第一巻

義經千本櫻（よしつねせんぼんざくら）

梶原平三譽石切（かぢはらへいざうほまれのいしきり）

源平魁躑躅（げんぺいさきがけつゝじ）

蓮生物語（れんしやうものがたり）

卅三間堂棟由來（さんじふさんげんだうむなぎのゆらい）

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎　共編

第一巻

時代狂言傑作集

東京　春陽堂發行

見立外題盡
義經千本櫻
渡海屋の段
一勇齋國芳画
一勇齋國芳画

緒言

「世話狂言傑作集」の刊行と竝べて、この「時代狂言傑作集」の刊行が新たに計畫された。書肆の希望は二つの叢書三十卷によつて、事實上の『歌舞伎劇大系』を構成せんとするにある。

刊行校訂に關する用意は、前者に於けると全く揆を一にしてゐるから、こゝに繰返すことを見合せる。が一言補足し、お斷りしておきたいのは、臺本校定の困難といふことである。本來上演臺本なるものは、殆ど上演の度毎に、主として俳優の都合、或は前後の狂言の按配、季節の關係等によつて、常に多少の補綴が加へられて來たものなのである。少くも、明治の前半期までは、上演毎に何等か新らしい面目を添加することが、狂言作者の義務でもあり、責任でもあつたらしい。であるから、例へばこゝに同一題目の臺本が五種あるとすると、多くの場合全部が異本同士であることが多い。斯樣の場合、吾々は各臺本の上演年代と、その時の俳優の顏觸れとを參酌して、臺本を選定し、他の同種臺本を異本として參酌校定するの方針で進むことにした。從つて本集に收められた所のものが、時として現行通りのものでない場合もあらうし、流布の臺本、印行せられてある臺本とは少異あることもあらう。尚且原材として採用せる臺本は版本でも活字本でもなく、悉く狂言作者によつた筆寫された舞臺使用の臺本であつて、最初

い。の印行本となるがために、時として、冒瀆の誤謬を敢てせるが如き場合も、寓なきを保し難い。
これは「世話狂言傑作集」に就いても、全く同一であるが、本集刊行に際し、特に記して讀者各位の御諒恕を仰いでおく次第である。

編纂同人識

大正十四年七月末日

解　説

「義經千本櫻」は「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」と共に、人口に膾炙する時代狂言の一である。原作は、延享四年十一月十六日から大阪大西の芝居、竹本座の操りにかゝつた物で、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等三人の合作である。歌舞伎劇の時代物は、義太夫種から移植された物が大部分であるが、この「義經千本櫻」の如きはその最たるものである。

原作たる淨曲は在來の院本通り五段物で、その場割りを列記して見ると、次のやうになる。

初段の口は大内裏の場で後白河天皇の御前で、左大臣の左大將藤原朝方が、義經のかねて望む初音の鼓を、賴朝を討てとの謎をかけて義經に賜はる。義經は兄賴朝を討つ事叶はず、一方初音の鼓を御辭退申すは勅諚に背くから、一生鼓は打つまいと心に誓つて、有難く鼓を拜領して退出する。中は北嵯峨庵室の場で、維盛御臺若葉の內侍と六代君とが、維盛が高野山にありと聞き、主馬の小金吾を供につれて維盛を尋ねに出發する。切は川越上使の場である。

第二段目の口は伏見稻荷鳥居先の場、切は渡海屋から大物浦の場。

第三段目の口は椎の木の場、切は鮓屋。

第四段目の口は「道行初音旅」、切は川連館から教經忠信の出逢ひの場。

第五段は、忠信が源義經と名乘つて、賴朝方の兵と奮戰する所へ、川越太郎が左大將朝方を縛し連れて來る、平家追討の院宣も朝方の仕業であると判明するので、教經は朝方の首を切り教經は兄繼信の敵と名乘つて忠信に討たれ、めでたく天下泰平になる。院本は右の如き段取になつてゐる。

歌舞伎劇に移して演ぜられる場合は、序の口と中と五段目とを略して、川越上使の場から忠信教經の出會ひまでゞある。もつとも「忠臣藏」のやうに通してゞなければ演ぜられないといふのでなくて、時々中幕物として、この長い中の一部分を切つて上場されることは言ふまでもあるまい。それは一つには比較的前後の關係が密接でなく、一段々々が獨立した脚色になつてゐるからである。この原因についても、種々說すべきこともあるが、こゝには略しておく。

この作の作者は「義經千本櫻」に於て何を書かうとしたのか。名題は「義經千本櫻」であつても、義經が主になつてゐるのではなく、義經はたゞワキ役にすぎない。作者はむしろ忠信を源氏方のシテ役にして書いたと見るべきである。序詞にも「忠なるかな忠、信なるかな信、勾踐の本意を達す陶朱公」とあるのによつても察せられる。忠信を中心にして、平家一門の沒落の哀史を書いたものである。即ち新中納言知盛を渡海屋銀平とし、三位中將維盛を鮓屋の彌助とし、能登守教經を横川禪司覺範として、これらの人物を通して豪族平氏の沒落をあざやかに

描き出してゐる。しかも唐突に是等の人物を出したのではなくて、伏線としては、賴朝が義經にかけた不審の第一に、知盛、維盛、教經の首は贋物だと云はしてゐる。作者の用意は抑して知るべしである。

「渡海屋」が謠曲の「船辨慶」によつてゐる事は疑はれない。謠曲に出て來る知盛の亡靈を院本作者一流の新解釋によつて、實在の人物として活躍させ、大物の浦で「義經に仇せしは知盛の亡靈なりと傳へよや」と言譯させて、ケリをつけてゐる。「渡海屋」と「船辨慶」とを比較して見ると、數等「船辨慶」の方が藝術的には勝れてゐるが、延享當時のやゝ理智的になつた民衆には、この新解釋がうけたものでもあらうか。（もつとも能曲は、この當時民衆の近より難いものであつたが。）

初音鼓は大和國源九郎狐に關する傳說であるが、この傳說は甚だ曖昧で確かでない。事によると四段目の切にある文章の「源九郎義經の、義といふ字を訓と音、源九郎義經附き添ひし」とある、その義經あたりから思ひ附いた着想ではあるまいか。

鮓屋の段については、「維盛彌助といふ鮓屋、今に榮うる花の里、その名も高くあらはせり」と段切には書いてあるが、維盛彌助といふ鮓屋は、この淨瑠璃の作られた後によつて出來た鮓屋であつて、これ前にはなかつたのだといふ。後世この院本が大當りをとつたから、後人の附會

した物である。名作が世に及ぼした著しい影響の一例である。丁度「菅原傳授手習鑑」が作られて、その作中の架空の人物、武部源藏の後裔と稱する人が、現はれたやうなものである。

扨、義太夫で大當りを取つたこの淨曲を、歌舞伎に移して演じた最初は、この作の出來た翌年、延享五年五月、江戸の中村座に於てであつた。その時の役割りは次のやうである。

渡海屋銀平（中村傳九郎）、辨慶（中島三甫右衛門）、主馬小金吾（松島八百藏）、若葉内侍（嵐玉柏）、源義經（歌川四郎五郎）、川越太郎（市川勘十郎）、静御前（澤村小傳次）、典侍の局（尾上菊五郎）、川連法眼（市川宗三郎）、お里（富之助）、彌助（中村七三郎）、權太、忠信、源九郎狐（澤村長十郎）、鮓屋彌左衛門、覺範（市川海老藏）等。

この内海老藏は、二代目の團十郎。長十郎は二代目團十郎と並び稱された、初代澤村宗十郎、菊五郎は初代であり、傳九郎と七三郎は共に二代目である。大阪では少し遲れて、同じく寛延元年八月（七月改元）嵐龍藏座でやつたのが最初で、その時の役割は、

卿の君、お里（嵐富松）若葉の内侍、小仙（市村さの八）、典侍の局、飛鳥（松島喜代時）、靜御前（芳澤崎之助）、小金吾、彌助（大和屋甚兵衛）、義經、おくら（坂東豐三郎）、梶原、藥醫坊（瀬川平九郎）、辨慶、權太（中村歌右衛門）、銀平、川連（市川團藏）、忠信、川越（松山三十郎）、彌左衛門、覺範、（姉川新四郎）、龜井六郎（座本龍藏）等であつた。この

歌右衛門は初代、團藏は三代目、芳澤崎之助は三代目芳澤あやめであつた。
これ以後は盛んに上場されて、今日に及んでゐる。權太を得意にして演じた俳優はなんと云つても三代目の菊五郎と五代目の鼻高幸四郎とである。これらの人によつて、今日見るやうな權太の型が大成されたのであらう。ごく近世で權太、忠信を得意にして型を殘したのは五代目の菊五郎である。
狐忠信の紋の源氏車は、この作の稿下當時、狐場を語つた竹本政太夫の紋である。この趣向は初めは狐と見せないのであるから、實珠の玉はつけられないので、いろ／＼と工夫した結果、源氏の由緣から源氏車にしたのである。以來忠信は源氏車でなければならないやうになつてしまつた。これも、例の忠臣藏の由良之助の二つ巴の紋も、初演の折由良之助の人形を使つた初代吉田文三郎(冠子)の定紋を適用したのと、全く揆を一にしてゐる。
吉野山の道行を常磐津で演じたのは、寛政六年五月、河原崎座で、「風流道行時鳥花有里」が始めである。俳優は靜が小佐川常世、忠信が四代目岩井半四郎であつた。太夫は常磐津文字太夫。
清元でも行はれるが、これは富本の轉用である。富本の「幾菊蝶初音道行」は文化五年五月中村座に於て、三代目歌右衛門の源九郎狐、四代目瀬川菊之丞の靜で先づ演ぜられ、太夫は富本豊前太夫であつた。これが今日清元に轉曲せられてゐるものである。

こゝに轉錄した臺本は、弘化四年九月河原崎座に上演された時のものである。主なる役割を擧げると、四世中村歌右衞門（鎌平、梶原、忠信）、四世梅幸菊五郎（典侍の局、お里）、市川九藏（判官、彌助）、松本錦升（權太、川越太郎、相模五郎、景範）、市川新車（卿の君、小せん）、大谷友右衞門（彌左衞門、海野太郎、川連法眼）等であつた。

尙「渡海屋」と「川連館」の終り等に於て、「若君」としたのは、原本臺本ともに「安德天皇」となつてゐる事を附記しておく。

「梶原平三譽石切」即ち「石切梶原」の原作は、「三浦大助紅梅靮」である。この作は享保十五年二月、竹本座の操りにかゝつたもので、作者は文耕堂、長谷川千四の兩名である。そして石切梶原はその三段目にあたる。

この原作は「三浦大助百六つ」と云はれて有名な、三浦大助の事蹟を書いた物である。本編五段物であるが、序段の口は相州眞鶴ケ崎の場で、石橋山の一戰に敗れた賴朝が、七騎落の問答をするの場である。この所へ義朝の勘當を受けた八丁礫喜平次の妻子が來て、勘當御免を願ふが許されないで、一つの軍功を立てたらば許すと云はれて妻子は歸る。切は三浦屋敷の場で三浦の一門九十三騎が殘らず集まつて、大助の百六回目の誕生日を祝つてゐる。茲へ大助の惣

領娘で、眞田與市義貞の祖母お土が、賴朝の使者としてやつて來る。三浦の一門は皆々お味方をするといふが、獨り畠山重忠は京都にある親庄司の心が分らないからといふので、味方するともせぬとも云はず立ち歸る。

二段の口は、お土の道行。中は眞田の屋敷、石橋山の戰に眞田與市が俣野五郎に殺された有樣即ち本卷に收めた序幕の雲助の話通り――を眞田文藏國安が來て物語る。と、お土は、文藏が戰場を後にして歸つて來た心の卑怯さを詰り、勘當する。切は八丁礫喜平次の親の家、丁稚長太に化けてゐる安達藤九郎盛長と、町端れの寺小屋師匠に化けてゐる眞田文藏と、この家の女房とのイキサツがあり、源氏へ味方することを誓ふ。

三段目が、本卷に收めた場面で、口は六郎太夫の家、切は石切の場である。

四段目の口は重忠邸の場、重忠は三浦大助が立て籠る衣笠城討手の大將である。今日しも何やら鎧櫃の中へ入れた物を、衣笠の城へ贈らうとする。來合せた大庭三郎景親は重忠に二心ありとあやしむ、そこでその櫃の中を檢めて見れば重忠の室、大助の孫娘の玉房御前であつた。中は女房の緣を切つて大助を攻めるといふのである。大庭はそれに感じて自分の粗忽を詫びる。切は三浦の城の場、三浦の一門は悉く賴朝の御味方に參り、城には大助たゞ一人、後は女房ばかりである。こゝへ亂心の玉房御前の召使ひお大が種々執りなしを賴むが皆々聞入れない。切は

廣庭の場、三浦大助が一生の思出とて馬に乘り、紅梅の手綱をかひぐり乘り出す、畠山重忠が來て大助に逃げよと云ふ。大助は玉房に討たれるから、それを手柄に再び夫婦になつてやつてくれと云ふ。所へ搦手の大將梶原平三がやつて來て、三浦大助の首討つたと云つて來る。その首は六郎太夫の首で、婿の文藏の御主人のために死んだのである。が六郎太夫が梶原に讓つた刀から六郎太夫は大助の子で若い時に別れたきりになつてゐたといふ事が判明する。又、その刀の功德で玉房の亂心もをさまる。玉藻の前の一念が三浦の家に仇するために、玉房の皮肉に分け入つたといふのであつた。

五段目は、畠山梶原の兩人が賴朝の御味方に參る。折柄攻めて來た俣野五郎を、主の敵と眞田文藏が討ちとる。大庭は八丁礫の後家と藤九郎とが生捕つて來て、めでたく賴朝は旗擧げする。「三浦大助紅梅靮」は以上の如き五段物であるが、現今演ぜられるのは三段目のみである。前の「千本櫻」の鮓屋の段で梶原を立役にしたり、この作で梶原を立役にしたりして、在來の院本には敵役で通つたものを、突然變へて見せたのは、院本作者がそろ〳〵題材に窮して、あゝでもない、かうでもないと考へた結果なのであらう。

この石切が始めて江戶の舞臺に上つたのは、寬政六年六月の桐座である。役割は、梶原(八百藏)、俣野(勘彌)、梢(三五郎)等であつた。

大阪では明和頃から行はれたらしいが、いつが始めか不明である。

原作には、星合寺の小松原で松風を釜のたぎる音と聞いて梶原が茶の湯の手前を見せる趣向があつた。それを今日のやうに宮造り玉垣の舞臺にしたのは、三代目歌右衛門からである。

こゝに用ひた臺本の中、序幕は嘉永三年正月市村座上演の時のもので、六郎太夫(友右衛門)、梢(五幸)、等。大詰に慶應元年十月中村座所演の時のもので、梶原(權十郎事九世團十郎)、大庭(四世小團次)、六郎太夫(龜藏)、俣野(新之助)、梢(團太郎)等であつた。

「源平魁躑躅」即ち「扇屋熊谷」の原作は、「石切梶原」と同じ作者の文耕堂、長谷川千四両人の作で、原題は「須磨都源平躑躅」といふ。享保十五年十一月、大阪竹本座の操りにかゝつた物である。そしてこの「扇屋の場」は二段目の切にあたる。

序段の口は大内の場で、俊成卿の面前で姉輪平次と岡部六彌太との論爭がある。切は俊成卿の場で、薩摩守忠度が六彌太の情によつて和歌の師匠俊成卿に對面し、千載集の中へその詠歌を入れて貰ふ事になる。

第二段の口は右大將重虎の館、重虎の妹品照姫は敦盛と許嫁の仲、そこへ親戚の俊成卿から御見舞として裡菊が來る。裡菊は六彌太の妹ながら俊成へ奉公して娘分となり、忠度とは戀仲

である。二人とも平氏に縁ある身とて話がよく合ふ。そこへ扇屋上總が來る。切は扇屋の場である。

第三段の口は、宇佐八幡の場、三位中將重衡と薩摩守忠度とが勅使に立つて、平家滅亡の神勅を得るの件。切は尾形屋敷の場、尾形は九州の豪族で、二郎、三郎の二人の兄弟が、主取りのために旅してゐたのが、同日に歸つて來る。兄の二郎は平氏、三郎は源氏に味方してゐるのである。二郎は始めて尾形家の養子である事を知り、且つ平氏は二郎の本統の生家菊地家とは仇ある仲と知つて、源氏へ味方と決心する。母親はその決心を聞いて自害する。

第四段の口は、品照姫、裡菊の道行、中は義經の面前へ熊谷が敦盛の首を持つて來て、出家を願つて許される。切では六彌太が義理に迫つて忠度の首を取る。

第五段は頼朝の面前へ重衡が引かれ、情誼ある判決が下されるところ。

大略右の如き筋であるが現今まで殘つてゐるのは、扇屋の場だけである。後に並木宗輔が書いた「一谷嫩軍記」は、この作に負つてゐる所甚だ多い。

原作には勿論五條橋の場はない。これは天保三年二月、角座で西澤一鳳が三代目歌右衛門のために増補したものである。江戸から上つた紫若（七代目岩井半四郎）の敦盛と、老巧な歌右衛門の熊谷とが、牛若と辨慶にあて込んだ見得が大當りだつたと傳へられる。尙、七代目の團十

郎は五條橋の熊谷馬上の見得に、七五三、飾海老、橙の見得といふ型を殘したといふ。卽ち左手の太刀を横に高くさし上げるのが七五三、赤塗の顏が飾海老、右の拳を肱を張つて胸の所に構へたのが橙といふのである。

こゝに收めた臺本は、天保七年十一月森田座上演の際のもので、七世團十郎卽ち海老藏の熊谷坂東三津五郎の扇屋上總といふ配役であつた。

この卷には文耕堂の作が二つまで採錄されてあるから、次手ながら、文耕堂の事を附記しておく。文耕堂は本名松田和吉、竹本座の作者で、竹田出雲と相前後した時代の人で、近松門左衛門に續いて作者になつた人である。享保七年九月「佛御前扇車」を近松添刪として出したのから察しても、彼は近松の助手として働いてゐたのであらう。近松歿後やうやく驥足を伸ばして、種々の新淨瑠璃を書いたが、中にも有名な物は「御所櫻堀川夜討」、「鬼一法眼三略卷」、「壇浦兜軍記」、「ひらがな盛衰記」などである。その作風は甚だおとなしく、出雲、千柳、半二などのやうに餘り技巧に走らない作者であつた。長谷川千四は文耕堂の助手として働いた人である。

「蓮生物語」は熊谷、敦盛の後日物語りといふべきものである。この狂言はもと狂言作者の長島壽阿彌が、尾上榮三郎（四代目菊五郎）の爲に書いて送つた物を、海老藏（七代目團十郎）が借りて自分の狂言にしたのだといふ。天保十二年四月中村座が初演で、名題は「堺開帳三升花衣」役割は、

熊谷蓮生法師（海老藏）、尾眞如（小佐川常世）、同妙春（岩井松之助）、平山武者所（甚六）、玉織姫（榮三郎）、主馬判官盛久（坂東彦三郎）であつた。

この作はそんなに勝れた作ではない。大體は「一谷嫩軍記」の三段目、熊谷陣屋と、屋屋熊谷とをでつち合はした物である。蓮生の物語などは全然「熊谷陣屋」の轉用にすぎない。陣屋の藤の方を、玉織姫にかへて書いたゞけの物にすぎない。たゞ僧形になつた熊谷が、軍物語をするといふ、そこが作者の目のつけ所であらう。然しこのあまり傑れたとは言へない作も、名人七代目團十郎の手にかゝつて、現今までも演ぜられる事になつたのである。

こゝに收めた臺本は嘉永五年三月河原崎座上演の時ので、役割は、蓮生法師（市川海老藏）、主馬判官盛久（八世團十郎）、玉織姫（粂三郎）等であつた。海老藏二回目の上演で、「歌舞伎新十八番の內」と銘記されてある。

「卅三間堂棟由來」の原曲は、若竹笛躬、中邑阿契の作で、寶暦十年十二月に豐竹座の操りにかゝつたものである。

この作の最初の作は、黑木勘藏氏の說によれば宇治加賀掾の正本に「熊野權現」といふ正本がある。これは延寶七、八年頃の作で、作者は近松門左衛門ではないかと思はれてゐる。この中の平太郎道行などには、この作が暗示を受けてゐる點が多い。ついで出たのが、伊藤出羽掾の正本で「都卅三間堂棟由來」といふので、作者は山本河內掾である。元祿初年の作と推定される。この作は餘程「柳のお柳」に近く、「柳のお柳」は手もなく飜案だと言つてもよからう。「卅三間堂棟由來」は五段物で、「平太郎住家」はその三段目にあたる。全曲は要するにこの平太郎お柳の作りを中心にして、武者所時澄と平忠盛との權威爭ひである。が然しなんと云つても、平太郎お柳の契りと、白河法皇の前生話とが本筋であつて、後はつけたりの趣向にすぎないものである。

我國の戲曲には動物の精が、人間と契るといふ趣向が往々にある。近松門左衛門の「百合若大臣野守鏡」の鷹の精、竹田出雲の「蘆屋道滿大內鑑」の狐の精などがそれである。この「柳のお柳」なども、その一種で、我が國の鄕土傳說その儘の脚色であるが、無理がなく、物あはれに書かれて、時代物として特色あり、また佳作の一に入るべき物であらう。

江戸の舞臺で始めて上場されたのは、天明六年十月、中村座で、役割は楨曾根平太郎（八百藏）お柳（小佐川常世）和田四郎等（又太郎）であつた。

こゝに收めた臺本は、無論歌舞伎化されてゐる故でもあらうが、原曲とは少々違つてゐる。勿論、お柳の愁歎、木遣りなどはその儘であるが、原曲には猿辷りの石松といふ人物は出て來ないで、和田四郎といふ人物が母親を殺すことになつてゐる。また劍の事などは原曲にはない。和田四郎はたゞ法皇の前生の御頭がほしいために、母親を殺すのである。この臺本は長い脚本の一部分であるに違ひないが、實演の際にはこの部分のみであるし、首尾相整つてゐるから、便宜上この分だけにとゞめた。

本書の校訂、原稿の整理、解說等に關して、先輩幷に編纂同人の厚情に負ふ所少くないが、特に文學士朋田民夫氏の熱心なる援助に俟つ所甚だ多い。茲に附記して謝意を表する。

（大正十四年七月下旬　河竹繁俊しるす。）

目次

緒言と解説……………………………一―一六
◎義經千本櫻（千本櫻・七幕）……………………一
◎梶原平三譽石切（石切梶原・二幕）……………一九一
◎源平魁躑躅（扇屋熊谷・一幕）……………二六五
◎蓮生物語（一幕）……………………三一七
◎卅三間堂棟由來（柳のお柳・一幕）……………三四九

挿繪の目次と說明

○千本櫻渡海屋の場……………………卷頭
（一勇齋國芳筆の錦繪．本卷に採用した臺本の上場された時の配役である。）
○權太と彌左衞門……………………一頁の前
（初代豐國筆、松本幸四郎の權太と澤村四郎五郎の鮨屋彌左衞門。）
○扇屋熊谷……………………二六五頁の前
（豐原國周筆の大首錦繪、先代中村芝翫の熊谷幷に先代澤村訥升の敦盛である。）
○蓮生物語……………………三一七頁の前
（明治四年七月、守田座で河原崎權之助即ち後の九代目團十郎や先代左團次等によつて上演された時の繪草紙の繪である。）
○平太郎住家……………………三四九頁の前
（龜戶豐國筆の錦繪、八代目團十郎が采作事平太郎に扮してゐる。）

義經千本櫻
よしつねせんぼんざくら

義經千本櫻（七幕）

序幕

堀川御所の場
同堀外芋洗の場

役名　川越太郎重頼、源九郎義經、武藏坊辨慶、土佐坊昌俊、龜井六郎、駿河次郎。
義經御臺卿の君、義經妾靜御前其他。

本舞臺三間の間二重舞臺、一面に御簾を卷き上げ、見附け金襖、上の方床の間、香臺に袱紗を掛け、これに初音の鼓を載せ、次に鎧櫃、この上に錦長刀を飾りあり、二重舞臺上の方に褥を敷き、義經着折り衣裳にて脇息にかゝり居る。下の方に卿の君、打掛け衣裳にて褥の上に住ひ、腰元居ならび、平舞臺上の方に龜井六郎、駿河次郎、上下衣裳にて控へ居る、眞中に靜御前、烏帽子裝束にて中啓を持ち控へ居る、舞の切れにて幕あく。

ト奥にて、

大勢　ヤンヤ〳〵。

ト謎への鳴物になり、

静　お望みとある故に、拙い舞振りお目にかけ、おはもじう存じまする。

卿君　イヤナウ、初めて見ましたが面白いこと、この程我が身の煩ひも醫の助けを受けながら、心悪しく暮らせしに、我が君様のお勸めで今日は思はぬよい慰み、そもじには御太儀であつたなう。

静　ハツ、その御機嫌にあまえ、申し上げたきお願ひがござりまするが、お取り上げ下さりませうや。

卿君　アイヤ、そのお尋ねには及ばぬ事、願ひとはよそ〳〵しい、近う寄つて物語りや。

静　ハイ、お願ひと申しまするは外の事でもござりませぬ、氣の毒なのは武藏坊辨慶殿、なにか大きな仕損ひを致しましたと、樂屋へ参りおろ〳〵泣いての私へ頼み、つきつめた氣細いお人さうで、餘りと申せばいぢらしさに、何卒お詞添へられ、我が君様の御機嫌の直りますやう、この事ひたすらお願ひ申し上げまする。

へ申し上ぐれば御臺は可笑しく、君にも笑ひ、駿河の次郎は佛頂面。

駿河　イヤハヤ、かゝつた事ではない。六郎お聞きやつたか、武藏坊辨慶とも云はるゝ者が女中を頼んでのお詫事、樂屋へ行つて泣きましたげな。

龜井　いかさま〳〵、舞からとり入っての詫言、まそつと懲らしていつその事、坊主頭を奴にせうと
云うてみたらようござらう。
へ内證評議も猶をかしく、御臺は笑ひの内よりも。

卿君　いかなる仕損じせし事ぞ、テモまあ、をかしい執りなしぢやわいの。
へ仰せあれば義經公。

義經　過ぎつる參内の折から禁庭にての我儘、左大臣朝方公への惡口、御家來を踏み打擲、その場
できつと叱りつけ我が目通りへは叶はぬと、申し付けたる故ならん、手綱ゆるすと人喰ふ馬、
公卿でも武家でも憚からぬ、持ちあぐんだ鐃坊主。
へまそつと懲らせと御上意に、駿河の次郎圖にのつて、

駿河　じたい、アノ七つ道具が大きな邪魔、源氏には坊主の大工があるかとお家の名折れ、この儀も
きつと止めるやう、仰付けられて然るべう存じまする。

龜井　イヤ、まだ七つ道具は御普請の役にも立つが、難儀なのは、あの大長刀を振り廻すによつて、
傍あたりの鼻がたまらぬ、泰平の世には役に立たぬ人間、とかく當分は押し籠めておくがよろ
しうござります。

〽評議區々、御臺は笑止と。

卿君　アイヤ、その樣に譏るを聞いたら、又怒らうも知れぬぞや、とも〴〵お詫を。

靜　有難うござります。

義經　性懲りもなき坊主め、きつと異見し、重ねて荒氣を出さぬやう、靜もともに申しきけよ。兩人參れ。

〽座を立ち給ひ、駿河龜井とうち連れて、一間へこそは入り給ふ。

ト義經に駿河、龜井附いて奧へはひる。

〽靜は嬉しく。

靜　サア、急いで武藏殿を、呼び出して下さんせいなあ。

腰元　かしこまりました。

トしらべになり、花道へはひる。

靜　お前のお詞添ふ故に、有難うござりまする。

卿君　アイヤ、そもじのお願ひ故ぢやわいなう。

〽五の辭儀も戀の義理、悋氣嫉妬の角もなく、丸い頭の武藏坊腰元にひつ立て

られ、恐れ入りつゝ七尺の身體も三尺八九寸、四尺に餘る大刀を引ずらして
ぞ這ひ出でける。
ト此文句の内、花道より腰元皆々辨慶を連れ出て來り、舞臺の附際へ來る。
ヘ腰元ども口々に。

腰一　さりとては、又片意地な。

兩人　坊樣ではあるわいなあ。

腰二　アレ御覽じませ、後じさりばかり。

兩人　致されますわいなあ。(ト辨慶思入あつて、)

辨慶　アヽコレ、そのやうに惡く云はぬものぢや。弱身へつけこんでむごいわろたち、人には報いが
あるぞよ。
ヘ見廻す目玉に。

腰元皆々　アレ、また睨まれますわいなあ。

辨慶　これは、細目だ、細目だ。
ヘ目顏しかめて身をちゞむ、靜は手を取り御前へ連れ出で。

ト静は辨慶の手をとり、よき所へつれて來り。

静　もう堪忍して、おやりなされて下さりませ。

〽半分笑ひの執りなしに、卿の君はしとやかに。

卿君　君は船なり臣は水、波立つ時はおのづから君の御船をくつがへす。家來の業とて云譯たいぞ。重ねてきつと荒氣をやめ、おとなしうなつたがよからうぞや。

〽子供異見に辨慶は、たゞ。

辨慶　アイ〱。

〽もみ手してあやまり入りし風情なり。（ト辨慶よろしくこなし。）

〽かゝる所へ遠見の役人篠原藤内、あわたゞしくまかり出で。（ト侍出て。）

侍　申し上げまする。

卿君　何事ぢや。

侍　今日大津坂本の邊りを巡見致せしに、忍び〱に鎌倉武士都へ入りこむその中にも、土佐坊昌俊、海野の太郎行長、熊野詣りと僞り、我が君の討手に向ふと、專らの風聞、殊に唯今鎌倉の大老川越太郎重頼、我が君に直談せんとて、お次に控へまかりあり、いかゞはからひ申さん

や。

〽尋ね申せば卿の君。

卿君　ハテ心得ぬ、その川越太郎は自とは故ある人、土佐坊海野が討手の様子知らさんために来りしか。何にもせよ、縁あれば苦しうない、通し申せ。

侍　ハツ。（ト引返してはひる。）

卿君　その旨君へも申し上げん、次手に武藏もお目見得を。

〽座を立ち給へば武藏坊。

辨慶　討手とはうましうまし、われらが世盛り忝い、土佐坊でも海野でも、たつた一呑み一攫み、首引抜きて參らせん、さうだ。

〽駈け出だすを押しとゞめ。

靜　アヽコレ待たしやんせ。コレそれがもう悪い、お上の御意も待たず、おぞましの坊さんではあるわいの。

〽無理にひつ立て御臺と共に、義經公のおはします奥殿へとぞ急ぎゆく。

ト卿の君先に、靜は辨慶をひきとめ、よろしく腰に附いて奧へはひる

へ程なく入りくる武士は、鎌倉評定の役人川越太郎重頼、大紋烏帽子さわやかに、年も五十路の分別盛り、座敷に入りきたれば、御主人九郎判官義經御裝束を改められ、しづ〳〵と立ち出で給ひ、

ト花道より川越太郎烏帽子大紋にて、奥より義經烏帽子裝束にて出て來り、双方よろしく座につき、

義經　珍らしや重頼、兄賴朝にもお變りなく、百侯百司も恙なきや。

へ仰せにはッと頭を下げ。

川越　先づは御堅體を拜し恐悦至極、右大將にも安全に渡らせられ、諸大名も日毎の出勤、賢慮安んじ下さるべし。

義經　シテ其方は、海野土佐坊同役にて上りつらん、但しは外に用事ありや。

川越　さればの儀、君に御不審の三ケ條、一々御尋ね申し上げ、御返答によつては海野土佐坊と同役、恐れながら過言は御赦免下され。お尋ね申上ぐる仔細、御返答承はりたう存じまする。

義經　ム、この義經に不審あらば兄賴朝になりかはる其方、過言はゆるす尋ねて見よ。申し聞かん、遠慮無用。

川越　ハツ冥加に餘る仕合せ、とてもの事に、御座あらため下されい。

へ席を立てば大將も末座へさがつて川越を、上座へこそは請ぜらる、席改めて

川越太郎。

いかに義經、平家の大敵を亡ぼし勳功を立てながら、腰越より追返され無念にあらん、但し、さもなかりしや。

義經　親兄の禮を重んずれば、無念なとも存ぜず。

へはツと義經袖かき合せ。

川越　ヤア、その詞虚言々々、親兄の禮を重んずる者が、平家の首の中、新中納言知盛、三位中將維盛、能登守教經、この三人の首は贋物、なぜ僞つて渡したぞ。さ、この故の御存分、御返答承はりたう存ずる。

義經　オヽ、その云譯いと易し、贋首を以て誠とし實を以て贋とするは軍慮の奧儀、一門の中にも三位中將維盛は小松の嫡子、殊に親重盛は仁を以て人を愛し厚恩の者數知れず、又新中納言知盛能登守教經は古今獨歩のゐせ者、何れも入水討死と世上の風聞、幸ひに一門殘らず討ち取りしと、贋首を以て欺きしは、一旦天下を靜謐させん義經が計略、とあつて捨ておかれぬ大敵故、熊井鷲尾伊勢片岡究竟の輩をば休息と僞り、國々へ分け遣はし、忍び〳〵に討ちとる手筈、か

く都に安座すれども心は今に戰場の苦しみ、いつか枕を安んぜん、ア、淺ましの我が身の上。へうちしをれ給ふにぞ、實に理と重頼も思ひながらも役目の切羽。

川越　ム、、さてはその遺恨ある故に、御謀叛思したてられしな。

義經　ヤア穢らはしい、謀叛などゝは何を以て、何を目當。

川越　君鎌倉を亡ぼさんと、院宣を乞ひ受け給ひしとは如何に、即ち初音の鼓の裏皮は義經、表皮は頼朝、打てといふ聲ありとて頂戴ありしと、左大臣朝方より急の知らせ。

義經　さては朝方が讒言せしな、その鼓の事は某兼ねての懇望、下しおかるゝ場になつて、反逆によせたる譴の品、これ朝方が計ひとは思へども院中より下さりし音物、受納せずば綸命に背き、受けては兄頼朝へ孝心立たずと、望みに望みし一挺なれども、打てば鼓に聲ありと、アレあの如く床に飾りて眺むるばかり、神明佛陀も照覽あれ、打ちもせず手にも觸れず。

川越　ハ、ア、その御誓言の上からは何疑ひ奉らん、二つの仰せ分られは事明白。さりながら情なきは今一つ、御簾中卿の君は平大納言時忠の娘、平家に御縁組まれし心はいかに。

義經　ヤア愚かなる尋ね、兄頼朝の御臺政子は北條が娘、時政の氏は平家にあらずや。

川越　イヤ、それは主君頼朝伊豆に御座ある時、北條一家を味方につけん計略の御縁組。

義經　ヤア云ふな重頼、もと卿の君は汝が娘、平大納言に貰はれ、育てたるは時忠、肉身血を分けた親は其方、なぜそれ程の事鎌倉にて云譯せざるや、但し義經と緣あると思はれては、身の瑕瑾と思ひ隱しつゝみしか、卑怯至極。

へ仰せを聞くより川越太郎、居たる所にどつかと居直り。

川越　ヤアお情けない義經公、淸和源氏の末流九郎義經婿に持つたは、恐らく日本の男頭、五十に餘る川越が名を惜しんで祿を貪らうや、いま肉緣をあかせば、こなたの云譯するもくどく、緣者の證據となる故に、オヽ鎌倉では隱した包んだ、蔭になり日向になり云ひくろむれども御前には、讒者の舌に强くなり、智者と云はれし秩父さへ力に及ばぬ平家と緣組。今となつて川越が娘と云うても得心あらうか、卑怯至極と義經公の思召し面目なし、皺腹一つが御土産。

へ指添手早に拔きはなす。

ト此內卿の君出かゝり窺ひ居て、

卿君　アヽコレ、待つて下さりませ。その云譯は自が。

へ刃物もぎとりわが咽へぐつと突立てどうと伏す、これはと驚く義經公靜も駈け出で抱き起し、藥よ水よと狼狽へて、淚より外詞なし、川越は見向きもせ

ず。

ト卿の君つか〳〵と寄つて、川越が白刃をもぎとり咽へつきたてる。此時靜も出て來りびつくりして卿の君を抱き起し介抱する、義經川越よろしく思入れ。

川越 出來されたり時忠の娘、さうなうては御兄弟御和睦の願ひも叶はず、とくに呼び出し我が手にかけんと思ひしが、我と最期を遂げさして死後に貞女と云はせ度く、態と自滅に見せかけしに、よう拔身を奪ひ取つて、天晴健氣な女中、でかしめされた。

〽餘所に褒めるも心は涙、義經間近く寄り給ひ。

義經 かくあらんと思ひし故、態と川越が血筋をあらはし、平家の縁を除かんと思ひし甲斐もなき最期、あさましき身の果、よしなき契りをかはせしよなあ。

〽御目に餘る涙の色、靜御前も諸共に、あなたこなたを思ひやり、泣き沈み給ふにぞ、手負は君を戀しげにうち眺め〳〵、

卿君 一つならず二つまで大切な云譯立ち、殘る一つは平家へ縁組、その科私が皆なす業。サア川越殿、平大納言時忠が娘の首、頼朝樣の御目にかけ、御兄弟の御和睦。それが冥土へよい土產。

へ首さし延ばす心根を、思ひやる程川越太郎、胸に滿ちくる涙をば、呑みこみ呑み込み傍へ立寄り。

川越　似合はざる譬なれども玄宗の后楊貴妃は、馬嵬が原にて哥舒翰に討たれ天下の煩ひを拂ふ、御兄弟確執とならば萬民の歎き、清き最期も天下のため、出來された、天晴々々、あかの他人の某が介錯して進ぜう。

へ刀するりと拔きはなす。

卿君　そのあかの他人のお手を、かりるも深き御緣、とてもの事にたつた一言。

川越　アイヤ、親子の名乘りは未來で致さう。さらば。

卿君　おさらば。

へさらば〳〵と討つ首よりも、體は先へ川越がどうと座してぞしをれ居る、心ぞ思ひやられたり、へ靜御前も義經も、歎きに沈み給ふ折柄耳を貫く鐘太鼓鬨をどつとぞ上げにける。

ドンチャンになり、

エイ〳〵オウ。（ト鬨の聲上る、皆々思入れ。）

〽こはいかにと、靜御前は仰天、君にも驚き。

義經　さては土佐坊めが、攻めかけしと覺えたり、龜井駿河はいづくにある。

〽仰せの内よりおつとり刀で兩人も、表をさして駈け出るを。

ト奥より龜井駿河刀を提げ出て來り、兩人花道へツカ〳〵と行きかゝるを。

川越　ヤレ待たれよ、仰せ分けを聞くまではと留めおきしを攻めかけたか、彼等も讒者と一味の族。とは云へ兩人共鎌倉殿の名代、あやまちあつては敵對するも同然、たゞ速やかに追ひ歸すか威しの遠矢で防がれよ、さなきに於ては忽ちに義經公の仇とならん。

龜井駿河　心得ました。

〽表をさして駈りゆく、義經公も川越が詞至極と猶も氣をつけ。

義經　無分別の辨慶が心もとなし、武藏々々。

〽呼び給へば腰元立出で。（ト奥より腰元皆々出て來り。）

腰一　武藏殿は最前より、しをれて居られましたるが、

腰二　閧の聲を聞くとそのまゝ、

腰三　喜び勇んで、

腰四　行かれましてござりまする。

義經　さてこそ。靜參つて急ぎ制せよ。

靜　心得ました。

義經　矢先危ふし。それ、鎧。

腰元四人　ハツ。（ト腰元二重より鎧を持ち出る。）

〽はツと答のその隙に、長押の長刀かいこんで、表へ走る女武者、堀川の夜討に靜が働きと、末世に云ふもこれならん。

ト此内靜二重舞臺にある長刀をかいこみ、鎧を抱へ逸散にはひる。

〽いかがと案じ給ふ所へ、龜井駿河馳け戻り。

ト花道より龜井駿河出て來り、

龜井　我々味方を制し、的矢を射させ追返さんと存ぜし所、武藏坊の無法者玄翁大槌をうち振つて、敵を一々こなみぢん。

駿河　大鋸にて人をひツ切り、殊に討手の大將海野の太郎を、てつぺんから爪先まで、敲き碎きましてござります。

〽申し上ぐれば大將あきれ、川越太郎はつとばかりに仰天し。

川越　ヱ、しなしたり、ひろいだり、討手の大將討ち取つては、御連枝和睦の願ひ叶はず、不便や嫂もまつたく犬死、ハテ、是非もなき世の有樣ぢやなあ。

〽悔み涙に義經公。

義經　古人は人を恨まずと、傾く運のなす業と思へば今更悔みもなし、武藏が無骨を幸ひに、都をひかば綸命にも背かず、兄頼朝の怒りもやすまる。これを思へば殘り多きは、卿の君が不便の最期。

〽殘り多やと御涙、みな夢の世の有爲轉變

我も憂世にすてられて、驛路の鈴の音を聞かん。龜井駿河供いたせ。

〽立ち出で給へば川越太郎、しをれながら暫しと留め、床にかざりし鼓たづさへ。

ト　內川越太郎、二重舞臺に飾りある鼓を取つて來る。

川越　君多年御懇望ありし重寶、殘しおかれなば取り落されしと申すも殘念、院勅に打てといふ聲ありとは、皮より穢れし讒者の詞、打つを拙者が調べかへ、再び御連枝和睦のとりもち、長の旅路

のお物忘れ。

〽心をこめてさしいだせば、義經御手に觸れ給ひ。

義經　親しき兄弟の首をば打ち切らるゝも運のつき、結びかへせよ太郎重賴。

〽御心根のいたはしくも、名殘を惜しみ御大將

ト義經二重よりおり上手へ行く、龜井駿河附添ひ、太郞思入あつて。

〽龜井駿河をお供にて、すご〳〵館を出で給ふを、見送る人も鎌倉へ是非なく

なくも立歸る。

重賴さらば。

川越　ハヽア。

〽世のなりゆきぞ是非もなき。

ト義經龜井駿河思入にて、花道へはひる、川越首に思入あつて。

〽重賴首級にうち向ひ、

傾く御運と云ひながら、思へば不便な娘が最期、犬死とばし思ふなよ、この重賴が命にかへ、

其方の操も判官殿の、かならず御役にたてゝ見せう。

へさすが肉身恩愛の緣の歎きはら〳〵、一度に落つる瀧津瀨や前後不覺に泣きゐたる、夢の浮世と思へども、又せぐり來る袖の雨、しをれ〳〵て。

ト川越思入あつて、切首をひつかゝへきつとなり、どんちやんにて花道へはひる、どんちやんにて幕ツナギにて引返す。

本舞臺正面一面の筋塀。上手に御所の門、眞中に用水桶、この上に小桶を積み重ねあり、すべて堀川御所前の體、これに淺黃幕をかけ、こゝに義經の家來四人○△□◎衣裳上下にて立ちかゝり、どんちやん合方にて幕開く。

○　今日ツた川越太郎殿には、鎌倉殿の御上使として見えられしが、椿事出來致せしかと、襖越しに承はれば、卿の君は平大納言時忠卿の御息女故、平家に內通あらんかとの御疑ひ。

△　卿の君の御自害にて平家との緣絕えし故、申譯は相立ちしが又も難儀は土佐坊討手の注進。

□　これを防がば兄へ手向ひにならんとて、君には御落去遊ばすとの事、片時も早く御供申さん。

◎　それにつけて辨慶は、土佐坊討手と聞くよりも、喜び勇んで立向ひしがさて〳〵困つた法師でござる。

○何はしかれ、御用意をお勧め申さん。何れもござれ。

ト上手へはひり、淨瑠璃になる。

へ別れゆく、貝鐘の音鯨波の聲堀川御所の門前にて、取り圍んだる討手の人數あたりへ響き物凄く、震動するこそ理なり。

ト淺黄幕切つて落す。

へ武藏が強力土佐坊の馬の尾筒を引き戻せば、馬上ながらに大音あげ、

土佐　鎌倉殿の仰せをうけ、今宵夜討ちの土佐坊昌俊、なんでおのれが支へだて、土佐が自慢の腕こぶし、見事戰にかつほぶし、だし鹽梅を喰うて見よ。

へ喰うて見よといきまいたり。

辨慶　ム、ハ、、、、、猪口才な武士呼ばゝり、我らの眼からはなまり節、刃物は入らぬ小手捌き、この指先でひねり殺すぞ、

へ大手を擴げてとり卷いたり。

土佐　小癪な一言、ソレ者ども。

大勢　ハ、ア、やらぬ。

へそれ討ちとれとおつとり巻く、太刀も刀も鷲掴み、鴨づかみの首の骨、擢る
と切れる數萬力雨か霰か人つぶて。

トこれよりちらしになり、立廻りよろしくあつて、辨慶首を切つては天水桶へ投げ込みトゞ殘りの人
數を下手へ追込む、土佐坊窺ひ出て辨慶にかゝる立廻りあつてきつと押へ。

辨慶　ヤア／＼我が君はおはするか、片岡伊勢は何れにある、武藏が料理の食ひ殘し、賞翫せぬか。

へ呼ばゝり／＼見廻せど、館もいひそと靜まつて、答へのなきに不審たて、

片岡ヤア／＼、三郎ヤアイ。物音せぬは、さては館を落ちさせ給ひしか、ム、。

へコハ何故か、身の科と思ひよらねば云ふ人も答うる人も梢の鳥、ないて詫び
する土佐坊を右と左へ持ち直し。

じたい此奴が逃げ廻り、隙どつた故お供に後れた。おのれの首の飛ぶ方が、我が君樣の御行
方。

へよい投算とひッ掴み、ちよつぺい天窓を頭巾越し、すつぽり抜いて空へ投げ。

ト土佐坊の首を引き抜き、空へはふり、

こけたる方は辰巳の間、菟原小原の方でもあるまい、もとは牛若。

〽丑の方、

〽巳午も。

〽よしや、

吉野も氣遣ひ、こゝに戌亥や酉ならで、程もあるまいおツ付かん。忠義と思ひせし事も、今になりては未申。

〽思ひ違ひの荒者が、あら砂蹴立つる響はとう〳〵、とう〳〵〳〵踏みしめ〳〵踏みならし、義經の後を寅の刻、風を起して。

トこの見得よろしく段切にて辨慶用水桶の上に跨がり、雑兵の首を入れたるを、屋根にしたる板にてかき廻し、芋洗ひの見得よろしく。

幕

二幕目　稲荷森の場

役名　四郎兵衛忠信實は大和の源九郎狐、源判官義經、武藏坊辨慶、早見藤太、龜井六郎、

駿河次郎、伊勢三郎、片岡八郎、軍兵四人、白拍子靜御前等。

本舞臺正面一面の淺黄幕、上手朱塗りの大鳥居、これより下手一面朱塗りの玉垣、所々に石燈籠、よき所に紅葉の大樹、同じく釣枝、稻荷の森鳥居先の體よろしく、ドン／＼遠寄せにて幕あく。

〽吹く風に連れて聞ゆる鬨の聲、物すさまじきけしきかな、昨日は北闕の守護今日は都を落人の身となり給ふ義經公、數多の武士もちり／＼になり龜井片岡伊勢駿河、主從五人大和路へ夜深に急ぐ旅の空、あとふりかへれば堀川の御所も一時の雲煙り、浮世は夢の伏見道、稻荷の宮居にさしかゝれば、四方にひゞきし貝鐘太鼓。

トやはりドンチヤンにて、花道より義經好みのこしらへ、武者草鞋、後より龜井、片岡、伊勢、駿河、いづれも武者達拵、草鞋大小にて付添ひ出て、直ぐに舞臺へかゝる。

龜井　又も聞ゆる貝鐘太鼓、亂調に打ちならし、

片岡　一時にあげし鬨の聲は、正しく鎌倉勢に疑ひなし。

伊勢　このまゝやみ／＼追手の者に、後を見せるも殘念なり。

駿河　たとひ多勢なればとて何程の事あらん、イデお許しを蒙つて。

四人　一合戰仕らん。
へ勇みすゝめば御大將。

義經　いやとよ方々、都にて討川越太郎が云ひし鎌倉殿の憤り、明白に云ひ開き、卿の君の敵たき
最期も義經が身の言譯なるに、早まつて辨慶が海野の太郎を討つたる故、やむ事を得ず都をひ
らくは、親兄の禮を思ふ故、この後は猶もつて、鎌倉勢に刃向はゞ主從もそれ限り。
へと仰せに四人も腕なでさすり、拳を握つてひかゆる折柄、義經の御跡、した
ひこがれて靜御前、こけつまろびつ來りしが。
トやはりドンチヤンにて、花道より靜好みのこしらへにて出て義經を見て、
へそれと見るより走りより。

靜　我君樣お胴慾でござりまする、武藏殿を制せよとわらはをお遣り遊ばしたその後で、早や御所
をお立ち退きと聞きまして、たとひ二里三里おくれうと追ひ付くは女の念力、よう、むごたら
しうこの靜をお捨て遊ばして、四人の衆も聞えませぬ、わらはもお供のなるやうに、執り成し
云つて下さんせ。
へ歎けば共に義經も、情に弱る御心、見て取る四人。

龜井　ヲ、我君も道すがら、お噂なきにはあらねども、行く道筋も敵の中。
片岡　とりわけ行先は、多武の峯の十字坊。
伊勢　女義を同道なされては、寺中のおもはくいかゞなり。
駿河　一まづ都へお歸りあつて、お便りお待ち、
四人　なされませ。
　〽すかしなだむる時しもあれ、武藏坊辨慶息を切つてはせ來り。
　トドンチヤンにて、花道より武藏坊出て來り。
辨慶　土佐坊海野を討ち取らんと、都に殘り思はずも、遲參仕つてござりまする。
　〽と云ひもはてぬに御大將、扇をもつててう〳〵と、なぐり情も荒法師を、目鼻も分かず打ち給ふ。
義經　うぬ坊主め、びくと動かば義經が手討になすぞ。
　〽と御怒りの顏色に、思ひがけなき武藏坊はッとばかりに恐入る。
辨慶　この間大内にて朝方殿に惡口せしとて御勘當、永々出仕もせざりしが、靜樣の御詫で御免あつたは昨日今日、その勘當のぬくもりが手の中にほの〳〵と、まだ冷めきらぬその中に、又も

義經 やこの御不興、辨慶が身にとつては、不調法せし覺えなし。

やあ覺えなしとは云はれまい、鎌倉殿と義經が兄弟の不和を、取り結ばせんと川越が實義、卿の君が最期を無にして、義經が討手に登りし鎌倉勢をなぜ切つた。これでも汝が誤りであるまいか、サア、返答せよ武藏坊。

〽はつたと睨んで宣へば、武藏坊は返す詞もなく、頭も上げず居たりしが。

辨慶 憚りながらその事を、存ぜぬにてはあらねども、正しく御所の討手として上つたる土佐坊、いかに御意が重いとて、主君をねらふをまお／＼と、見て居る者のあるべきか。さある時には日本に忠義の武士は絕え果てなん、誤りならば幾重にも御詫言仕らん、いかに御家來なればとて、あんまりむごいお叱りやう、これといふも我君の漂泊より起つたこと、エヽ無念でござります。

〽無念〳〵と拳を握り、ついに泣かぬ辨慶が、たしない淚をこぼせしは、忠義故ぞと知られける、靜も武藏が心を察し。

靜 アレ、あのやうに詫びて居られます、何卒御堪忍遊ばしませ。

〽とやはらかな詫言の、その尾について四人の勇士。

龜井　何卒御心なだめさせられ、
片岡　此場の事はこれぎりに、
伊勢　御宥免遊ばされますやう。
駿河　我々共も共々に、偏へに願ひ上げ、
四人　奉ります。
　へ詫びければ、義經面をやはらげ給ひ、
義經　母が病氣で故郷へ歸りし、四郎兵衞忠信を我が供に召し連れなば、武藏が詫は聞かねども行く先々が敵となつて、一人でもよき郎等を力にする時節なれば、この度は許しておく、以後たしなめ
つゝしみをらう。
　へ辨慶はツと頭を下げ、はツとばかりに、坊主頭をなでまはし。
辨慶　靜樣、重々のお詫言、いかいお世話樣でござります。
　へいかいお世話と喜べば。
靜　マア、お詫が濟んで目出たうござんす、サアこれからはこの靜が、君のお供するやうに、武藏殿執り成しを賴むわいなう。

へ思ひつめたるその風情。

辨慶　ア、これは又迷惑千萬、唯今詫言頼んだとて當り眼が返報、義理でもあいと申したけれど、この辨慶共意を得ず、御家來さへも跡先に引別れ行く忍びの旅、落行く所はかねて聞きおく多武の峰、これもつて女は叶はず、昨夜にかはる人心なれば、十字坊の所存もはかりがたし、これより道を引違へ山崎跡に、津の國尼が崎大物の浦よりお船にめし、豐前の尾形をお頼みあらうも知れず、それなれば長の旅路、猶もつてお供はなるまい、ふッつり思ひ切つて都に留まり、君の御左右待ち給へ。

へ云ふにぞわつと泣き出し。

静　今迄お傍に居た時さへ、片時お目にかゝらねば、身も世もあられぬこの靜、いつ又逢はれる事ぢややら、行先知れぬ長の旅、跡に殘つて一日もなんで待つてゐられうぞいの、いかなる憂目に逢ふとても、ちつとも厭ひは致しませぬ。コレ武藏殿、どうぞ連れて行て下さんせいなあ。もうし我君樣、お連れなされて下さりませ。

へ涙ながらに我君にひしひしと抱きつき、はなれ方なき風情なり、靜が別れに判官も目をしばたゝきおはせしが。

義經　唯今武藏が云ふ通り、行先知れぬ旅なれば、都に殘り義經が、迎ひの船を相待たれよ。

〽伊勢に持たせし錦の袋、それこなたへと取出し。

義經　これこそ年來義經が望みをかけし初音の鼓、この度法皇より下し給はり、我手へは入りながら、一手も打つ事なり難きは、兄頼朝を討てとある、院宣のこの鼓、打たねば違勅の科のがれず、打てば正しく鎌倉殿に敵對も同然、二つの是非を分け兼ねたるこの鼓、身をも放さず持つたなれども、又逢ふまでの筐とも、思うて朝夕慰め給ふべし。（ト鼓を渡す。

〽渡し給へば手に取りあげ。（ト靜鼓を取り、思入あつて）

靜　スリヤ、どうあつても、お供はかなひませぬか。

〽思ふ願ひの綱も切れし、鼓をひしと身にそへて、かつぱと伏して泣きゐたる、

龜井片岡進み出で、

龜井　長詮議に時うつり、土佐坊が殘黨ばら、

片岡　押して來たらば御大事、イザ〳〵お立ちあられませう。

〽と郎黨に諫められ、涙とともに立ち給へば、靜はそのまゝ我君の、御袖にす

がりつき。

靜　わらは一人捨てられて、こがれ死に死なんより、御手にかけて下さりませ。

ト義經にとりすがり、泣伏して思入、始終ドンチヤン。

〽わッとばかりに泣き叫べば、人々も持てあまし、

駿河　あやまちあつては我君の、御名の瑕。

〽なんと詮方、駿河の次郎立寄つて、會釋もなく取つて引退け、幸ひの縛り繩と鼓の調引ほどき、靜の小腕手ばしかく、あやまちさせぬ小手縛り、道の枯木に鼓とともに、がんじがらみにくゝりつけ、

ト靜アレと云ふをかまはず、駿河鼓の調を解き　後手にくゝし、紅葉の立木へ鼓と共にくゝしつける、靜悲しき思入。

龜井　イザ、我君様。

四人　お立ちあられませう。

〽いざさせ給へと諸共に、道を早めて、

ト義經先に立ち、四人付き添ひ、鳥居の内へはひる。

へ急ぎ行く、後に靜は身をもがき、我君の後影見ては泣き泣いては見。

靜　エヽお胴慾でござります、情にてかけられた、縛り繩が恨めしい。

へ引けば悲しや、お筐の鼓が損ねうなんとせう。

何とせうどうせうぞ、この繩をほどいて、死なせて下さりませ。

へと聲をばかりに泣きさけぶは、目もあてられぬ次第なり。

ト靜いろ〳〵とあせり、トヾどうと泣き伏す。

へかゝる所へ土佐が郎黨、早見の藤太、落ち行く義經のがさじと、數多の郎黨引具して、義經討たんと馳け來り、藤太は勇みの大音上げ、

トはげしきドンチャンになり、花道より早見の藤太好みのこしらへその外一、二、三、四、五、六の軍兵六人、陣笠をかぶり、後より附いて出來り、花道よき所に留まり、

藤太　コリヤ〳〵家來共、惣じて戰の駈引は小敵とてあなどるな、大軍とて恐るゝな、まづ強勇と見たならば人より先へ退くべし、弱い奴なら引ッからめ、手柄にするが肝要なり、必ず忘るな合點か。

皆々　かしこまつてござります。

藤太　いそげ〳〵。

皆々　ハア、、、、。

ト皆々駈けぬけようとするを。

藤太　待て〳〵家來共、惣じて戰に向ふなら、先陣などはいらぬ事、後詰の人數をあてにしろ、第一番が兵糧だ、腹がへつては働かれず、ここらに茶屋があるならば飯を炊かせろ合點か。

皆々　かしこまつてござります。

藤太　いそげ〳〵。

皆々　ハア、、、、。

トやはりドンチヤンにて、皆々藤太と入れ替り。

藤太　家來々々、こりやどうぢや。

軍一　申し〳〵旦那樣、急げ〳〵とおつしやれど。

二　行きつ戻りつなされては、

三　ねつから道がはかどらぬ、

四　これから我等が先に立ち、

五　旦那をお供に致します。
六　われらについて、
六人　いそげ〳〵。
藤太　かしこまつてござります。
　　ト鳴物にて軍兵先に立ち、藤太後につき、本舞臺へ來り靜を見て、
皆々　ヤア、、、、。
　　ト皆々びつくりして、
一　モシ旦那、どえらい者が居りまする。
藤太　なんぢや、どえらい奴がゐる。急いで逃げろ〳〵。
　　ト藤太逃げようとするを、皆々とめて
二　モシ〳〵、女でござります。
藤太　なんぢや女ぢや、それこそ身共が大好物、引とらへて手柄にしてくれうわ。
三　引とらへずとも、縛つてあります。
藤太　なに、縛つてある、それこそ幸ひ。ドレ〳〵、女とあれば、ヨウ。

ト藤太靜をよく〳〵見て、

四 コリヤ〳〵、わいらあれを知らぬか、あの女こそ義經が、かるいものさう〴〵しい御前と云ふ者だわ。

五 モシ、あれは義經のおもひもの、

六 しづか御前といふ、

六人 白拍子で、

藤太 ございます。

シタリ、わいらはよく存じてをるな、何はしかれ繩までかけてあてがふとは、うまい〳〵、此の鼓も義經が重寶、何んとか申した。

一 初音の鼓でございます。

藤太 その通り、靜といひ鼓までこの所にあるからは、この道筋に判官も、隱れ居るに疑ひなし、まづ靜を引立てう。

ヘ福德の三年目と、藤太手早く繩切りほどき、鼓を奪取り引立て行かんとする所へ。

ト藤太軍兵皆々静の綱をほどき、引立てゝ花道よき所迄行く、此時花道揚幕の内にて忠信の聲にて。

忠信　待てエ、。

皆々　なんと。

忠信　待ちやがれエ、。

ト鳴物になり、花道より忠信好みの四天丸ぐけ、大小好みのこしらへにて出て、よろしく押戻し、右鳴物にて本舞臺へ來る。

〽四兵衛衛忠信君の御跡慕ひ來て、かくと見るより飛びかゝり、藤太が肩骨引つかみ、初音の鼓を奪返し、中にひつさげ二三間、取つて投げつけ静を圍みふんばたがつて立つたるは、心地よくこそ見へにけり、

静　ヤア忠信殿、よい所へ、よう來て下さんしたなあ。

〽と喜べば、早見の藤太大音上げ、

藤太　ヤア〳〵忠信、逃足早き判官殿、尻に坂東風車、かけたる後に殘りしは足弱車のその静、綱手綱にくる〳〵とくゝりし罪を初音とは、水車とも知れざる内連れ行かんとせし花車へ、源氏車の押戻しは、夏の蟲なる火の車とぬかしても、その手は食はぬ口車、糸車より細首を身共に

渡すか、返答は、サヽヽヽなんと〳〵。

〽なんと〳〵とよばゝつたり、忠信かつとふき出し。

忠信　ヤアしをらしいうんざいめら、ならば手柄にからめて見よヱヽ。

〽大手をひろげて、待ちかけたり。

藤太　物な云はせず討つてとれ。

トドン〳〵になり、皆々忠信にかゝりよろしく見得、これより誂への立廻りあつて、トヾ軍兵皆々花道へ逃げてはひる、藤太後より切つてかゝるを、ちよつと立廻り、見事に投げる。

〽藤太が素首つかんでどうと投げ、足下にふまへ。

忠信　汝等が分際で、この鼓をしてやらんとは胴より厚き面の皮、打ち破つてくれべいが、云ひ分あらば手柄にからめて見ろえ。

〽ぼん〳〵と踏のめせば、ぎやつとばかりを最期にて、其まゝ息は絶えはてたり、鳥居の本の木蔭より、義經主從駈け出で給ひ、

と鳥居の内より、義經先に四人附き添ひ出來り。

義經　ホヽオ、珍らしや忠信。

ヘと仰せを聞くよりはつと手をつき、

忠信　コハ、存じよらぬ御目見得。

ヘ飛びしさつて目禮す、龜井駿河武藏坊互ひに無事を語り合ふ、忠信重ねて頭を下げ。

先づは變らぬ君の尊顏拜し奉り拙者も安堵、某も母が病氣見舞のためお暇給はり、生國へ罷下り永々の介抱、程なく母も本復致し罷上らんと存ずる中、君腰越より追返され鎌倉殿御兄弟御仲不和と、承るより、取る物もとりあへず都へ歸る道すがら、土佐坊君の討手と聞き、夜を日についで堀川の御所へ今晩駈け附けしに、はや都を開かせ給ふと聞くよりこれ迄御跡慕ひ、思ひ掛けなき靜樣の御難儀救ひしは、我が存念の屆きし所と、恐悅に存じまする。

ヘと申し上ぐれば、御悅喜あり、

義經　我も當社へ參詣して、今の働き委しくも見屆けたり、鎌倉武士に刄向ふなとかたく申し付けたれども、土佐坊の討たれし上からはその家來を忠信が討つたるとて構ひなし、今に始めぬ汝が手柄天晴々々、取りわけて兄嗣信も我が矢面に立つて討死したるは稀代の忠臣、その弟の忠信なればわが腹心を分けしも同然、今よりは我が姓名を讓り、淸和天皇の後胤源九郎義經と名

乘り、まさかの時は判官になり代つて敵を欺き、後代に名を止めよ。これは當座の褒美なるぞ。

と義經鎧を忠信にやる。

ヘ家來に持たせし御着長、忠信に賜ひければ、はツとばかりに押し戴き、頭を土にすりつけ〳〵。

忠信　土佐坊づれが家來を追ひちらせしとあつて、御着長を下し賜はるその上に、御姓名まで賜はるは、生々世々の面目、武士の冥加にかなひし某、チエ、有難く頂戴仕る。

ヘ天を拜し地を拜し、悦び涙にくれければ、判官重ねてのたまふやう。

義經　我はこれより九州へ立ち越え、豐前の尾形に心をよせん、汝は靜を同道して、都に止まり、萬事宜しくはからふべし。

ヘと君は靜に別れを惜しみ。

忠信　スリヤ靜樣は。

義經　便りもあらばおとづれん、さらば。

ヘと立ち給へば、今が誠の別れかと、立寄る靜を武藏坊、立ちふさがれば、忠

信も、我君に暇乞ひ。

忠信　我君には、御機嫌よろしう。

義經　おゝ、靜忠信無事で居やれ。

へ互ひに無事を頷き合ひ、歎く靜を押しのけ〳〵、心强くも主從は、山崎越に尼ケ崎。

忠信　靜樣の儀は、お案じなく。

皆々　さらば、

忠信
五人　おさらば。

へ大物さして出で給ふ。

ドンチヤンになり、義經戀ひの思入、皆々附添ひ東の揚幕へはひる。靜悲しき思入にて、

靜　コレなう我君樣、しばしお待ち遊ばしませ。

へと行くを制し留むれば御行方を打ち守り、御かほばせを見るやうで、戀しいわいのと地にひれ伏し、正體もなく泣きければ。

忠信　ヲヽ、お道理でござりまする、さりながら別れもしばしが內、この鼓君の筐とあるからは、君と

思うて肌身に添へ、憂をお晴らしなされませ、われも賜はるこの着長。

へゆらりと肩に引つかけ、なだめ〳〵手を取れば、靜は泣く〳〵筐の鼓、肌身に添へてつきぬ名殘りに咽せかへり、涙とともに道筋を、たどり〳〵て。

ト靜鼓を持ちしづ〳〵と花道へかゝる。忠信花道の附際まで行く。雷序になり、忠信よろしく六法、誂への鳴物三重にて、花道へいつぱいにはひる。

幕

三幕目

渡海屋の場

大物浦の場

役名　渡海屋銀平實は新中納言知盛、源判官義經、武藏坊辨慶、相模五郎、入江丹藏、龜井六郎、駿河次郎、片岡八郎、伊勢三郎。銀平女房おりう實は典侍の局、娘お安實は若君

船頭、下女實は官女等

本舞臺三間の間常足の二重、眞中暖簾口、上の方赤壁、これに種々の帳面此上に誂への神棚稻荷宮、神酒德利、下の方に戸棚、此前に菰包みの荷物を重ね、ずつと上手九尺の障子屋體、いつもの所門口、こゝに官女二人下女のこしらへにて、爼板庖刀にて料理してゐる。四人の船頭菰包みの荷を舞臺下手

にてこしらへてゐる、よき所に二枚折りの屏風を立てお安寢てゐる、これに蒲團かけあり、すべて船問屋の體。テンツヽ鼓の音にて、幕あく。

女一　マア〳〵、皆さん一服、

二人　のましやんせいなあ。

船一　イヤ、とてものことに、この荷を積み込んでしまふべえ。

船二　ソレ〳〵、さうして今にゆつくりのまうよ。

船三　おつるどんや、お梅どんの顏を見ながら。

船四　さうよ、煙草にして小當りもよからう。

下一　又そのやうな戲謔ばかり、ほんにまあ最前から、こゝに煮花も出來てあるのに、飮ましやんせぬかいなあ。

四人　そいつは有難い。

ト皆々捨ゼリフにて、茶を飮むこと。

船一　トキに、荷はもうこれぎりかな。

下二　サア西國へ行く分はそれぎりぢやさうなが、牛窓へ行く大事の荷物が、中の間に來てござんす

わいなあ。

船一　それぢや、もう一かへり來ずばなるまい。

船二　二人は船場のやりくりをするがいゝ。

船三　なんにしろ、マアこいつを積み込んでしまふべえ。

船四　それがいゝ、サアやらかせ。

ト船頭の一、二手傳ひ、船頭三、四荷をかつぎ上げる。

船一　そんなら早く賴むぜ。

三四　合點だ〱。

船二　どれ、奥の荷をしらべようか。

トテンツヽ浪の音になり、船頭三、四は花道へ、船頭一、二は奥へ双方はひる。下女料理ごしらへをしてしまひて。

下二　成程、船頭衆といふものは、大きな聲ぢやないかいなあ。

下一　その大聲にかまはず、お安さんがよう寢入つて。

下二　サア、風邪でもひかせ申してはと、私が蒲團をかけるも知らず。

下一　後生樂なものぢやわいなあ。

ト云ひながら介抱してゐる、合方になり、障子の内より、辨慶やつし、山伏のこしらへにて、風呂敷包みを背負ひ出て來る。しづかな雨車になる。

辨慶　いかさま、、、けうな日和だわえ、又ばらついて來たさうだ。

ト兩人見て、

下一　ヲヽ、これはお客僧樣、さぞまあ、御退屈でござりませう。

下二　さうしておツつけお膳を出しまするに、どこへお出でなされます。

辨慶　イヤモウ、川止めに逢つた旅人のやうだとよく云ひますが、西國への出日和待つて同伴ともにけろりかん、わしもあんまりほつとしたゆゑ、たゞ家に居やうより、西町へ行て買物でもして來ようと思つて。

下一　さやうでござりまするか、しかし出船の雲が見えたかして、荷物を船へ積みましたれば、それと申すと直ぐに出船、お手間をとらずと、早うお戻りなされませ。

辨慶　ムヽ、さういふことなら歸り道、船場へ廻つて來ようわいの。

下二　それでもあなた折角と、外のお客は鳥貝鱠なれど、御出家樣の事ぢやによつて態々と精進料

理、ちよつとあがつてお出でなされませ、

辨慶　イヤ〳〵愚僧は山伏なれば、精進には及ばぬ、鳥貝鱠の方がよからう。

下一　でも、山伏樣なら、今日は廿八日。

下二　不動樣の御緣日。

辨慶　ヲヽ、ほんにそれ〳〵、大事の精進であつたわいの、マアなんにしろ行つて來ませう。

ト云ひながら、お安をまたぎにかゝり、ドロ〳〵になる。

アイタヽヽヽ。

ト足をさすつて思入。

兩人　どうなされました。

辨慶　お娘が寢て居たを、ついまたぎ越したれば、俄に足が筋ばつて。

兩人　エ。

と顏見合せ、思入。

辨慶　あゝ聞えた〳〵、なんぼ少さくつても女子、蟲が知らして、しやきばつたものと見えるわえ。

兩人　何をまあ、わつけもない。

三人　ハヽヽヽヽ。
辨慶　ドレ、大降りのしないうち。
兩人　早うお歸りなされませ。
辨慶　ドリヤ行つて來ようか。

ト唄になり、山下駄を履き、ばつてう笠をかぶつて花道へはひる。

下一　ほんに、このやうな所にお寢ぢやになつて、今のやうな。
下二　サア〱、ちやつとお目を、おさましなされませ〱。

ト兩人抱き起す、お安目をさまし、

お安　ほんに二人がお料理をするを見てゐながら、ツイ睡たうなつて。
下一　サア〱、お目が覺めたなら、今朝お習ひなされた清書を、お母樣のお傍で。
下二　ようお書きなされて、旦那さんのお歸りにお目にかけたらそれこそ又。
兩人　御褒美でござりませう。
お安　そんなら、いつものやうに母樣に、字配りしてもらはうか。
下一　それがよろしうござりまする。

兩人　サア／＼、お出でなされませ。

ト二人お安を連れ、合方にて奥へはひる、床の淨瑠璃になる。

へかゝる所へ誰とも知らぬ鎌倉武士、家來引具し入り來り。

トこの淨瑠璃の内、花道より相摸五[illegible]なりの侍にて、今一人の侍を供に連れ出て來り、花道にとまり、

供侍　ハツ、即ちあれが、銀平が宅でござります。

五郎　案内いたせ。

供侍　かしこまりました。

ト兩人舞臺へ來り、門口より、

亭主はをらぬか、亭主／＼。

下女二人　ハイ／＼何の御用でござります。

供侍　其方どもは、何者だ。

下一　ハイ、私共は、船頭の女房どもでござりまするが、

下二　けふこの家は取り込みゆゑ、雇はれて參つて居りまする、

兩人　者でござりまする。

供侍　ヤア慮外な奴、女の存じたことではない、亭主を出せ、亭主を出せ。
兩人　イヱ、旦那は他行、私共へなんなりと。
供侍　ヤア又しても無禮な奴、大切なる御用、他行とあらば呼びにやれ、遲いと曲事だぞ、早くしろ早くしろ。
兩人　ハイ〳〵、お上さん〳〵。

〽呼びたつれば、女房は驚き走り出で。

トこの淨瑠璃にて、奥より女房おりう世話女房のこしらへにて出來り、

りう　これは〳〵誰方樣かは存じませぬが、女共のはしたないはお許し下さりませ。然し今皆が申します通り、主人は問屋廻りに出まして、宿にではござりませぬが、私ですむことなら、何の御用でござりまする。
供侍　シテ、其方は、何者だ。
りう　あるじ銀平が女房でござりまする、シテあなた樣は。
供侍　ムヽ、女房とあらば云ひ聞かさん。旦那は誰あらう北條の家來相模五郎樣だ。唯今御用の筋あつてお出でなされたわ。ハツ、即ちあれが、銀平の女房にござりまする。

五郎　ヲヽ、さうか。

トこれにて供の侍と入りかはり、

其方女房とあらば云ひ聞さん、身共は北條の家來相模五郎といふもの、この度義經尾形を賴み九州へ逃げ下るとの風聞によつて、鎌倉殿の仰せを受け、主人時政の名代として、討手に唯今下れども、打ち續く雨風にて船一艘もとゝのはず、幸ひこの家に備へおいたる船。日和次第出船と聞き、願ふ所なれば、その船身共が借り受け、櫓を押し切つて下らんため罷り越した。旅人あらばぼいまくり、座敷を明けて休息させい。サヽ、早く致せ、早く致せ。

へ早う〳〵と、いかつがましくのしあがれば。

りう　それはマア〳〵御大切な御用に、船がなうてさぞ御難儀、こちらのお客も二三日以前から日和待ちして御逗留、今更船を斷りまして、あなたの御用にも立てにくうござりませう。殊に先樣も御武家方なりや、御同船とも申されまい、こゝを御料簡遊ばして、今夜の所をお待ちなされましたら、その内には日和も直り、何艘も何艘も入船の內をしらべて。

五郎　ヤイ〳〵〳〵默りをらう。一日でも逗留がならば、この家へは云ひつけぬ、所の守護へ權柄づくに云ひつけるわ、奥に居るその侍めが恐うて、おのれ等が口から云ひ憎くば、身共が逢う

て直きに云うてくれん。

りう　ア、モシ、お待ち遊ばしませ、お急きなさるのは御尤もなれど、あなたを奥へやりまして、直きに御相談させましては、船宿の難儀、おツつけた人も歸りませう、マア、それ迄はお待ちなされて。

五郎　ヤア、何をそれ迄べん〳〵と、コリヤ聞えた。なんだな、奥の武士に逢はさぬは、察する所平家の餘類か。

りう　どう致しまして私共が。

五郎　さなくば判官義經へ、由緣の者か。

りう　何のマア。

五郎　言譯あるか。

りう　サア。

五郎　サア。

三人　サア〳〵。

五郎　返答は、な、な、なんと。

〽せりつめられてはッとばかり、途方にくれし折柄に、この家の主兵綱銀平、雨傘片手につかくくと立ち戻る我家の軒。

ト誂への鳴物にて、渡海屋銀平番傘をさし出て門口へ來る。

〽銀平不審にたゝずめば、相摸五郎は圖に乘つて。

ト相摸五郎おりうの顏色を見て、

五郎　ヤア、返答なきはいよくもつて怪しい女、奥へふん込み詮議せん。

供侍　下郎もともぐ。

りう　アヽモシ、何卒主人の戻るまで。

五郎　エヽ、四の五のと面倒な、疑ひかゝるこの家の內、とめ立てするな。ソレ。

〽權柄押しにきめつくれば、始終立聞く銀平が、居るとも知らず相模五郎、網戸をめがけ駈け込むを、とゞむる女房つきのけはねのけ、又とりつくをあらけなく。

ト五郎奥へ行かうとする、おりういろくさゝへる、下女二人もとめるを、供の侍引きすゑる、このうち立ち廻り、

〽佇む銀平走り入り、侍が手をとつて、

ト銀平此時内へずいと入り、おりらを鬮ひ、五郎が手をぐつとねぢ上げる、おりら見て。

りら　ヤア、お前はこちの人。

供侍　コリヤ身共を何とする。

銀平　イヤ、何とも致しませぬ、ついに見なれぬお武家樣、女子を捕へて御人體にも似合ひませぬ。

五郎　マアお靜かになされませ。

供侍　ム、。

ト兩人おこつく、供侍下に居る。

五郎　アイタ、、、。シテ、其方は何者だ。

銀平　私は卽ちこの家の亭主渡海屋銀平、見ますれば女子共が、何か定めて不調法、御立腹のその樣子、私めに一通り仰しやつて下さりませ。

ト五郎をつきはなす。

五郎　ム、スリヤおのれがこの家の亭主か、亭主なら云うて聞かさう。身は北條の家來なるが、義經の追手を蒙り、奧の武士が借りたる船、此方へ借らんため、奧へふんごみ身が直きにその武

士に逢はうと云へば、あのゝものゝとさへぎつて、とゞむるゆゑに今の仕儀だわ。

銀平　へエ、憚りながら、そりやあなたが、御無理かと存じまする。

五郎　ヤイ素町人め、武士に向つて何が無理だ。

銀平　何故とおつしやりませ、人の借りておいた船を、無理に借りようとおつしやりますは、マア御無理ではござりませぬか。その上に、また宿借りの座敷へふんごまうとなされるゆゑ、女共がおとめ申すをふんだり蹴たりなされまするは、ちとお侍様には似合はぬやうに存じます。一度でも宿を致しますれば、商旦那、その座敷へふん込ましては、どうもお客人へ私が立ちませぬ、こゝの所を御料簡なされて、お歸りなされて下さりませ。

五郎　ヤア、重ね〴〵のその雜言。

供侍　旦那に向つて歸れとは推參千萬、うぬ、とめ立て致さば。

兩人　手は見せぬぞ。

銀平　ア、もし、それはお前樣、御短氣でござりませう、私も船問屋はしてをりますれど、聞きはヅツてをりまする。惣別刀脇差では、人を切るものではないさうにござりまする。

五郎　なんと。

銀平　お侍樣の二腰は、人の粗忽狼藉を、防ぐための道具とやら。
五郎　ヤ。
銀平　さるによつて武士の武の字は、戈を止むる、とやら書きますさうにございます。
五郎　ヤア、小癪な事をぬかしたな、その頰げたを切り下げくれん。
　へ拔打に切り付くるを引ぱづし、相模五郎が利腕むんづと取り。
銀平　スリヤ、どのやうにお詫び申しても。
五郎　ならぬ事だわ。（トきつと云ふ、銀平こなしあつて、）
銀平　コリヤ、モウ料簡がならぬわえ。
供侍　ならんと云つて、なんとする。
銀平　町人の家は武士の城廓、閫の内へ泥瀉を切込むさへあるに、此刀で、だ、だ、誰を切る氣だ、その上に又平家の餘類の義經の由縁のなんのと、旅人をおどすのか、よし又判官殿にもせよ、大物に隱れない眞綱の銀平が、おかくまひ申したら何とする。サア、見事誠の侍ならば、びくとでも動いて見よ、素頭微塵にはしらかし、命を取らばこの世の出船。きり〳〵こゝを、なくなるまいか。

へ刀もぎとり中に引提げ持つて出て、門の閾にもんどりうたせば、死ぬるばかりの痛さをこらへ、顏をしかめて起き上り。

ト此内五郎を門口へ投げる、五郎起上るを家來介抱して、

五郎　ヤイ、亭主め、よく侍をひどい目に合はせたな、この返報には、うぬが首を。

ト思入あつて、門口へ寄らうとするを、家來とめて、

供侍　もし〳〵旦那樣、そりや惡い御料簡でござりまする、銀平は強くツても高が町人、又此方は弱くツても侍、まづ〳〵お歸りなされませ。

五郎　容赦がならうか。

供侍　えゝ、さりとては御合點の惡い、容赦がならずば、報謝なされい。

五郎　なに、報謝とは。

供侍　銀平に御報謝。

五郎　それは御奇特。

供侍　あなたは氣の毒。

五郎　なに、これしきに。アイタヽヽ、成駒屋ア。

〽嵐に逢うたる小船の如く尻に帆かけて主從は、跡も見ずして逃げ失せける。

ト これへ波の音をかぶせ、五郎供の侍附いて花道へはひる、

銀平　ハヽヽヽヽ、口程にもない侍めだ。

りう　ほんにまあ、よい所へ戻らしやんして、よい氣味でござんしたが、然し又どうならうかとひやひや思うてをりましたわいなあ。

銀平　なんの〳〵、とは云ふものゝ今のもやくやを、定めて奧のお客人が。

りう　サア、大方お聞きなされたでござんせうわいな、

ト 銀平煙草盆をとり、煙草をのむ、下女二人よろしく捨ゼリフ。

〽二人がひそめく話聲、洩れ聞えてや、一間の障子押し開き義經公、旅の艱苦にやつれはてたる御容顏、龜井を始め跡に隨ひ立出づれば、コハ存じなやと夫も俄に膝立て直し、夫婦諸共手を下れば、

ト 此の內障子屋體より、義經先に龜井、駿河、片岡、伊勢出來り、右四人下手にすまふ。

義經　隱すより顯はるゝはなしと、不興を受けし義經が、厚き大地も拔足の天高うして脊をこゞめ、尾形を賴み九州へ下らんと、此地に一宿なせしに、其方よくも計り知り、時政の家來を退け、

今の難儀を救ひしは、町人に似合はぬ、いゝ働き、我一の谷を攻めし時鷲尾といへる木樵の童に山道の案内させしに、この山樵なる者ゆゑ武士となして召使ひしが、それに勝りし汝の働き、天晴世が世の義經なら、武士にとり上げ召使はんに、かく漂泊の身となりて、あるに甲斐なき事どもぢやなあ。

ト武勇はげしき大將の、身を悔みたる御詞、四人の勇士も諸共に、無念の拳を握りける、銀平は頭を下げ、

銀平　これは〳〵有難いそのお詞、イヤモウ、私もこの界隈では眞綱の銀平と申して、少しばかりは人にも知られて居りますれど高が町人、唯今の腕立も、畢竟申さば隨將軍、些細な事がお目にとまつて、我々づれに御褒美の御意、冥加至極もござりませぬ。殊に君のお顏を見覺え奉るは、さいつ頃八島へ赴き給ふ時、渡邊福島より兵船の役にさゝれ、私が手船も御用に達し、一度ならずこの度も不思議にお宿仕りまするも、おそれながら深き御縁でござりませう、さるによつてお爲を存じ、申し上げたいは、今歸りし北條の家來、とつて返さば御大事、一刻も早う御乘船が、よろしからうと存じまする。

ト云ひもあへぬに龜井六郎、

龜井　いかさまあろじが申し條尤も至極、唯今の鎌倉武士が、とつて返さばお身の妨げ。

駿河　一刻も早く御乘船、さりながらこの天氣に御出船は。

四人　いかゞあらんや。

銀平　アイヤ、そこにぬかりがござりませうか、弓矢打物はお前樣方の御生業、船と日和を見る事は船問屋の又生業、昨日今日は辰巳、夜半になれば雨も上り曉方には朝嵐にかはつて、御出船には引こ拔上々の日和、數年の功で、そこらはきつと見極めておきましたテ。

へ見えすく樣に云ひけるは、その道々と知られける。

片岡　ヲヽ銀平出かしたり、其方が申すに相違あるまい、雨の霽間に御乘船。

伊勢　君にはこれより尾形が方へ、片時も早く御供仕らん。

へ申しあぐれば義經公。

義經　何さま船中の事は、銀平よろしくはからひ得させよ。

銀平　ハア、唯今も申す通り、幼少より船の事はよく鍛錬仕つれば、御安堵あつて御乘船、御見送りの爲私も手船にて須磨明石の邊りまで、お供致すでござりませう、元船のある所は五町餘り沖の方、船は即ち日吉丸、思ひ立つ日が吉日吉祥、雨具の用意仕り、後より追付き奉らん。

コレ女房、そちはわざツと御出立を、お祝ひ申して濱邊迄御案内。

ト波の音になり、下手より傳馬船にて船頭艪をおしたて出て來り。

銀平　こりや、元船の用意は萬端とゝのうたか。

船頭　アイ、出船の用意は殘らず調ひました、元船は五町餘り沖の方、モウお支度をなされませ。

銀平　ヲツトよし／＼、コレ女房、そちはわざツと御出立をお祝ひ申せ。

りう　アイ／＼。

銀平　さやうならば我君樣、いづれも樣、御免下さりませ。

ヘ挨拶そこ／＼銀平は、納戸の内へ入りければ。

ト銀平奥へはひる、おりう思入あつて、

りう　お肴が出來たなら、早う持つて來て下さんせ。

下女　ハイ／＼、かしこまりました。

ト奥より下女二人、銚子、杯、酒肴等を持ち出て來り。

りう　サアお粗末にはござりまするが、船路の旅を恙なう、お目出鯛のむしり肴で、わざツとお祝ひ遊ばしませ。

龜井　これは〳〵云はれぬ事を、銀平の心遣ひ。

駿河　折角のあるじがもてなし。

片岡　わざとこれにて出船の御祝儀。

伊勢　我君、お取り上げ遊ばしませ。

ト杯をとり上げ。

義經　あるじが厚き志し、門出を祝うて一獻汲まん。

りう　サヽ、お一つ召し上りませう。（トつぐを飲んで。）

義經　サヽ、其方達も一つ〳〵。（ト杯を廻す。）

龜井　然らば、頂戴仕りませう。

ト杯をいたゞき、これより酒事捨ぜりふにてちよつとあつて。

伊勢　コレ御内儀、我々共も頂戴致したれば、もう杯を取りおいて下されい。

りう　マア、よろしうござりまする、もうお一つお過しなされませ。

伊勢　然らば御内儀、一つお受け下されい。

りう　ハイ〳〵、それは有難う存じます。

ト　おりう杯をとり上げ、下女酌をする、おりう思入あつて、

ほんにまあ、しばしの間もお宿を申し上げましたら、お名殘り惜しうございまする。申し旦那樣、お聞きなされませ、唯今夫が申しまする通り、このやうに空合も惡うございまするし、定めし覺束なく思召しませうが、その段はお氣遣ひはございませぬ。イヤモウ、このやうに申しますると、どうやら女房の口から夫をほめますやうで、お恥かしうございまするが、マアお聞きなされませ。二三日以前うちの人は、問屋廻りに出られましたゆゑ、若い衆の物から子供の物迄洗濯物がつかへまするし、なにがよい天氣でございましたゆゑ、盥一杯浸けこみ、せいだして洗うて居りましたら、こちの人が問屋から歸つて來られまするど、マア門口から大きな聲で、ヤイ阿房め、このやうな天氣に洗濯をしくさつて、どこで干さうと思ふのぢやと申されまするゆゑ、マアこのやうな天氣に洗濯せねば、子持は手が廻らぬと申しましたれば大きに腹を立てまして、それが阿房ぢや、なんぼ都合がしたうても天氣の惡いのにほし上げることがなるまいと申されましたが、なんの阿房らしい、いんまの間にほしあげて見せうとせい出して洗うて居りましたれば、夫の云ふ事聞き居らぬ奴ぢや、首縊しようと申されまするゆゑ、こりや面白い、サア首縊ぢやと申して、何處の國にか夫の首を取る氣かして、さつと濯ぎしぼりあげ、掛

けるやいなや後の方から、眞黒になつて降つてまゐりました、サア、どうぢや首をおこせと申されました。イヤモウ、私は一言もございませぬ、ほんにもう船と日和を見る事は、こちの人が大名人。ほんにマア、拍子にかゝつて私が申す事ばかり。サア〳〵、も一つお上りなされませ。

女一　サア、もうお一つ召上りませ。

〽女房達のすゝめにより、大將御悦喜ましまして、四人の勇士もとも〴〵に差いつ抑へつ杯の數めぐらして門出の祝ひ、大物の浦になみ〳〵と引受け〳〵すごしけり。

船頭　いま御內儀の云はるゝ通り、出船して暴風られたら大難儀、所で親方が見極めたこの日和、沖がゝりをしようぢやなし、順氣に直ぐに御着船になりまする。サア、支度が宜しうございますなら、元船へ參りませう。

片岡　いかさま、さやう仕らう。いざ、この上は我君樣。

義經　最早船場へ赴かん。

駿河　いざ御案內。

兩人　かしこまりました。

りう　小雨ながらも大切な御身の上、しばしの内もお姿を。

ト ありあふ簑笠を出す、兩人手傳ひ、義經に着せる。

義經　そちが敎へに義經が、身の隱れ笠隱れ簑。

ト やす下駄を穿き、門口へ出る、

りう　あなた方にも船場まで。（ト四人にも簑笠を渡す。）

四人　勸めにまかせて。（ト四人も着る。）

義經　然らばこのまゝ。

りう　御機嫌よろしう。

義經　過分。

へうち連れ立ちて主従は船場へこそは、

ト 此淨瑠璃へ波の音雨車にて、下女二人傘をさし先に立ち、義經、龜井、駿河、片岡、伊勢、皆々花道へはひる、

りう　ヤレ／＼、お客方を御機嫌よう立たせ申したれば、奥を片づけて下さんせ。

兩人　かしこまりました。

ト兩人奥へはひる、やはり時の鐘、おりう思入あつて。

りう　イヤとやかうする内もう日暮、ドレ、ついでにおみあかしを。

へ燧ならして油さし、神棚おうへに灯をてらし。

ト燧箱を出して神棚行燈へ火をともす事あつて、

コレ〳〵、娘はなにしてぞ、お安や〳〵。

へよべばお安は、一間を立出で

お安　アイ。

ト奥より手習草紙を持ち出る。

りう　暮方に手習もおきやらいで、ようまア精の出ることぢやなア。今夜は父様は侍衆を元船まで送つてなれば、そなたも寢るまでこゝにゐや、ほんにぬしとしたことが、千里萬里も行くやうに身ごしらへ、モウ日が暮れたのに、用意がよくば、早う行しやんせいなあ。

へよべどぐつとも答なく。

返事のないは、もし又晝の草臥で轉寢ではあるまいか、もし銀平殿、銀平殿。

〽よばゝる聲と諸共に。（ト謠になる。）

謠〽そも〳〵これは桓武天皇九代の後胤、平の知盛の幽靈なり。

〽こなたの障子引き開くれば、常に變りし優美の出立、白糸威の武具に、白柄の長太刀構へしは、げに良將と知られけり。

知盛 ばん龍は天地に蟠り、時至らねば宮守蜥蜴と身をひそめ、我も亦渡海屋銀平とは假の名、新中納言知盛と、實名をあらはす上は。

〽恐れありと娘の手をとり、上座にうつし奉り。

ト大小の合方になり、お安を上手へ直し。

君は正しく若君にて渡らせ給へど、源氏に世をせばめられ、所詮勝つべき戰ならねば、玉體は二位の尼抱き參らせ、知盛諸共海底に沈みしと欺き、竊に供奉なしこの年月、お乳の人を女房といひ、御介添の侍從を下女となし、勿體なくも若君を我子とよび奉り、時節を待ちし甲斐あつて、九郎判官義經を今宵の中に討取つて、年來の本望達せんこと、あら〳〵嬉しや喜ばしやなあ。典侍の局も喜ばれよ。

ヘ勇める顔色威あつて猛く、平家の大將知盛とは、その骨柄にあらはれたり。

典侍　さては常々の御願ひ、今宵と思召給ふよな。

知盛　いかにも。

典侍　ハ、ア、勇ましやさりながら、判官はするどき男子とやら、し損じばし、したまふな。

知盛　なにさ〳〵、その故にこそ手段をめぐらし、最前北條が家來相模五郎と云はせしも、我手の者、討手と僞り狼藉させ、我義經に荷擔人の體に見せ、今夜の難風を日和と僞り、船中にて討ち取る計略、なれども知盛生殘りて、義經を討つたるなりと忽ちに沙汰あつては、末々君の御養育の妨げ、知盛又重ねて賴朝に仇も報はれず、よつて人數を手配りして、艀にて後よりぼツつき。

ヘ義經と海上にて戰はゞ、西國にて亡びたる、平家の惡靈知盛が幽靈なりと雨風を幸ひに、彼等が眼を眩まさん爲、我が扮裝も朧げに。

ヘ怪しく見ゆる白糸威、白柄の長刀おつとりのべ、九郎が首取りたち歸らん、その軍用の品とりしたゝめ、かの牛窓へと積んだる荷物は、みなこれ變る手段の兵具。

典侍　かばかり深き御計ひ、必定勝利に疑ひなし、

へ局が喜び知盛思案し。

知盛　勝負の場所はこの大物、必定勝利とは思へども、もし自然この沖にあたりて、提灯松明一度に消えなば、我討死の合圖と心得、君にもお覺悟させ申し、御骸見苦しからぬやう、な、かねてこの事心得めされ。

典侍　ア、もし、跡氣づかはずとよい吉左右を、知らしてたべ。

知盛　いふにやおよぶ、かく迄しこみしわが計略、たとひ義經天地をくゞる術あるとも、やはかし損じ申さんや、一門の仇鬱憤、今ぞ晴れゆく時節到來。

ト此時ばた／＼になり、花道より築開きの船頭一、二白の四天のなりにて、松明を持ち走り出で直ぐに揚幕へ來る。

兩人　お迎ひ。

トよろしく下に控へる、此内典侍の局神酒徳利と三方へ載せし土器とをとりあげお安に飲ませ。

典侍　目出たく出陣。

ト知盛に三方の土器を渡し、

知盛卿、いざお杯。

知盛　ハツ。

ト典侍の局酌して、知盛飲む。

典侍　げに天杯をうながされ、勅命蒙むる義兵の旗擧げ。目出たう祝して、出陣あれ。

知盛　ハツ。

ト田村の謠の切れになる、知盛陣扇を持ち立上り、

〽あれを見よ不思議やな、味方の軍兵の旗の上に千手觀音の光を放つて虚空に飛行し、千の御手ごとに大悲の弓には智慧の矢をはめて、一度放せば千の矢先雨霰とふりかゝつて鬼神の上に亂れ落つれば、ことごとく矢先にかゝつて鬼神は殘らず討たれにけり、ありがたしありがたしや、眞に呪咀諸毒藥、念彼觀音の力を合せて、すなはち還著於本人、すなはち還著於本人の敵は亡びにけり。

ト此文句一ぱいに舞ふことあつてをさまり。

知盛　ハ、、、、。

典侍　目出かく門出。

知盛　おツつけ勝鬨。

若君　知盛早う。

知盛　ハツ。

ヘ飛ぶが如くに。

ト波の音カケリになり、キツヒ三重にて知盛思入れ、船頭二人先きに松明をふりたて、花道へ逸散にはひる、典侍の局後を見送り、

典侍　ヲ、ても勇ましい知盛卿。

ヘ後見送りて典侍の局、御傍にさしよつて。

今知盛のおつしやつたを、ようお聞きなされたか、幼けれども十善の君、このさもしいお姿にては軍神の恐れもあれば、イザ御装束遊ばしませ。

ヘ御装束をと立上り、まさかの時は諸共に、冥土の旅の死装束と、心をこめし

納戸口、褄隠して入りにけり。

ト よろしくあつて典侍の局お安を連れ奥へはひる、波の音にて此道具ぶん廻す。

本舞臺上手へ寄せて中足三間の屋體、一面に伊豫簾を下し、下手正面二段の浪手摺、此前打寄せ、小高き蘆原、よき所に切穴、すべて裏手の體、波の音にて道具をさまる。

〽夜もはや次第に更渡り、松の嵐もかまびすしく、降り來る雨の磯端の岩の小蔭を簑笠に、面を包む忍びの武士、こゝかしこよりあらはれいで。

ト 波の音になり前の場の船頭一、二、三、四陣立て、附太刀にて、肩簑竹笠をかざし、忍び出て、

武一　なんといづれも、かねて時政公の仰せを受け、船頭となつて入込む我々、この家の主人銀平こそ、正しく平の知盛に疑ひなし。

武二　いかにも、女房といふは典侍の局、我子と僞り養育するは、若君にきはまつたり。

武三　まつたこの家に逗留なせしは義經主侍、知盛今宵の難風を、日和と僞り船中にて、討取る計略。

武四　その虛をはかつて若君、典侍の局諸共に討取つて、鎌倉へ差し出せば恩賞褒美は望み次第、手柄はし勝ち、ぬからぬやうに。

武一　しからば邊りに忍び居て、折を見合せ人知れず。
武二　必らずともに合點か。
武三　心得申した。
武一　忍ばッせい。
〽囁きしめし忍び入る。
ト波の音にて下手へはひる。
〽今宵を晴の戴冠と、かねて期したる二人の下女、局が指圖に局の官服、賤がくずやも大內の、ありしに返る御裝束、山鳩色の御衣冠、うや〱しく臺に載せ。
トよき程に伊豫簾を卷き上げる、內に以前の下女二人、白誂への袴、官女のなりにて、三方に御衣冠を載せ、我君の前におき下手に控へ居て。
官一　イザと我君には御裝束。
兩人　片時も早う。
〽御傍に立寄りて、賤が上着を脫ぎかへて、下の衣上の衣、御衣冠にいた

るまで、めさせかゆればあてやかに、初めの姿にひきかへて、やんごとなさ
御粧ひ、俤いとくも見え給ふ。

ト兩人してよろしく衣裳を着せること、

若君　二人の者、典侍の局は。

兩人　ハツ。（ト奥へ向ひ）

官一　君のお召し、

官二　お局樣。（ト此時奥にて）

典侍　唯今それへ。

〽程なく局は見かはすばかり、賤の姿にひきかへて其身も共に衣服を改め、一
間を立出で。

ト此内典侍の局、官女のこしらへ檜扇を持ち出てよろしくすまひ。

君にも御装束上げ參らせしか。

兩人　ハツ。

典侍　目出たい〱。サア、これからは知盛卿の、吉左右待つばかり。

へ君のお傍に引添うて、知らせを今やと待つばかり、折から知盛の郎黨相模五郎、息つぎあへず馳せつけば、

トドンチヤンはげしく、花道よりばた〳〵にて、相模五郎早打のこしらへにて走り出る、典侍の局見て、

典侍　ヤレ待ち兼ねし相模五郎、樣子はどうぢや、何と何と。

へ局もせきにせき立たり、

五郎　ハツ、さればかねての手段の通り暮過ぎより、味方の小船を乘り出し〳〵、義經が乘つたる元船間近く漕ぎよせしに。

へ折しもはげしき武庫山颪に、つれて降り來る雨雷。

時こそ來れと水練得たる味方の勢、皆海中へ。

へ飛込み〳〵、西國にて亡びたる。

平家の一門。

へ義經に恨をなさんと、聲々に呼ばゝれば。

敵も用意やしたりけん、提灯。

〽松明ばら〳〵と、味方の船に乗り移り、こゝを先途と戰へば、味方の駈武者大半討たれ、

事危ふく見へければ、某はこれより直ぐにとつて返し、主君知盛卿の御先途を、見屆け奉らん。

〽申しもあへず駈りゆく。

トドンチャン、ばた〳〵にて、相模五郎花道へ逸散に走りはひる。

典侍　ヤ、、、。すりや一大事に及びしか、さるにても知盛の、御身の上こそ氣づかはし。

官一　さだかに、それと戰ひの。

官二　たとひ黒白はわからずとも、

典侍　沖の樣子はいかゞならん。

〽一間の襖押し開くれば。

典侍の局兩人へそれと思入れ、兩人正面見付けの襖をあける、後打拔き、三段の波手摺、遠見に兵船のもやう、高張りをともし誂への通りある、この途端屋體を上手へ引付け、下の方へ誂への大碇、岩臺を引出し、すべて誂への通りよろしく、典侍の局若君を抱き、立身、官女二人も引添ひ、海の面を見

やつて。

〽提灯松明星の如く、天を焦せば漫々たる、海も一目に見え渡り、數多の兵船やり違へ／＼、船櫓を小楯にとり、敵も味方も入亂れ、船を飛越えはね越えて、追ひつまくりつ、えい／＼聲にて切り結ぶ、人影までもあり／＼と、戰ふ聲々風に連れ、手にとるやうに聞ゆるにぞ。

典侍　アレ／＼御覽ぜ、あの中に、知盛のおはすらん。

〽やよいづくにとのび上り、見給ふ内に。

ト兵船の提灯段々に消える。

典侍　ヤヽヽヽ、提灯松明次第々々に消失せて、沖もひつそと靜まりしは。

〽これこそは知盛の討死の合圖かと、餘り呆れて泣かれもせず、途方に暮れて立つたる所に。

ト典侍の局兩人と顏見合せ、よろしく思入れ。

〽入江の丹藏朱になつて立歸り、

トドンテヤンはげしく、花道ばた〳〵にて、入江丹藏りゝしきなり、手負ひにて走り出て來り、舞臺下手にて放心の思入れ。

兩人　ヤヽ、入江丹藏。

典侍　君にはこれに。

トこれにて丹藏心付き、

丹藏　ヤ、若君、典侍の局。

典侍　シテ何と、サヽ、どうぢや。

丹藏　ハツ。

ト床のノリになり。

されば候、義經主從手いたく働き。主君知盛卿も敵の多勢にとりまかれ、すでに危ふく見えけるが、かいくれに御行方知れず、必定これは海に飛び入り、はや御最期と存ずれば、知盛卿仰せおかれし如く、局には君へ御覺悟の御用意あれ、拙者は君と御主君の冥土の御供仕らん。はや、おさらば。

〽云ひもあへず諸肌くつろげ、持つたる刀腹につき立て、汐の深みへ飛込ん

だり。

ト丹蔵よろしくあつて、波板の切穴へ飛込む、皆々思入

典侍　さてはびんなく知盛も、あへなく討死したまふか、二人の者。

兩人　お局様。

三人　ハアー。

〽はッとばかりにどうと伏し、前後も知らず泣きけるが、やう〳〵に心を定め、

典侍　一叢餘り見苦しき、この茅屋を玉の臺と思召しての御住居、なれど知盛果てし上は、力及ばず、君にもお覺悟遊ばしませ。

〽御手をとつて立給へば。

若君　コレなう乳母、覺悟々々というて、何方へ連れて行くのぢやや。

典侍　おゝさう思召すは理、ようお聞き遊ばしませや。この日本にはな、源氏の武士はびこりて、恐ろしい國、この波の下にこそ極樂淨土というて、結構な都がござりまする、この都には祖母君二位の尼御をはじめ、平家の一門、あの知盛もおはすれば、君にもそこへ御幸あつて、物憂き世界の苦しみを、のがれさせ給へや。

〽なだめ申せば打ちしをれ給ひ。

若君　そりや嬉しいやうなれど、あの恐ろしい波の下へ、たゞ一人行くのかや。

典侍　ア、勿體ない何のまあ、この乳母が美しう育て上げたるお體を、たゞお一人、あの漫々たる千尋の底へやりまして、なんと身も世もあられませう。このお乳が何方までもお供致しますわいなあ。

若君　そりや嬉しい、そなたさへ行きやるなら、何方へなりと行くわいなう。

典侍　おゝ、よう云うて給はつたなあ。

〽引きよせ／＼抱きしめ。

火に入るも水に溺るも、前の世の約束なれば。

〽未來の誓まし／＼て。

モウこの上は、天照大神へお暇乞ひ遊ばせや。

〽東に向はせ參らすれば、美しき御手を合せ、伏し拜み給ふ御有樣、見奉ればは氣も消え／＼。

ヲヽようお暇乞ひ遊ばした。佛の御國は、こなたぞや。

〽指さす方に向はせたまひ。

若君　今ぞ知る御裳川の流れには、波の底にも都ありとは。

〽詠じ給へば。

典侍　恐れながら今一度。

ト典侍の局、これを檜扇へさら〳〵と書き認め、

若君　「今ぞ知る御裳川の流れには、波の底にも都ありとは。」

典侍　ヲ、おでかしなされたなあ。ア、その昔月花の御遊の折から、かやうに歌をよみ給はゞ。

官一　父君様は申すに及ばず、祖父清盛公。

官二　二位の尼君、とりわけ御母門院様、なんぼう喜び給はんに。

典侍　今はの際にこれがまあ、云ふに甲斐なき。

三人　御製ぢやなあ。

〽くどきたて〳〵涙の限り声限り、歎き沈むぞ道理なり。

ト此時遠寄せになる。

〽折から聞ゆる貝鐘太鼓典侍の局は耳そばだて、

典侍　さてこそ義経が計らひにて、若君を傍にせん手段よな、二人の衆、君を守護なし給へや。

兩人　心得ました。

〽二人の官女は手早くも、若君抱き立ち上れば、局も長刀おつとりのべ、共に守護なし引添うたり。

ト若君を兩人して抱上げる、典侍の局長押の長刀を取り、此時岩組の蔭より以前の四人窺ひ出で、

四人　局、觀念。

〽いつの間にかは以前の郎黨、若君めがけて切りつくるを、すかさず、長刀追取りのべ、女に稀なる手だれの働き、はげしかりける次第なり。

ト誂への鳴物になり四人を相手に立廻りあつて、

〽むら〳〵ぱつと逃げ散つたり、局も必死と心を定め。

ト此淨瑠璃の内、四人立廻りあつて、下手へ逃げてはひる。

典侍　最早運命、もうこれまで、君にもお覺悟すゝめ奉らん。

官一　スリヤ、お局様にも、

官二　若君樣にも。

兩人　お覺悟とな。

典侍　いかにも、そち達はこの場を落ちのび、夫の菩提を早う〳〵。

官一　コハ情なきそのお詞、君に別れなに面目。

官二　命長らへ申さんや。この儀ばかりは、

兩人　お許しなされて下さりませ。

典侍　ア、是非に及ばぬ。片時も早く極樂の、門出を急がん。

〽若君しつかと抱上げて、磯打つ浪に裳を浸し、海の面を見渡し〳〵。

トこれより床の合方になり、典侍の局若君を抱上げて、上の方より下手の岩臺へそろ〳〵ト、キツカケなしに屋體岩臺共上手へ引き、よき所にをさまる、典侍の局先に官女二人よろしく岩臺へ乘る、典侍の局海を見渡し、きつと思入れ。

典侍　いかに八大龍王、恒河の鱗、若君の御幸なるぞ、守護し給へ。

官一　モウこの上は、妾はお先へ。

官二　我君樣の道しるべ。

トこれにて波の音になり、官女二人懐劍にてさしちがへる。

兩人　エイ。

〽覺悟の懐劔咽につき立て、底のみくずとなりけり。

ト兩人さしちがへ波手摺の中へ飛込む、水煙りぱつと立つ。此内典侍の局歌を書きし檜扇をいたゞき
此時海へ投入れ。

典侍　それ。

〽ざんぶと打込む御製の扇、渦まく浪に飛入らんとする所、いつの間にかは義經主從馳寄つて、若君小脇にばひ取れば、驚きながら、典侍の局、捨てたる長刀とるより早く、義經覺悟と打ちかゝれば、心得たりと身をかはし、爭ひはてず兩人は一間の内へ。

ト典侍の局若君を抱き波の中へ飛入らんとする時、屋體の内より義經先に四人附添ひ出て、若君を引きとる、典侍の局これを見て、長刀を取つて義經にたちかゝる、四人支へながら上の方へはひる。矢張り波の音、カケリになり、花道より辨慶走り出て、揚幕を見て下手へ忍ぶ、又以前の武士二人走り出て、舞臺へ來り、兩人思入あつて囁き、下手へ忍ぶ。

〽かゝる所へ知盛は大童に戰ひなし、鎧に立つ矢は蓑毛の如く。威も朱に染め

なして。我家の内へ立歸れば、後を慕うて武藏坊表の方に立開くとも、知らず知盛聲を上げ。

ト此の内ドンチヤンのあしらひ、花道より知盛手負ひ好みのこしらへにて、長刀を突き出て來る、引下つて後より辨慶、半切のなりにて附いて出、花道にて知盛見入あつて、

知盛　若君は何處にまします。お乳の人典侍の局。

〽呼ばはり〳〵どうと伏す。

エヽ無念々々口惜しや、これしきの手に弱りはせじ。

〽弱りはせじと、長刀杖に立上り。

お乳の人、我君樣。

〽よろぼひ〳〵驅け廻れば、一間を踏あけ九郎判官義經、若君を弓手の小脇にひん抱き、局を引附けつツ立ち給へば。

ト此内奥より義經若君を抱き、典侍の局傍に以前の四人附添ひ出る、知盛これを見て。

あら珍らしや、いかに義經。

ト謠になり、

〽思ひぞ出づる浦浪に、知盛が沈みしその有様に、又義經も微塵になさんと長刀とり直し、

サア〳〵勝負々々。

〽勝負々々と詰めよれば、義經は少しも騒ぎ給はず。

義經　ヤア知盛、さな急かれそ、義經が云ふ事あり。

〽若君を典侍の局に渡し、靜々と歩み出で。

其方西國にて入水と僞り、帝を供奉なし此の所に忍び、一門の仇を報ぜんとは天晴々々。我この家に逗留し、並々ならぬ人相骨柄、察する所平家にてなにがしならんと思ふゆゑ、辨慶に云ひ含め、若君をさぐるの計略に、荷擔人の體に見せ心をゆるませ討取る手段、その事計り知つたるゆゑ艀の船頭を海へ切込み、裏海へ船を廻し、疾よりこれへ入込んで、始終を委しく見屆け、若君も我手に入つたれども、日の本をしろしめす萬乘の君、何條義經が虜にする謂はれあらんや、一旦の御艱難は平家に血をひき給ふ故、今某が助け奉ツたりとて、不和なる兄頼朝も、我が誤りとはよも云ふまじ、必ず〳〵若君の事は、氣づかはれそ知盛。

〽聞く嬉しさに典侍の局。

典侍　ヲヽ、あの詞に違ひなく、先程より義經殿段々の情にて、若君の御身の上は知邊の方へ渡さう
と、武士のかたい誓言、喜んでたべ知盛卿。
へ聞くにこつたる氣も逆立ち。
知盛　チヱヽ、殘念や、口惜しや、我一門の仇を報はんと心魂を碎きしに、今夜暫時に手段あらはれ身
の上まで知られしは天命々々、まつた義經若君を助け奉るは、天恩を思ふ故、これもつて知
盛が恩にきるべき謂れなし。サア、今こそ汝を一太刀恨み、亡き魂へイデ手向けん。
へ痛手によろめく足ふみしめ、長刀おつとり立向ふ、辨慶押しへだて、打物業
にて叶ふまじと、珠數さら／＼とおしもんで。
辨慶　いかに知盛、かくあらんと期したる故、我も後より船手へ廻り、計略の裏をかいたれば、最早
惡念發起なせ。
へ持つたるいらだか知盛の、首にひらりと投げかくれば、
ト辨慶珠數を知盛の首へかける。
知盛　ヲヽ、さてはこの珠數をかけたるは、知盛に出家せよとな、ヱヽ、けがらはしい／＼、抑々四姓始
まつて、討てば討たれ討たれて討つは源平のならひ、生きかはり死にかはり、恨みをなさでお

くべきか。

〽思ひ込んだる無念の顔色、眼血走り髮逆立ち、この世からなる惡靈の相をあらはすばかりなり、御幼稚なれども若君は、始終の分ちを聞しめし、知盛に向はせ給ひ、

若君　我を供奉し、永々の介抱は其方が情、今日又康を助けしは義經が情なれば、徒に思ふな、コレ知盛。

〽勿體なくも御淚を浮め給へば、典侍の局も俱に淚にくれながら、用意の懷劍咽につきたて、名殘惜しげに御顏を、打守り〳〵。

ト典侍の局懷劍を咽へつきたて、よろしく思入、床の合方になり。

典侍　ようおつしやつた、いつまでも義經が志し、必らず忘れ給ふなや、源氏は平家の仇敵、後々までもこのお乳が、若君樣にあだし心も付からうかと人々に疑はれん、左樣ならば生きてお爲にならぬ。君の御事くれ〴〵も、賴みおくは義經殿。

〽さらばとばかりをこの世の暇。

我君樣、知盛卿、いづれもおさらば。

〽あへなく息は絶えにける。（ト典侍の局よろしく落入る。）

〽思ひもうけぬ局の最期、君は猶更知盛も、重なる憂目に勇氣も碎け、しばし詞もなかりしが、若君の御座近く涙をはら〳〵と流し。

ト知盛思入あつて。

知盛　アツ果報はいみじく、一天の主と産れさせ給へども、西海の浪に漂ひ、海にのぞめど潮にて、水に渇せしはこれ餓鬼道、また、

〽ある時は風波に遭ひ、お召しの船を荒磯に、吹き上げられ。

多くの官女が、泣きさけぶは、

〽阿鼻叫喚、陸に源平戰ふは、とりも直さず修羅の苦しみ、又は源氏の陣所陣所に、數多の駒の嘶くは畜生道、今またいやしき御身となり。

人間の憂艱難、目前に六道の苦しみをうけ給ふ、これといふも父清盛外戚の望みあるによつて、姫宮を御男宮と云ひふらし、權威を以て御位につけ、天道を欺き天照大神に僞り申せし

その悪逆、積り積りて、一門我子の身に報いしか。

〽是非もなや。

我かく深手を負うたれば長らへはてぬこの知盛、いまこの海に身を沈め、末代に名を殘さん。いかに義經、大物の浦にて判官に、仇をなせしは知盛が、怨靈なりと傳へよや。サア、息ある内に若君の供奉を頼む〳〵。

〽よろぼひ立てば、

義經　ヲ、我はこれより九州の、尾形が方へ赴く、若君の御身は義經が何方までも供奉なさん、心殘さず成佛めされ。

〽御手をとつて立給へば、四人の勇士武藏坊、御後に引添ひたり、知盛につこと打笑みて。

知盛　昨日の仇は今日の味方、あら心安や、嬉しやなあ、これをこの世の暇乞ひ。

若君　知盛。

知盛　ハツ。

へふりかへつて龍顔を、見奉るも眼に涙、今はの名殘りに若君も、見返り給ふ別れの門出、とゞまるこなたは冥土の出船。

三途の海の瀬踏せんと

へ碇をとつて頭にかつぎ、渦卷く波に飛入りて、あへなく消えたる忠臣義心、その亡骸は大物の、千尋の底に朽果てゝ、名は引汐にゆられ、流れ〳〵て跡白波とぞ、

ト淨瑠璃の内、義經先に若君を抱き、龜井、駿河、片岡、伊勢、辨慶附いて花道へ行く、知盛碇を持つてよろしく岩臺へ登り、

皆々　さらば。

へなりにける。

ト段切れにて、知盛碇を擔いだまゝ波間へ飛込む、これにて皆々よろしく、波の音、鳴物カケリにて

幕

ト幕外、大小入り誂への鳴物になり、義經先に皆々花道へはひる。と、あとシャギリ。

四幕目　下市在の場

役名　いがみの權太、鮓屋彌左衛門、主馬小金吾武里、猪熊大之進、庄屋作兵衛、五人組うね作、畑右衛門、一子善太。六代君、女房小仙、若葉の内侍等。

本舞臺一面の淺黄幕、よき所に葭簀張りの出茶屋、上の方に開帳の立札、同じく提灯、床几を直し眞中に椎の木の大樹、同じく釣枝、こゝに小仙女房のこしらへ、善太傍に遊び居る。仕出し大勢開帳參りのこしらへにて床几にかゝり、これへ小仙茶を出してゐるこなし、金峯山藏開張の體、在鄕唄にて幕開く。

○　なんと、久し振りでのお開帳とは言ひながら。

◎　おびたゞしい、群集なことではござらぬか。

△　それといふも大食官飯足樣といふ、どえらいくらゐのつよいお方の、由緒ある靈寶物がござるによつて。

□　これはしたり、大食官ではござらぬ。

皆々 大職冠でござるわい。

△ 左様でござるか、わしは又くらゐのよい人ぢやゆゑ、大食官かと思うたわえ。

○ それに又、東大谷の講中から奉納の、飾り物は見事な物でござるなあ。

◎ ぢやによつて、あの通りな群集でござる。

□ とやかういふ内、アレ見さつしやれ、日足が段々。

○ しかし夜が長くなりました故、わしは家へ行て。

◎ ハヽア嚊衆のお開帳と出かけるつもりか。

○ すなはち左様さ。

△ ほんに、すきな男だわえ。

皆々 ハヽヽヽヽ。

○ ときに、茶代を拂ひましたぞや。

皆々 サア〳〵、行きませう〳〵。

ト辻打ちになり、皆々下手へはひる、小仙は捨ゼリフにて、茶碗なぞ片づけてゐる、床の淨瑠璃になる。

へ枯れ殘る身はいとゞ細枝をりや、若葉の内侍若君は、主馬の小金吾武里が、嵯峨をのがれて惟盛のもしや高野と志し、旅の用意の小風呂敷、背に忍海吉野なる、下市村に着きけるが、

ト此文句にて、花道より若葉の内侍、六代君の手を引き、後より小金吾、大小旅なりにて、跳への荷をかたげ、出て來り、こなしあつて、

小金　幸ひのあの茶店、暫くお勞れをお休めなされませ。

トこれにて三人本舞臺へ來る。

へ内侍を誘ひ、其身も背負ひし包をおろし。

トこなしあつて、小金吾六代内侍を上手の床几へかけさせる、小仙は茶を汲み出て。

小仙　サア、お茶一つお上りなされませ。

へ内侍はつく〴〵見給ひて。

内侍　コリヤ、そなたも子持さうなが、自も連合の忘れ筐を伴ひしに道よりなやみて貯へし、藥を殘らず飲みきらし、俄の難儀、子を持つた者は相見互ひ、嗜あらば所望したうござるわいの。

小仙　それはマアいかい御難儀、私が子は産れてより、頭痛一つおこしませぬ故何の用意もござりま

せぬ。ハテそれはお氣の毒な事でござりまする。ヲヽそれ〳〵、幸ひこの寺の門前に、洞呂川の陀羅にすけ受け賣りをする人がござりますれば、お供の前髪さん、ツイ一走り行つて、お買ひなされませ。

小金　イヤ〳〵、身共は當所不案內、大儀ながら其方調へて來てはくれまいか。

小仙　ヲヽそれはお安い事、私が調へて來てあげませう。善太留守しや、それとも一緒に行きやるか。

善太　ヲヽ、おれも一緒に行かう〳〵。

〽おれもと慕ふ子を連れて、尊い寺の門前へ。

ト善太の手を引き、思入あつて、

小仙　ドレ、買つて參りませうか。

〽藥を買ひに出て行く。（ト小仙善太を連れて花道へはひる。）

內侍　ハテ、心よい女中ぢやわいの。

ト內侍落ちし木の實に思入あつて。

コレ六代、こゝに大分木の實が落ちてあるが、拾うて遊ぶ氣はないか、金吾が拾ふが大事ないかや。

へいさめの詞に引立てられ。

六代　金吾も拾へ、おれも拾はう〳〵。（ト拾ふ事）

内侍　サア〳〵ひらを。

小金　イヤ、拙者めが拾ひませうか。

ト内侍小金吾は、六代を慰めながら木の實を拾ふ。

へと小金吾が廿歳に近き大前髪、大人氣ないも若君の、機嫌とる椎栃の實を、拾ひ集むる折柄に若い男の草臥足。

トテンツ、合方にて、花道より權太旅なりのこしらへにて、荷を肩にかけ出て來り直ぐに舞臺へ來り。

權太　どりや、一服して行かうか。御免なされませ、火を一つお貸しなされませ。

ト床几へかける。三人とも木の實を拾ひ居るを見ながら。

こりや皆樣方は、開帳參りでござりまするか、和子樣は道草か、わしが在所の子供と違ひ、御器量なお産れつきでございますねえ。

へ褒めても話しかけても、心おく身はそこ〳〵に、詞數なく拾ひ居る。

ト權太は木の實を拾ひ居るを見て、

小金　もし〳〵、その落ちた木の實は蟲入りで、見かけがよくツても、皆ほがらでござります。木にあるのをお取りなされませ。

權太　この男は何を申す、二丈餘りのこの高木、かけ上る蹴爪はござらぬわえ。

小金　もし、そりや心安く、取りやうがござります。

權太　そりや、どうして。

小金　さらば取つて、お目にかけませうか。

〽小石拾うて打つ礫、枝にあたつてばら〳〵〳〵、若君若丈惱みも忘れ、

ト權太小石を拾ひ、捨ゼリフにて木の枝へ打ちつける、これにて木の實大分落ちること。

六代　金吾も拾へ、おれも拾はう。

〽小金吾拾への御機嫌に、内侍も嬉しく、

内侍　ヲヽ、よい事して貰やつた、過分〳〵。

〽と一禮に、冥加にあまると知らざりし、旅の男は自慢顏。

權太　何と御覽じましたか、モウちつと取つて上げたいが、遠道をかゝへお仲申してゐられず、私は

先へ參ります、御縁もあらば又重ねて、お目にかゝりませう。
ト權太こなしあつて上手へはひる、此時荷物を取り違へることよろしくある。

〽云うて其場を行過ぎる、小金吾木の實を拾ひしまひ。

小金　サア〳〵これで御堪忍なされませ、さて〳〵今の男は、氣轉者でござりました。
ト小金吾思入あつて、床几におきし風呂敷を見て。

こりや、どうやら風呂敷包みが。

〽と見るや床几の風呂敷包み、同じ色でもどこやらが、違うたやうなと走り寄る。
ト小金吾思入あつて、包みの中を改め見て、

〽違うたやうなと、內改めれば覺えなき。

小金　しかもこれは張皮籠、こつちは衣類の藤行李、さては木の實に氣を奪はせ、取りかへてうせたるか、但し粗相か、なんにもせよ、追かけて取りかへさん。
ト行きかゝる。

權太　ア、もし〳〵。

ト上手より、權太以前の荷物を持ち走り出て來る。

旦那、大きに粗相致しました、眞平御免なされて下さりませ。

ト右の荷物を、小金吾の前へおき、

日も暮近し心はせく、同じ色の風呂敷故、重い輕いに氣もつかず、取り違へましたは私の粗相、道にてふつと心づき、とつてかへしてお詫言、ヘイ／＼眞平御免下さりませ。

ヘ顏に似合はぬ手すりたいほう、小金吾は胸おちつけ、

小金　粗相とあらば言分なし、萬一紛失の物があるとゆるさぬぞ、合點か。

權太　何がさて臺座の別れ、お荷物に躑躅があつた時にやあ、御存分になされませ。

小金　ム、、其の一言なら疑ふに及ばねども念のため、中改めて受け取らうか。

ト權太捨ゼリフよろしく、此内小金吾荷を改め見て

ヘ包みを開き改め見れば、相違もなし。

實に粗相に極まつた、中分ない、ソレ其方の荷物持つて行きやれ。

ヘと床几に殘る風呂敷包み、渡せば受け取り不思議顏。

ト權太自分の荷物をちよつと見てこなし。

權太　なに、荷物に間違ひはござりませぬか、ヤレ〳〵嬉しや〳〵。もし、この中着の解けたは。

ト小金吾へこなし。

小金　イヤ、それは最前髮つたやうには思へども、もしやとちよつと見たばかり。

權太　それぢや私も、ちよつと中を改めても、ようござりまするか。

小金　自分の包み、勝手におしやれ。

ト權太荷物を解く。

〽云ふ間に開く張皮籠、引ちらけて袷の袖、浴衣の間を搜し見て、びつくり仰天、行李打ちふるひ。

ト權太いろ〳〵搜し見て、無き思入れ。

權太　こりやアどうだ。こりや無いわ〳〵。

小金　無いとは、そりや何が見えぬ。

權太　サア、この皮籠の中に、人に頼まれて高野へ上げる祠堂金の二十兩、入れておいた。こりや、くすねたな〳〵。サア出した〳〵、サア出しやがれ。

〽とつてもつかぬ難題に、小金吾むつと反打ちかけ、

小金　こいつ下郎の身を以て、武士に向つてその雜言、今一言云つて見よ。

〽きつさうかゆれば、

權太　ハヽヽヽ、成程盗人猛々しいと、しらを切つて逆ねぢに、扶持方棒をひねくつて、おどしをかけて逃げる氣か、そりや大和に澤山な、萬歳や才藏のぼんやりとした奴なら、おどしを食つて行きもせうが、その手は食はねえおかつせい。十四の年に友達と家をこつそり拔參り、恐え野道も馴れツ子に、伊勢から江戸へぐれ出して、忘れもしねえ一年餘り賭場のぼうぢや質屋の使ひ、ごろついてゐた蔭にや、この目がでりやこの後は、かうと氣のづに先から先、惡い事なら見えすかア。サア僞か金は二十兩でも、盗人といふ名がつきやあ、一人ばかりか二人三人身體に縄のかゝらぬ内、きり〳〵金を出しやアがれ。

小金　モウ堪忍が。(ト刀の柄へ手をかける。)

〽と拔きかけしが、お二方の姿を見て、ぢつとこらへて胸なでおろし、

これさ若い人、そりや生得の覺え違ひ、見らるゝ通り足弱を、お供したれば、假令何萬兩落散つてあらうとも、目をかける所存はない、とくとそつちを吟味しやれ。

〽と云はせもはてず。

權太　コレ、その足弱を連れたが、盜人のつけ目だわ、よもやと思はせて、してやるが當世のはやり物だ、何萬兩は入らねえ、たつた二十兩だ、キリ〳〵出せ。

小金　スリヤ、どうあつても、身が盜んだと申すのか。

權太　知れたことだ。

小金　ムウ、シテその盜んだ證據は。

權太　コレ、この皮籠の中括はなぜ解いた、そつちの荷物に躊躇があると許さねえと、云つたぢやアねえか。なんと理詰だらう、サア出しやアがれ。

〽せりつめられて小金吾も、

小金　もう、これまで。

ト小金吾刀を拔かうとするを、内侍とめて、

内侍　コレ、尤もぢやが、短氣な事しやつては、わしもこの子も共に難儀、無念にあらうと堪忍して、あの者の言ふやうに、料簡つけてやつてたも、足弱連れたを災難と思ひ、胸を靜めてたもいなう。

〽血氣にはやる小金吾も、見るにしのびず涙をおさへ。

ト小金吾思入あつて。

小金　世が世の時であらうなら、ずた〳〵にためしても、あき足らぬ奴なれども、何をいうても茅花の穗にも怯ぢる身の上、御臺樣、チヱ、口惜しうござりまする。

へこなたは大事な二方を、お供の身なれば無念を怺へ、奥齒かむ程つけ上り、

權太　二十兩の金であたゝまつて、その面なんだ、ホウ怖い〳〵、その赤鰯をひねくつて切る氣か、その目で嚇すか、これ前髮の毛を一本〳〵引こ拔くぞ、但しは金はふけらしたか、ドレ連の女を。

ト内侍へかゝらうとするを、つき廻して、

へ弱身へかゝるを、首筋つかんで引戻し、用意の路銀云ふ程出し、にらみつけ。

トこれにて小金吾懷中より包み金を出し、權太へはふりつける。

小金　大切のお方をお供したれば、みす〳〵衒りとらるゝ廿兩、きり〳〵持つてうせをらう。

へ打ちつくれば衒りのならひ、金見ると目に佛なく、手ばしかく拾ひ集めて耳よみ揃へ、

權太　テモ恐ろしい此の金を、すんでの事にしてやられうとした。

小金　その舌の根を。（ト小金吾立寄らうとするを。）

〽立寄る金吾を、内侍はおさへ。

内侍　ア、コレ、事ない内に。

〽事ない内と若君引連れ、立出で給へば是非もなく、後に引添ひ小金吾も、無念を怺へ。

ト小金吾思入、内侍は六代を連れ行きかける。小金吾立戻つてちよと権太へ思入れ、内侍これをとめ、

〽上市の宿ある方へと、急ぎゆく。

ト三人思入あつて上の方へはひる。権太後を見送り、のび上り〳〵見送る。この時下手より、以前の小仙善太の手を引き出て、此様子を見て、葭簀の蔭へちよと小隠れする、権太こなしあつて、

権太　コレ、いくらにらんでも一度が一分につきやアしねえわ、べらぼうめ。

〽うまい仕事といがみの権太、金懐へ押込んで、盆屋へ急ぐその折柄。

どりや、行からか。

〽行く所へ、茶屋の女房立ちふさがり、

ト行きにかゝる、小仙權太の手を引き出て、

小仙　コレ權太殿、こりやどこへ。

權太　ムヽ、わりや嫁か、戸を明けてどこへ行くのだ。

小仙　私しや藤八のお頼みで坂本へ、薬を買ひに行きましたわいなあ。

權太　ヲヽそりやいゝ手筈だ、われが居たら邪魔をしように。

小仙　コレ權太殿、わしやお前に衒りをさす氣で、戸を明けて居やしませぬぞえ。マア、下に居やしやんせ。マアちよつと下に居やしやんせいなあ。

權太　サア、下に居るが、何の用だ。（ト床几へかゝる。）

小仙　エヽ、お前はなあ／＼。

ト合方になり、小仙思入れあつて。

最前戻りかゝつた所にわつぱさつぱ、さし出たら衒りの正銘あらはれて、どんな事にならうも知れぬと、あの葭簀の蔭から聞いて居た。えゝ、こなさんは、恐ろしい企みする人ぢや、子は産めど心は産まぬと、親御は釣瓶鮓屋の彌左衛門というて、この村でも口もきくお方に、見限られて勘當同然、御所の町に居た時こそ道も隔たれ、跡の月同じこの下市に住んでも、嫁か孫

かとお近付きにもなられぬは、皆こなさんの心から、いがみの權にきぬきせて、衒の權と云はうぞや、この善太郎は可愛はないかいなア。博奕の資本がいるならば、この子やわしを賣つてなりと、重ねてやめて下さんせ。なんの因果でそのやうな、恐ろしい氣にならしやつたぞいなあ。

　へと取りつき歎けば、

權太　エヽ、又してもめろ／＼と、俺が衒りの原因も、みんなうぬから起つた事だわえ。

小仙　ホウ、こりや聞ねばならぬ、そりや又どういふわけで。

權太　どうといつたら覺えがあらう、俺が十五の歳元服して、親父の云附けで御所の町へ、鮨商賣し女の中に、われが振袖見込んだが因果のつくばひ、お袋のへそくり金店の得意の溜り錢、身體半分しまうてやつた、聞えたか、所で親父がほり出した、無理なやつの、その時因果とこの餓鬼が腹にあつて、親方はねだる、年貢米を盗んで立銀、その尻が來て首が飛ぶのを、庄屋の阿房が年賦にして毎日の催促、その金を濟まさうと博奕にかゝり出世して、小強請衒、この中も親父の所の家尻を切つて見た所が、妹のお里めと家の男めが夜通しの鼻聲で、とんと間の惡かつたこと、とう／＼とやり損なつたが、今日は又まんのよさ、この勢にお袋の鼻毛をゆ

すりかけ、二三貫目せしめてくれるわ、酒を買つて待つてゐろ。コレ善太、居眠りをしやアがつて、日も暮れねえ内から夜通しをしねえけりや、俺が跡は譲られねえ。どれ、行かうか。

ト云ひつゝ立てば、女房はすがりつき。

小仙　まだこの上に親御の物まで、欺しとるとは勿體ない、まあ家へ戻つて下さんせ。こりや善太、父様をとめてくれ。

ト權太を小仙とめて、

善太　とゝ様、家へ行て下されや。

權太　われがさういふなら、家へ歸つて出直さう。サア嚊、店をしまへ。

小仙　アイ〳〵。

ト店をとり片付け、權太の荷をかゝへ、

サア、行かうわいな。

權太　善太來い、えゝ、こぢれツてへ。

ト善太を背負ひ、權太思入あつて、

エヽ、つめてへ手だなあ。

小仙　サア、早うござんせいなあ。

權太　エヽ、うしやアがれ。

ト唄になり、兩人よろしく花道へはひる。と禪の勤めになり。手より猪熊大之進、引還し合羽三度笠旅なりにて出て來ると、上下より立廻りの人數八人忍びのなりに出て來り、思入あつて。

六人　大之進樣。

大之　こりや、（トあたりへ思入あつて。）かねてわいらが知つての通り嵯峨野の奥にて取り逃がせし、主馬の小金吾武里、内侍六代共々に、當地へ來ると手の者より、我へ竊の報せ故、思ひ思ひに姿を變へ、彼奴等を召し取る今宵の手筈。

一　足弱連れといひながら、音に聞えし主馬の小金吾。

二　油斷大敵我々は、木蔭に忍んで樣子を窺ひ。

三　もし手にあまるその時は、一度にかゝつて惱まさば。

四　たとひいか程働くとも、からめとるには手間ひま入らず。

五　内侍六代諸共に、ふん縛つてさし出せば。

六　褒美の恩祿我々が、一足飛に立身出世。

七　しかし朝方公の思ひ者、若葉の内侍にあやまちあらば。

八　我々が働きも水の泡、怪我なきやうに心をつけて。

大之　ヲヽ、手柄はしがち、油断致すな。

八人　心得ました。

大之　行け。

八人　ハツ。

トやはり禪の勤めにて上手へはひる、大之進思入あつて、

大之　かく八方を取圍めば、小金吾はじめ網裏の魚。なほも手筈を、オヽさうだ。

ト禪の勤めになり、大之進思入あつて、下手へはひる。時の鐘にて、此道具よろしくぶん廻す、

本舞臺一面玉椿の生垣、後ろ黒幕、上下に松の立木、同じく釣枝、時の鐘にて道具留る。

へ夕陽西へ入る折柄主馬の小金吾武里は、上市村にて朝方が追手の人數にとりまかれ、數ヶ所の疵を負ひながら、氣は鐵石とおもひの刃こヽに三人かしこに七人、ばらりくと薙倒し、その身は秋の花紅葉、朱になつてぞ出で來り。

ト此内禪の勤めになり、小金吾拔き身にて、黒四天の捕人二人と立廻りながら出て來り、兩人を斬り

倒し、

小金　エヽ多勢の追手にとりまかれ、お二方を見失ひしが、いづれへお出でなされしやら。内侍様、六代様。

トあたりへこなし。

〽見やる向ふへ追手の大將、猪熊大之進、遲ればせにはせ來り。

トドン／＼になり、花道より大之進、四天のこしらへ以前の八人黒四天にて附添ひ出て來り、

大之　ヤア／＼小金吾、いつぞや嵯峨で見失ひ、主人朝方の不興をうけ、すご／＼館へ歸られず、庵坊主に白状させ、つけまはしたるこの街道、維盛の御臺所若君諸共身共へ渡し、腹かつさばいてくたばるか、丁稚め返事は、なんとなんと。

〽なんとなんとゝ呼ばゝれば、小金吾ふッとふき出し、

小金　主馬の小金吾武里が、御供申すお二方、やはかわいらに渡さうや、道おッぴらいて通しをらう。

大之　ムヽ、さうぬかせば絶體絶命。者共、ソレ。

八人　心得ました。

へ打つてかゝるを右左り、手負ながらも小金吾が、手いたき手練に切り立てられ、言ひがひなくも組子共、風の木の葉と逃げ行くを、のがさじやらじと追うて行く。

トドン／＼にて、八人を相手に立廻りあつて、トヾ皆々を上手へ追込む。とやはりドン／＼にて、下手より六代出て來り、

六代　金吾やアい、金吾やアい。

ト舞臺をよろ／＼して下手へはひる。これにて此道具ぶん廻す。

本舞臺正面一面に振りよき松並木、上手右の地藏、臺幹の松、所々に稻村、後ろ黒幕、こゝに小金吾八人と切結び居る、ドン／＼にて道具納まる。

小金　主馬の小金吾武里が、死もの狂ひ、うぬら寄つたらなで切りだぞ。

八人　なにを。

トドン／＼にて、ちよつと立廻り、跳への鳴物になり、八人を相手に立廻りよろしくあつて、トヾ皆皆を切倒し、きつと見得、時の鐘、思入。

小金　内侍樣、六代樣。

ト花道を見やり思入。此時後より大之進飛び出で、

大之　武里、觀念。

トこれより、床の淨瑠璃になる。

〽踊り上つて討つ太刀を、てうとうけとめはつしと反ね、手強く見ゆる猪熊も目當は眩むそのすきに切込むだんびら、眉間割られてづでんだう倶に深手の四苦八苦、修羅の巷ぞあやふけれ、忠義の天性小金吾が、なんなく相手をとつて押へ、ぐつと突込む止めの刃、

ト淨瑠璃の立廻りあつて、トゞ大之進を切倒し、止めをさす。小金吾苦しみ立廻りながらこなしあつて。

小金　御臺樣若君樣イなう。御臺樣、若君樣イなう。

ト刀を杖につき思入、

〽仕果せし嬉しやと、思ふ心のたるみにや、うんとその身も倒れ伏す、

ト小金吾苦しき思入れにて倒れる、ばた〳〵にて、内侍六代出て小金吾を見てびつくりして抱き起し、思入あつて。

へなう悲しやと内侍若君、いたはり抱き起し。

内侍　これなう金吾、気を確に持つてたも・其方が死んで自や、この六代はなんとなるものぞいなう、これ情ない、気を確に持つてたもいなう。

六代　小金吾イなう、小金吾イなう。

へ情なや悲しやと、泣き入り給ふ御声の、耳に通つて手負は顔あげ。

小金　ヲヽ内侍様か、六代様か、よう御無事でござりましたなあ。

ト竹笛入りの合方になり。小金吾苦しき思入れあつて、

これ御両所様、諦めて下さりませ、心はやたけに逸れども、もう叶はぬ、我君維盛様は、かねて御出家のお望み、熊野の浦にて逢ひ奉りしといふ者ある故、高野山へと志し、お二方をお供仕つたれど、中々この深手では思ひもよらず、これ若君様、ようお聞き遊ばせや、御台様を伴ひ高野の麓といふ所に内侍様を残しおき、あなたには人を頼んで山へ登り、父様の御名は言はれぬ、今道心の御出家と、尋ねてお逢ひ遊ばせや。

へ西も東も敵の中。

アヽ平家の公達とさとられぬやうお命めでたう御成人遊ばせや、憚りながら金吾めが事思召し

出されなば。

〽一滴の水一枝の花、それが卽ち冥土へ御知行。

御成長待つて居りまする、お名殘惜しうござりまする、モウお別れ。

〽云ふもせつなき息づかひ、六代君はとりすがり。

六代　こりや金吾、そちが死ぬると父樣に、逢ふ事がならぬわいなう。

〽泣き入り給へば、內侍はせき上げ。

內侍　あれ聞いてたも、子心でも其方一人を力にする、維盛樣に逢ふまでは、死ぬまいぞとなぜ思うてはたもらぬぞ、御一門は殘らず亡びたまひ、廣い世界を敵に持ち、いつ迄長らへゐられうぞ、ともに殺してたもいなう。

〽歎きたまへばことわりと、手負はいとゞ淚にくれ。

小金　先君小松の重盛樣は日本の聖人、若君はその孫君、諸神諸菩薩の惠のない事はござりませぬ、末の賴みを思うて、必ず短氣をお出しなされまするな。アレ／＼向うに提灯の火影、又も追手の來るも知れず、若君伴ひこの場をば、サ、、早う／＼。

內侍　イヤ／＼、深手の其方を見捨ておいて、何處を當に行くものぞ、死なば諸共。

へと座したまへば、

小金　エ、腑甲斐ない、六代様は大事にはござりませぬか、この手で死ぬ金吾ではござりませぬ、聞き入れて、この場を早く。エ、聞き入れなければ、直ぐに切腹。

内侍　それぢやというて、このまゝに。

小金　お聞き入れなくば、この場で切腹致しませうか。

ト刀へ手をかける、内侍とめて、

内侍　ア、コレ、待つてたもいなう。

小金　そんなら落ちて、下さりまするか。

内侍　サアそれは。

小金　サア。

兩人　サア〳〵

小金　聞き入れなくば。

内侍　そんなら聞き分け、落ちませうわいなう。

小金　スリヤ、御得心下されまするか。

内侍　オイなう。

小金　エヽ忝ない。

内侍　たゞ案じらるゝは、其方の身の上。

六代　こりや金吾、必らず死んでくれなやア。

小金　お氣遣ひ遊ばすな、運に叶ひお後より、參りまする。

内侍　必らず待つてをるぞや。

小金　サヽ、早く〳〵。

〽いふ間も近づく提灯の、火影に恐れ是非なくも、若君連れて立ち給ふ。

ト内侍六代の手を引き、段々花道へはひる、小金吾捨ゼリフにてよろしく思入

〽御心根のいたはしさ、手負は御後見送り〳〵。

死なぬと申せしは皆僞り、三千世界の運借つても、何のこの手で生きられませう、内侍樣六代樣、これがこの世の、お別れでござります。

〽思ふ心も斷末魔、知死期も六つの暮過ぎて。

ト小金吾よろめきながら立上る。

〽朝の露と消えにける。

ト小金吾大之進の上へ倒れ、よろしく絶え入る。時の鐘になり。

〽程なく來る提灯は、この村の五人組、何やらざは〱話し合ひ、山道の別れ途に庄屋の作が立ちどまり。

トやはり時の鐘、花道より彌左衛門ふけたるこしらへ、後より庄屋作兵衛、百姓の權作、畑右衛門提灯をさげ出て花道にて、

作兵　コレ彌助の彌左衛門殿、貴樣鮨生業故、念おす上に押しかけるが、今云ひつけた鎌倉の侍は。

うね　ヲヽそれ〱、聞き及んだげじ〱何やらこなたの耳を甜つて、禿げる程云ひつけたら。

畑右　かしこまつた〱と、滅多無性にうけあうたが、何んぞ覺えの

三人　ある事でござるか。

彌左　ハテ知れたこと、こなた衆も常から俺が性根を知らぬのか、血を分けた悴でも、見限つたら門端も踏まさぬ彌左衛門、膝ぶしが碎けても、畏つたら舞も切らさぬ。したが彼の云付けがもつけの幸ひ、嵯峨の奥から逃げて來た子を連れた女と大前髪、この村に入込んだと追手からの報せ、所でげじ〱殿が甜りかけて、捕へたら褒美とある。こりや又格別よい仕事。皆も油斷

せまいぞや。

作兵　ヲヽそれ〳〵、こんな時こなさんの息子、いがみの權太殿が居たら、役にたゝうわえ。

うね　アヽコレ、いがみなぞと、親御の彌左衞門殿が聞いてござるわえ。

畑右　庄屋樣にも似合はぬ、氣を附けたがようござる。

作兵　これはとんだ粗相を申した。

三人　ハヽヽヽ。

彌左　わしはちと、この村境に用事もあれば、こなた衆達はそろ〳〵と先へ行かしやりませ。

作兵　そんならわしは、先へ行きませうかえ。なう、皆の衆。

畑右　さうしませう〳〵。

三人　彌左衞門殿、先へ行きますぞや。

ト三人捨ゼリフにて、本舞臺へ來り、下手へはひる。

〽頼んでおかうと五人組、山道行けば彌左衞門、坂へおりしも行先の、手負に
ばつたり行き當り、はツととびのき氣味わるながら、提灯ふり上げそろ〳〵
立寄り、

ト彌左衛門舞臺へ來り、小金吾に躓き思入れあつて提灯をかざし見て。

彌左 テモむごたらしう切つたわ〳〵、旅人さうなが、追剝の所爲ならば丸裸にしさうなもの、路銀を當に惡者の所爲でもあるか。

へ惡い子を持つ親の身は、案じすごして、

これ〳〵、手負殿々々。

へ呼べど答もなき骸に、

扨は最早、息絶えたか。

へ見ればふけたる角前髮、袖振り合ふも他生の緣。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

へとかく浮世は老少不定、哀れを見るも佛の異見、人は唯まず眞直ぐに、後生の種が大事ぞと、思ひつゞけて行き過ぎしが、なに思ひけん立留り、とつおいつの一思案、そろり〳〵と立戻りあたり見廻し見廻して、

ト彌左衛門いろ〳〵思入あつて、トヾ落しある刀を取り上げ、死骸の首を打ち、

へ死首はツしと打落し、提灯ふき消し首ひッさげ、忝い。

へ直ぐなる道の横飛びに、我家をさして。

ト首を手拭に包み、思入れあつて逸散に花道へこなし、床の三重、本釣鐘の送りにて、よろしく、

幕

五幕目　鮓屋の場

役名　いがみの權太、下男彌助實ハ三位中將維盛、鮓屋彌左衛門、梶原平三景時、一子善太、六代君。鮓屋娘お里、若葉の内侍、女房小仙、鮓屋母おくら等。

本舞臺三間の間常足の二重、上手障子屋體、正面戸棚の内に誂への箪笥、錠前つき、眞中納戸口、下手鮓桶の棚、此前に仕事場一式飾りつけ、よき所に誂への鮓桶三つ程並べある、いつもの所に門口、柱に釣瓶鮓と記したる看板掛けある、すべて店先きの心。母親おくら、娘お里、片襷にて鮓をつけてゐる、仕出し大勢思ひ思ひのこしらへにて買つてゐる、鳴物テンツヽ合方にて幕あく。

○コレサお娘、こゝへも二百ばかり包んで下さい。

お里　ハイ〳〵、お待遠でござりませう。
くら　マア、お煙草でもあがりませ。
◎　ほんに、この忙しない繁昌な店、娘ばかりぢや手が足るまい、ちつと手傳つてやりたいなう。
△　何といはつしやる、この家には權太というて、息子があるを知らぬかい。
□　ハヽア成程、いがみの權太がことかえ。
△　アヽこれ、何を言ふぞえ。
□　なにさ、いがみぢやアない、日本ぢやと、いふ事ぢや。
皆々　ハヽヽヽ。
お里　ハイ、お誂へができました。
○　ヲヽもう出來たか、ソレ二百よ。
◎　こゝへは、當百一枚ぢや。
△　わしらのは二包みぢやが合點か。
お里　これはあなたのでござりまする。
△　ドレ、五十の土産は嗅のぢや。

□　ハテたのもしいなう、わしは隣へ花嫁ぢや、サア一緒に戾りませう。

お里くら　これは有難うござります。

皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。

トテンツヽにて、別れてはひる。

へ春は來ねども花咲かす、娘が漬けた鮓ならば、いゝなれがよかろと買ひにくる。風味もよしの下市に、賣りひろめたる所の名物、釣瓶鮓屋彌左衞門、留守の內にも生業に、拔目もない儀が早漬に、娘お里が片襷、裾に前埀ほや〳〵と愛に愛持つ鮎の鮓、押へてしめて馴れさする旨い盛りの振袖が、釣瓶ずしとは物らしゝ、しめ木に栓を打込んで、桶片付けて、

お里　モウシ、母さん、昨日父さんのおつしやるには、晩には家の彌助と祝言さす程に、世間晴れ女夫になれと云はしやんしたが、日が暮れてもお歸りないは。

くら　ヲヽ云やる事はいの、なんの嘘であらうぞ、器量のよいのを見込みに、熊野參りから連れて戾つて氣心も知ると、彌助といふ我名を讓り、主は改めて彌左衞門、家の事を任せておかしやる

は其方と娶はす兼ねての心、今日は俄に役所から、親父殿を呼びに來て、思はぬ隙入り、迎ひにやらうにも人はなし。

お里　さいなあ、折惡う彌助殿も方々から鮓の誂へ、仕込の桶が足るまいと、明桶とりに行かれましたりや、モウ戻らるゝであらうわいなあ。

〽噂半へ明桶荷ひ、戻る男のとりなりも、利口で伊達で色も香も知る人ぞ知る優男、娘が好いた厚鬢に冠着せても憎からず、内へ入る間も待兼ねて、お里は嬉しく。

ト花道より、彌助袖無し羽織のなり、鮓の明桶を荷ひ出て來り、舞臺へ來て門口をあけて。

彌助　ハイ、唯今戻りました。

お里　アレ、彌助さんが戻らしやんした、エ、もう待兼ねたわいなあ、なぜまあこのやうに、遅かつたのぢやえ、もしどこぞへ寄つてかと、大抵案じた事ぢやないわいなあ。

〽女房顔して云うてみる、さすが鮓屋の娘とて、早い馴れぞと見えにける、母はにこ〳〵笑ひを含み、

くら　婿どの、氣にかけて下さんすな、この吉野の里は、辨天の敎へによつて夫を神とも佛とも、いたゞいて居よとある天女の掟、そのかはり悋氣も深い、又ありやうは親の孫、瓜の蔓ではござらぬわいの。

〽云ひくろむれば。

彌助　これはまあ却つて迷惑、段々のお世話の上大切なる娘御まで下され、お禮の申しやうもござりませぬ、さりながら、とかくお前樣には彌助殿々々と殿付けになされて、さりとては氣の毒、やつぱり彌助どうせいかうせいと、お心安う、なあもうし。

くら　イヤ〳〵、それはゆるして下され。

彌助　そりや又、なぜでござります。

くら　さればいの、彌助といふ名はこれまで連合ひの呼び名、殿付けせずに、どうせいかうせいとは、勿體なうて云ひ憎い、云ひなれた通り、殿付けさして下されいなう。

〽娘にこれを聞けがしの、母の慈悲とぞ聞えける。お里彌助は明椸を、板間へ並べゐる所へ、この家の惣領いがみの權太。

トテンツヽになり、花道より權太、好みのこしらへにて、すた〳〵と出て、直ぐに舞臺へ來り、門口

をあけて。

權太　お袋は家にか。（ト内へはひる、お里見て）

お里　兄さん、惡い所へ、ようお出でなさんした。

權太　何だ、その面ア、よく來たがびつくりか、わりや彌助と旨い事をしてゐるさうだが、コレ彌助、よく聞け、いま追出されて居ても、この家の釜の下の灰まで俺が物だ、今日は親父の毛虫が、役所へ行つたと聞いたによつて、ちつとお袋に云ふ事があつて來た、二人ながら奥へ行け、エヽ行きやアがれ。

お里　ビヽヽビイ。

ト口眞似して辛氣なるこなし。

〽睨み廻されうぢ〳〵と、これにと云うて立つ彌助、娘も後に引添うて、一間へこそは入りにける。

〽母は一間を立出でゝ、

くら　ほんにまあ、目にかゝるさへ腹が立つ〳〵トットヽおのれうせをらぬか。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、

權太　モシ／＼おつかさん、ちよつと待つておくんなさいまし。

トおくら行きかけしが、思入あつて立留り、

くら　何もわれに用はない。どうなとしをれ。

權太　ア、もし／＼、ちよつと待つて下さいまし。

くら　こりややい、おのれはマア、勘當受けをつた家へのめ／＼と、遠慮もなく、第一世界へ聞えが惡い、サ、、どこへなと早う行きをらぬか。

權太　ちつとの内はいゝぢやないか、たま／＼來たのに、そんなに邪險に云ひなさんな、マア母さん聞いてくんねえ。イヤモウ、俺も今度といふ今度は、こつきり聲を上げました、イヤサ、がつかりしたな。ア、恐ろしい／＼、ごろつき仲間の友達附合ひ、頭から足までかりこんで、今ぢや首も作り付けのやうだ、誠にみぢめかんねぶつが聞いてあきれらア、人をつけに、俺が身體を始末におへなくしましたのサ。

くら　こりや、又親父樣の留守を考へ、無心に來たか、性懲もない腕白者、そのおのれが心から、嫁があつても足ふみ一つさす事ならぬ、聞けばこの村へ來て居るげな、互ひに知らねばすれ合うても、嫁舅の明盲目、眼つぶれと人々に云はれるが面目ない、エ、不孝者め。

〽目に角たてゝかこちたる、機嫌にぐんにやり、直ぐではいかぬといがみの権太、思案しかへて。

権太　コレ拝借人、今晩参つたは、無心ではござりませぬ、お暇乞ひでござりまする。

くら　そりやマア、なんで。

権太　私は遠い所へ参りませねばなりませぬ程に、親父様もお前様にも、随分おまめでござりませ。

〽しをれかゝれば、母は驚き、

くら　ア、こりやく、待ちや、遠い所とは、そりや何處へ、どうした譯で、何しに行くのぢや。

〽根間は親のだまされ小口、さあしてやつたと、目をしばたゝき、

権太　親の物は子の物と、お前へこそ無心を申せ、つひに人の物を箸かたし、いがんだ事も致しませせぬに、不孝の罪か昨夕、わしは大盗人に逢ひました。

くら　や、何と言やる。

権太　サアその中に代官所へ上げる年貢金、三貫目といふものを盗みとられ、云譯もなく仕様がなく、お仕置に合うよりはと、覺悟極めて居りまする。

〽かます袖をば顔にあて、しやくりあげても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の縁へ、

とゞかぬ舌ぞ恨めしき、あまい中にも分けて母親、實と思ひ共に目をすり。

くら　鬼神に横道なしと、年貢の金を盗まれ、死なうと覚悟をきめたとは、まだ出かした、災難に逢ふも親の罰、よう思ひ知れよ。

權太　アイ〳〵、思ひ知つてはをりますれど、どうで死なねばなりますまい。

くら　こりやヤイ、常のおのれの性根故、これも衒りか知らねども、しやうぶ分けにと思うた金、親父殿に隠してやらう、これでほつとり性根を直しをれ。

權太　アイ〳〵。

ヘそろ〳〵戸棚へ子のかげで、親も盗みをする母の、あまい錠さへあけ兼ぬる。

ト二重舞臺の戸棚を見て。

くら　南無三、こりやア錠がおりて。

權太　そりやア煙管の雁首で、こち〳〵がいゝ。

ト腰より煙管を出して、母へ渡す。

ヘしなれたるおのが手業を教ゆる不孝、親は我子の可愛さに、地獄の種の三貫目跡をくろめて持つて出で。

ト權太煙管にて鍵をたゝきあける、おくら戸棚より、銀包みをば三貫目取出し。

くら　アヽこれ、なんぞに包んでやりたいものぢや。（ト思入れ。）

〽限りない程あまい親、うまいわろぢやといがみの權太、鮓の明桶よい入物これへ／＼と親子して、金をつめたる白銀ずし、蓋をしめ、栓をしめ。

權太　アヽもし、これがようございます。

ト鮓の明桶を持つて來る、兩人してこれへ金を入れ。

くら　サアよいわ、これで目立たぬやうに、持つて行け。

ト桶を權太に渡す。

〽親子が工合の最中に苦い父親彌左衞門、これも蛇持つ足の裏、あたふたとして門口を。

ト花　より　彌左衞門出て來り、門口へ來り、

彌左　今戻つたぞよ、あけい／＼ヱヽ、あけぬかい。

ト兩人あたふた思入れ。

權太　南無三、親父だ。（トうろたへる。）

へ内には轉倒うろたへ廻り、其桶こゝへ〱と明桶と、共にならべて親子はひそ〱、奥と口へと引別れ、息を詰めてぞ入りにける。

ト右の桶を明桶とひとつに並べ、暖簾口へ兩人はひる。

へしきりにたゝけば、奥より彌助走り出で、戸をあける、彌左衞門内入り惡く四邊を見廻して。

ト奥より彌助出て來り、門口をあける、彌左衞門内へ入り、

彌左　こりや、まだ何奴も寢てをるか、云ひ付けた鮓どもはしらんであるか。

へ鮓桶さしたり明けたり、ぐわつたぐわた。

こりや思ふ程仕事が出來ぬわい、マ、茶を一つくれ。

彌助　ハイ〱。

ト彌助暖簾口へはひる。彌左衞門思入あつて、懐より侍の首を取出し、鮓の明桶へ隱し、蓋をしてゐる、奥より彌助茶を汲み出て來り、

ハイ、お茶をお上りなされませ。

トさしだす彌左衞門びつくり。

彌左　オヽ、ムヽ、茶か。

ト桶を片よせ、茶を取つて飲みしまひ。

さうして、女房共や、お里めは、何をして居るぞ。

彌助　お袋樣もお里樣も、奧に仕事なされてござります。これへお呼び申しませうか。

ト奧へ行かうとすると　彌左衞門とめて、

彌左　アヽコレ。（トあたりを見廻し、門口をしめ）

〽内外見廻し、門口を閉め。

まづ／＼。（ト合方になる　彌助二重へ住ふ。）

君の御親父、小松の内府重盛公の、その御恩を受けたる某、何卒御子維盛卿の御行方をと思ふ折柄、熊野の浦にてお出合ひ申し、御月代をすゝめ、この家へ御供申したれども、人目をはばかり下部の奉公、あまりと申せば勿體なさ、女房ばかりに仔細を語り、今宵祝言と申すも、心は實をお宮仕へ、彌助彌助と賤しき我名をお讓り申したも、彌助くるといふ文字の緣起、人は知らじと存ぜしに、今宵鎌倉より梶原平三景時來つて、維盛卿をかくまひあるとのツぴき

させぬ詮議、鳥を籠と云ひぬけては隠れども、邪智深き梶原、もしや吟味に參るも知れずと、心企みは致しておけど、油斷は怪我の元、明日からは我が隠居、上市村へお越しなさるがよろしうござりまする。

〽申し上ぐれば維盛卿。

彌助　父重盛の高恩を受けたる者は幾萬人、數限りなきその中に、おことがやうな者があらうか、シテ昔はいかなる者なるぞ。

〽尋ねたまへば、

彌左　もと私めは、平家盛りの折柄、唐土育王山へ祠堂金をお渡しなさるゝ時、おんどの瀬戸にて三千兩の金盗みとられ、役目の難儀切腹にも及ばん所、有難い重盛卿、日の本の金唐土へ渡す我こそは、日本の盗賊と、御身の上を悔み給ひ、重ねてなんの祟りもなく、御暇を下され、親里へ立歸つて由緒ある鮨生業、今日を安穏に暮せども、悴權太郎めが盗み衒り、殺生の報いぞと、思ひ知つたる身の懺悔、お恥しうござりまする。

〽語るにつけて維盛の、榮華の昔父の事、思ひ出され御膝に落つる涙ぞいたはしき、娘お里は今宵待つ、月の桂の殿もうけ、寢道具抱へ立出づれば、主人

はハッと泣く目を隱し。

と暖簾口より、お里蒲團と二つ枕を持ち出て來る。

こりや彌助、今云ひきかせた通り、上市村へ行く事を必らず忘れまいぞ、今宵はお里とこゝにゆつくり、嚊と俺とは離れ座敷、遠いが花の香がなうて、氣樂にあらう、ハヽヽヽ。

ヘ打笑ひ、奥へ行くのも娘は嬉しく

ト彌左衛門思入あつて奥へはひる、お里彌助思入。

お里　ほんにマア粹な父さん、離れ座敷は隣り知らず、餅つきせうとホヽヽヽ、こちらはこゝに天井ぬけ。

ヘ寢て花やろと蒲團敷く、維盛卿はつく／＼と身の上又は都の空、若葉の内侍や若君の、事のみ思ひ出されて、心も冴えず氣は浮まず、打ちしをれ給ひしを、思はせぶりとお里は立寄り。

これイなあ。えゝ辛氣な事、何案じてぢやぞいな、二世も三世も堅めの枕、二つ並べてこちや寢よう。

〽先へころりと轉び寢は、戀の罠とぞ見えにけり、維盛枕に寄添ひ給ひ、

彌助　これまでこそは假の情、夫婦となれば二世の緣、結ぶにつらき一つの云譯、なにを隱さう某は、國に殘せし妻子あり、貞女兩夫に見えずの掟は夫も同じ事、二世の堅めは許してたも。

〽さすが小松の嫡子とて、解けたやうでもどこやらに、親御の氣風殘りける、

〽神ならぬ佛ならねばそれぞとも、知らぬ道をば行迷ふ、若葉の內侍は若君を、宿ある方に預けおき、手負の事も賴まんと、思ひよる身も緣のはし、この家を見掛け戶を打たゝき。

ト花道より、若葉の內侍、六代の手を引き出て來り、門口にて、

內侍　賴みませう。一夜の宿を、賴むわいわいなう。

〽乞ひ給へば維盛は、よい退しほと表の方、たゝく扃に聲をよせ。

彌助　この家は鮨生業、宿屋ではござらぬわいの。

〽愛想のないが、愛想なり。

內侍　イヤ、コレ申し、稚きを連れた旅の女、是非に一夜を賴むわいの。

〽是非に一夜とのたまうにぞ、斷り云うて歸さんと、月を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、はッと戸をさし内のやうす、娘の手前いぶかしく、そろ〱立寄り見給へば、早くも結ぶ夢の體、表に内侍は不思議の思ひ。

今のはどうやら我夫に、似たと思へどなりかたち、頭も青き下男、よもやまあ。

〽よもやと思ひ給ふうち、戸を押しひらきて維盛卿。

彌助　若葉の内侍か、六代か。

内侍　さては、我が夫。

六代　とゝさまイなう。

〽なうなつかしやと取りすがり、言葉はなくて三人が、泣くより外の事ぞなき。

彌助　まづ〱内へ。

今宵はとり分け御の事思ひ暮して居たりしが、親子共に息災で不思議の對面、さりながら某この家に居る事を、誰が知らせしぞ、殊に又はる〲の旅の空、供をも連れぬは何とも以て。

〽尋ね給へば、若葉の内侍。

内侍　都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一門残らず討死と聞く悲しさも嵯峨の奥、泣いてばつかり暮せしに、高野とやらに在すると云ふ者のある故に、小金吾召連れ御行方を、志さす道にて追手に出逢ひ、

へかわいや金吾は深手の別れ。

頼みも力もない中に、めぐり逢うたは嬉しいが、三位中将維盛様がこのお姿は何事ぞ、袖のないこのお羽織に、このお頭は何事おやぞいなあ。

へむせびたえ入り給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手をあて袖をあて、伏沈みてぞおはします、涙の中にも若葉の内侍、伏したる娘に目をつけ給ひ。

若い女中の寝入りばな、殊に枕も二つあり、定めてお伽の人ならん、かくゆるがしきお暮しなら、都の事も思召し、風の便りもあるべきに、打捨て給ふは、お胴慾でござりますわいなう。

へ恨み給へば、

彌助　それも心にかゝりしが、文の落ち散る恐れあり、わけてこの家の彌左衛門、父重盛への恩報じと、我を助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情、何がな一禮返禮と、思ふ折柄娘の戀路を、情なく云はゞあやまちあらん、却つて恩が仇となり、假の契りは結べども女は嫉妬に大事も洩ら

すと、弥左衛門にも口どめして、我身の上も明さず、徒な枕も親共へ、義理にこれまで契りしぞや。

へ語り給へば伏し沈む娘、こたへ兼ねしか声を上げ、わつとばかりに泣きいだす。こは何故と驚く内侍、若君引連れ、逃げのかんとしたまへば。

ト お里起上る、

お里　モシマア、お待ちなされて下さりませ。

へ涙とともに、お里は駈けより。

まづ〳〵これへ。

へ内侍若君上座へ直し、

私は里と申しまして、この家の娘徒ら者、憎い奴ぢやと思されん申訳、お聞きなされて下さりませ。

ト 合方、

過ぎつる春の頃、色めづらしき草中へ、絵にあるやうな殿御のお出で、維盛様とは露しらず、女の浅い心から、可愛らしい、いとしらしいと思ひ初めたる恋の元、父も聞えず母様も夢にも

知らして下さんしたら、たとひ焦れて死ぬればとて。
〽雲井に近き御方へ、鮓屋の娘が惚れらりよか。
一生連添ふ殿御ぢやと、思ひ込んで居るものを、二世の堅めは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に預かりましたわいなあ。
〽どうと伏し、身をふるはして泣きければ、維盛卿は氣の毒の内侍も道理の詫涙、かわく間もなき折柄に、村の役人駈け來り。
ト花道より、宿役人出て、門口をたゝき。
役人　コレ／＼、今こゝへ梶原樣がお出でなさる、内を掃除しておかしやれや。
〽云ひ捨てゝ立歸る、人々はツと泣く目も晴れ、如何はせんと俄の仰天、お里はさそくに心附き、
お里　まづ／＼親の隱居所、上市村へ早う／＼。
〽と氣をあせる。
彌助　げにその事は彌左衞門、我にも敎へおきしかど、最早開かぬ平家の運命、檢使を引受け潔よ

腹かき切らん、さらぢや。

ト腹を切らんとする、内侍とめて、

内侍　コレお待ち遊ばせ、この若のいたいけ盛りを思召し、ひとまづこゝを。

ヘ無理やりに引立て給へば維盛も、子にひかさるゝ後ろ髪是非なくこの地を落ち給ふ、御運の程こそ危ふけれ。樣子を聞いたるいがみの權太、勝手口よりおどり出で、

ト此の文句の内、彌助内侍、六代身拵へして下手へはひる。直ぐに奥より、つか／＼と權太出て來り、

權太　お觸れのあつた内侍六代、維盛彌助、ふんじばつてくれべいか。

ヘ尻引からげ駈け出すを。

お里　コレ、待つて下さんせ、兄さん、これは一生の私が願ひ、どうぞ見遁して下さんせいなあ。

トすがりつき、とめる、

權太　べらぼうめ、大金になる仕事だア、エヽ退きやアがれ。

ヘすがるを蹴飛ばし蹴倒しはりとばし、最前置きし銀の鮓桶、これ忘れてはと引さげて、後を慕うて追うて行く。

ト權太お里を蹴倒し、以前の鮓の桶を引かゝへ門口へ出て、逸散に花道へはひる。

お里　もうし父さん、母さんいなう。

〽お里がよぶ聲彌左衞門、母も驅け出で、

と奧より彌左衞門、おくら兩人出て來る。

兩人　ヤア娘、何事ぢやぞいの。

お里　モウシ〳〵ア、都から維盛樣の御臺若君、尋ねさまよひお出であり、積る話のその中へ、詮議に來ると報せを聞き、御三人連れで上市へ、お落し申したわいなあ。

兩人　オヽ〳〵出かした、出かした。

お里　イエ〳〵、ねつから、出かしやせぬわいなあ。サア、それを聞くと兄さんが、討取るか生捕るかして褒美にすると、たつたいま、追驅けてござんしたわいなあ。

〽云ふよりびつくり彌左衞門。

彌左　そりや一大事ぢや。それ、脇差しをよこせ〳〵。

ト、お里戸棚より、脇差しを持つて來り、彌左衞門に渡す。

〽たしなみの朱鞘の脇差、腰にぼつこみ驅け出す。

ト彌左衛門一腰をさして、つか〳〵と花道へ駈け行く。

〽向うへハイ〳〵、矢筈の提灯、梶原平三景時、家來數多に十手を持たせ、道をふさいで。

ト時の太鼓になり、花道より軍兵矢筈の紋付きの、高張提灯を持ち出て來る、彌左衛門びつくりしてこなし、後より梶原陣立好みのこしらへ、この後より侍四人陣立のこしらへ軍兵陣羽織の入りし誂への鎧櫃をかつぎ、その外大勢附添ひ出て來り、花道にて彌左衛門に行合ひ、梶原を見てよろしく思入れ、

梶原　やあ老ぼれ、何方へ行く、逃ぐるとて逃がさうや。

侍四人　下にをらう。

〽追取り卷かれてはッと吐く胸の、先も氣遣ひこゝものがれず、七轉八倒心は早鐘、時に時打つ如くなり。

梶原　やあ、こやつ横道者、おのれに今日維盛が事詮議すれば、存ぜぬ知らぬと云ひぬける、その儘にして歸せしは、某が計ひ、甲冑の姿にひきかへ、かゝる禮衣を着せしも、思ひよらずふんこまうが爲、この家に維盛匿ひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打、とる物もとりあへず來たれども、油斷の體はおのれをば、とり逃すまいため、サア首打つて渡するや、但し

逢ひに及ばんや、返答ぶて、ど、ど、どうだ。

へせめつけられ、叶はぬ所と胸をすえ。

彌左　成程一旦は隱ひませぬと申したなれど、餘り詮議が强い故、隱しても隱されず、はや先達て首討ちましてござりまする、御覽にいれろでござりませう。何を申すもこゝは門中、マアあれへお通り下さりませう。

ト皆々本舞臺へ來り、内へはひり。

へ佇ひ入れば母娘、どうなる事と氣遣ふ内、鮓桶引さげ彌左衞門、靜々出でゝ向ふへ直し。

ト梶原上手へ通る、彌左衞門鮓桶を取り出し、梶原の前へ直し。

彌左　三位維盛が首、お受けとり下されい。

へ蓋をとらんとする所へ、女房かけよりちやつと押へ。

くら　アヽコレ親父殿、この桶の中には、わしがちつと大事な物を入れておいた。こなさん、あけてどうさつしやる。

彌左　オヽ、われは知るまい、この桶には、最前維盛卿のお首を打つて入れておいた。

くら　イヤ／＼この補は、こなさんに見せる物ではないわいの。

彌左　エヽおのれが、何にも知らぬからぢや。

くら　イヤ、こなさんが知らぬ故ぢや。

ト兩人爭ふ。

〽妻は銀と心得て、爭ひ果てねば郞等ら。

○　ヤア主人の面前、無禮な奴、この場に及んで爭ひ立。

○　たとひ、いかやうに陳ずるとも、その儘にしてすておかうや。

△　いづれが是か非かこの場にて、黑白分ける今日の詮議。

□　最早叶はぬ其身の切羽、サア眞直ぐに白狀せよ。

彌左　サア、それぢやによつて、このお首を。

くら　ハテ、こなさんも聞分けない。

彌左　エヽ、何をおのれが。

〽せり合ふ二人を、見てとる景時。

梶原　ムヽ、さてはこやつら云ひ合はせたな。ソレ者共。

四人　夫婦の者を引くゝれ。

大勢　ハツ、畏つた。

　へ縛れくゝれと下知のした、捕つた〳〵と取り卷く所に。

　ト皆々とり卷く。此時花道揚幕にて

權太　維盛夫婦餓鬼めまで、いがみの權太が生捕つたり。

四人　なに、維盛を生捕つたとは。

　ト侍四人花道を見込む、梶原思入あつて、

梶原　いづれも、引け。

四人　ハツ。（トこれにて四人の侍控える。）

權太　エヽきり〳〵と來やアがれ。

　へ呼ばゝる聲、はツとばかりに彌左衞門、女房娘も氣は仰天、いがみの權太はいかめしく、若君内侍を猿縛り、中に引立て目通りに、どつかと引きすゑ。

　ト花道より、小仙と善太を内侍と六代に仕立て、猿轡を掛け、後手に縛り繩を取り出て、直ぐに舞臺へ來り、

親父の賣僧が三位維盛を、熊野浦より連れ歸り、道にて頭を剃りこぼち、青二才にして彌助と名を變へ、この間はいやらしい若衆髷、生捕つて面はぢつと存じたに、思ひの外手強い奴、村の者の手をかりやう／＼と討とり首に致して持參しました。御實檢下さりませ。

へはツと心得、蓋おし開き、うちながめ、

ト桶を梶原の前へ出す、梶原首を見る事あつて、

梶原　故維盛剃りこぼち、彌助といふとは存じながら、先達て云はぬは、彌左衛門めに思ひ違へをささぬため、聞及んだろいがみの權太、惡者と聞きしがお上に對しては忠義の者、出かした／＼。内侍六代生捕つたな。ハテよい器量、夢野の鹿で思はずも女鹿子鹿の手に入るは天晴れ働き、褒美には親の彌左衛門が命許してくれう。

權太　アヽもし／＼、親父の命位ひを許してもらはうとて、この働きは致しませぬ。

梶原　ムヽ、すりや親の命をとられても、褒美がほしいか。

權太　ハテ親の命は親と相對、私にはどうぞ御褒美に、お金をお願ひ申します。

梶原　なか／＼小氣味のよい奴、褒美呉れん。ソレ、家來共、櫃の中なる陣羽織、これへ持て。

四人　ハツ。

〽下知に從ひ家來共、櫃の中より陣羽織を取り出し、御前に直せば。

ト四人の內一人鎧櫃より陣羽織を出し、梶原の前へ出す。

梶原　あの者へ遣はせ。

○　ハツ。

〽渡せば權太は佛頂面、（と權太へ渡す事。）

權太　そんならこれが、御褒美でござりまするか。

梶原　こりや、その羽織は賴朝公の御召かへ、何時でも鎌倉へ持ち來らば、金銀とつりかへ即ち囑託の合紋。

權太　成程當世衒りがはやるによつて、こりや二重取りをさせぬ分別、ハテ、よくした物だなあ、そんなら繩付きを、お渡し申します。

〽繩付き渡せば、首を器に納めさせ。

ト六代內侍を渡す、捕手兩人の繩をひかへる、と首桶を持ちし捕手。

捕手　シテ、これなる兩人、いかゞ計ひませうな。

梶原　大切なるめしうど、取逃さぬやう引立て參れ。

四人　かしこまつてござりまする。
梶原　役目終らば、これより旅館へ立歸らん。
四人　お立ち。
〽權威たゞしく兩人を引たて引たて立出づる。
ト皆々付き、梶原花道より向へ行き、思入。
梶原　こりや權太、彌左衛門一家の奴等、暫く汝に預くるぞ。
權太　お氣遣ひなされまするな、貧乏ゆるぎもさせる事ぢやアござりませぬ。
梶原　ハテサテ、けなげな、ハヽヽヽヽ。〈ト思入れ。〉
〽褒めそやして梶原は、繩付き引立て立歸る。
ト時の太鼓になり、提灯持ち先に、梶原花道へかゝる、後より内侍六代捕手繩をひかへ、同じく捕手首桶をかゝへ、此人數花道へはひる、權太門口より後を見送り。
權太　アヽこれ〳〵、其の次手に褒美の金を、忘れて下さりますな。お頼み申します。
〽見送る隙間、油斷見合せ彌左衛門、憎さも憎しとひんだかへ、ぐつと突込む恨みの刄。うんとのつけにそりかへる、見るに親子はハアはツと、憎いなが

らも悲しさの、母は思はず駈けよつて、

くら　コレ、天命知れや、不孝の罪。

へ思ひ知れやといひながら、先だつものは涙にて、伏沈みてぞ泣きゐたる、彌左衛門齒嚙みをなし、

彌左　泣くな女房、なに吠える、不便なの可愛のと、こんな奴を生けておけば、世界の人の大きな難儀ぢやわい、門端も踏ますなと云ひ付けおいたに家へ引入れ、大事の〳〵維盛樣を殺し、內侍樣や若君をよう鎌倉へ渡したな、腹が立つて腹が立つて、涙がこぼれて胸がさけるわい。三千世界に子を殺す親といふのは俺ばかりぢや、天晴手柄な、因果者にようしをつたなあ。

へ拔身の柄も碎くるばかり、握りしめ、ゑぐりかけるも心は涙、いがみし權太郎、刃物おさへて、

權太　コレ、親父殿。

彌左　なんぢや。

權太　こなたの力で維盛を、助くる事は叶はぬ〳〵。

彌左　こりや云ふなやい、云ふなやい、今日幸ひと別れ道の傍に手負の死人、よい身替りと首打つて

戻り、この中に隠しておいたわ。こりや、これを見をれ。

ヘ鮓桶とつてうちあくれば、ぐわらりと出でたる三貫目。

ト彌左衛門以前の鮓桶をあける、中より三貫目の銀ばら〳〵と出る、彌左衛門びつくりして、

ヤ、こりや銀ぢや、こりや、どうぢや。

ヘあきれはてたるばかりなり、手負は顔をうちながめ、

權太　おいとしや親父様、私が性根の悪さに御相談の相手もなく、前髪の首を惣髪にして渡さうとは料簡違ひのあぶない所、梶原程の侍が、彌助というて青二才の男にしたてある事を、知らいで討手に來ませうか、それと云はぬはあつちの企、維盛様御夫婦の路銀にせんと盗んだ銀、重いを證據にとり違へた鮓桶、あけて見たれば中には首、はツと思へどこれ幸ひ、月代剃つて突付けた首、やつぱりお前の仕込みの首。

彌左　ムヽ、そのお性根で御臺若君に縄かけ、なぜ鎌倉へ渡したぞ。

權太　ヲヽ、氣遣ひさつしやるな、そのお二人に逢はせませう。

ヘ袖より出す一文笛、吹きたつれば折よしと、維盛卿内侍は茶汲みの姿となり、若君連れて駈付け給ひ。

ト權太一文笛を出し吹くと、下手より以前の彌助浴衣上張り、内侍六代小仙と善太の衣裳に着かへて出る。

維盛　彌左衞門夫婦の衆、權太郎へ一禮を。

ト内侍權太を見て、

内侍　ヤヽ、手を負うたか。

へ手を負うたかと驚くも、お變りないかとびつくりも、一度に胸をぞさまじける。

彌左　すりや、あなたが誠の、御臺若君なるか、今繩かけて渡したる、御臺樣と若君は。

權太　その御臺と見えたは、權太郎が女房小仙。

彌左　シテ、若君は。

權太　ヲヽ、それは。（ト巾着の迷子札を見せる、彌左衞門これを見て）

彌左　「下市村大和新田、權太郎忰善太。」（トおどろき）ア、、、。

へ母は悲しさ、手負にとりつき、

くら　かほど正しき性根にて、人にうとまれそしらるゝ、身持ちにはなぜにしてくれた、常が常なら

連合がむざと手疵も負はせまい、むごい事をしたわいなう。

ヘ悔み歎けば權太郎。（ト竹笛入りの合方になり。）

權太　ヤレ、そのお悔み無用々々、常が常なら梶原が身替り食つて歸りますまい、まだそれさへも疑うて親の命を褒美にくれう、忝いといふとはや、詮議に詮議をかける所存、いがみと見た故油斷して一杯食うて歸りしは、禍も三年と、惡い性根の年の明時、産れついて諸勝負に魂奪はれ今日も、あたたを二十兩衙り取つたろ荷物の中、うやうやしくも高位の畫姿彌助が顔に生寫し、合點がゆかぬと母人へ銀の無心を囮に入りこみ、忍んできけば維盛卿、御身に迫る難儀の段々、此度性根を改めずば、何時親人の御機嫌にあづかる時節もあるまいと、うつてかへたる惡事の裏、維盛樣の首はあつても、内侍若君の替りにたてる人もなく、途方にくれし折柄に、女房小仙が倅を連れ、親御の勘當故主へ忠義何うろたへる事がある、わしと善太をこれ斯うと、手を廻すれば倅めも母樣と一緒にと、共に廻した縛り繩、かけてもかけても手が廻り、結んだ繩もしやらほどけ、いがんだ俺が直ぐな子を持つたは何の因果ぞと、思うては泣きしめては泣き、後ろ手に廻したその時の、心は鬼でも蛇身でも、怺へかねたる血の涙、可愛や、不便や女房も、わつと一聲その時に、コレ、血をはきましたわいの。

へ血に咲きましたと語るにぞ、力みかへつて彌左衞門」

彌左　聞えぬぞよ權太郎、孫めに繩をかける時、血をはく程の悲しさを、常には持つてたぜくれぬ、廣い世界に唯一人孫といふのもあいつ一人、子供が大勢遊んでゐれば、親の顏を目印しに、にがみばしつた子があると、尋ねて見てはこれ〳〵子供衆、權太が息子が居ませぬかと、問へば子供はどの權太、家名は何とゝ尋ねられ、俺が口からまんざらにいがみの權とはえ言はず、惡者の子ぢや故に、はね出されて居るであらうと、思ふ程なほそちが憎さ、今直る性根が、半年前に直つたら、ナウばゝ。

くら　親父殿、嫁女や孫の顏、よう見覺えておかうのに。

彌左　おゝ、俺もそればつかりが。

へとむせかへり、わつとばかりに伏し沈む心ぞ思ひやられたり、内侍は始終御涙、維盛卿も身に迫り、いとゞ涙にかきくれ給ひ。

維盛　彌左衞門が歎きさる事なれども、逢うて別れ逢はで死ぬるもみな因緣、汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて、内侍が供せし譜代の家來、生きて盡せし忠義は薄く、死んで身替る忠勤厚し、これも不思議の因緣。

へ語り給へば、彌左衛門。

彌左　テモさても、これも鎌倉の奴が仕業であつたか。

維盛　ヲヽ云ふにや及ぶ、右大將賴朝が威勢にはびこる無得心、一太刀恨みぬは殘念至極。

へ怒にまじる御淚、げに御道理と彌左衛門、梶原が預けたる、陣羽織をとり出し、

彌左　ヲヽ幸ひ賴朝が着替へとて、寶美の合紋に殘しおきしこの羽織、ずた／＼に引裂いても、御一門の數には足らねども、一裂きづゝ御手向、サア、遊ばしませ。

へ差し出す。（ト以前の陣羽織を取つてさし出す。）

維盛　なに、賴朝が着替へとや。（ト羽織を取つて）晋の豫讓が例をひき、衣を裂いて一門の、恨みをはらさん思ひ知れ。

へ御佩刀に手をかけて、羽織を取つて引上げ給へば、裏に模樣か歌の下の句。

ト羽織を取つて、裏に目をつけ、

「內や床しき內ぞ床しき」と、二つ並べて書いたるは、ハテ心得ぬ、この歌は小町が詠歌、雲の上はありし昔に變らねど、見し玉簾の內や床しき、とありけるを、その返しとて人も知つた

ることの歌を、物々しく書いたるは心得ず、殊に梶原は和歌に心をよせし武士、内や床しきはこの羽織の、縫目の内ぞ床しき。

ヘ襟際附際切り解どき、

ト維盛懐刀にて羽織の衿を切りほどく、中より浄土の袈裟法衣、水晶の珠數出る、維盛とり上げ見て、

ヤ、こりやこの内には袈裟法衣、珠數まで添へて入れおいたは。

皆々　コリヤ、どうぢや。

ヘこはいかにとあきれる人々、維盛卿。

維盛　ム、さもさうずさもあらん、保元平治のその昔、わが父小松の重盛、池の禪尼と云ひ合はせ死罪と極まる頼朝の、命助けて伊東へ流人、その恩報じに維盛を助けて出家させよとの、鸚鵡返しか恩返しか。ハ、ア敵ながらも頼朝は、天晴の大將。

ヘ見し玉簾の内よりも、心の内の床しさや。

これとても、父重盛のお蔭、エ、忝い。

ヘ喜び給ふも道理なり、人々はッと喜び涙、手負の權太は這出ですりより。

權太　及ばぬ知慧で梶原を、欺つたと思ひしが、あつちが何もみな合點、思へば今迄衒つたも後には

命を衒らるゝ、種と知らざるあさましさ。

〽と恨み悔みつ妹に向ひ。

コレ妹、年老られて便りのない、父さんや母さんに、先立つ俺になり代り、二人前の孝行して、不孝の罪を消してくれ、ヨ、ヨ、頼むぞよ。

〽云ふも苦しき終り際、惟盛卿もこの世を悟り。

維盛　エヽ我もこれまで佛を衒り、恩愛妹脊の輪廻を離れず、離れる時はいまこの時。

〽髻ふつと切り給へば、内侍若君お里はすがり。

ト維盛短刀にて髻を切る。

内侍　ともに尼とも、姿を變へ。

お里　せめてお宮仕へなりとも。

内侍　おゆるしなされて。

兩人　下さりませ。

〽願へど叶はず打ち拂ひ、打ち拂ひ。

維盛　内侍は高尾の文覺に、六代が事頼まれよ、お里は兄になりかはり、親へ孝行肝要なるぞ。

へ立出で給へば、彌左衞門。

彌左　女中の供は年寄り役。

へ諸共に旅の用意、手負をいたはる母親が。

くら　アヽコレ情ない親父殿、權太郎が最期も近し、死目に逢うて下されいの。

へとむるにせき上げ彌左衞門。

彌左　現在血を分けた悴を手にかけ、どう死目に逢はれうぞ、死んだと見ては一足もあるかるゝもの
かいの、息ある内に叶はぬまでも、助かる事もあらうかと、思ふがせめての力草、とめるそな
たが胴慾おやわいの。

へ云うて泣出す父親に、母はとりわけ娘はなほ、不便々々と維盛が首には輪袈
裟手に法衣、手向けの文も阿耨陀羅。

彌左　三藐三菩提の門出に。

内侍　高雄。

お里　高野へ。

くら　引き分くる。

維盛　夫婦の別れに。
彌左　親子の名殘り。
へ手負は見送る顏と顏、思ひはいづれ大和路や、吉野に殘る名物に、惟盛彌助といふ鮓屋、今に榮うる花の里、その名も高く。
ト維盛は花道、内侍六代彌左衛門は、東の假花道にかゝる、權太よろしく落入る、お里おくらワッとすがる、よろしく段切れにて、
へあらはせり。
幕

六幕目　吉野山山中の場

ト幕外三重にて、双方揚幕へはひる、後シヤギリ。

みちゆきはつねのたび

常磐津連中
竹本連中

役名　静御前、佐藤四郎兵衛忠信實ハ大和の源九郎狐

本舞臺一面吉野山の櫻林、遠山の遠見上下櫻の植込み、下手に太夫座をとりつけ、上手に床出語り霞幕にて隠れある、好みの通り、山おろしにて道具納る。

竹本へ戀と忠義といづれが重い、かけて思ひのはかりなき、大和路さして行く路次に、静御前のとりなりも、人目を忍ぶ市女笠、背中に風呂敷忠信が、あづまからげの旅姿。

トこれにて静忠信せり上る、鳴物とまる。

常磐津へ馴れぬ茂みのまがひ道、分けつゝ行けばあさる雉子の妻乞ひや、我も戀故身もこがれ行く、

竹へ重き仰せを蒙りて、通ひ旅路の雲なつかしき、乳たんぽゝの鼓草。

常へ春の道芝ふみしだき、花の木蔭に休らひぬ。

トよろしく兩人あつて。

静　忠信殿、道すがらの心遣ひ、我が君樣のましますは吉野の奥と聞いたばかり、遠近人に問うて下さんせ。

忠信　御諚の如く、我が君この吉野に御座あるは、御二方様の盡きぬ緣の妹背川、春立つといふばかりにや三芳野の。

靜　山も霞みて。

兩人　今朝は聞ゆらん、

竹へ吉野山、峯の白雪踏み分けて、梅が香諷ふ山賤の、拍子をかりのたはむれや、德若に御萬歲とは、我が君樣、新玉の年立ちかへる朝には。

常へ床しき風が東風へ吹く。

竹へ變らぬ契り嬉しやと申す。常へよいとや申す。竹へ春駒は。

ト靜よろしく振りあつて。

常へホヽヤレ山家の爺婆何ぞも、たつたき牛蒡くつばさんで、どびろく何ぞをふツくらツて、孫玄孫に腰を押させて、春の野面を遊山めさりや、霞の皺ものびやかに、やなぎにめでたくさむらふぞや。

竹へいさめ申す旅の伽。（ト忠信よろしく。）

靜　いつにない、忠信殿のたはむれに、旅の憂さを忘れました。

忠信　その御辛苦も今暫く、やがて我が君に、御對面の上。

靜　この憂き事も昔語り。

忠信　妹脊變らぬ。

靜　さゞめ言。

常〽見かはす顔と顔世花、互ひに恥ぢる四季の景、ゑがくせうじの明暮に、夏は螢のともし火に、短き夜半をくよ〳〵と、泣きあかしたるほとゝぎす、〽アレ村雨の袖うちふりて露の花、〽雪かとぞ見ん花吹雪、積る思ひの旅衣。

ト兩人よろしく。

忠信　幸ひこゝに人目なし。

竹〽姓名添へて賜はりし、御着長を取り出し、君と敬ひ奉る。

常〽靜は鼓を御顔と、よそへて上げる沖の石。（ト鼓をおく事。）

竹〽人こそ知らね西國へ、御下向の御海上、波風あらく御船を、住吉の浦に吹き上げられ、それより吉野にましますよし、やがてぞ參り候はんと、互ひに

筐とり納め。

常へこの鎧を賜はりしも、兄嗣信が忠勤なり。

ト此時花四天の立衆二人窺ひ出で、

捕手　落人やらぬ。

ト櫻の枝にて兩人打つてかゝる。

靜　なに、嗣信が忠勤とや。

常へ誠にそれよ越方を。

竹へ思ひぞ出づる壇の浦。

忠信　海に兵船平家の赤旗、陸に白旗。

竹へ源氏の兵、シヤ物々しやと夕日影、長刀小脇に引そばめ、なに某は平家の侍、惡七兵衛景清と、名乘りかけ名乘りかけ、なぎ立て、なぎ立てなぎ立つれば、花に嵐の散りぢりぱつと、木の葉武者、いひがひなしよ方々よ。

常へ三保の谷の四郎これにありと、渚にてうと打つてかゝる。

竹へ刀を拂ふ長刀のえなれぬ振舞いづれとも。
常へ勝り劣らぬ浪の音、うち合ふ太刀の鍔元より、折れて引汐歸る雁。
竹へ勝負の程を見捨つるかと、長刀小脇にかい込んで、兜の錣を引掴み、後へ引く足たぢ／＼。
常へ向うへ出る足よろ／＼。
竹へむんづと錣を引切つて、双方尻邊にどつかと座し。
常へ腕の強さと云ひければ。
竹へ首の骨こそ強けれど、ム、、、、。
常へハヽヽヽ。
竹へ笑ひし後は入り亂れ、手強き働き兄嗣信、君の御馬の矢表に、駒を引添へ立ちふさがる。
ト忠信立廻りあつて、兩人をあてる。
靜　ヲ、聞き及ぶその時に、平家の方にも名高き強弓、

常〽能登守教經と、名乘りもあへずよつぴいて、放つ矢先は恨めしや、兄嗣信が胸板に、たまりもあへず眞逆さま。

竹〽あへなき最期武士の、忠臣義士の名を殘す、思ひ出だすも淚にて、袖は變らぬ筒井筒。

ト此時後より捕手四人出て窺ひ出で、

捕手 忠信やらぬ。（トかゝる。）

常〽花の面、色香こぼるゝ八重一重、手まり櫻の身もかろく、露の情に撫子の、衣紋櫻に、アレ、そよ〳〵と春風が、吹くは吹雪の白牡丹、つくねざくらのあだくらべ。（トよろしく。）

常〽いつか御身もへのびやかに、春のやぎふの糸長く。

竹〽枝をつらぬる御契り、などか朽てはつべきと、互にいさめ諫められ。

常〽急ぐとすれどはかどらぬ、蘆原峠鴻の里、雲と見まがふ三芳野の。

ト此內兩人身拵へして、行きかける、知らせにて常磐津連中を消す事、此時捕手心づき、忠信へか

ゝる、立廻つてあてながら花道へ行き、よき所にて兩人をかへす

竹へ籠の里へ。

ト三重山おろしにて、靜花道へはひる、忠信花道にて見得、鳴物かはつて花道へはひる。よろしく

幕

七幕目　大詰　川連館の場

役名　佐藤四郎兵衛忠信、佐藤四郎兵衛忠信實ハ大和の源九郎狐、九郎判官義經、川連法眼、龜井六郎、駿河次郎、伊勢三郎、片岡八郎、法師梅本の佐渡坊、返坂の藥醫坊、山科の荒法橋、横川禪司覺範實ハ能登守教經。義經妾靜御前、川連奥方飛鳥、腰元裏葉、腰元こずゑ。

本舞臺通し高足、本緣附きの二重、襖欄間、黑塗り登り高欄、正面銀張りの瓦燈口、上手一間の御簾屋臺、下手網代塀、柴垣、櫻の釣り枝、同じく立木、すべて川連館の體、琴唄にて幕あく。

へ鶯の聲なかりせば雪消えぬ、春は來ながら春ならぬ九郎判官義經は、御慰みの琴三味線川連法眼が奥座敷、げに賴もしきもてなしなり。

ト琴唄の合方にて、奥より腰元裏葉、梢出て。

裏葉 なんとマア梢殿、いつぞやよりこの館に、源義經公御忍びましませど、勿體なくも日蔭の身をお慰みの琴三味線、殿樣も奥樣も、御大抵なお心遣ではあるまいわいなう。

梢 裏葉殿の云はしやんす通り。隨分ともに御大切に、致しませいとおつしやりつけ、丁度幸ひ今を盛りの御庭の櫻、一しほのお慰みでござんせうわいなあ。

裏葉 それはさうと、殿樣のお歸りに間もあるまい、御客樣の御座の間に又御用があらうも知れぬ。

梢 そんなら一緒に奥座敷へ。

裏葉 さあ、行かうわいなあ。

へうち連れ座敷へ入りにけり、今朝より他出の法眼心に一物有り顔に、そうやうと立歸れば、妻の飛鳥は出向ひ。

ト腰元兩人奥へはひる、淨瑠璃へしらべを冠せ、花道より川連法眼、熨斗目、長絹、長上下小サ刀にて出て來る。奥方飛鳥、打掛け衣裳にて出て來る。

飛鳥 これは〳〵わが夫には事なう早いお歸り、シテ今日の御評定一山のお仕置か、但し又奥の御客人、義經公の御事でござりまするか。

川連　オヽいかにも、義經公の御事さ。

飛鳥　ムウ、さては吉野一山、殘らずお味方と、いふやうな事でござりまするか。

川連　成程衆徒の中にも、返坂の藥醫坊、山科の荒法橋、梅本の鬼佐渡など、別しては横川の覺範、一はな立つて義經の味方といふは、わが心を探ると知つたる故、この法眼は鎌倉方と云ひ捨てて立歸つた。

飛鳥　シテ鎌倉方とおつしやるは、衆徒の心をこちらからも、探り見る御料簡でござりまするか。

川連　イヤ〳〵、この法眼は今日より、心を改めて義經とは敵味方。

飛鳥　エヽ、そんならあなたは義經公を。

川連　オヽサ、鎌倉殿へ打つて出す、合點ゆかずばこれを見よ。

ヘ懷中より書翰投げ出せば、手にとり上げ、文言殘らず讀終り。

ト川連懷中より一通を出す、飛鳥取つて開き見て。

飛鳥　ヤヽ、スリヤ義經公この山に忍びまします事、早速鎌倉へ知れたる樣子の、この文體。

川連　オヽサ、天に口なし人を以て云はしむる、竊に告げ知らせた者なくて、小舅の茨左衛門、かく云うてさし越すべきや、內通あつて知れたる上はのがれなし。

飛鳥　エヽ、そんなら眞實。

川連　いかにも。

飛鳥　スリヤ、あなたは義經公を、ほんぼんに討つお心か。

川連　オヽ、くどい事を。

へはツたと胸もつき詰めて、夫の刀に手をかくれば、

コリヤ待て女房、そちや何故に。

へと云ふ顔きつとうちまもり。

飛鳥　エヽ聞えませぬ法眼殿、なぜ隔てゝは下さるぞ、恩賞のお下し文千通萬通來たとても、一旦の契約を變ずるやうなあなたの氣質でござりませうか、茨左衛門が妹の飛鳥、義經公の御隱家兄左衛門へ知らせたかと、この身故にあなたの疑ひ、覺えない事言譯を口でまだ〳〵云はうより、命を捨てゝこの身の云譯、留めずと殺して下されいなう。

へ根涙ぞ誠なる、法眼始終聞きすまし、以前の一通とるより早く、ずん〳〵に引裂き〳〵。

ト飛鳥小さ刀へ手をかけるを、法眼とめて一通を引裂き、

川連　心底見えた、僞りに命は捨てまじ、女房を疑ふは未練には似たれども、衆徒等が胸中を探りし次手に、心を引きみるこの贋狀、引裂き捨つれば安堵して、自害をとゞまれ、女房飛鳥。

ヘとける詞は春の雪、恨みも消えてなかりけり。

ト此時奥にて。

義經　あるじ法眼歸られしな、それへ參つて面談せん。

ヘ面談せんと義經公、奥の間より出でさせ給ひ。

ト倚絃になり、奥より以前の腰元、煙草盆褥を持ち出で、二重眞中へしく、奥より義經、壺折衣裳、小刀にて、小姓一人附添ひ、刀を持ち出てよろしく住ふ。

鞍馬山の好みを忘れず、一々の御厚志、祝着詞に述べがたし、兼ねて申し談ぜし通り、今日の衆徒の評定、委細あれにて承知せり。

ヘ御錠にはつと頭を下げ。

川連　こは有難き御諚、師の坊の命と云ひ、唯ならぬ御方、麁略なき心底御存じの上は、身にあまる喜びこの上や候べき、武藏坊は奥州秀衡方へ遣はされ、御家來とて少なければ、龜井駿河なんぞの如く、思し召されて下さりませう。

へ申す詞の內、使能り出で、

トバタ〳〵にて、花道より近侍上下にて出て。

近侍　ハツ申し上げます、佐藤四郎兵衛忠信殿、君の御行方をたづね御出なり、これへ通し申さんや、いかゞはからひませう。

義經　なに忠信が參りしとや、對面なさん、これへと申せ。

近侍　ハツ。（ト近侍は引かへしてはひる。）

川連　絶えて久しき四郎兵衛、御對面のその間我々は別間へ。

飛鳥　さやうなれば、わが君樣。

義經　兩人過分。

川連　後刻御目に。

兩人　かゝりませう。

へ夫婦は立つて入りにける、案內につれて四郎兵衛忠信、御座の間のこなたに出で、絶えて久しき主君の顏見るも無念のあら涙、さしうつむいて詞なし、大將御機嫌なゝめならず。

ト川連、猿島は奥へはひる。序の舞をかぶせ、花道より忠信、長上下大小にてよろしく出で、直ぐに舞臺へ來り下の方へ住ふ、義經見て、

義經　ホヽヲめづらしや四郎忠信、汝に別れこゝかしこ、鎌倉殿の御讒言つよく身の置所もなかりしに、東光坊の弟子川連法眼に匿はれ、心ならざる春を迎へ暫くの命をつぐ、我が姓名を讓りし其方命全くあること我が運の未だ盡きざる所、頼もしゝ喜ばし、その砌り預けおいたる、靜はいかゞなりゆきしぞ。

〽御尋ねありければ、忠信いぶかしげに承り、

忠信　コハ存じがけなき御仰せ、八島の平家一時に亡び、天下一統の勝鬨をあげ給ふ、折柄告げくる母が病氣、聞し召し及ばれ御暇賜はり、本國出羽へ立歸りしは去年三月、程なく別れし母が中陰、忌中に合戰の疵におこづき、破傷風といふ病となり、既に命も危ふき半、御兄弟の御仲裂け堀川の御所沒落と承はる口惜しさ、胸を煎る程重る病氣、無念さ餘つて腹かつさばかんと存ぜしかど、せめては主君の御顏今一度拜し奉らんとの念願とゞき、忍びの道中つゝがなく、この館に御入りと承はり、唯今參つた忠信に、姓名を賜はり靜御前を預けしなんど御諚の趣、かつ以てこの身に覺え候はず。

〽と云はせもはてず、氣早の大將。

義經　ヤア默れ忠信、堀川の館を立退きし時、折よく汝國より歸り、靜が難儀を救ひし故、我が着長を與へ九郎義經といふ姓名を讓り、靜を預け別れし其方、世になき我を見限り靜を鎌倉へ渡せしか、義經が所在詮議に來たか、唯今國より歸りしとは、まざ〳〵しき僞り表裏、漂泊してもうつけぬ義經、騙らんとは奇怪至極、不忠不義の人外め、引くゝつて面縛させよ、龜井、駿河はや參れ。

〽仰せに馳け來る二人の勇士、左手右手に反うちかけ。

ト上下より龜井、駿河、上下衣裳大小にて出て、忠信を左右よりつめかけ。

龜井　委細はあれにてみな聞いた、不忠不義の四郎忠信。

駿河　靜御前を何處へやりしか、サア眞直に白狀せよ。

忠信　思ひがけなきその詞、この身にとつて覺えぬ疑ひ。

龜井　ヤア白々しきその一言、知らぬと云ふには云譯あるか。

忠信　サア、その儀は。

駿河　但しふみつけ、繩かけようか。

忠信　サア、それは。
龜井　白狀するか。
忠信　サア、それは。
三人　サア〳〵〳〵。
龜井
駿河　なゝ何と。
　　ヘなんと〳〵と難儀の最中。
　　トバタ〳〵にて、花道より以前の近侍出て、
近侍　ハツ、申し上げます、靜御前のお供にて、四郎兵衛忠信殿、お出でござりまする。
　　ト引かへして侍はひる、忠信驚き思入あつて、
忠信　我が名をかたるうろん者、引くゝつて我が君へ、この身の面晴れ、ソレ。
　　ト身拵へして花道へ行かうとする。
龜井　ヤア、ならぬならぬ、詮議すまざるその内は。
駿河　動かす事はまかりならぬ。
　ヘ二人が向ふをさゝへたり。

義經　やア、さなせそ兩人、ハテ心得ぬ、忠信これにある上に、又ぞろや忠信が靜を同道とは、仔細ぞあらん、片時も早く連れきたれ。

へ龜井は次へ立つて行く。（ト龜井思入あつて花道へはひる。）

へ我が身あやぶむ忠信は、默して樣子窺へば、別れ程へし君が顏、見たさ逢ひたさとつかはと、歩み來る間もしどけなく。

ト花道より靜、打掛け衣裳にて、袱紗包みを抱へ花道にて、

靜　ヤア、我が君樣か、おなつかしうござります。

へ人目厭はずすがりつき、戀し床しの溜々を涙の色に知らせけり。

ト靜御前二重へ上り、義經にすがり思入。

義經　女心に懷くは尤も、別れし時云ひ聞かせし如く、人の情に預かる義經、輪廻汚なき振舞たれば情なくもてなしたり、シテ同道せし忠信は、いづくにあるぞ。

靜　サア、たつた今連れだつて、お次まで來りしが、こゝへはまだか。

へ見まはし見まはし。

それ〳〵、ても早うこゝへきて、一緒にお目にかゝるものを、ちつとの間も先へ拔駈け、まだ

戰場と思うてか、あんがちなお人ではあるわいの。

へ恨み口なるお詞に、不審一ぱい晴れぬ四郎忠信。

忠信　ハテ心得ぬ靜御前のお詞、我君にもその如く覺えたきお尋ね、拙者めは今のさき出羽の國から戻りがけ、去年お暇申してから、御目にかゝるは唯今はじめて。

靜　アレ、アノ人のおやら／＼と、戯けた事ばかり。

忠信　イヤ、戯誑でない大眞實。

靜　アレ、まだ眞顔で欺すのかいな。

へと何氣もなまめく詞の中、たち戻る龜井の六郎。

ト花道より龜井出て舞臺へ來り。

龜井　靜御前を同道の、忠信ひつたて來らんと存ぜし所、次の間にもあり合はさず、玄關長屋所々方々、相たづね候へども、一向行方相知れ申さず。

へ申すに心迷はせ給ひ。

義經　コレ靜、これに居るは其方を預かつたる忠信ならず、唯今國より歸りしと物語りなす中、忠信靜を同道との案内、二人ある中見えざるは不審者、面體似たる贋物ならずや、靜心はつかざる

や。

〽と仰せの中に忠信を、つれ〴〵とうち眺め。

静　成程さうおつしやれば、どうやら小袖も形も違うてある、お待ち遊ばせや。ハヽアそれか、オオさうぢや。

〽思ひ當る事こそあり。

君が諱と別れし時賜はりし初音の鼓、肌身放さず手に觸れて、忠信殿の介抱うけ、八幡山崎小倉の里、所々方々に身を忍び折々の留守の中、君戀しさにこの鼓打てば慰む度々に、忠信殿の歸らぬ事はなく、その音を感に絶える事、酒の過ぎたる人同然、打ち止めばきよろりッと何氣ない顔付きは、よく〳〵鼓が好きさうなと、初手は恐れ二度三度、四度目にはテモ變つた事、又五度目には不思議立て、六度目には逃げ立ち、それよりは打たざりしが、君はこゝにと聞きつけて、心急く道忠信殿にはぐれし時、鼓の事を思ひ出し、打てば不思議や目の前に、來るとわたく見えたるは、女心の迷ひかと思うて連れだち參りしに、今この樣子はどうぞいなあ。

〽申し上ぐれば義經公。

義經　ムウ、鼓を打てば歸り來るとは、それぞよき詮議の近道、まつたそれなる忠信にも尋ね問ふべ

き仔細あれば、廣書院へ引据えよ。

駿河　ハツ、君の上意、四郎忠信。

忠信　スリヤ拙者めを。

龜井
駿河　きり／＼お立ちやれ。

忠信　ハツ。

〽仰せにいなもあらけなく、龜井駿河は忠信を、引立てゝこそ入りにける。

ト忠信龜井、駿河に取りまかれ、上手へはひる。

義經　コリヤ靜、この詮議そちに申しつくる。その鼓を以て同道なしたる、忠信を詮議いたせ。　セシ
怪しき事あらば、この刀にて討つて捨てよ。

ト刀掛けの一腰を取つて靜に渡す。

靜　スリヤ、この詮議を私に。

義經　いかにも、わが手で打たれぬ鼓の妙音、それを肴に一獻酌まん。しかと詮議申しつけたぞ。

〽帳臺深く入り給ふ。

ト管絃になり、義經先に腰元小性附添ひ奥へはひる。靜後に殘り、よろしく思入。

〽静は君の仰せを受け、手に取り上げて引結ぶ。しんき深紅をなひまぜの調結んで胴かけて、手の内しめて肩に上げ、手品もゆらに打ちならす、聲せい〳〵と澄み渡り心耳を澄す妙音は、世に類なき初音の鼓、かの洛陽に聞えたる會稽城門の雄の鼓も、かくやと思ふ春風に、誘はれ來たる佐藤忠信。

ト静鼓を出し、よろしく打つ、此時薄ドロ〳〵にて、花道スッポンより、二役の忠信實ハ源九郎狐、着付、長袴、少さ刀、誂へのこしらへにてよろしく現はれ、しづかに舞臺へ來り、静を見て思入。

〽静が前に兩手をつき、音に聞きとれしその風情、すはやと見れど打ち止まず、猶も様子を調の音色、聞き入り聞き入る餘念の體、怪しの者と見てとる静、折よしと鼓をとゞめ。

ト源九郎狐鼓に聞き入り、高欄へ手をかけ、二重へ上る、静見て。

静　遲かりし忠信殿、我が君様のお待ちかね、サア〳〵奥へ。

〽何げなき詞にはツと云ひながら、座を立ち遲れさしうつむく、油斷を見すまし切りつくるを、ひらりと飛び退き。

ト源九郎の忠信思入、靜一腰を拔き切りつけるを、源九郎よろしくとめて。

源九　靜樣、こりや何となさるゝ。

〽咎められて氣轉の笑ひ。

靜　ホヽヽヽ、オヽアノ人のけうとい顏、久し振りで靜が舞、見ようと御意遊ばす故、八島の軍物語を舞の稽古に。

〽と鼓を早め、かくて源平入亂れ、船は陸路へ陸は磯へ、漕ぎよせて打出で打ちならす、鼓に又も聞き入つて、餘念他愛もなき所を。

忠信やらぬ。

〽と切りかゝる、太刀風かはしてかいくゞるを、付け入る柄許しつかと取り。

ト兩人立廻りよろしく、きつとなつて。

源九　コリヤ某に何科あつて欺し討ち、切らるゝ覺えかつてなし。

〽刀たぐつて投げ捨つれば。

靜　ヤア覺えなしとは卑怯な一言、贋忠信の詮議せよと仰せを受けたこの靜、云はずばかうして、云はさうか。

へ鼓おつ取りはた〳〵、女のかよわき腕先に、うちたてられてハアハツと
あやまり入つたる忠信に、鼓うちつけ。

サア白狀、サア〳〵。

へとつめよせられ、一言一句詞なく、たゞひれ伏して居たりしが、やう〳〵に
頭をあげ、初音の鼓手にとり上げ、さもうや〳〵しく押しいたゞき押しいた
だき、靜の前に直しおき、はるか下つて手をつかへ。

ト靜鼓を源九郎に打ちつけ、以前の刀にて切りつけるを、源九郎鼓にてとめ兩人立廻りよろしく、鼓
を靜の前へ置き、下手へ來り思入

源九　今日の唯今まで、人に包みし身の上なれども、今日國より歸られたる誠の忠信殿に御不審かゝ
り、難儀となる故よんどころなく、身の上を申し上ぐる始まりは。

へそれなる。

初音の鼓。桓武天皇の御宇内裏に雨乞ありし時、この大和に千年の功經たる牝狐牡狐二疋の狐
を狩りいだし、その狐の生皮を以て拵へたるその鼓、雨の神をいさめの神樂、日に向うてこれ
を打てば鼓はもとより波の音、狐は陰の獸故水を起して降る雨に、民百姓は喜びの聲を初めて

あげしより、初音の鼓と名附け給ふ、その鼓は私の親、私めはその皮の子でござります。

へ語るにぞつとこはげ立ち、騒ぐ心をおし靜め。

靜　ムウ、そなたの親はこの鼓、鼓の子ぢやと云やるからは、さてはそなたは狐ぢやの。

ト思入。雷序、ドロ〳〵にて、源九郎の忠信の衣裳、毫引抜きにて、狐と見ゆるこしらへに變り、仕掛けにて平舞臺へよろしく現はれる。

源九　ハツ、成程、雨の祈りに兩親の狐を捕られ殺されたその時は、親子の差別も悲しい事も、辨へなきまだ子狐、藻を被くほど年も長け鳥居の數も重なれど、一日親をも養はず産の恩を送らねば、豚狼にも劣りし故、六萬四千の狐の下座につき、野狐とさげすまれ、官上りの願も叶はず、親に不孝な子があれば、畜生よ野良狐と、人間樣ではおつしやれど。

へ鳩の子は親鳥より、枝を下つて禮儀をのべ、烏は親の養を育くみかへすもみな孝行。

鳥でさへその通り。

へ人の詞に通じ、人の情も知る狐。

なんぼ愚癡無智の畜生でも、孝行といふ事を、知らいで何と致しませう、とは云ふもの丶親は

なし、まだも頼みはその鼓、千年功經る威德には、皮に魂とゞまりて性根入つたは即ち親、附添ひて守護するは、まだこの上の孝行と思へども。

ヘ淺ましや、禁中に留めおき給へば、八百萬神宿直の御番、恐れあれば寄りつかれず、頼みの綱も切れはてしに。

前世に誰を罪せしぞ、人の爲めに憎するもの狐に產れ來るといふ、因果の經文恨めしく、日に三度夜に三度。

ヘ五臟をしぼる血の涙、火焰と見ゆる狐火は胸を焦せる炎ぞや。

かほど業因深き身も天道樣のお惠みで、不思議にも初音の鼓、義經公の御手に入り、内裏を出づれば恐れもなし、ハ、ア嬉しや喜ばしやとその日より、附添ふはみな大將のお情、稻荷の森にて忠信が行り合さばとの御悔み、せめて御恩を送らんとその忠信殿の姿に變り、靜樣の御難儀を救ひし御褒美とあつて勿體なや畜生に、清和天皇の後胤源九郎義經と云ふ御姓名を賜はりしは、そら恐ろしき身の冥加、これといふも我が親に孝行が盡したい、親大事と思ひこんだ心が屆き、大將の御名下されしは、人間の果をうけたる同然、いよ／＼親が猶大切、片時も離れず附添ふ鼓。

〽靜様は又我が君を、戀慕ふ調の音、變らぬ音色と聞ゆれども。
唯今の鼓の音は私故、忠信殿君の御不審蒙りて、暫しも忠臣を苦しますは汝が科、早く歸れ
と父母が教への詞に力なく元の古栖へ歸ります、これまでは大將の御目を掠めましたる科、靜
様御詫なされて下さりませ。

〽縁の下よりのび上り、我が親鼓にうち向ひ、かはす詞の尻聲も涙ながらの暇
乞、人間よりは睦まじく。

モシ親父様母様、お詞背かず私は、モウお暇致しまする。とはいひながら御名殘りが惜しか
ろまいか、暫しもお傍に居度く産の恩が送りたいと、こがれた月日は四百年、願ひ叶ふが嬉し
さに悲しい妻子をふりすてゝ、去年の春から附添うて丸一年立つや立たず、去ねとあるとて何
でマア、あいと申して去なれませうぞいの〳〵。お詞背かば不孝となり、盡した心も水の泡、
まだせめてもの思出に、大將の賜はつたる、源九郎を我が名にして、末世末代呼ばるゝは、こ
の悲しみにかへられませう。靜様、御推量なされて下さりませ。

〽泣いつ口說いつ身もだえし、どうと伏して泣きさけぶ、大和の國の源九郎
狐と云ひ傳へしも哀れなり、靜はさすが女氣の、彼が誠に目もうるみ、一間

の方にうち向ひ。

ト源九郎狐よろしくある、靜奥の方へ向ひ思入。

靜　我が君樣、お聞き遊ばされましたか。

〽申す詞の内よりも。

ト管絃になり、奥より義經出て。

義經　ホヽヲ委しく樣子聞き届けたり、さては人にてなかりしか、今までは義經も狐とは知らざりし、不便の者の身の上やなあ。

〽不便の心とありければ、頭をうなだれ禮をなし、御大將を伏拜み〳〵、座を立ちは立ちながら、鼓の方をなつかしげに見かへり見かへり、行くとなく消ゆるともなく春霞、人目朧と見えざれば、大將哀れと思召し。

ト源九郎狐思入、ドロ〳〵にて、下手の櫻の木へ仕掛けにて消える、かけ焔硝立つ、義經思入あつて。

あれよび返せ、鼓を打てば音に連れて、再びこれへ歸り來らん、鼓々。

〽とありけるにぞ、靜は又もとり上げて、打てど不思議や音は出でず、これは

〳〵と〳〵り直し、打てども打てどもこはいかに、ちつともぽうとも音のせぬは、

ト静鼓を打つても、音の出ぬ思入れ。

靜　さては畜類の魂残すこの鼓、親子の別れを悲しみて、音をとゞめたに疑ひなし、人ならぬ身もそれほどに、子故に物を思ふかいなう。

〽うちしほるれば義經公。

義經　我とても生類の、恩愛の節義身にせまる、一日の孝もなく、父義朝を長田に討たれ。

〽日陰くらまに成長せり。

せめては兄の頼朝にと、身を西海の浮き沈み、忠勤徒なる御憎しみ、親とも思ふ兄君に見捨てられし義經が、名を譲りし源九郎は前世の業我も業、そも何時の世の宿酬にて、かゝる業因なりけるぞや。

〽身につまさるゝ御涙に、靜はわつと泣出せば、目にこそ見えね庭の面我が身の上と大將の、御身の上を一口に勿體涙に源九郎、たもちかねたる大聲に、わつと叫べば我とわが、姿を包む春霞、晴れて形を現はせり。

トドロ〳〵にて、雛壇よき所へ、源九郎狐現はれでる、義經見て、

義經 ヤア源九郎、靜を預かり長々の介抱、詞には述べがたし、禁庭より賜はる大切の品なれども、孝心の厚きにめで、今より汝に得さするぞよ。

〽手づからとり上げ差し出せば。（ト義經鼓を取つて出す。）

源九 なに、その鼓を下されんとや。

義經 いかにも。

源九 ハツ有難や忝なや、焦れ慕ひし親鼓、御辭退申さず頂戴せん、かへす〳〵も嬉しやなあ。

トドロ〳〵雷序になり、所々へ狐火出る、源九郎狐鼓をとつて、いそ〳〵思入。

ハツ重々深き御恩の御禮、今より君の蔭身に添ひ、御身の危ふきその時は一方防ぎ奉らん。オヽそれよソレ、身の上に取紛れ申す事忘つたり、一山の惡僧輩今宵この館を夜討にせんと企てたり、押しよせ來ると見る時は、我が神變の通力にて衆徒を殘らず蹴かつて、この館に引き入れ〳〵。

〽眞向立割車切り、又一時にかゝりし時、蜘蛛手かくなは十文字、或ひは右袈裟左袈裟、上を拂へば沈んで受け、裾を拂へばひらりと飛び、けいしやう

術得たりや得たり。

御手に入れて亡ぼすべし、必らずともにぬからせ給ふな。

〽鼓を取つて禮をなし、飛ぶが如くに行末の、跡をくらまし。

ト三重、早雷序になり、源九郎狐、鼓を持ちよろしく花道へはひる。

義經　源九郎が報せにて、はからず知つたる今宵の樣子、これより奧にて何かの用意、靜來れ。

〽うち連れ奧にぞ入り給ふ。

ト管絃にて、義經靜奧へはひる。知らせにつき、本舞臺へ一面に網代塀の幕を振りおとす。櫻の釣枝はその儘殘る。

トやはりドロ〱、雷序にて、所々へさしがねの狐火出る、花道より子役狐のぬひぐるみにて何にても、雪洞と見える物を持ち出で、花道よき所にて揚幕の方をまねく、花道より、法師梅本の佐渡坊、返坂の藥醫坊、山科の荒法橋、頭巾、黑衣、差拔を高くはき、附太刀、草鞋にて出て來り．

佐渡　これは〱、川連法眼殿の差圖にて、これ迄出迎ひ、御太儀々々。

藥醫　何と御覽じろ、法眼殿の屋敷廻り、この長廊下まで、掃除萬端行屆き、見事な事ではござらぬか。

法橋　さやう〱、何はともあれ、向うの廣間へ參らうではござらぬか。

佐渡　それがよくござる。

三人　サア、御同道致さう。

ト右鳴物にて、狐先に皆々舞臺へ來る。狐は佐渡坊へ囁く思入れ。

佐渡　ムウ、よくござる。何といづれもお聞きなされたか、法眼殿申さるゝには、源の義經を最早からめおかれしとの義でござる。

藥醫　それはハヤお手柄な義でござる。

ト狐は又藥醫坊に囁く、藥醫坊思入れあつて、

何と申さるゝ、唯今我々共に手渡し致すその間、この席にて酒宴を催せよと申さるゝかな。

法橋　それはハヤ結構なお捌きでござる。折角の御馳走とあるからは、お辭儀なしに頂戴致さうではござらぬか。

佐渡　さやうとも〱、さて〱法眼殿は、心のつかれたお方でござる。

ト右鳴物、此内子役の狐、奥より何にても化かされの酒肴道具を運び、眞中へ並べる、皆々下に居る。狐皆々に囁く。

法橋　イヤ、これは〳〵痛み入りたる、御叮嚀な儀ではござらぬか。
佐渡　誠に珍らしき山海の珍味をとり集められ、我々までも祝着致す。
藥醫　しからば各々頂戴致さう。
佐渡　それがようござる。

トこれより謠へのをかしみの合方になり、狐酌をして、皆々捨ゼリフにて酒盛よろしくある、狐は奥へはひり、又銚子を持ち出で、皆々思入れ。

法橋　ときに、モウ數獻頂戴致したれば、最早御酒はおとりおき下されい。

スリヤ何と申さるゝ、法眼殿が我々に、踊りを所望致したいと仰せらるゝか。

ト狐は法橋に囁く。

佐渡　なに〳〵我々に踊りを。イヤハヤ、それは眞平御免をこうもり羽織とは、どうでござる〳〵。
藥醫　イヤ〳〵、折角のお好みなれば、一踊りいたさうではござらぬか。
佐渡　いかさま、とても濡れたる衣の袖、いつその事に、やらかさう〳〵。

ト又狐法橋に囁く。

法橋　何と申さるゝ、その踊りの音頭を、拙僧にやらかせと言はつしやるか。

ト狐うなづいて、早くと仕方する。

サア、その音頭は、オ、恥かし。

兩人　何を言はつしやる。

ト狐に古き法團扇を法橋に渡す。

法橋　サア〳〵いづれも、踊り〳〵。

ト踊り地になり、狐先に兩人前へ出る、法橋團扇をかざして。

踊りは宵の夢の中、嘸父戀し母戀しと、唄は冥土の鳥かや。

トこれより音頭になり、皆々踊りになり、ぐる〳〵廻る事よろしくある。

手振り袖振り踊振り。

トやはり音頭にて踊りながら、狐は藥醫坊をつきつける事三四度、藥醫坊逃げる事、トゞ狐は馬の草鞋をつけしを太刀と見せたるを佐渡坊に渡す、取つて藥醫坊の首をエイと打つと狐後より大南瓜をなげる、これにて渡り拍子と聞ゆるやうに、雷序を早め、ドロ〳〵にて、皆々上手へはひる、知らせにて總代幕を切つて落す。

本舞臺一面の御簾、以前の御殿の道具になる。

ト直ぐに大薩摩淨瑠璃になる。

〽それ吉野の花の爛漫と、吹雪にまがふ山風に、連れてむらがる數多の狐火、かくと白刃の大長刀石突土につきならし、衆徒の大將横川の覺範、茫然として佇めり。

ト大太鼓入り、セリ上げの鳴物へドロ〳〵をかぶせ、狐火大分むらがる、横川の覺範大長刀をつき居眠り居てセリ上がる、目を見開き、狐火をきつと見て、

覺範　ハテいぶかしやなあ、樹下石上の勤行に日夜怠慢なきが如く、一門の仇を散ぜんと川連が館へかゝる道、眠るともなく佇みしは、さては野狐めらが仕業よな、横川の禪司をまどはさんとは、ハテ、小ざかしき振舞ぢやなあ。

〽はつたと睨みし憤怒の形相、すさまじくも亦恐ろしゝ。

トきつと見得、狐火一時に消える、覺範思入あつて。

益なき事にて思はぬ暇どり。ヤア〳〵川連殿はいづくにある、客僧これまで參つたり、奥へ推參申さんや、とく〳〵對面〳〵。

ト謠になる。

謠　〽衣の袖をまき上げる、御簾のこなたに聲あつて。

ト上手の屋臺の御簾を卷き上げる、義經金烏帽子、裝束をあらため出て。

義經　ヤア〳〵、平家の大將能登守教經待て。

ト云ひ捨て、御簾おりる、謠になり。

謠　〽はツと心もおくれ咲く、花の一重にあらなくも。

ト覺範思入れあつて。

覺範　聲あつて形なきは、我を呼ぶにあらざりし、覺えなき名に驚きて思はぬ氣おくれ、人なくて恥かしからざりし。

謠　〽あら恥かしや衣手の、脇よりもるゝ打物の、さやつまりたる詞の末。

ト覺範思入れあつて。花道へ行きかゝる、御簾の内にて、

義經　横川の禪司覺範とは、假りの名、實は平家の大將能登守教經へ、九郎判官義經あらためて見參々々。

忠信　佐藤四郎忠信、あらためて。

兩人　見參々々。

覺範　何がなんと。

トツツカケになり、御簾巻き上る、眞中に義經上手に忠信以前のなり、駿河次郎若君を抱き、下手に龜井六郎控へ居る、軍兵大勢槍を持ち、上下よりばら／＼と出る、これにて覺範無念眞中へ戻り、きつと見得。

皆々　動くな。

ト覺範見て。

覺範　ヤヽ、君は正しく若君、守護し奉るこの體は。

義經　ホヽヲ不審は尤も、天皇入水と僞り、内裏巻をすませしは、其昔宗清に助けられたる恩返し。

忠信　若君を助命奉り、源氏の供奉したてまつるは、義經公の御仁心。

龜井　まつた一味の惡僧ばら、源九郎が通力にて。

駿河　討取つたる上からは、一本立ちの横川覺範。

片岡　卑怯未練に包むとも、最早のがれぬ尋常に。

伊勢　その名をあかして勝負なすか、但しふみつけ繩かけうか。

覺範　サ、それは。

義經　本名あかすか。

覺範　サ、それは。

皆々　サア

忠信　その姓名を。

皆々　名乘つた〳〵。

覺範　ホヽヽ、斯くなる上は何をか包まん、八島の戰に入水と見せ、一旦その場を立ち退きしも、天下にはびこる賴朝が素首取つて君が代に、ひるがへさんと惜しからぬ命を長らへ味方を招き、横川の禪司覺範と變名なせし某こそ、桓武天皇九代の後胤平相國淸盛が一門たる、門脇敎盛が嫡男にて、强弓の者ありとその名四海にとゞろきし、能登守敎經とは俺が事だア、間近く寄つて面相拜み奉れエヽ。

ト頭巾をとり、衣裳引拔き、讒へのなりにてきつと見得。

皆々　さてこそなア。

覺範　かく本名をあかす上は、片ツ端から死人の山だ、覺悟なせ。

義經　ヤレ待て敎經、今某に敵たふは、君に刃向ふ同然。

覺範　ホヽヲ、君を助命の情に免じ、この場はこのまゝ。

義經　たち別るゝとも又の參會。

忠信　をりも吉野の花やぐら。

覺範　花々しき勝負をとげん。

忠信　まづ、それまでは。

義經　能登守教經。

覺範　かた〳〵。

皆々　さらば。

ト覺範眞中に、軍兵棒にならび、皆々引張り、よろしき見得にて。

幕

義經千本櫻（終り）

梶原平三誉石切
かぢはらへいざうほまれのいしきり

梶原平三譽石切（石切梶原＝二幕）

序幕　笹目ヶ谷青貝師内の場

役名　青貝師六郎太夫、眞田文藏國安。旅僧、飛脚、雲助。青貝師娘梢、與市妹早瀬、其他。

本舞臺向う通り松並木、後ろ黒幕、こゝに四つ手駕籠を一挺おろし、棒鼻に問屋場提灯をさげ、雲助五人焚火にあたり居る見得、鴨笛にて幕あく。

雲一　何の事たの、この邊の鷄は氣まぐれぢやアねえかナア、客人を起して擔いで來たが、まだ夜が明けねえ。

雲二　そんなに惡くいかすなえ、どの道二三日の内には、ぶツちめて煮て食ふのだ、その時われも食ふだらう。

雲三　うきアねえ、みせしめの爲めだ。三介に見せておいてやらうぢやねえ。

雲四　これ／＼手前達は無駄口を利かずと、客人が待遠しく思つてゐさつしやらう、よく譯をお話し

申せ。

雲一　ほんにさうだ。モシエお客さん、お聞きなすつたか知らねえが先頃から鎌倉道へ新關が出來て、明なら夜中でも改めて通しやすが、夜中は明六ツを打たねえと、どんな確な者でも通さねえから、モウちつとの間こゝに御辛抱したせえ。

雲二　なにお前、手形も何も出すのぢやねえから、お連のお侍さんはよつぽど差遣えな事はござりませぬ。

雲三　それを知らつしやらねえから、お連のお侍さんはよつぽど先へござつたらうに。さぞ案じてゐさつしやるだらう。孫ヤアイ、なぜまたこんなにやかましいだらう。

雲四　手前達は知らねえ筈だ、それ先頃蛭ケ小島にひすばつてござつた、頼朝殿とかいふ人が、謀叛の勝負をおツぱじめて、山木の判官殿をぶツてしめ、それから片つぱしから叩きしめようとした所が、何をいふにも多勢に無勢だ、土肥の杉山と石橋山をずりをかけて張つた所が、からりどんとうたれてしまつて下馬一枚で逃げた故、もしその群がこゝらあたりへ來やアしめえかと、張番をするのだとよ。

雲一　何でもはや、一升はひる袋は一升だなあ。然しその戰といふやつを、見物してえものだな

あ。

雲四　なんの造作もねえ、俺もこの頃まで長尾新六樣に中間奉公して居たから、やゝともするとえい
えいどうと出て見たが、イヤ丸畫に畫いたやうなものぢやねえ、凄いおッかねえものよ。

雲二　ヱ、人が知らねえと思つて、噓をいゝかげんについておけえ。

雲三　どうして、手前達に戰に出られるものか。

雲四　べらぼうめ、何が餘德があつて、噓をつくものか。

雲一　よせ〳〵長尾新六新吾樣といふは、音に聞えた強い人だ、われがやうな者を戰の供に連れて步
くものかえ。

雲四　ヱ、まだそんな事をぬかしやアがる、そんなら俺が證據を見せてやらう。

四人　こいつは面白い、サア見せろ見せろ。

雲四　びつくりしやアがるな、サアこれだ。（ト三百兩の質札を出して見せる。）

四人　なんだ〳〵、それがどうしたのだ。

雲四　これこそなあ眞田の與市といふ、源氏方の若武者が持つてゐた、宗近といふ短刀と黄金の守り本
尊、大事の戰に出ること故二品共に持つて出たと思へ、丁度その時は今夜のやうな眞暗がり

故、相手は名にし負ふ俣野樣、餘程たゝき合つてゐたが、こぢれがきたか組打ちになつて、くんづほぐれつこけまはつて、悠々與市殿が俣野樣を下にひッしいて、今話した宗近の短刀で、首を搔かうと思へど鞘が血でひッついたかして拔けねえ故、岩角でたゝき割らうとした所が、運の盡きと目釘際からおッぺし折れて、ぽんと飛んでしまつた。

四人　とんだ事をしたなあ。

雲四　ヱ丶まぜつけえさずと聞けい。そこで與市殿がまごついてゐた所へ、おらが主人の新吾新六といふ人が、駈けつけて加勢したから、到頭與市の首を取つて、直ぐに兄御新吾樣は行つてしまつた。その後で弟御の新六樣と俺と、死骸の懷中からその黃金佛と折れた短刀を拾ひ集め、こいつを兄貴に沙汰なしに質にやつてくれ、われにも分前をやるといふから、こいつはうめえと人賴みをして、若宮の質屋へやつて三百兩借り、新吾樣にやつたら、骨折り代だと、たつた十兩よ、一割にも足らねえ骨折り代故、癪に障つて直ぐに屋敷を出てしまつたが、この頃聞きやアその二品を京都へやれば、長尾の兄弟衆が加增するといふ事故、受け戻さうとあせれど、肝腎の質札が俺が手にある事故、まご〳〵してゐるといふ事だ、いゝ氣味だア。

雲一　そんならその書附けを持つて行きやア、二品ともに受けられるのだな。

トこの以前より四つ手駕籠の垂れを上げ與市妹早瀬、屋敷風俗なり、一本差し好みのこしらへにて窺ひ出て。

早瀬　スリヤその書物が、黄金佛と短刀を、質入れなされたる證據とな。

雲二　ヤア、お前は客人。

早瀬　その品こつちへ。（トひつたくる。）

雲四　ハア、それを取られて。ハヽアさては、こなたは眞田の與市に由縁の者か、さうでなくとも源氏の餘類。

雲三　しよびいて行きやア、褒美の金だ。

雲一　蜂は口から、ハテ、いゝ鳥がかゝつたなあ。

早瀬　たとひ源氏の餘類にもせよ、汝ら如きに手籠めになる女子ぢやないぞ。

雲四　エヽそんな事にやア頓着ねえ、マアその質札。（ト取りにかゝる。）

早瀬　めつたに戻してよいものか。

雲四　エヽ面倒な、たゝんでしまへ。

トこれより三味線入り、禪の勤めになり、早瀬脇差を拔き、件の書ものを懐中して、四人と渡り合ひ

よろしく立廻り、皆々を追ひこみ、ほつと息をつき。

早瀬　チヱ、忝い、眞田の重寶たる黄金佛の靈佛、まつた拜領の短刀は若宮小路へ、質入れしてゐるとは聞けど金の算段、殊にまた手形なくては手に入らず、文藏殿のいく世の苦勞、程は行くまじ追付いて、この由語つて手渡しせん。ト身拵へして行かうとする、この內雲助の三窺ひ出て〕

雲三　その質札を。（ト組みつくをつき廻し、ぬき打ちに切りかへし〕

早瀬　コリヤよい物が、手に入つたわえ。

トこの仕組みよろしく、時の鐘にて、この道具、ぶんまはす。

本舞臺三間の間常足の二重、赤壁、納戸口　上手に障子屋體、いつもの所に門口、この下に櫻の大樹、この前釣枝、下手にも屋體、見世のかゝり、靑貝の道具種々並べある、こゝに梢、振袖娘のなりにて、前掛け、紅絹の襷がけにて茶を汲んで居る、飛脚、旅侍、奴、いづれもこゝに休み居る見得、唄、合方にて、この道具をさまる。

梢　マア、どなた樣も、お茶一つお上りなされませ、お早うございましたわいなあ。

ト茶を汲みて出す。皆々娘を見て。

飛脚　上らんかとは忝い、お娘の店で呉れた、この茶を飲まいでならうか。（トいやらしきこなしあつ

て茶を飲み〕この茶を飲むと、今朝からの草臥が急にようなつた。

旅侍　イヤモ、可愛いらしい娘の出花、これを飲まいでよいものか、ぽつとりとしたその姿を見ては、どうもたまらぬ、たまらぬ。

梢　ほんに、氣の輕いお人さんぢやなあ。

奴　かういふお娘のこしらへた茶なら、下郎は何杯でも下さるて。

梢　あなた田舍者ぢやと思召して、おなぶりなされますわいなあ。

飛脚　なぶるではない、大眞實ぢやて。

旅侍　とんと嘘は申さぬわいやい。〈ト皆々いやらしく云ふ捨ゼリフ、よろしくあるべし。〉

梢　そのやうな事おつしやつて、おなぶりなされずと、お國へのお土産に、所の名物青貝細工、お購めなされて下さりませいなあ。

旅侍　オヽ、購めてやろ〳〵、國許へ土産とは、何ぢや〳〵。

飛脚　身共も買うてやるぞよ。

奴　サア、その品を見せやれ、見せやれ。

梢　ハイ〳〵、サア御覧なされませ。〈トなまめきたる合方になり、いゝせり箱を持つて出で〕この名物青貝の

細工盡し、品は卅六の歌仙貝、十六の嘉定貝、やゝ産む時の守りになる子安貝、海雀はお望み次第、何なりともお安うあげまする。

旅侍　イヤモウ、辯舌なら器量なら、今のを聞いて心は一倍。

飛脚　イヤまた、娘の口から貝盡しとはどうもこたへられぬ。（ト飛脚梢の傍へ寄って行く。）

梢　お飛脚さん、こちやいやぢやわいなあ。（トぴんとすねる、旅侍飛脚を押しのけ。）

旅侍　これ〳〵お飛脚、武士の見る前で無作法千萬、これ、たしなみなされ。コリヤ〳〵お娘よ、身共が申す事を聞け、聞きさへすれば、國許へ連れ歸つて、奥樣ぢやがどうぢや〳〵。（ト寄り添ふを梢ふりはなし。）

梢　そんな事して下さんすな、父さんが叱つてぢやわいなあ。

旅侍　たとひ父さんが叱つても、身どもがよいやうに挨拶して遣はす、おうと言へ〳〵。

飛脚　お娘え、色よい返事を聞かせいやい。（ト梢へしなだれかゝる。奴旅侍を引きのけて。）

奴　これはしたりお旦那、御人體にも似合ひませぬ、おたしなみなされ。

旅侍　エヽ下郎、その方何を知つて、退いてをれ〳〵。

奴　イヤサ、高のしれたる下司女め、お旦那には不相應、この下郎めが似合相應。コリヤ〳〵お

娘、こゝへ來い、こゝへ來い。

飛脚　イヤ〳〵そのお娘は身が先へ聲をかけたれば、身共が先ぢや〳〵。

旗侍　イヤ、身が先ぢや。（ト兩人傍へよる。）

梢　いやぢやわいなあ、そんな事云うておくれな、父さんに叱られるわいなあ。

旗侍　サア、その言譯は身共がしてやる、サ、こゝへ來い〳〵。

飛脚　さうはならぬぞ〳〵。

奴　イヤ、下郎がさうはさせない〳〵。

ト三人ごつちやになり、梢を追廻す、この内六郎太夫、納戸口より煙草盆をさげて出かけ見てゐて、よき時分に梢を圍ひ前へ出る、兩方より六郎太夫に抱き付き、顏を見て三人ともびつくりなし、眞面目になつて、

三人　コリヤ、どうぢや。

梢　ヲヽ、父さん、よう寢やしやんしたなあ。

六郎　ぐつすり寢たわえ。

三人　そんなら舅は。

六郎　ハイ、この娘の父でござります。（ト皆々顏見合せて）
二人　ハテ、面目次第もない。（ト皆々下に住ひ、間の惡きこなし。）
椎　父さん聞かしやんせ、ねつからあの衆さん達が。（ト云はうとするを六郎太夫打ち消す。）
六郎　ヲヽ大事ない大事ない、默つてゐや〳〵。時に娘、おりやア今奧でうと〳〵と、一寢入する内に、變つた夢を見たわいやい。お前方も聞かつしやれ。なにが街道の茶屋であつたが、その娘を捕へていやらしい、イヤ美しい娘が居たよ。なにが侍と、やツこらさと、モ一人は飛脚であつたが、その娘を捕へていやらしい事のありツたけ、鮑の貝の片思ひかは知らぬが、樣々の事を云うて、可愛さうに娘を、念佛講にあはさうとしをるを夢に見たわえ。
旅侍　コリヤ〳〵親仁、もうよいわい。
六郎　サア、その後を聞かつしやれ。
飛脚　これさ、もうよいと云ふに。
旅侍　モウ〳〵、よい〳〵。
六郎　イヤ〳〵、お前は國許へ、連れていなつしやるぢやないか。
飛脚　ハテ、モウよいと云ふに。（ト皆々ごつちやになつて、逃げて行くを六郎太夫ひつとらへて。）

六郎　これ〳〵、この後を聞かつしやれ、聞かつしやれ。
三人　御免だ〳〵。
旅侍　いつたい貴公が惡い。
飛脚　イヤ、其許が。
旅侍　つゞまる所は、こつちが惡い。
奴　イヤ、お飛脚が。
トこれより床の淨瑠璃になる。
〽時の座興も首尾惡しく、旅は道づれ三人は、うちつれてこそ急ぎ行く。
トこの淨瑠璃にて、いろ〳〵捨ゼリフあつて下手へはひる、六郎太夫後を見送り。
六郎　ア丶世の中には、いかいたはけがあるものぢやわい。
梢　モウ〳〵父さん、ようござんすわいなあ。
六郎　イヤよいぢやない、あんな奴等は以後のためぢや、云うてやるがよいわい。
梢　それもさうでござんすなあ。（ト元の所へ両人戻り坐りて、）父さん、今朝とく起きて、どこへやら行て來て、それから奧に寢てゐさんしたが、早うからどこへ行てござんしたえ。

六郎　さいない、今朝とく起きて見ると、アレアノ門の櫻が目について、今は世間で花見ぢやの何のと云はつしやるが　そなたや俺はその日に追はれてそこどこでもなし、星合寺の觀音櫻へ參詣して、地内の櫻を見て來たが、それにつけてもわが身の十四の時、許嫁した婿の與四郎、家出したは五六年以前、どこにどうしてゐる事やら、こなたも段々年もたけ、さぞ逢ひたからう、俺も逢はせうと思ひますわいなう。

梢　父さんでさへそのやうに、思うて下さんすに、コノ與四郎さんは、どこにどうして居さんす事やら便りもなし、胴慾でござんす、私しや逢ひたい、逢ひたうござんすわいなあ、

〽とゞかぬ事をくど〳〵と。くどき歎くぞ道理なり、

六郎　サアよいわいやい、その逢ひたひは道理なれど、逢はれる時節が來にやア逢はれぬ、その内に喜ぶやうな、よい便りがあらうぞよ。

梢　イヱ〳〵便りして下さんせぬ、胴慾な與四郎さん、いつ逢はるゝ事ぢややら。

六郎　さればいやい、そこが逢はれる時節ぢや、空行く月のめぐり逢ふまで、ちつとの間ぢや、辛抱せい。

梢　アイ〳〵、私が逢ひたいより、お前の手前が濟まぬわいなあ、堪忍して下さんせえ。

六郎　エヽ何云やるぞい、可愛い娘や婿の事、それをなんの詫する事、アヽ俺もいろ〳〵の事思ひ出して、氣持が悪うなつた。ヲヽ幸ひ〳〵、今朝神棚へあげた御神酒の残り、一杯やろ、わが身も相してたもらぬか。

梢　わたしや酒は、欲しうござんせぬわいなあ。

六郎　いゝやいなう、酒は愁ひの玉箒とやら、かういふ折は一つ飲んで、氣をとり直すものぢや。一緒におぢや。

梢　わしや後から行きまする。

六郎　そんならさうしや。どりや、熱燗できゆつとやらう。サア、早うおぢや。

へ親子の仲も酒の手前、言ひくろめてぞ入りにける、

ト六郎太夫納戸へはひる、梢殘り、後床の合方。

梢　ほんに月日の經つは夢幻、六年以前に許婚して下さんした與四郎さん、嬉しやと思ふ間もなう家を出やしやんした故、その後も毎日々々泣いてばつかり　今日は戻つて下さんすか、明日は便りがあらうかと、待てど暮らせど文一つおとづれのないはお氣に染まぬのか、何故からうかうとうち明けて、一緒に連れて行て下さんせぬ、もつたいない事ながら、育てゝ貰うた父さん

よりお前の事が苦になつて、朝夕焦がるゝ憂き思ひ。ほんに思へば私が名とおなじ梢の櫻はあのやうに、年々花を咲かせても、いつを春とも樂しみとも知らでこがるゝこの身の程、やるせないことではあるわいなあ。

ト門の櫻を見て、愁ひのこなし。

〽はては涙にうちしをれ、泣く〳〵納戸へ入りにけり。

〽薄墨に書く玉章のたよりさへ、遠ざかりたる故郷へ霞隠れにたち歸る、眞田文藏國安が氣も安からぬ身の一分、舅が家居にさしかゝり。

トこの淨瑠璃にて、あと唄になり、與市妹早瀨先きに眞田文藏半合羽大小旅ごしらへの這入にて菅笠を持ち出て、花道にて、

文藏　イヤ申し早瀨樣、向うの家が卽ち私が舅の家、しかしながら、あなたのお身の上を悟られぬやう、道々も申す通り、喜瀨川の遊女の體に見せるが奥の手。

早瀨　そりや合點でゐるわいなう。

文藏　さやうなれば、マア〳〵あれへ。（ト唄になり、兩人舞臺へ來り内を窺ふこなし。）アイヤ賴みませう賴みませう。

梢　アイ〳〵、どなたでござんすえ。（ト云ひながら納戸より出て、顔見合せ。）ヤア、お前は與四郎さん。

文藏　ヲヽ、梢、無事であつたか。

梢　アイ、お前も無事でよう戻つて下さんしたなあ。今の今とて、お前の事を、云ひ出して居ましたわいなあ。コリヤ夢ではないか、マアこちらへござんせいなあ。

文藏　そんなら、はひつても大事ないか。

梢　知れた事いなあ、お前の家ぢやないかいなあ。

文藏　そんならゆるしやれ。

ト上手へ通る。梢始終嬉しき思入。捨ゼリフにて煙草盆を持ち來り、茶を汲んで出したり、手早く衝立を出し、文藏との間をへだて、梢道具鏡臺など出し、顔を直したり髪をなでつける。

いかさま、五年も見ぬうち、めつきりと變つたは藁葺の屋根、變らぬは垣の櫻。

ト梢へ思入あつて、早瀬の目にかゝるやうに云ふ。梢捨ゼリフにてふと早瀬を見つけ。

梢　お前は、どなたぢや。

早瀬　イヽエ私は。

文藏　イヤ梢　その女中は連れのお人ぢやわいなう。

梢　さうでござんすかえ　それなら最前から御挨拶も申さうもの、マアおはひりなされませいなあ。

早瀨　そんならゆるして下さんせいなあ。（ト文藏より上座へ通り坐る事。）この子が今のかえ、お前様は噂に聞いたよりは、愛らしいよい子ぢやなあ。

梢　ヲヽ氣の輕いお連樣、お目にはかゝりませぬが私はこの與四郎さんの許婚の梢といふ者でござんす、お心安うして下さんせ。さうしてマア、長の年月文も便りも音づれも、父樣の手前氣兼ねばつかり、今の今までお前の噂、ほんに氣强い胴慾な事でござんすわいなあ。

文藏　ヲヽその恨みは道理なれども、云譯はゆるりとせう。シテ舅殿には、御無事でござるか。

梢　アイ、父さんは前に變らず、お達者でござんす。

文藏　スリヤ、六郎太夫殿には、御無事とな。

梢　アイ、こゝへ呼びまして、早う逢うてあげまして下さんせいなあ。（ト立ちかゝるを文藏こなしあつて、）

文藏　イヤ梢待ちや、舅殿と逢はぬ先に、そなたに尋ねたい事がある。マア〳〵、こゝへ。

梢　アノ、私へ。

文藏　マア、こゝへおぢやいなう。

梢　アイ。

文藏　別の事でもない、梢そなたと俺と別れてから、何年になるぞいなう。

梢　ありや私が十四の年、大方足かけ五年ぢやわいなあ。

文藏　サアその五六年の間に、狀一本の便りもないと、定めて親仁様もそなたも愛想を盡かして、外に男を持つたであらうなう。さうか／＼。

早瀨　さうでござんす、結句田舍は色事が早いげな。

梢　エヽ女中さんまでが同じやうに、そりや何を云はしやんすぞいなあ。たとひ五年が十年便りがないとて、外に男を持つやうな私ではござんせぬ。やう／＼家へ戻つて來て、ようマアそんな事云はれた事ぢやなあ。

文藏　スリヤ、男も持たず、貞女たて。

梢　知れた事イなあ。

文藏　その心なら、そなたに改めて頼まにやならぬ事がある。聞き屆けてたもるぢやまで。

梢　あれ又そんな分け隔て、女夫の仲に、何の頼むの頼まれるのと、何なりとも云うて下さんせい
なあ。
文藏　スリヤ、どのやうな事でも背かぬとナ。
梢　なんの、背きませうぞいなあ。
文藏　イヤ〳〵、さうばかりでは心許ない、まことそなたが眞實なら、誓言をたてやいなう。
梢　その誓言は、觀音樣を誓ひにたて、大事の〳〵父さんを奈落へ落す法もあれ、お詞は背きます
まい。
文藏　それ聞いて先づは安堵。忝い。頼みと云ふは外ではない、喜瀨川の色町へ。傾城奉公に行て
たもらぬか。
梢　エヽ。
文藏　サヽ、そのびつくりは尤もぢやが、一通り話して聞かさう。そなたに別れた五年以前、國々を
へめぐり、やう〳〵奥すじのお大名へ奉公勤め、侍と相なり相應の知行を貰ひ、降つて涌い
たるこの身の難儀、三百金才覺せねば侍の立たぬ譯、近頃心なき事ながら我へ心中、義理思
ふ心があらば、我が一分の立つやう。頼みといふはこの事ぢやわいたう。

梢　成程それは聞きわけました。傾城奉公はおろか品によつたら命でも、夫故なら捨てませう。さらさら、いやではござんせぬが、その金の入譯を聞いた上で、いづれの廓へなりと行きませう。その金は、何にマア入用でござんすぞえ。

文蔵　サア、金の入譯は。

梢　何にいるのぢやえ。

文蔵　サア、それは。（ト云ひ兼ねるこなし、呉羽となしあつて。）

呉羽　主の口からお内儀樣へ、手を下げての頼みといふのは、よく〳〵の事、推量して勤め奉公に、行て進ぜなさんせ、天晴貞女ぢや、見事ぢやと、世間の人が褒めますぞえ。

文蔵　フヽ、さうとも〳〵、一生の身の難儀、何であらうと義理を思うて、勤め奉公に行てたもれ。これ〳〵梢、物を云はずおし默つてゐやるは、スリヤどうあつても、樣子を云へぢやな。

呉羽　サア、あのやうに云はしやんしては。

文蔵　しからば委しく語つて聞かせん。何をか包まん某は不圖した事で喜瀬川の宿へ通ひそめ、さる全盛の太夫をば、さる客と張り合つて、論が昂じてこの頃は身請けの論、某が手に入らねば男の一分もすたり、生死にも及ぶ程の意地づく、身請けの高は三百兩なれども、當分どうも

才覺もならねば、不圖思ひついたは、許婚のそなたをば、その傾城の代りに廓へ遣はす料簡。とあつても長勤めはさしておかぬ、三百兩さへ調へば工夫はさま〲、どうぞ廓へ行てたも、樣子といふはかくの通りぢやわいなう。

〽云ひならべるを半分聞き、連れの女の傍により、顏つく〲とうちながめ。

梢　これ女中さん、顏風俗なら物腰なら、物の云ひやう合點がゆかぬと思うたに、今の話は、さては身請けをすゝめたお傾城は、こなさんでござんすな。

早瀬　イヱ〱、さうでは。

梢　イヱ〱、さうぢや〱、さうぢやわいなあ。

〽云ふをうちけし涙聲。

マアお禮から申しませう、ほんに〱忝い心立て。したがマア、この談合はさらりとやめて貰ひませう。何ぼう馴れそめても傾城は殿御の慰み物、五年前から許婚のあるからは、抱かれて寢いでもわしや本妻。アイ、アノお人のお內儀樣でござんす。それにマア、何處の國にかあらうことか、あるまいことか、こなたを請出す代りに、傾城奉公に行く事、わしや不得心でござんす程に、さう思うて下さんせ、あた〱あほうらしい。

〽腹立ちまぎれに出放題、詞あらはに云ひ破れば。

早瀬　たとひ父樣が許嫁しておかしやんした本妻でも、氣に染まぬ時は男の効驗といふ物事があるぞえ。これ私が悪い事は云はぬ程にな、眞實夫がいとしくばな、應と云うて離縁へ得心になつて行かしやんせ。腹立てずと、ようとつくりと事をかみわけ、奉公にさへ行かしやんすれば。

梢　イヱ／＼／＼、聞きともない／＼、モウ云うて下さんすな。あんまりむごい無理な事、傾城奉公にやらうより、いつそ殺して下さんせ。

〽顔は上氣の緋縮緬、涙は露の玉あられ、ぷりしやりするこそ道理なれ、文藏はなほ夫の効驗。

文藏　サア、そのやうに云はうと思つて、念を番うて、誓文立てた神佛を、そちや反故にするか。

梢　イヽヱ、なんぼ誓文立てゝも、こんな無慈悲な頼みは神佛も見通し、わしや罰らも何ともないわいなあ。

文藏　スリヤ、夫をうつけにするか。

梢　イヤ、さうではなけれど。

文藏　さらでなくば、得心するか。」
早瀨　でも、それではあんまり。
梢　サア、それは。
文藏　但しは夫婦の緣切らうか。
梢　サア、それは。
文藏　緣を切らねば、得心か。
梢　サア。
文藏　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
　〽サア〳〵〳〵とせりつめられ、暫し詞もなかりけり、梢はやう〳〵顏を上げ。
梢　成程廓へ、行きませうわいなあ。
早瀨　そんならお前、得心して。
文藏　廓へ代りに行く心か。

梢　アイ、五年まへから戀ひ焦れ、待つに甲斐なく久し振りで、顏を見て嬉しう思うたそのまゝに、苦界へ沈む私が身の上、アこれも約束事ぢやとあきらめて、モウ今から行きませう程に、そのかはりには郞の勤め、首尾よう年が明けたなら、必ず夫婦になつて下さんせ、わしやそれを樂しみに行きますわいな。

〽淚ながらに詞の體、文藏は落ちつき顏。

文藏　ヲヽ出かした、出かした、それでこそこの文藏が女房、三百兩の金が調うたら、よびもどして二世の夫婦。

早瀨　ようあきらめて下さんした、ちよつと主へも暇乞ひ、云ひおく事もある程に。

梢　いつまで云うてもつきぬ名殘、父樣の目が覺めぬ內、早う連れて行つて下さんせ。

文藏　そんなら梢、サア早うおぢや。

〽連れだち出づる折柄に、

ト三人連れだち出ようとする、納戸口より、

六郞　婿殿待つた、娘も待ちや。

〽と聲かけられてためらふ所に、暖簾おしあけ六郞太夫。

ト二人ともびつくりして、エヽととまる、納戸口より六郎太夫出る。

梢　ヤア、とゝさん。

文藏　「舅殿」

六郎　以前は婿殿與四郎、今は侍眞田文藏國安殿。

文藏　ヤア。

六郎　連れた女中は、お名は知らねど御主人の妹御。

梢　エヽ。

ト びつくりして、梢は文藏と顏見合せ下に居る、文藏、早瀨、六郎太夫の顏を見て。

文藏　とは、音づれもせぬ某が。

早瀨　殊に自が身の上まで。

文藏　どうして、それを。

六郎　ヲヽ、知らいでならうか年の功、子を見る事親に如かずと譬に違はぬ婿殿、エヽ、マア下に居さつしやれ。（ト文藏下に居る。）や、幸ひな。（ト自分も下に居てこなし。）こなたはなう。（ト誂への合方になる。）花も香もないこの親仁が、云ふ筈ではなけれども、娘の代りに聞きにくからう

が、聞いて下され。こりや娘、そちが生れてから俺が手一つで、手しほにかけて育て上げ。十四の暮にこなさんを養子にして、やれ嬉しやと思ふ內、ふと家出しめされて行方知れず、尋ねに行くにも貴をあて、老の足では心許なく、その上娘一人置いて行かれず、じやう事なしにそれなりに早五六年、廿歳になつても膚身も觸れぬかたくな娘、許嫁のそなたに心中立て、これまで男猫の傍へもよらず、思ひ暮して今日の難題、明日をも知れぬ老の身の撫でつ擦りつ成人させたあの娘、多くの人の惠みになるも夫へ立てる心底は、出かしたと褒めたいが、なんの親の身でまじ／＼と見てゐられうぞ、俺が死んだ後なら、見ず知らずになつたらうに、これも前世の約束と、あきらめようが可愛さうに氣兼させ、いろ／＼の苦界の勤めがさせられようか、いかに夫のためぢやとて傾城の買論とやら身請けとやらに、入る金の代りにならう、何ぼうでもこの親仁がやりはせぬが、六郎太夫が眼鏡に違はぬ、天晴な侍眞田文藏國安。

へ泣きいりしとありければ、文藏は疵持つ足。

文藏　スリヤ、この與四郎を眞田家の侍と。

六郎　それ／＼そのやうに隱さつしやるがうらめしい、この親仁を根が他人ぢやと心をおかつしやる、和殿は正しく源氏方、眞田の與市義貞殿に奉公に出たる事は、國の便りに聞きたれと今日

が日まで音づれせねば、樣子こそあらんと思ひし故、娘にも知らさず心をつけてをる折ふし、きよろ〳〵と立戻り、許婚の稍を三百兩に賣らうとは、云はずと知れた源氏方への忠勤、金の入譯悟られまいと、傾城ではないお主の娘御を傾城らしうこしらへて、受け出すなどゝ仕組んだは、まだ分別が若い〳〵。

文藏　ヱ、。

六郎　この推量は違ふまいがの。

文藏　へ　五臓六腑に分け入つて、見たる目利にいひたつれば、驚き入つて文藏國安。成程隱し包みしは拙者があやまり、いかにも主人の妹君。御家の系圖を盗みとられ、詮議致せし所質店にさし入れしとの事、明日中に受け戻さねばならぬ二品、入用の三百兩は右の仕合せなれども、今日の身の上にて才覺ならず、思ひついたるこの稍サア暫しの間の勤め奉公、親父樣の前へ隱しても、サアどうで知れる身の云譯、大望成就なすなれば風前の塵より輕い三百兩、暫しの間と得心させたる今の仕合せ、見あらはされたは流石の老功、御目鏡違はぬ面目なさ、必らずあなたのお身の上や、この文藏が義は。

六郎　ヱ、滅相な、云うてしまへばあと白浪、可愛いゝ娘が婿殿へつか〳〵云うたは、ちよと親甲斐

に、年寄りのいつこく、必ず氣にさへておくりやるな、若い時はさうもないが、年寄るほど坊主に鉢卷、とんともたへがござらぬわいなう。

文藏　なんの〳〵これまで便りせぬ某へ、恨みも云はずよう得心して下さつた、嬉しいぞや。これ梢。

梢　父樣、今文藏樣の言はしやんした金の才覺、どうぞ私を。

六郎　イヽヤ、勤めにやらぬ。

梢　それではお前、お二人へ。

六郎　償ふ金は外にある。

梢　エヽ。

　　ト云ひつゝ立つて納戸より、箱とり出し前におき。

六郎　娘も賣らず身も汚さず、望みの金は、これ、この一品。

文藏　この箱を金子とは。

六郎　先祖代々傳はつたる、この刀。

文藏　そんならこれを、當代なして。

六郎　大庭三郎景親殿が、兼ねて懇望の此の刀。
早瀬　スリヤ、それを當代なせば。
梢　夫の望み三百兩。
六郎　金にして、忠義を立てさす。
梢　さすれば、私も奉公に。
六郎　なんのやらうぞ。
文藏　段々のお志し。
早瀬　何と申してよからうやら。
梢　エ、嬉しうござんす。
早瀬
文藏　エ、忝い。（ト兩人拜む。）
六郎　滅相な、罰があたりますわいなう。
梢　父さん、文藏さんも喜びぢや、わしや落ちつきましたわいなあ。
六郎　その笑ひ顏が、樂しみぢやわい。
文藏　しからば刀は、大場が屋敷へ。

六郎　イヤ〳〵、幸ひ今日は星合寺の觀音へ、大庭殿が參詣と聞くからは、望みを達するはこの時、とりも直さず觀音樣の御利生にて、道すがらお頼み申しませう。望みの通り三百兩、右から左へ猿が餅賣つてから。サア娘、わが身が杖ぢや。

梢　そんなら直ぐに、ちつとも早う。

六郎　羽織持ておぢや。

梢　アイ〳〵。（ト納戸へはひる。）

文藏　お年寄りへ、御苦勞をかけまする。

六郎　何のいの。（ト此内梢納戸より羽織を持つて出て。）

梢　アイ、羽織。

文藏　それ女房、親父樣を氣をつけい。

梢　アイ〳〵。

六郎　その笑ひ顏さへ見れば、ハヽヽヽヽ。

早瀨　申すも氣の毒ながら。

六郎　ヲヽ、暇どる事ぢやござらぬて。

梢　待つて居て下さんせ。

文藏　隨分早う、お歸りを。

六郎　氣遣ひせまい、如在はない。

文藏　お志しの程、忝い。

梢　ア、もし、勿體ない。

六郎　娘よ。

梢　父さん。

六郎　ちやつと來い。

トチヨンと木の頭、六郎太夫羽織を着る。おの〳〵氣味合、よろしき仕組み。

へ星合寺へぞ。

ト三重にてよろしく。

幕

大詰

星合寺の場

役名　大庭三郎景親、俣野五郎景久、梶原平三景時、青貝師六郎太夫、鳴尾九郎、茨木六郎、吉留名瀬藤太、鷹山庄司、瀨見野羽根藏、錦木群藏、山崎左京、志村右膳、科人劍菱の春助。六郎太夫娘梢、其の他。

本舞臺正面うち拔き廻廊の遠見、觀音佛殿の切り出し、櫻の釣枝、同じく立木、上手よき所に青目石の手水鉢、尤も切割る仕掛けあり、下手竹矢來はすにしきり誂へあり、下手よき所に雁的を掛け、馬場先きの體、こゝに鳴尾、茨木等、衣裳上下の大名八人、弓の射方を稽古して居る。掛け聲喧ましく、鳴物白囃子にて幕あく。と直ぐに、床の淨瑠璃になる。

へ果しなき東路の何國はあれど名に照らす、星合寺の小松原、老木も千代の色添へて花を咲かせる御佛の、誓ひは四方に鳴り高き弦掛けの觀音とて、弓矢とる身は猶更に、あゆみを運ぶ靈地なり。

鳴尾　先だつて伊豆の小島へ流人の頼朝、僅かの小勢を以て石橋山に旗擧げせしも、元より知れた蟷螂が斧の譬へ、たゞ一戰に打ち負けて生死の程も知れぬといふは、笑止千萬な儀ではござらぬか。

茨木　それと申すも世に時めきし平家の御威勢、いらざる謀叛と天の憎み。
古名　又この弦掛けの觀音は、世の靜謐を守りの神、弓矢とる身の信ずる時は、忽ち家名を起すとある。
錦木　それ故この境内へ的場を構へ、我々が矢的の勝負も弦掛けの大悲を尊む矢數の甲乙。
山﨑　しかし、これも世に云ふ畠水練、言はゞ小兒の戲れ同然。
瀨見　平家の武運を祈るため、これと申すも我々が忠義。
志村　互ひに治世に亂を忘れぬ、武邊のたしなみ。
鹽山　某も修行が第一、イザ射術にかゝりませう。（ト各々矢場へかゝる、鳴尾あざ笑ひて）
鳴尾　これ〳〵鹽山殿、そのおし手のゆがみを直さつせい、それを引起して、半月を滿月に引き直す時は。（ト扇にて仕方して見せる。）
鹽山　これは〳〵、御親切なる御傳授、有難うござりまする。
志村　惣じて射術は、第一に素直にせよとの師範の教へ。
鳴尾　こましやくれたその詞、某なども今度の合戰に、長陣して兵糧の飯も食つたからは、サアこの所にて賭け的の勝負をせうか。

兩人　サア、それは。

鳴尾　但し某には及ばぬと降參めさるか。

兩人　サア、それは。

鳴尾　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。（ト立ちかゝる、畠山とめて）

畠山　まづ〳〵、いづれもお待ちなされい。この庄司が一應申す事がござる。總じて射術の稽古は鏃、置羽根の吟味を第一として、あながち人に射勝つばかりが、はげみでもござらぬ。一分に油斷なく下執の心が的中致すもの、孔夫子の語にも射る事は君になぞらへ、あたらざればその身に求むと予前に隨分と功を積み、遺恨がましき事のないやう、致されたがようござる。

〽血氣にはやるこの場の爭ひ、と靜め居るその所へ、當國の住人大庭の三郎景親、同じく俣野の五郎景久、石橋山の合戰に打勝ち、勇む心のもの詣、兄弟連れの參向道。

トこれより三味線入り大拍子、大庭三郎上下衣裳大小、俣野五郎同じなり、後より[illegible]の侍兩人附添ひ出て來り、

中にも五郎景久は、眞田の與市を討ち取りし自慢を顔にあらはれし男、兄に進みて行く足の、庭先にさしかゝれば、

臨山　これは〳〵大庭殿、俣野殿、御兄弟連れにての御參詣。いづれも無禮無用、控へめされ。

　　ト　これにて皆々双方へ分かれる、大庭俣野上手へ通り床几へかゝる、大名心八人後へなみよく床几へかゝる。大拍子。

俣野　ハヽア、いづれもには、コリヤ觀音の利生を願つて高名手柄をせんために、この射垜にて射術の稽古でござるかな。

鳴尾　イヤモ、佛の利生はともかく、蛭が小島に浪人の頼朝、謀叛を起し天下を騷がすこの時節、それ故斯く武藝を勵みをりまする。

大庭　いかさま、それはよい心がけ、しかし流人づれの頼朝めが、僅か三百騎に足らぬ軍勢を拾ひ集め、この大場に刃向ひしは、富士の山をせゝる土龍同然、生捕りにして日向責め、皮ひきむいてくれんずものを、とり逃して殘念至極。

鳴尾　今にもあれ落ちのびし、在所が知るれば、直ぐさま向うて一合戰。

茨木　俣野殿が眞田の與市を討ちとられし如く、高名手柄が致したうござる。

志村　しかしその折からは夜戰故、如法闇夜の事なれば、上のが俣野か下のが眞田か見とめがつかず。

古名　互ひに組しき組みしかれ、あやふき勝負のその中に。

山崎　御運がよさに勝戰。

鳴尾　これ〳〵、御自分達は俣野殿の、高名をなじらつしやるか。

古名鹽山志村　イヤ、全くもつて。

鳴尾　でも今の詞のはし〴〵、今一言云つてお見やれ、その座は立たさぬ、何とでござる。

ト鳴尾ほか敵役の大名きつとなる、鹽山とめて、

鹽山　これはしたり、よしなき爭論、眞田を討ちとられし故、六波羅殿より御感に預かり、比類なき高名と世上の取り沙汰。

大庭　そりや知れた事、首取つたは弟が手柄、チト各々もあやかりめされ。

鹽山　成程、こりやあやかりたいものでござる。（トこの時花道揚幕の内にて）

呼ビ　景時參詣。

大庭　なに、景時の。

皆々　參詣とや。（ト揚幕にて。）
呼ビ　參詣。
　　　トしらせにて、上手の霞幕切つて落し、竹本の出語りになる。
　　〽おとなふ聲ともろともに、葉越しにきらめく槍印、金唐皮の短册に和歌も心は優しくて、勇氣は鬼もとりひしぐ梶原平三景時、心に深き大願の、徒歩にてこゝへ詣で來る。
　　　トこれにて大小入り、跳への鳴物、花道より梶原平三景時、衣裳上下大小太緒の草履、絹羽織の侍二人、次に下部茶辨當をかつぎ、花道にてこなし、
梶原　枯れたる木にも應護にて盛りの色と眺めたる、地主清水の眺めにもおさ〳〵劣らぬ大悲の庭、その花の春暮れゆけば飛花落葉の風情をしめす、誠や龍門原上に屍をさらす武士も、げに樂しむべきこの櫻、世にもやさしき景色ぢやなあ。
　　〽花に觀じてゐたりける、それと見るより大庭兄弟。
　　　トこれにて梶原供廻り附いて舞臺へ來る、皆々こなしあつて、
俣野　これは〳〵梶原殿、今日御參詣と存じなば、御同道申さうもの。

大庭　存ぜぬ事とてお先へ推參。

梶原　ホヽウ大庭殿、俣野殿、うち揃うて御信心な儀でござる。（ト皆々を見て）これはいづれもには、當觀音の射垜にて、射術のお稽古御神妙な儀でござる。

茨木
鳴尾　梶原殿には、

皆々　まづ／＼これへ。

梶原　しからば、御免。

へ　しからば御免とうち通り。

ト梶原目禮して眞中へ通る、供廻り後に控へる。

梶原　誠にこの度石橋山の戰に、味方の勝利を得し事も、弓矢を守る弦掛けの觀世音の利生、なほこの上にも神の力、信ずるに如くはござらぬ。

俣野　イヤ／＼梶原殿、觀世音の力を頼んで戰に勝つたとは、武士の詞に甘い／＼、兄景親をはじめかく申す俣野の五郎、ついに普門品一卷讀んだ事はなけれども、鬼神とよばれたる眞田の與市を取つて押へ、擒になせしは我が強力のなす所、平家の太刀風に恐れ、頼朝が尻に帆かけて逃げ行きしも、云ふに及ばぬ兄大庭殿がみな軍術に秀でし故、假令佛と思へばこそ、氣晴しが

てらのこの參詣、これは浮世の法樂といふもの、觀音の利生にて勝つまじき戰にも勝つたやうな御一言、人が聞いては外聞かた〴〵チトおたしなみなさるゝがよくござる。

梶原　ホヽウ、異な事が誠に障り御機嫌を損ねしは、梶原が言ひ下手、眞平御免下され。したが神佛を賴めば武士の不外聞、一分のすたるといふ事、弓矢八幡、この梶原はたゞ今まで存ぜなんだ、ア、これを思へば往昔鈴鹿にて、田村麿が鬼を從へられしも、觀世音の利生を蒙り、外聞を失はれ、さぞ後悔に思はれたでござらう。

へさすが鬼神に横道なし、大庭兄弟迷惑顏、梶原もさながらに笑止さあまる詞のつや。

いかさま大庭殿、俣野殿、御兩所によつて、この度の合戰にうち勝ちたればこそ、かやうな長閑な春景色、今を盛りの花も眺めらるゝと申すもの。

大庭　ヲヽサ、その通りでござる、落ち失せた源氏の奴原は、花見る事はさておいて。

俣野　大方どこぞの山奥で、かつゑ死でもいたすであらう。

梶原　それを思へば有難きこの遊興、持ち合はせたるさゝへ提重、これにて一獻さし上げたし、その品これへ。

家來　ハヽア。

ト供侍二人、銘々の家來と共に舞臺へ毛氈をしきつめる、これへ皆々住ひ、さゝへ、提重、茶弁當、杯をとり出す、この内よろしく捨ゼリフ。

梶原　せめて景時が、拙き一首もお笑ひ草、料紙をもて。（ト供の侍料紙短册箱を持ち出し前へおく。）

ヘ短册とり出しさら〳〵と、書き認むる即座の詠歌。

ト梶原短册を手にとり、認むる事あつて大庭へ見せる、大庭取つて、

大庭「時ぞとて咲ける櫻の花かづら、心にかゝる春の諸人」こりや面白さうな御歌でござる。なういづれも。ト皆へ見せる。）

皆々　イヤ、我々も感心致してござる。

ヘ世の中の譬にもれぬ身の上や、寶は時のさし合せ惜しまぬも又娘故、老が一途の思ひ川、深き心はすぐ燒の、刀片手に二人連れ。

ト梶原、大庭、俣野ほか皆々、件のさゝへの銚徳利を出し、杯を皆々順盃にし、よろしくある。次付の内花道より六郎太夫、親仁木綿紋付き、羽織着流し、風呂敷に刀を包みてこれを持ち、後より梢娘にて、切繼衣裳にて、附添ひ出て來り、

六郎　ヲヽ、あすこにござろがお殿樣ぢや、娘早う來やれ〳〵。
　へほた〳〵喜び走りより、大庭が前に兩手をつけば。
　　トこの內兩人舞臺へ來て、下手に控へる。
鳴尾　ヤア見馴れぬ町人、何故に大庭殿の。
八人　面前へ。
六郎　アヽ申し〳〵、私は大庭樣へお願ひがござりまして。ハツ、おそれながらお殿樣へお願ひがござりまして、この親仁めは帷子が辻に住ひ致す、青貝細工師の六郞太夫と申す親仁めにござりまする。かねて御所望下されし所持の刀、急に金子の入用がござりますれば、差し上げたき願ひ故、今日御參詣を見かけて參りました、刀をめされて下さりませうならば、へイ〳〵有難うござりまする。
　へ思ひこうでぞ願ひける。
大庭　ホヽウ聞き及ぶ靑貝師の六郞太夫とは其方か、所持の刀賣りたいとは、某が兼ての望み、重疊々々、幸ひこれに居めされる梶原殿は本阿彌勝りの目利者、究竟の折柄なれば、心にさへ叶うたら望みの通り金子はくれう。

六郎　有難い殿樣の仰せ。ソレ娘、早う殿樣へ持つて行きや。

梢　アイ〳〵。

〽アイと立居もしとやかに、大庭が前にさし出せば。

ト梢刀を持ち、靜々と大庭の前へもち くを、

大庭　コリヤ〳〵女、身共ではないわ、それなる梶原殿へ。（トこれにて件の刀を梶原の前へおき、控える。大庭こなしあつて、）イヤなに梶原殿、御苦勞ながら御目利を賴み入る。

〽云ふに娘は利發者。

梢　これは〳〵冥加もない、私風情が刀の目利を、誰あらう梶原樣が遊ばして下さりまする。コレ父さん悅ばしやんせ、有難いぢやないかいなあ。

〽會釋もおぼこに憎げなき、平三景時につこと笑ひ。

梶原　六郎太夫とやらんが所持の刀と聞けば、彼れが家のいはゞ重寶、梶原が定まらぬ目にかけて、とやかう申すも無遠慮千萬。イヤ、この儀は御免下されい。

大庭　これは〳〵、御辭退はかへつて迷惑致す、こなたが目利下されねば彼れが願ひも叶はず、又手前とても心殘り、是非にこの儀をお願ひ申す。

俣野　兄がかねぐ〵望みの刀、拙者とも〴〵お願ひ申す。

梶原　これは梶原づれに左程のお頼み、辭退致すはかへつて失禮。しからば拜見いたさう。

へ清めの手水と立ち上れば、六郎太夫は袖を控へ、

ト梶原立つて上り行くを六郎太夫つかつかと袴をひかへて。

六郎　ア我々づれが所持の刀、お目利下さるさへ憚りあるに御手水には及びませぬ。

へと、とどむるにぞ。

梶原　イヤ〳〵さにあらず、たとひ持手は誰にもせよ、名作の刀とあれば武士の尊む所、文は鏡、武は劒と、二つにとゞまる日の本の神寶、おろそかにては叶ふまじ。

へ禮儀みださぬ清めの手水、劒を取つて押しいたゞき。

トこの内梶原供に指圖して、手水鉢の傍へ行き手を出す、供は柄杓にて水をかける、口をそゝぐ事あつて元の所へ來り、件の刀を押しいたゞき、抜きかけこなし。

へ抜きはなせば、雲なき夜半の月のかげ、みなぎる瀧を照すが如く、怪しむばかりの劒の燒刃、

梶原　切先物打はゞき元、鎬さし裏さし表、一點雲らぬ名作物、見事。

へ覺えず知らずうちまもり。

ハテ天晴奇代。身不肖なれども平の景時、數多の劍は見たれども、かやうな名作手に觸れしは今始めてこの終りならん。もつとも無銘と見ゆれども、定めてこれは出所も。(六郎太夫へこなしあつて氣をかへ)さぞと白州のこの劍、買ひ求めて大庭殿、家の重寶に致されよ。

へ詞の齒ぎれもさすがの目利、大庭もほとんと機嫌の體。

大庭　御自分が左程まで御賞美あれば確かな道具、某も大慶々々。コリヤ親仁、其方が願ひに任せて、刀は購めてくれう、シテ價の金子はいか程ぢや。

六郎　コハ有難いそのお詞、先刻申し上げた通り、急に入用の仔細あつて、金子の望みは、なう娘。

(ト云ひ兼ねるこなし、梢ちやつとこなしあつて)

梢　ちやつと云はしやんせいなあ。

六郎　何卒三百兩下されませうならば、有難うござりまする。

大庭　ヲヽ、三百兩とはよい出やう、梶原殿にお目利を願つた手前もあれば、望みの通り購めてとらす。こりや〳〵家來共、あの者に金子とらせよ。

〽はッと答へて近習の侍、小判の包みとり出せば、

ト家來へざへ百兩包みを三つ載せ、大庭の前へ直しおき、控へる。

〽物にさし出る俣野の五郎。

俣野　これ〳〵兄者人、もそつと念が足り申さぬ、よし又この劒の出來鹽梅、草薙の寶劍村雲の御劒にまさる上出來にても、切味が惡くては鰹かき同然。

鳴尾　いかさま、俣野殿の云はるゝ通り、ためさぬ内は重寶とは申されまい、一應も再應も吟味めされたがようござる。

〽遠慮もなく云ひはなせば、梶原もむつとせしが、心の料簡開かぬ顔、六郎太夫は氣の毒の身にかゝつたる刃物の言譯。

六郎　イヤ申し俣野樣、憚りながら切味の善惡は見聞きにもあるべき事、その上にこの刀二つ胴に敷腕は豆腐切るよりいと安しと、申し傳へた重寶でござります。

〽云はせも果てずはつたとねめつけ。

俣野　ヤア默りをらう、三百兩の金が欲しさに云ひくるめてもその手は食はぬ、見せかけ律氣の拵へ

者、買ひかぶらせる企みでがなあらう、太い老ぼれめ。

〽叱りつけて云ひ破れば、とりつく島もなげ首の二人が心察しやり。

梶原　イヤ大庭殿、俣野殿、梶原が折角目利致したその刀、お購めなさきは本意なき事、二つには某が一分も異なもの、利きと鈍きとは理の證據に、こりやかやうになされたがよくござる、死罪に極まる科人あらば引出して試しもの、ハテ、その上で二つ胴の切れぬ時は是非もなし、こゝで何かと爭ふは無益の論ではござらぬか。

〽と云ふに大庭もうちうなづき。

大庭　げにさやう、尤もの御料簡、誰れかある獄屋へ參り、死罪の者を引立て參れ。〔ト下手へこなし、後にて〕

家來　ハ、ア。

〽云ひつくる聲も大庭が家來ども、畏つたと走り行く。

ト家來の侍つか〳〵と下手へはひる。

〽こなたの道よりいきせきと、飛脚と見えて旅侍、大庭が前に手をつかへ。

ト早き大拍子になり、花道より飛脚ぶつさき長袢纏、大小にて、細袋へ狀箱を入れて肩にかけ、逸散

に駈け來り、下手に手をつかへ。

飛脚　ハツ、拙者儀は伊東入道が家來、谷山早助と申す者、先刻お屋敷へ參りし所、これへと承はり、直さま參りし火急の御用、イザ御披見下さりませう。
　へ差し出す狀箱。（トツカ〳〵と大庭に狀箱を渡し、下に控へる。）

大庭　遠方の所、大儀々々。

俣野　伊東方より急用とは、何か氣遣ひな儀ではござらぬか。（トこの内大庭密書を讀み終りて、）

大庭　スリヤ賴朝には三浦の大助を賴み、衣笠の城に立てこもつたとある、この文面。

俣野　先だつて土肥の杉山より、行方の知れぬ賴朝め。

鳴尾　主從七騎にて眞鶴ケ崎より落ち失せしとの風聞、元來伊東入道とは、人も知つたる遺恨ある仲。

茨木　それ故に早速の注進、イデ我々も出陣して、賴朝が素頭取つて手柄にせん。

古名　武名をあらはす時節到來、イデ歸宅して、甲冑の用意せん。

皆々　ソレ。（ト皆々きつと息込む、墟山こなしあつて）
　へ勢込んで駈け出せば、

鹽山　血氣にはやるは匹夫の勇、陣振れもなきにこりや何事、まづさし當るこの場の樣子、ためし者を見るも後學、たち騷がずとお控へなされ。

ヘひきとめたるその所へ、獄屋の役人繩つき一人引連れて、大庭の前に膝まづき、

ト大名皆々控へる、この内下手より以前の役人二人、お仕着せ繩付きを引立て出て、下手へひきすえる。

役人　ハツ、大禁の獄屋の内、帳面吟味致せし所、死罪に極まる科人はたゞ一人、二つ胴の御ためし、いかゞ計らひませう。

ヘ伺へば大庭の三郎。

大庭　兼氏が雌雄を定めんと、落着もせぬ科人を、いたづらに切られもせまい。是非がない今日はこの刀持つて歸れ。

ヘ云はれて吐胸つきつめた、老の料簡當惑の、色目見てとる娘の梢。

梢　サア父さん立たしやんせ、とても叶はぬ願ひの筋、よしない事を云つて居る手間で、私がソレ、ナ、今の所へ奉公に行けば、望みの金は調ふ、苦に病まずと早う行て、談合して下さん

せ。

〽諫めも親の氣を休める孝心見えて哀れなり、六郎太夫は最前より、さしうつむいてゐたりしが、横手を打ち。

ト六郎太夫屈託のこなしあつて、氣をとり直し、皆々に思入あつて、

六郎　ヲヽそれ〳〵、大事の事を忘れて居た、十年ばかり以前の事伊東殿の御方よりよん所なき御所望にて、刀を御覽にいれし時試みのためし者二つ胴を切つたりとの、極めの證文下されしを、常は刀に添へおくを參りがけにとり急ぎ、はつたりと取り落して參りました、たゞ今娘を取りに遣はし、各々樣の御覽に入れませう程に、其上にてその刀、何卒お購め下さりませう。

〽願ふを聞いて梶原平三。

梶原　スリヤ二つ胴の極めの證文、伊東殿が添へたるとな、ムヽそれは究竟の折紙、片時も早くとりよせよ。

六郎　左樣なら、唯今直きに遣はしませう。コリヤ娘、そちや家へ行て證文取つて來てくれい。

梢　アイ〳〵。

六郎　そんなら行てたもるか。

梢　アイ〳〵。（といそ〳〵とこなしあつて立ちかゝる。）

六郎　コリヤ佛檀の下戸棚、小引出に入れてあるぞや。（六郎太夫梢の顔を見て暇乞をいふこなしあつて。）
コリヤ〳〵、大事にかけて持つておぢや、必ず落しやんな。

梢　氣遣ひさしやんすな、ツイ行て來るわいなあ。

六郎　ヲヽ大儀ぢやなう。

梢　父さん、待つて居て下さんせ。

〽小褄からげて。（ト梢花道へツカ〳〵と行き、躓く、六郎太夫見て、）

六郎　アヽコレ、あぶないわいやい。

梢　イヱ、どうもしやせぬわいな。

六郎　なんぼう遲うてもよいぞや。大儀ぢやなう。

梢　アイ〳〵。

〽返事もいそ〳〵帷子の我が家をさして急ぎゆく、娘が影を見送つて、大庭が
前にづツと出で。
トのび上り見送り、こなしあつて下に居て、大庭へ思入あつて、

六郎　改めて大庭様へ、親仁めがお願ひ、胴だめしの今一人は、この親仁めをお加へ下され、早う刀の切味御試し遊ばし、三百兩の價の金子下しおかれませうならば、ヘイ〳〵有難う存じまする。

　ヘ前後揃はぬ願ひの詞、聞くより大庭は聲あらゝげ。

大庭　ヤイ老ぼれめ、うぬ、血迷うてをるな。コリヤ、よく物を合點して見よ、試されては命がないぞ。

俣野　わりや命がなうても金が欲しいか。

大庭俣野　ハテ無分別な親仁だわえ。

大庭　ハヽ。

俣野　ハヽ。

兩人　ハヽヽヽ。（ト顏見合せてあざ笑ふ。）

六郎　御尤も至極なお咎め、千萬の金より重きは人の命なれども、義によつて捨てる時は、塵芥より輕しとやら。七十歳の春秋を積り積りて頭の霜、旦や消えん夕や消えんと、死を待つばかりの身の上に、義理に迫つた娘の難儀、老の身でまぢ〳〵と、どうマア見てゐられう。代なす刀

は親の慈悲、三百兩の直打を極めるも。

〽我が子のための折紙と、思へば些も惜しからず。

この上のお願ひには、娘が參らぬその内に、この身體をお試しなされて、願ひを叶へて下さりませ。伊東殿の證文ありと申したは僞り、娘が傍に附添ひては、よも見殺しには致すまい、さすれば事の妨げと當座遁れの間に合ひも、娘をはぶかうための僞り、何を申すも三百兩の金が娘にやりたいばかり、憚り多き事ながら、梶原樣へこの金子お預け申して、娘が歸りましたなら、事の仔細を仰せ聞けられ、お渡しなされて下さりませ。

〽ひとへに願ひ奉る。

ソア、大庭樣、俣野樣、老が望みを聞き分けて、命をめされて下さりませ。

〽詞を盡し理を盡し、餘儀なく賴むぞ不便なる、大庭は一途に刀のほしさ、氣强く生れし一德には、物の哀れもかへりみず。

大庭　段々との義聞き屆けた、望みの通り試してくれう、金子は娘に渡してやるわ、下郎の小さい心から三百兩を大切に思へばこそ、念を入るゝも無理ならず。コリヤ大庭は大名、なにこれしき

を梶原殿に御苦勞かけう、二つ胴さへ切つたなら、三百兩に限らぬ、五百兩でも千兩でも、梶原がために惡しくはせまじ。

六郎　スリヤ、お聞き屆け下さりまするか。

大庭　いかにも。

六郎　エヽ、有難うござりまする。

〽云ふを俣野は、せゝら笑ひ。

俣野　へヽ、なにが有難からう、しかし下人にしてはよい覺悟、よく〳〵世間にあきたと見え大方死神が取りついてゐるのであらう。サテ〳〵笑止な親仁めだ。

大庭　サ、片時も早く、最期の支度。

〽と見廻して。

所は幸ひ射垜の前。ソレ侍ども、用意せい。

家來　ハヽア。

〽云ふに最期の六郎太夫、二人に一禮にこ〳〵顏、先に進んで的場の內、射垜

に植ゑたる矢切の竹、この世を名殘りの藪ぢから、節くれ立つたる老いの手に、引きもぎ〱くゝり添へ、左右の垣に結び合せ、手づから圍ふ最後場所眞中にどつかと座し。

ト右の内侍三人出て、眞中へ莚をしき、六郎太夫最期のこなし、

六郎　サアお侍樣、御苦勞ながら繩をおかけなされて下さりませ。

ト後へ手を廻す、侍二人立ちよつて六郎太夫に繩かける。

俣野　サア科人めを、はやくこれへ。（ト下手へこなし。下手にて）

侍　ハ、ア。（ト侍下手より、劍菱の呑助繩にかけ出て、下手に住ふ。）

〽呼ぶに引出す繩付きは足もひよろ〱色青ざめ、竹垣に追ひ入るれば。

六郎　これは〱不思議な縁で、六郎太夫が冥土の友となられるの。

〽挨拶すればうろ〱眼。（ト呑助こなしあつて。）

呑助　ア、思へば僕が身の敵と云ふは二合半、酒一杯呑むと忽ちに怒り上戸が癖となり、師匠を殺した科故に、鬼假しの罪となり、莚被りまでなり下り、牢にも大方三年酒、今日引出されて最前からあそこで樣子をきく酒屋、最早冥土の迎ひ酒と思へば身内がひや酒であつい涙がこぼれ

俺、ヱ、この身體が、い、い、ふじみ酒なら、助かる事もあらうのに、切られぬ先からいたみ酒、あと強ひされるはなほ苦しい。重ねておいて名作の、試しをするとは、ヱ、マア二つ胴慾な。

〽切られぬ内から魂は、中有に迷うて見えにける。

大庭　コリヤ弟、汝が手の内にて、この刀の切味試しみよ。

俣野　心得ました、イデ二つ胴を試してくれん。

〽刀ひつさげ立上れば。ト件の刀を持ち、下へ來るを、梶原俣野の持つ刀をひきとめ、

梶原　ヤレ待たれよ、お頼みありし故目利致した某に、一言の禮儀もなく、御邊が彼等を試さんとは、餘りなるふみつけ業、近頃無禮にござらう。

〽面色すぢをあら立つれば。

俣野　ヤア、これは〳〵氣の短かい、唯今この刀を貴殿へお渡し申して、目利なされた御不承に、サア梶原殿、見事に遊ばせ、御苦勞ながら。

〽すべらかす。

梶原　いかさま、こりやかうならうては叶ふまい、しからば刀を。

俣野　イザ。

ヘ刀もぎとり平三景時、しづ〳〵と立ちよつて。

トこれにて刀を梶原に渡し、俣野下手へ床几にかゝる。

梶原　誰かある。切柄もて。（ト家來ハッとこなし、梶原下手の六郎太夫に思入あつて）イヤなに、六郎太夫とやら、先刻よりのあらましこれにて承り居る、老の命を輕んじて我子を惠む神妙、感ずるに餘りあり、この景時が乞ひ望んで手にかくるは、最期を清くさせんがため、この世は子故の闇なれども、未來はまさに明らけき、月の光ともろともに、劒の德はあらはるべし、必ず心の曇りをはらせ。

ヘ情の詞に頭を下げ。

六郎　ヘイ〳〵、六郎太夫が身にとりましては、善知識よりなほ有難いお惠み、たとひ下郎の手にかゝり相果つるとも是非なきに、老が冥土へ首途に、誰あらう坂東一の文武の勇士、梶原樣にむさき身體を試さるゝとは天晴果報、疊の上の病死より百倍の本望、我子に與へる三百兩は紫摩黄金の佛果の種、浮世の名殘り。さはさりながら今にもあれ、娘が戻つて參つたら、さぞほへもせう他愛もあるまじ、アヽいらざる愚癡を。サヽ、恐れながら、どうぞお世話に。

〽涙をかくす笑の内、目許にほろりと一雫、わつと泣くよりいぢらしく、顔を背けて梶原が、袂を露にあやなせり、娘の梢は極めの證文、あり所知れねば故非なくも、戻つて見つけるこの場の仕儀。

ト六郎太夫梶原に愁ひのこなしよろしくある、花道より梢、わが草履の鼻緒の切れしを持ちうろ／＼して出て、よき所へ来り、舞臺なる六郎太夫を見付けて、ツカ／＼と下手へ来り。

梢　ヤア、父さんを誰がしばつた、何の科でござんすなあ。

トきつさうして寄らうとするを、番人六尺棒にて梢をとめて、

番人　ヤア、寄るな／＼、控へてゐよ、控へてゐよ。

梢　エヽ、なんぼうでも譯を聞かぬ内は、控へませぬ、控へませぬ。

〽情なや悲しやと、垣にすがつて泣きわめく、六郎太夫は顔を上げ。

六郎　ヲヽ、驚きは尤も、氣を靜めてモウ泣くな、まだ／＼この上に、どのやうな悲しい事があらうとも、必ずびつくりするなよ、仔細は後で合點がゆかう。梶原様、早う／＼、エヽ申し、娘が歎くを不便に思召し、猶豫して下さる程情の罪科、サア一思ひにすつぱりと。

〽遊ばせやと云ふうちから、それと悟つて娘が悲しさ。

梢　さてはお前は身を捨てゝ、試し物にならしやんす心かいなあ。
〽いかに刀が賣りたいとて、そりやあんまり胴慾な、私の心の悲しさつらさ、
思ひやつて下さんせ。
親を殺した刀の價が、どうまあ持つていなるゝものぞ。モウシ梶原樣、必らず父樣を切つて下さんすな。その代り私が身を試したい程、お試しなされて下さりませ、モウシお情でござりまするわいなあ。
〽あの繩解いて下されと、伏し沈むこそ道理なれ、六郎太夫は聲あらゝげ。

六郎　ヤアくどくと叶はぬくり言、八十に手の屆く娑婆ふさげのこの身體、三百兩にはよい賣物、かばひ立てして結句不幸、一旦受け合うた金の事、今更出來ぬと云うて夫へ義理が何で立つ、あのこゝな、未練者めが。
〽怒つて見せても、聞きいれず。（ト繩られし儘梢へこなし。）

梢　イエく、親の死ぬるを見捨て、夫へ義理を立てようとは、わしやなんぼでも思ひはせぬ、マエこんな事と知つたなら、お前に隱して傾城奉公に行かうもの、女子の知慧の後や先、氣がつ

かなんだが口惜しいわいなあ。

〽その身を恨みつ父を惜しみ、くやみ涙の暇よりも。

ヱヽ胴慾にもわしを欺し、ありもせぬ極めの折紙、取つて來いと暇いれさせ、その間に死んでしまはうとは、後で憂目を見よとの事か、そりや父樣聞えませぬ、モウシ梶原樣、どうぞお詫しなされて下さりませ。（トこの間梢番人二人に棒で押へられ、いろ／＼身をもむ事あつて、）モウシあなた樣、おとりなされて下さりませ。（ト竹矢來の外にて棒にてとめられ居て、皆々へ頼めども、大庭俣野大名も知らぬ顔してゐる故、）ヱヽこのやうに、大勢並んでござる中に、とりなして下さるお方はない事か、ヱヽモウシ、拜みまする、お殿樣。

〽拜んで廻るいぢらしさ、六郎太夫はもてあぐみ。

六郎　ヱヽ情ない、あの娘を、あつちへやつて下さりませ。

〽云ふに下部がたちかゝり、情容赦もあらけなく。

ト梢押しのけるを二人の家來棒にて當てる、これにて梢ウンと倒れる、六郎太夫思ひ切つて、

ヱヽ七面倒な。梶原樣、御苦勞ながら。

トきつと云ふ、梶原愁ひのこなし。この時心を替へ、靜に上をはね、下緒にて襷をかけ。

へ中には平三景時が指圖に重ねる二つの骸、六郎太夫は觀念の眼を閉ぢ、大庭兄弟目をはなさず、並居る諸士も冷汗の、玉も飛び散る刀の光、振り上げる手も懸け聲も鋭き劒の拜み打ち。

トこの内家來皆々、梶原の指圖にて莚の上に、六郎太夫を寢かし、役人は繩付きの呑助の吹替への骸をのせて、手足を家來押へ居る、梶原は件の刀を引拔きよろしくこなし、大庭、俣野、上下へ別れ詰めより、きつと目をつける、本釣鐘の頭。

へ音はばつたり砂礫、血は立つ波を湧きかへす、上の死骸を引のくれば、六郎太夫は茫然と、危い夢のさめたる心地。

トこの中梶原「エイ」と聲かけ切割る、櫻の花散る、吹替への呑助胴切になり、見事に二つに割れる、梶原左手にてとじ紙にて血糊のはねしをふき、件の刀を見詰めてこなし、六郎太夫は縛られし繩切れその儘喜び居る、大名皆々びつくり、大庭俣野は顏見合せ、肩にて笑ひ居る、梢心づき起上りて、六郎太夫を見てツカ〳〵と傍へ行きいたぶりて

梢　モウシ、父さん、父さん、お前は切られはさしやさんせぬわいなあ。

六郎　イヤ〳〵、おりや切られて死んだ〳〵。（ト六郎太夫を引起し、下手へ引ずり來り、身體をなで廻し。）

梢　これはマア、切られはさしやんせぬわいなあ。

六郎　イヤ〳〵、死んだ〳〵。

六郎太夫死んだと心得、念佛をとなへ合掌するを、その手を拂ひのけて、梢すがりより頬合はせる、これにて梢を見てびつくり、又梶原を見、あたりを見廻し心付いて。

こりやどうぢや。

〽目利違ひの金味に、この場の味を梶原が苦りきつたる不首尾さよ、俣野は嘲り高笑ひ。

俣野　さてこそ〳〵、大方こんな事であらうと、思ひ當つたこのしだら。

吉名　先刻俣野殿が推量の通り、名作と云はうかきよろ作と云はうか。

鳴尾　目利やらめくらやら、梶原殿の手の内も。

茨木　見ると聞くとは大きな違ひ、あまり馬鹿々々しい儀でござる。

皆々　ハ、、、、。（と皆々笑ふ、梶原うつむいて居る。）

俣野　さて〳〵ひやいな三百兩、すんでの事に衒られうとしたわえ。サア兄者人、方丈へ參らうではござらぬか。（ト大庭前へ出て、）

大庭　其方が試し見よと教へずば、その儘に持ち歸り、梶原殿の目利をあてに、人中で恥かいたら大庭の武士もすたる道理、ヱヽ思へばく憎い衒りめ、アノ、こゝな狸親仁め。

へと蹴飛ばせば、六郎太夫は口惜しく。

ト蹴飛ばし、大庭きつとこなし、六郎太夫起上り、きつと見つめて、

六郎　ヱヽ情けない、二つ胴が切れればお歸めなく、盗人衒りとは恨めしい、この年月横道な事した覺えはないこの親仁め、死際の今となつて、盗人衒りと土足にかけられ、えゝ口惜しい。

へ身をもがきてぞ歎きける。

大庭　盗人たけぐしいとは汝が事、二つ胴が切れねば、なまくら同然、衒りといつたが誤りか。

六郎　サア、それは。

俣野　但し、これでも名作か。

六郎　サア。

大庭
俣野　サア。

三人　サアく。

大庭　アノ、こゝな。

大庭
俣野　横道者めが。
　〽さも惜體にねめ廻し。
大庭　役にもたゝぬ事にかゝつて餘程の隙入り。いづれにもさぞ御退屈、入道殿よりの使にも、さぞ待どほ、即ち返書は方丈にて。
鳴尾　さやうでござる、かやうな席に長居致すは、武門の恥辱と申すもの。
茨木　これより直ぐに客殿へ參り、御兄弟の武藝の奥義。
古名　承はるが、身の後學と申すもの。
俣野　その上にて、方丈方にて酒宴の催し。
皆々　しからば御兩所。
　〽あたり眼に梶原へ、
　まづ〳〵。
大庭　ア、ア。
　〽入りにけり。
ト迯りにて大庭あくびをなし俣野先にこの一件殘らず上手へはひる。梶原の家來二人梶原に會釋する。

梶原行け〳〵といふこなしある故、兩人は下手へはひる、後眞中に梶原床几にかゝり、思案の思入、

六郎太夫梢は無念のこなし。

六郎 ヱヽ、無念な口惜しい、とやかう云ふ程恥の上塗り、さうぢや。

〽作の刀とり上げて 娘さらばと右手の脇腹、突込まんとする所を、娘はかけよりしがみつき。

ト梶原が前の刀に手をかけ死なうとこなし、梢とめて、

梢 コレ父さん、こりや何事ぢや、たつた今拾うた命、又腹切らうとは情けない、お前には死神でもついたのか、但しはお氣が違うたかいなあ。

六郎 何故の切腹とは 不思議に命のがれたれども 面目なさに死ぬるわやい。（ト竹笛入の合方になる。）俺が心ぜく儘に後先云はねば道理々々、六郎太夫の幼少より七十九歳の今日まで、身に添へ持ちしこの刀、人のもてなす詞にのり、天晴名作奇代の刀と思ひ込んで居たりしに、なまくら物とも業物とも辨へ知らぬ心の自慢、一人の婿に廣言はなち、氣遣すなと受け合うた三百兩の價金、この身を果たすが婿への言譯、こゝの道理を聞き分けて、婿へ手前のとりなしを、必ず必ず頼むぞよ、娘さらば。

〽又とり直せば。

ト梶原が前の刀を又とつて死なうとするを、手早くその刀を梶原とめて、

梶原　かほどの業物、切腹に汚さんとは、ア、恐れあり恐れあり、二つ胴は愚か目に見えぬ鬼神をも従はせん奇代の代物、和國の重寶、最前汝ののがれしはまつたく劔の鈍きにあらず、この梶原がいましめの繩目をかけて切り解く、手練のかね合劔の切味、こりや疑ひ晴らして安堵せよ、我に刀を得させなば、價は望みに任すべし、心安かれ六郎太夫。

〽語るに二人ははツと伏し。（ト六郎太夫梢顔見合せ）

兩人　エヽヽヽ、有難うござりまする。

〽喜び合ふぞ道理なり。

梶原　ホヽヲ、この刀の作りざま、詞の端々、大庭兄弟諸大名の手前を包み、わざとそれとは云はざりしが、コレ見よ、差裏にありありと、八幡といふ文字をすえたるを思ひ合せば、源氏方の由縁と知られ、奥床しくもたのもしゝ、この梶原に心おきなく、おことが素性實名を、包まず明せ。

〽げにねんごろに尋ぬるに、娘は嬉しく。

梢　かほどのお情うけまして、今更何の隠しませう。

〽云はんとするを。（ト六郎太夫梢を押へて、）

六郎　ア、これ／＼何を申す、源氏方の由縁の者と、勇者の目に見られし上は、あらがふべきにはあらねども、平家方の梶原様にそれぞと夫の名を名乗るは大きな不覚、御恩は御恩敵は敵、それが憎いとてお手討に、合はゞ合ひ次第。

〽木を切つて投げだす詞。

梶原　ホヽウ尤も、天晴の忠臣、その心底を見る上は、イデ某が心底をも申し聞かさん、こりや近う／＼。

〽あたり見廻し二人を招き。

ト梶原あたりへ心を配ることなし、六郎太夫梢近よる、梶原こなし。

この度土肥の杉山にて、落人となり給ひし、源氏の大将兵衛佐殿、伏木のうろに隠れ居させ給ひしを某が目にさへぎり、シヤよき敵ごさんなれと駈け向ひ、何の苦もなくかいつかみ、膝の下に押し伏せて、首をかゝんとなしつるに、サヽ聞きやれ、こゝに不思議や身もすくまり自由ならず、ヤアレいかにとお姿を見奉れば、自然と備はる武将の位、智仁勇の三徳兼ねて聞

きしにまさる御骨折、武門の榮を日の本に輝やかさん御目の内、梶原づれの侍が、討ち奉るは、ハ、ア勿體なし。

〽勿體なし。

ふつとその時思ひし故、思ひ廻せば我が先祖は、由緒ある源氏の家臣、當時平家に與すれども、先祖の故主へ返り忠二心とはよも云ふまじ、御運の開く時節の待たんと、お命を助け參らせ、大庭を欺くこの梶原、形は當時平家の武士、魂は佐殿の御膝許の守護の侍、我が身命をうち捨てゝ忠勤を盡すべし、よしそれ故に世にうとまれ、佞人讒者と指さゝれ死後の惡名受くるとも、いつかな〳〵厭はぬ某、御邊が胸中見ぬきし故、かく一大事を包まずあかす我が心底。

〽一大事をあかすぞと、心底殘らず物語れば。

六郎　成程そのお心を聞く上は、包み隱さうやうはなけれども。名作といふ證據もなきに、この刀を押賣りぢやと云はるゝも口惜しい、又御身の上の云分も。

梶原　ヲ、それこそは梶原が手の内、名作の證據を見せん、ハテ何をがな。（とあたりを見廻し、手水鉢を見て思入〕ムウ、これよ。

〽イザと二人が手をとつて、日影に向はせ。

ト梶原立上り、二人に手をつれ合へとこなし、刀を持ちし儘手をとり、日足を見て日に向はせ手水鉢へ二人の影寫るこなし、梶原進みより。

アレ見よ、兩人。（トのりになり）親子の姿あり〳〵と寫りし姿を　某が、今手にかけて試しもの、死ぬる者には影なしと、云ひならはせしも時の重寶、刀の切味見よ。

〽二人を寫す影法師　厚さ尺餘の青目の石、てうと打てば親と子が、影は分るる二つ胴。

ト本釣鐘、梶原こなしあつて、件の刀を抜きはなし手水鉢に思入あつて切る、これにて石火立ち石は二つに分かるゝ、三人こなし。

梢　アレ申し、とゝさん。

梶原　劍もつるぎ。

六郎　切り手も切り手。

ト六郎太夫梢は、梶原が手の内を感心のこなし、梶原は劍を見て感じ入る思入。

〽さてこそ源氏一統の、御世に秀でし梶原平三、鎌倉殿の政務の沙汰。

梶原　萬の下知をなしつろ故、名を。
　〽げぢ〳〵と云ひ云はるれど、誠の武士の鑑なり、六郎太夫は大きに喜び。
六郎　今こそ誠に名作の、奇異をあらはす御劒故、さし上げ申す身の大慶。
梢　この上ともに、味方のおため。
兩人　よろしくお願ひ申しまする。
　〽壮が情に柄鮫の命の親つぶ、生れの儘の御恩は厚き嬉し泣き、喜び涙景時も身の幸ひを輝かす、星合寺の門内より、大庭俣野を始めとし、以前の武士出來り、大庭三郎聲をかけ。
大庭　ヤア梶原殿、始終の樣子は殘らず聞いた、兼ねて望みの名劒を、お身がほしさに横取りせんため、コリヤ大庭を一杯やらしつたな。
俣野　ヲ、さうだ、梶原殿、そりや手が惡い、武士に似合はぬ卑怯でござるぞ。
梶原　たとひ莫耶が劒たりとも、持手に相應せぬ時はなまくら同然。
大庭　ム、、スリヤ貴殿はこの大庭の、性に合はぬと言はつしやるか。

梶原　されば、劍はその身の守りにして、あながち人を切るばかりの物にあらず。

梢　それ故私の父様を、お助けありしお情は。

六郎　とりも直さず仁の道、鈍き刀と思はせて、下されましたは義のなす業、諸軍の場所なら計略と申すもの。

大庭　エヽやかましい老ぼれめ、すつこんでをらう。

俣野　コリヤ梶原の僞り表裏を、イヤ智略だの計略のと、餘りなる得手勝手。

古名　さほど智略に勝れた梶原なら、和漢に備はる六韜三略、野馬臺くも手の奇計をはじめ。

鳴尾　諸軍を下知する軍師の進退、智仁兼備の器量あつて。

茨木　見事その刀、購めゝさるか。

鹽山　左程の器量なき景時ならず、モシ疑はしくば武士の極意を、尋ねて見られよ。

大庭　ヲヽ面白い、しからば問はん、モシ智仁勇の三徳が、一つかけてもその刀、この方へ所望致すぞ。

俣野　まづ試みに梶原殿。

皆々　軍慮の程が、聞きたい〳〵。

梶原　ハテぎやう〳〵しい詞戰ひ、身不肖なれどもこの景時は、坂東の八平氏、代々武門に傳へる家柄、お望みならば軍學の祕事口傳、あらかじめお話し申さう。

俣野　ヲヽ、それこそ望む所、しからばこれにて。

皆々　承はりたうござる。

〽とつめよれば。（ト皆々つめよる、大小入り合方になる、梶原眞中に住ひ、

梶原　それ陣所の大意は、前後の隊伍をよく守り、先陣は魚鱗にかため、後陣は鶴翼長蛇の備へ、臥龍が祕したる八門遁甲。

〽軍慮を帷幕の內にめぐらし、千里をかける諸卒のかけ引、弓矢持楯めぐりを圍ひ。

四方山はるかに春霞、夏はあり〳〵雲の峰。

〽旗と見まがふ山城の麓の岡に屯して。

梶原　深田を前に後やま。

〽秋の田の面の霧がくれ。

冬は凍れる池の面に、水鳥なんどのかけ引あり。

六郎　諸鳥のぱつと立つ羽音。

梢　空に吹雪の野路山路、樹々の梢も白妙の道ふみ迷ふその時は。

梶原　ホヽウこざかしくも尋ねたり、道白妙の雪の日は、老いたる馬を先に立て。

へ故郷の容にしるべせし、これ管仲が明智なり、その外飢渇の諸軍をあはれみ、水に渇せし葉武者には、向ふに梅の林あり、進めや〳〵と大將の詞に啣うるほせり。

漲り落つる大河たりとも、流れん者には弓筈をとらせ、戰は臨機應變にて、惡意の思慮こそ發明ならず、何と某が申す事、一言一句の批判がござるか。

大庭　サア。

梶原　サア。

俣野　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

梶原　いかゞでござる。

へげに辯舌もさはやかに、文武に富める勇者のいさをし、勇ましくこそ聞へけり。

六郎　ハア出來ました、出來ました、何とこれで智仁勇に缺けた所がござりまするか。刀は梶原樣へさし上げても、云分はござりますまい、但し申分がござりまするか。

俣野　ヱヽ、勝手に致せ。

鳴尾　サ、大庭殿、俣野殿、いづれも。

皆々　退散仕つらう。

梶原　六郎太夫は娘を伴ひ、某が屋敷へ參れ、望みの金子はとらすであらう。

六郎・梢　ヱヽ、有難うござりまする。

ト六郎太夫は刀をかつぎ先に立ちて悦び又氣をかへて、失禮があつては惡いとこなし。

へ親子を伴ひたち歸る、家の名字も相にあふ、鍛冶の鍛へに奇代の梶原、弓矢の譽れ、矢筈の紋、今にその名を。

ト此の内梶原皆々へこなしある、六郎太夫、梢花道へ行くを、下手より以前の飛脚つか〳〵と行き、刀へ手をかけ、

飛脚　その刀を。

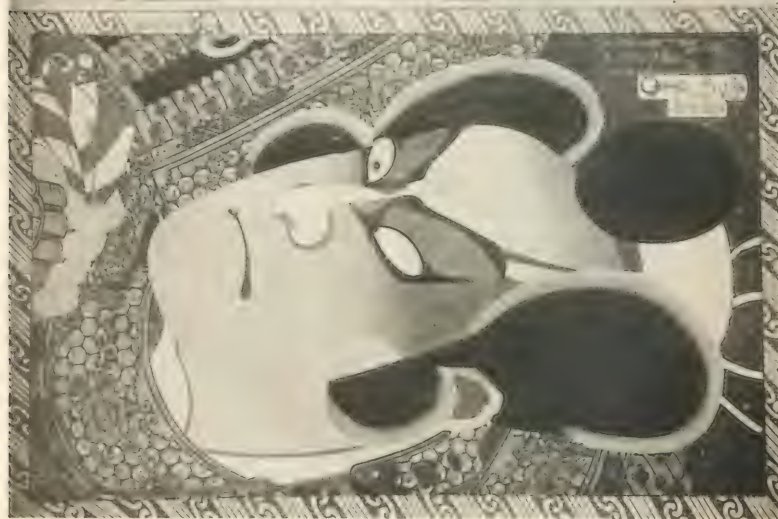
ト取りにかゝるを、梶原つか〳〵と花道へ行き、飛脚を取つて舞臺へ投げのける。無類の大力、最早大名八名ムヽと息込む、梶原扇を開くを木の頭。皆々無念のこなし。梶原笑をふくむ。

〽殘りける。

トよろしく、段切れにて

幕

ト幕引つけると、三味線入り大拍子になり、六郎太夫揃いそ〳〵して先にたつて行く、梶原扇にて砂煙を拂ひ、悠々と花道へはひる、しらせにつき、あとシャギリ。

石切梶原（終り）

源平魁躑躅
げんぺいさきがけつゝじ

源平魁躑躅（扇屋熊谷―二場）

六波羅扇屋上總店の場
五條橋の場

役名 熊谷次郎直實、扇屋上總大椽、姉輪平次、木鼠忠太、堤の軍次、扇折り小萩實ハ無官太夫敦盛、上總女房おこの、扇屋娘桂子、扇折りおひろ、軍兵、その他仕出し大勢。

本舞臺三間の間、通し中足の世話屋體、眞中暖簾口、上手抽斗付きの戸棚、下の方誂への襖障子、浪に千鳥の模樣、折廻して斜に見切り、ずつと上手に少し押出したる九尺の障子屋體、本緣付きの揚げ緣の心、瓦屋根の廂、一面の見世。軒に紺の暖簾を掛け、眞中に大きな扇の看板、扇折り上總の大椽と記しあり、すべて六波羅通り扇屋上總見世の體。爰に扇折りの女三人、をかしみの扇折りおひろ、都合四人見世先に並び、地紙を折りゐる。上總女房お此上手にて扇の箱へ扇を詰めてゐる。この傍に娘桂子、抱人形に着物を着せてゐる。仕出し大勢。坊主、侍、思ひ〳〵のこしらへにて扇を買つてゐる。この内に木鼠忠太法印のこしらへにてまじりゐる。よろしく臼挽唄にて幕あく。

坊主　丸骨の袋入りが出來たら、早く下さい。
侍　天地金の五本入りは、五箱ばかり先へ貰ひたいものだ。
○　ヘイ〳〵、唯今拵へて上げまする。（ト思入あつて）モシ折子さん、出來ましたら彼方へお上げなされて下さりませ。
町人　おいらも早くして下さい。
ひろ　エヽ、喧しい。なんの萬歳扇の一本や二本、買ふといつて騷々しい。サア〳〵わしが出してやらう。出してやらう。
ト抽斗より扇を出して皆々へ渡す。
商人　こゝの娘に賣つて貰はうと思つたら、吹矢から出た化物のやうな女か。
ひろ　エヽ、口の減らない、お前方には私が相應、なんぼ吹矢の化物でも、お前方に當りをつけられて堪るものかえ。
△　コレ〳〵おひろどの、買人の衆にかまはずと、ちやつと折りかけの扇を、折つてしまうたがよいわいなア。
忠太　モシ〳〵、わつちのも早くして下さい。

この　大きにお待たせ申ました。

ト扇箱を出す。侍出し扇を受取り。

坊主　どうやらかうやら、愚僧の丸骨は出來たといふものだ。

侍　然らばその五本入りは、身共が持ち歸り、跡々の誂へは、屋敷まで持參仕れ。

○　モシ桂子樣。この扇をあなた方へお上げなされて下さりませ。

桂子　そこどころではないわい。わしは用があるわいなア。

ひろ　それでもお前樣は、人形を持つて遊んでおいでなさるではござりませぬか。

桂子　サア、この人形は裸故、寒からうと思うて着物を拵へてやるのぢやわいの。

ひろ　人形は私が抱いて居りませう。お前樣にその扇のしめをしてお上げなされませいなア。

桂子　それでもわしや人形の着物で忙しいわいなう。

ト言ひ乍ら人形を下に置き、扇箱を持ち前へ出て、侍の傍へ置く。

侍　こゝの娘の手から、箱入りを貰ふとは、幸先がよいわえ。

桂子　エヽ何をおつしやるぞいナア。

トつんとしてこつちへ來ること。

皆々　ソリヤ、娘が物を言つたぞ〳〵。
ひろ　エヽ喧しい野郎どもだ。娘だつて物を言はなくつてどうするものだ。杓子が物を言つた事さへあらア。
皆々　杓子が物を言やア、手前によく似てゐるだらう。
ひろ　またそんなことを言ふかいナア。（ト立掛るを○△□留める。）
皆々　ワアイ〳〵。（ト囃す。侍これを留めて。）
侍　サア〳〵もうよい〳〵。身共と一緒に歸りやれ〳〵。さて〳〵こゝの店は、奇甘なことではある。
坊主　それもこゝの家は、娘が第一の看板だ。
侍　さては貴僧も、よつぽどお好きと見えますな。
坊主　大好物と申すではござらぬが、少々は用ひます。
侍　イヤ、如在のない御坊であるわい、ハヽヽヽ。サア行きませう。
皆々　錢は拂ひましたぞや。
この　これは皆樣、有難うございます。

ト右の鳴物にて、侍、坊主、仕出し皆々花道へはひる。此間忠太暖簾を差覗き、煙草を喫みながら、うそ／＼家内を見廻してゐる。扇折りの女は皆々元の座へ直る。おひろは錢を錢箱へ入れる。桂子は女房の傍にて扇のしめを拵へてゐる。

忠太　コウット、いつでも爰に、扇を折つてゐる女が、一人見えねえわえ。

ト是にておひろ忠太を見て、

ひろ　何だえ此の人は、みんな歸るのに、お前ばかりいつまで何をしてゐるのだやいナア。

忠太　何をしてゐるものか。扇の出來るのを待つてゐるのだ。

この　これは粗相いたしました。お前樣のお誂へは、戰中でございましたナア。

忠太　何を言はつしやる。この上さんは聾か知らぬが、平骨の扇をくれろと、先刻から口の酸くなるほど言つてゐるらア。（ト矢張りうそ／＼見てゐる。）

この　ハイ／＼、大きに遲うなりました。

ト抽斗より平骨の扇を出して、忠太に渡す。

忠太　一番先きへ誂へたものを、今時分出してよこし、その上妙な面の女めが、いつまで何をしてゐるのだなぞと、いけふざけたあまだ。

ひろ　オヤ、默つて聞いてゐりやア、私を妙な面だの、いけふざけたあまだのと、よく口幅つたい事を言つたナ。この渡り法印め。

忠太　渡らうが渡るめえが、うぬが厄介になるものかえ、だお多福め。

ひろ　エヽ、どう言へば斯う言ふと、モウ堪忍がならぬわえ。

ト大肌脱ぎになり。忠太に摑みかゝる、扇折りの女皆々留める。この内忠太店先にある平骨の扇を手早く取り。

忠太　阿呆やアイ〳〵。（ト右鳴物にて花道へ逸散にはひる。

〇　モウよいわいナア、お廣どん。疾に逃げて行つたわいナア。

ひろ　エヽまあ悔しいことをした。オヤ〳〵、どさくさ紛れに扇の錢も拂はずに行きをつたわいナア〳〵。

この　アヽ、もうよいわいなあ。今のやうな惡い奴には掛り合はぬがよい。わしは納戸に取散らして置いた仕事をして來る間、皆もよう精出して下され。今に旦那殿も戻りやるであらう。サア、娘も一緒に奥へおぢや。

桂子　イエ、私や後からまゐりまする。

この　そんなら皆の衆、店を氣を附けて下さんせや。

と唄になり、女房奥へはひる、桂子後を見送りこなしあつて。

桂子　先刻にから、あの小萩さんが見えぬが、奥に何を何うしてゐるのぢやぞいナア。

ひろ　ホンニ、お氣に入りの小萩さん、ちよつと呼んで上げえせう。

皆々　小萩さん〱。（トロ々に呼ぶ。此時奥にて。）

敦盛　ハイ〱、唯今それへ參りまするわいナア。

ト是にて、合方きつぱりとなり、暖簾口より小萩實は敦盛羽二重振袖娘のこしらへにて出る。皆々是れを見て。

皆々　ソレ、小萩さんぢや〱。

〇　小萩さんは仕合せ者、あの桂子樣のきつい御贔屓。

敦盛　アレ、またいろ〱な事を言うて、嬲つておくれでないわいナア。

桂子　皆がその樣に云ふと、わしや恥しいわいナア。

〇　モシ桂子樣。お前さま先刻にから人形を持つて遊んでゐたけれど、誰も相手になつてくれる人がなかつたわいナア。

敦盛　それはよう一人で遊んでお出でなされましたナア。
桂子　ハイ小萩さん、お前によう似た人形を持つて、相手にしてゐたのでござんすわいナア。
△　ヨウ〳〵、人形と遊んでさま〳〵。
桂子　アレ、あのやうに言つて爆てるわいナア。
敦盛　イエモウ、そりやその筈、桂子さんが私をば、小萩どうせい斯うせいと言うて下さんすりやよいけれど、小萩さん〳〵と言はるゝのが術なうて〳〵ならぬわいナア。
桂子　ナンノマア、父さんがいつぞや一緒に、連れて戻らしやんしたお前、どうして私がそのやうに言はれるもので、ナア皆さん。
○　そりやもう、桂子さんの言はしやんす通り、友達のやうにして遊んだ仲、コレ小萩さん、お前もこゝへはひりなさんせいナア。
敦盛　ハイ〳〵、私もはひりませうが、さうして何をして遊ぶのでござんす。
桂子　サア、この人形を男にして遊ぶわいナア。
□　そんなら是れからお雛様のやうな、女夫事して遊んではどうでござんす。
皆々　コリヤよからうわいナア。（ト合方になり。）

桂子　そんならこの人形は女子、小萩さんお前男にならしやんせ。

敦盛　私が男になれば、どうしますえ。

桂子　この人形がお前に惚れるといナア。

敦盛　エ、その人形が惚れたとかえ。

△　アノナ、この人形がお前に惚れたのは、昨日や今日の事ではないといナア。

敦盛　ア、モシ、その人形は女子ではござんせぬかいナア。

ひろ　オ、こりや可笑しいわいナア。女子が女子に惚れるとは、肝腎の時はどうなるであらうナア。

○　それ〳〵、どこやら拍子の抜けたものでござんすナア。

桂子　イエ、人形ぢやと言うて惚れまいものか。小萩さんの面差が、平家方の御一門も多い中、經盛様の御公達、敦盛様に似たとは愚か生寫し、元この桂子が御奉公を申してゐた時から、世にも是れ程あでやかな殿御もあるものか。女子に生れた名聞に、一夜なりともお情受ければ、その儘死すとも果報者。いつそ打明け此事を、文の玉章に認めて、召物の袂と袴のくゝりへ、そつと結んだ心の丈、どうぞお知らせ申したさ、今日か明日かと思ふうち都を落ちさせたまひし故、思ひに痛む折も折、その小萩さんが目許なら姿なら正眞の敦盛様と言うても、微塵も違は

ぬお顔、父さんに叱られても、お前方に笑はれても、言はねばならぬ、どうぞ一夜の添臥を、枕並べて給るやう、お前方へも頼むわいナア。

ト恥かしさうに顔をかくして思入。

敦盛　ほんにまあ最前から、人形の事と思うたら、何ぢやゝら誠色々な、そんな事は私やきつい嫌ひでござんすわいナア。

ひろ　なんぼ嫌ひでも、桂子さんの折角の志し、こりや私らが媒人とやらぢやわいナア。

敦盛　なんぼさう言はしやんしても、女子同志の轉び寢は興のさめたもの、どうぞ仕様はござんせぬか。

桂子　それでも私が言ふ事を、聞いて下さんせぬと、死ぬるぞえ。

敦盛　これは又迷惑な、お許しなされて下さりませ。

ト小萩奥へ行かうとするのを、皆々引留め

○　サア〳〵小萩様、御返事をせねば私らが、こゝでこそぐるぞえ。

桂子　どうぞ願ひを叶へて下されませ。

敦盛　それぢやと言うて。

△　ハテ、私らが呑込んだ程に、色よい返事をしたがよいわいナア。

敦盛　そのやうな無理ばつかりおつしやると、奥へまゐりますぞえ。

□　私らがさうさゝぬわいナア。

ト留める、皆々ごつちやになり、駒鳥の合方にて、奥より女房おこの出來り、この中へはひる。

桂子　ヤア、お前は母さん。

この　コリヤマア娘どうしたものぢや。お前方も店先で騒がしい。チト嗜んだがよい。

皆々　ハアイ。（ト是にて皆々下にゐて、合方になり）

この　コレ娘、お前方も附いてぢやによつて、話して聞かせますが、アノ小萩殿は、連合上總殿の姪御、チト譯あつて故郷より、この間つれ戻り、店の仕事を見習はせ、お前方と同じやうに、折手やら客分やら。此後共に氣を附けてやつて下され。それにつけても、コレ娘、此中から此間が、見て見ぬ振りしてゐれば、年端も行かいでいやらしい。アノ小萩殿を附けつ廻しつしやる様子。女子なればこそよけれ、若し眞の敦盛様なら、どうしようと思やるぞ。都の内は鎌倉勢が一條より九條、膳所醍醐、小栗栖、宇治、八幡、小原、賤原、芹生の里、源氏の武士のゐぬ所もなし、若しや洩れ聞え、如何なる大變にならうも知れぬ。「深山木にその梢とは見えざり

し、「櫻は花にあらはれにけり」と、詠じ給ひし頼政の歌の心と同じ事。例へば敦盛公の兒櫻は、其方の色香にあらはれにけり。昨日まで烏帽子の折樣末廣の折樣まで、平家を學びし人心、榮華も夜の一睡の夢、我夫大掾上總まで、代々平家の御恩を受け、お情厚き餘りに其方をばお宮仕へ、都落ちのお供を願ひし時も、女子なればとお暇下され、その上此の六波羅の築地の内に、住居せよと下し給はる、思へば冥加恐ろしい。せめて御恩を忘れぬため、侍部屋を取繕ひ、町家の店を拵へて、此處に住むのも朝夕に、昔の跡を思ひ出の、御恩を忘れぬ夫の心、サ、その親の心を知らず、敦盛に似た折子の小萩、長居させて、どんな憂目を見せうも知れぬ。此後小萩殿の傍へでも寄ると、この母が合點せぬぞや。

敦盛　アヽ、モシお袋さま。私の事なら、桂子樣を、そのやうにおつしやらずとも宜しうございまする。今のは冗談でございまするがナ。

ト呑込ませる、桂子俯向いてゐる。

○　アレ、あのやうにあやまつておいでなさるもの。モウ御料簡なされてお上げなされませ。

この　オヽ、得心が行たら、諄うは言ひませぬ。

ひろ　モウシ／＼桂子樣、あの通りお袋樣の御機嫌がなほりました。又そのやうに執拗うお言ひなさ

ると、いつもの蟲が起りますぞえ。

桂子　そんなら、もう母さんが、お叱りなされぬかや。

△　なんの、お袋樣の御機嫌は疾に直つてをりますわいナア。

桂子　そんなら小萩さん、お前も一緒に。

ト小萩の手を取らうとする。

この　あれほど言ふのに、小萩殿に。（ト中を隔てゝ宥める。）

桂子　アレ、堪忍したと言はしやんしたぢやないかいナア。

トつんとする。唄になり、桂子腹を立て奥へはひる。小萩も氣の毒なる思入。女房小萩へ思入あつて氣を替て、ツイと奥へはひる、皆々附添ひてはひる。時の鐘鳴る。上手の淨瑠璃臺出語りの知せあつて、

へ浮世を拂ふ風の傳手、はからず手に入る靑葉の笛、望み叶へば又一つ、胸に曇りを分け兼ねる、思ひは千々に扇屋上總、立歸る我家の軒、

ト此淨瑠璃の内、花道より上總初羽織、宿役人〇△□三人附添ひ出來り、花道に留り、

宿〇　上總殿や、そんならいよ／＼此方が、右大辨重虎樣の御前で受合つた通り、娘を差上さつしや

るに、違ひあるまいの。

上總　何が扨、高位の御前で畏まると受合ひましたからは、町人ながらも平家盛んの時より、一刀帶劍を許されし此上總、何しに虛言ござりませう。

三人　そんなら、よいかや。

上總　ハテ、ようなうてどう致しませう。

○　それ聞いて、おれも皆の衆も、よからうわいの。

△　御宿老樣さへよければ、私共は惡からうやうはござりませぬ。

□　さうではないて、若し上總殿に異變があると、宿老樣は言ふに及ばず、町内の難儀でござる。

○　いかさまそれはそんなものぢや。コレ上總殿や、念を入れるではないが、此方重虎樣から娘の替りに貰はしやつた杖の。

上總　エ。

△　モシ〳〵、御宿老樣、杖ではござらぬわえ。

□　それ〳〵、笛でござりませう〳〵。

○　オヽ笛々。その笛を貰うて、その替りに娘を上げるのであつたわい。娘に替へても笛が欲しい

と言ふは、今夜から按摩けんぴきにでも、出る積りと見えるの。

上總　へゝゝゝ、イヤ左樣なことではござらぬが、有難い都の地に産れました一徳は、遊藝亂舞を聞取り學問、それで名高い笛を申し受けまして、その替りには娘を差上げまするも、高位の重虎樣より後の榮えを樂しみに、いはゞ慾の世界でござります。

○　オヽ、さうとも〱、兎角慾を知らねば身が立たぬぢや。そこでおれも大の慾張り、宿老と名主の掛持ぢや。

△　イヤ、その慾張り話より、おいら達も家へ早く歸つて、生業を慾張らうではござらぬか。

□　サア、名主樣參りませう。

上總　まあ宅迄ゐらつしやつて、粗茶でも一つ差上げませう。

○　イヤモウ、それには及ばぬ。上總殿や、娘を差上げる日を前披露に、おれが方へ言つて寄越さつしやれ。さうすれば乘物でも挾み箱でも、一と肩づゝやつて、祝儀を占めたうござる。

△　そんな口なら、おいらも半口乘りたい。

□　サア〱、御宿老樣參りませう。

○　そんなら上總殿、きつと日柄を知らせる事を、忘れさつしやるなヤ。

〽皆わや〳〵と立歸る。

ト皆々引返してはひる。上總後を見送り。

〽上總は後を見送りて。

上總　モシ〳〵、お靜かにござりませ。有難や〳〵。日頃の願ひ心の誠、神明佛陀の利益にて、手に入つたる、この、

ト言はうとして、あたりへこなし、舞臺へつか〳〵と來り、

今戻つたぞや〳〵。

ト云ひながら内へはひる。奥よりおこの、桂子皆々出來り、

この　アイ〳〵。オヽ上總殿、今お歸りでござりましたか。

皆々　旦那樣、お歸りなされませ。

上總　オヽ誰も〳〵、よう精が出ます、大儀々々。

この　イヤ、早速聞きませうは、今日御役所よりの御用向にて、お出でなされましたが、いかなる事かと、大抵案じたことではござりませぬ。

上總　イヤ〳〵、格別案じたほどもなく、此身に取つては家の面目、めでたい吉左右、悦べ〳〵。

この　シテ、そのお悦びとおつしやるその譯は。

上總　外の事でもない、娘の桂子、右大辨重虎公よりの御所望にて、入内させよとの事、なんと目出度い事ではないか。

この　そんなら、あの、娘を大内へ。

上總　入内とは冥加なし、なんと娘、嬉しいか／＼。

桂子　私やそのやうな事は、厭でござんす。

上總　これはまた異な事を申す。氏なうして玉の輿とは、其方が事だわやい。

桂子　イヽエ、私やどのやうな事があらうとも、小萩さんより。

この　コリヤ娘、先刻も言ふ通り、そりや何事。

上總　マア／＼それは後での事。今日は娘の出世の祝ひ、ゆる／＼皆も一緒に、奥で遊びやつたがよい。

この　サア／＼娘、皆の衆も今日は店を捨て、奥へ行つて氣儘に遊びやいなう。

桂子　どのやうに言はしやんしても、私や嫁入りすることは。

この　ハテマア、呑込んでゐるほどに、わしと一緒に。

桂子　ア、モシ、今に行くわいナア。

ト唄になり、皆々奥へはひる。上總殘りこなしあつて、

上總　ヤレ〳〵、案じたよりも安々と、手に入つたる此笛、早うお渡し申したいもの。それにつけても娘桂子、敦盛樣と氣取りしやら、附けつ廻しつ戀慕の樣子。事顯はれては今迄盡す忠義も徒ごと。唯何事も事ないうちに、此笛をお渡し申し、此處を一先づお落し申すが君の御爲。この間にどうぞ、お目に掛りたいものぢやナア。

へ案じ入つたる折も折、何心なく小萩は立出で、

ト敦盛奥より出て來る。上總こなしあつて、

敦盛　旦那樣、唯今お歸りでござりますか。

上總　オヽ小萩、丁度よい所へよくこそ〳〵。ちよつと此處へ。

敦盛　イエ、貴下のお歸りの遲いので、お袋樣がきついお案じ、あなたのお歸りの樣子、ちよとお知らせ申して。

へ立たんとするを、

上總　アヽコレ、小萩待ちや。

敦盛　何ぞ御用でござりますか。

上總　オヽ、折入つて言はねばならぬ事がある。（ト思入あつて。）先づあれへ。

小萩これにて不審の思入あつて、しづ／＼二重の上手へ住ひ、

ヘ敬ひかしづき奉れば、女姿もその儘に、たちまち優美の御粧ひ。

上總門口をあけ外を見廻し、又門口をしめ、敦盛を敬ひ、下手に平伏なす、この内敦盛は二重よき所へ住ひ、

忍ぶうちこそ折手の小萩、斯く顯はるゝ上からは、桓武天皇の苗裔太政大臣清盛樣の御公達、無官の太夫敦盛公、われ／＼は下司恐れあり。ハヽ、ハツ。

ヘ低頭平身なしければ、敦盛心しとやかに、

と下手にて平伏し、笛の入りし合方になり、

敦盛　思ひ掛けなき上總が振舞。深く包めと言含めし、我名をあらはに言ふといひ、仔細ありげなこの體よ。

上總　その御不審は御尤も、仔細具に申し上げん。今日右大辨の重虎殿、朝廷よりの公用なりと某を招き、所の者共附添ひ出で、兼て上總より願ひ置きたる青葉の笛、下しおかれんその代り、

不束なる娘、重虎の傍近くかしづかせよとの詞、殊には懇望の笛まで下されんこと有難く〳〵と、飽くまでも阿り、娘一人捨てたる故、御懇望の笛手に入るも上總が寸志、イザお受取り遊ばされませう。

ヘ笛取出し差上ぐれば、御手に受けて御悦喜あり、

ト上總懐より笛を出して渡す。敦盛袱紗より出し、よく〳〵見る事あつて押戴き、

敦盛　エヽ有難や、日頃の望み一時に晴るゝ我が思ひ。抑笛と申するは、父經盛この道の達人にて、宋朝へ貢を贈り、寒竹の兩節を一節取り、天台の座主前の妙觀僧正七日の間加持し給ひ、秘藏して得られたる笛ぞかし。假令平家の運命盡き、馬蹄に屍は曝すとも、この笛と諸共に、浮世の音色とゞめんと、思ひ込みしに計らずも重虎が手に渡りしが、再びわが手に戻りし悦び。これと言ふも汝が働き、ホヽウ出かしたり、過分なるぞよ。

ヘ御悦びは限りなし。

上總　コハ冥加なき御詞、親より受けたる御恩の一毛。エヽ有難う存じまする。

敦盛　この上時日過さば上への恐れ、一門の思はく。唯今打立ち須磨の浦へ赴くべし。思へば〳〵年頃日頃御恩を蒙り、祿を食る者までも、そら目遣ひの世の中に、いかなれば汝等親子、われを

いたはる志し、生を隔つとも忘れまじ。とても傾く平家の運命、思ひ出せし折々には我亡き跡を弔ひくれよ。ア、是非もなき世の盛衰ぢやナア。

ト兩人愁ひのこなし。

上總　え丶腑甲斐なき思召し、禍福は車の輪の如く一旦傾く御運なりとも、御先代小松殿の御仁惠、など王法なからんや。しかし世上には事を窺ふ無道人も候へば、白晝に御下向は恐れあり。殊更御出陣の餞別に、奉らんと、打ちかけし陰陽和合の軍扇、暮方までには出來すべし。歸り扇、君は御運を開き扇、つひには元の御身柄と、世擧つて仰ぎ奉るやう、扇は上總が清めをかけん。その內君には陛娘に、御門出の御用意、仰せ付けられ然るべし。

敦盛　いしくも知らせし詞かな。志しに愛で、軍扇打立てんその間、都の名殘りも少時の內。

上總　お心は急ぐとも、黄昏時こそ程よけれ。モシ。

〽さゝやき頷く折柄に、何心なく下女は立出で、

ト以前のおひろ、奥より出來り、

ひろ　オヽ小萩さん、最前からお前を尋ねてをつた。お孃さんが何やら、お前に用があると言うておいでなさる。サア、ちよつと奥へござんせいナア。

敦盛　オヽ誰かと思うたらおひろさん、びつくりしたわいナア。
上總　用があるなら、靜かに言やれ。
ひろ　デモお孃さんが、急に用があるといふ程に、早うござんせいナア。
　　　ト手を取る。
上總　アヽコレ〳〵小萩、まあ用があるなら、奥へ行て來い。必らず今言うた事忘れまいぞ。
敦盛　サア、そりや呑込んでをります。
ひろ　サア、早うお出でなさんせいナア。
　　　へとつかはとして走り行く、（トおひろは奥へ走り入る。）
敦盛　しからば上總。
上總　敦盛卿、イヤ、須磨へ海路のそれまでは。
敦盛　やつぱり元の。
上總　姪の小萩。
敦盛　旦那樣。
上總　何かは奥で。

敦盛　後程お目に懸りませう。

　〽納戸へこそは立ちて行く。跡見送りて主人の上總。

上總　ア、心の迷ひか御姿も窶れ給ひしいたはしさ。イヤ〳〵、嘆くまい〳〵。大事の君の門出に涙は不吉。イザ、扇屋すきはいに召扇打つてまゐらせん。

　〽いざ〳〵扇まゐらせんと、折臺にさしかゝる。不淨を淸むる流儀の仕立、少時時をぞ移しける。

ト二重へ上り、折臺を引き寄せ、扇を折りに掛り、切火など打ちかける事。

〽深編笠に世を忍ぶ、浪人めけども男盛り、尾羽も枯らさぬ田舍侍、

ト誂へ嵌入りの鳴物になり、花道より熊谷の次郎直實、野袴ぶつさきいかもの造りの大小、大業なる深編笠を冠り、悠々と出來り、花道に止り、笠の内より向うを見て、思入あつて舞臺へ來り、

直實　承り及びたる、扇折りの名譽たる、上總と申すは此家でおりやるか。扇所望いたしたい。

　〽扇所望と店先に、むんづと腰を掛けにける。主人心得仕事押しやり、煙草盆提げ立向ひ、

上總　これは〳〵、數ならぬ上總が店、名を目印に御所望とは、近頃以て面目の仕合せ、シテ、お好

みなさる扇は、御所望にてお誂へになりますか。先づ、常の骨、丸骨、或ひは繁骨、小骨、小紋形、薄鼡、糸縫ひ、からくり扇、舞扇、お持料かなお土産かな、お望みがござりますれば、暫時の間に折り立て上げます。先づ〳〵、此方へお上りなされませ。コレ、誰ぞお茶上げぬかい。

〽誰ぞお茶持てともてなしける。

ト此内上總扇の箱を持出し、いろ〳〵見せる事。直實も見る事あつて、

直實　扇の品々承はる、何も所望におりなし。拙者が望むは、あれ、あの折掛けし陣扇、上京いたさば調へ吳れよと、國許の相朋輩に賴まれし故、ドレ、お見しやれ。

〽手に取上げて打眺め、

ト直實扇臺の扇を指さす。上總取つて直實に見せる事。

八本十六に付き陰陽の骨數よし。朱の丸、金の丸、銀の丸、夕紅是れもよし、心覺えの圖に合ひ申す。先づこのやうなる陰陽の陣扇、上京致さば調へくれよと、國元の朋友よりかまへて是を賴まれし、歸國の日數も明々後日、幸ひ見かけたる此扇、御亭主これを所望申す。

〽所望申すと取納むれば、

上總　ア、モウシ、この扇はさる方よりお誂へ、今日暮方迄に渡す筈、寸分違はぬやう明日中に折立て、明々後日御歸國の間に合すべし。その扇は此方へお戻し下さりませ。

ト上總取りに掛る。

直實　イヤ、是非とも所望申す。

上總　それは迷惑、その扇はどうあつても私へ。

直實　イヽヤ所望いたす。

上總　イヽヤ、その儀は。

直實　是非とも身共が。

〽辭退所望の折こそあれ、奥より洩れ來る笛の聲、敦盛卿の吹かせ給ふ音色に疑ひなし、上總驚き、いかゞはせんと躊躇ふ内、一入餘韻嫋々として、或ひは亂るゝ青柳の靡くが如く、下垂るが如く、買手は小首打傾け、

ト此内兩人扇を押合ひゐる。奥にて笛の音聞える。上總びつくりなし、心遣ひのこなし。いろ〳〵紛らかさんとするを、直實は笛の音に心を附け、手に持ちし扇を落し、

直實　民家に似合はぬ樂器の調べ。

上總　エ。

直實　さすがは都。ハテ、奥床しい。

〽心耳を澄ます有様に、又も胸をぞ痛めける。京極通りの方よりして、屈強の荒武者、土砂を蹴たてゝ駈け來り、上總の表を押取卷き、

と此内直實笛に聞きとれる。ドン〳〵になり、花道より姉輪の平次、半素袍の露を取り、股立太刀を佩き、武者草鞋のこしらへ。幕明の忠太、柿の鉢卷、四天りゝしきなり、四天の捕手大勢附添ひ出來り、舞臺へ來てよき所に留り、

平次　ヤア〳〵上總、汝が家に平家の落人、無官の太夫敦盛をかくまひおく由確かに聞き、姉輪の平次召捕らんため向うたり。かくしおいたる敦盛を渡せ〳〵。

〽渡せ〳〵と呼はれば、家内は笛の音も止まり、色を失ひ見えければ、買手も立つに立端なく、

直實　氣の毒ながら身に掛る、事にはあらねど京家の武士の、仕置を見るも後學のため、落間の内、これなる店先借用申す。

〽煙草盆提げ控へゐる。

ト直實は上の方緣端に腰を掛け、窺ひゐる。上總思入あって、前へ出で、

上總　これは思ひもよらぬ御艱難、御覽の通り間所もなき藁家の住居、何故左樣な貴人をば、かくまひおくべき謂なし。職人なれば賴まれづくと申す義理もなし。定めし人の言違ひか、門違ひと申すやうな。

ト言はうとする上總に、かぶせかけて、

平次　ヤア拔かすまい。おのれ最前重虎公へ參上し、敦盛が笛申し給はり、歸りし事をお知らせあるとその儘組子組下手分けさせ、此家の四方押取卷かせ窺ふ所、今吹いた笛の音は、敦盛ならでは都の内に誰かあらんや。殊に身共が間者の者、姿をやつし入り込ませ、日毎に樣子を窺ふとは、知るまい〱。

忠太　かねてお旦那の仰せに依り、法印と姿をやつし、目を付けおいた此家の內、ちつとは面に見知りもあらう。御下知を受けて、日毎に入込む木原忠太、何と膽が潰れたか。

平次　重虎公の仰せは、藏人殿の上意も同然、者共家內を吟味いたせ。

〽下知に從ひ組子の大勢、これはと驚く上總をば、姉輪の平次が引摺ゑたり。

ト忠太手に捕手ばら〱と與へ踏込み、上總入らんとするをば、平次立ちふさがりきつと引留める。

〽程もあらせず組子の銘々、立戻つて太息つき、

忠太　土藏天井二階の隅々尋ぬれど、敦盛らしいものは、一向に相見えませぬ。

平次　ヤア敦盛とて飯喰ふ人間、天井戸棚に何しにをらうぞ。匿ひおく上からは、家内の奴らも同腹中、女に化けてをらうも知れず、殊に敦盛は公卿上臈、扇折りに姿を變へさせおかんは必定。一々此處に呼出せ、姉輪が自身に詮議をする。

上總　ハヽヽヽ。下使の女を呼出すは、何よりも易いこと。然し敦盛を詮議めさるゝ姉輪殿、肝腎の敦盛を御存じあるか。

平次　ム、、サ、その敦盛の面體は、仔細あつて身共は存ぜぬ。

上總　平家の公達多き中、わけて名高き無官の太夫、それを御存じないとある姉輪殿のお役目は、近頃以て御粗相千萬。

平次　イヤ此奴小癪な事を尋ねる奴。兄は權の左衛門といふ小身にて吾等は部屋住み。それで何奴か面も見知らぬ。追附け重虎公のお取立にて、大名になるこの姉輪、こまごと吐かさず女ばら、きり〱此處へ引摺り出せ。

忠太　心得ました。（ト奥へ行からとする。）

上總　イヤ、御威光を借る迄もなく、いはゞ拙者が城廓同然、お望みなれば呼出して、一々御覽に入れん。女子共々々お叱りはない程に、此處へ出い〳〵、サア〳〵、早く來いよ〳〵。

〽早う是れへと呼出され、こは〳〵出づる扇折、

ト床打合せ、下座の鼓の入りたる鳴物になり、暖簾口より以前の○△□おひろの扇折り出て來る。平次それと目配せする。忠太先へ○を捕へ前へ引き出す。平次とつくりと見て、

平次　コリヤ女、その方は何國の者だ。

○　ハイ、私は祇園町の近所、母さんの名はおかし、私はしのぶと申しますわいなア。

平次　待て〳〵、祇園町のおやまとナ。ム、、扨は賣色の者か。賣子と聞いては、身共チト頼もしいわえ。

忠太　旦那、お好きでござりまするナ。

平次　ドレ身共が、乳を改めてやらう。（ト懐へ手を入れる。）

○　ア、モシ。（ト避けんとするを忠太押へてある。）

平次　ア、いゝ乳だ。此奴女に相違ない。許してやれ〳〵。サア、次の女、それへ出い〳〵。

△　ハイ〳〵。私の在所は八瀬の里。軒の、、、おやまと申します。黑木黑もじ御用なら、何時なりとも

お召しなされて下さりませ。

平次　此奴も惡くない面付、どれ〱、乳を〱。

ト無理に懐へ手を入れる。

忠太　これはしたり、旦那も氣の多い。殘りの女は私が改めてやりませう。サア〱こゝに來い來い。

ト又口の懐へ手を入れる。

オヽ、よい乳だ〱。コレ、そちは幾歳だ。

口　ハイ、私は十三ぢやわいナア。

忠太　十三ならばお月樣。十四はお半で十五はお七。十六島田が出て招く〱。

トこれに浮かれてちよと踊る。

平次　莫迦を盡すな、白痴者め。サア、三人ともに疑ひ晴れた。

ひろ　サアこれからは私の番、包むとすれど顯るゝ、女姿にやつせども、我こそ太夫敦盛なり。情を

かけよ武士共。

〽たちまち優美の御姿、

ト是にて平次忠太びつくり、互ひに身構へ、おひろに目を付け見て、兩人吹き出し、

平次　へ、ハ、、、、、。どこをおのれが敦盛、正眞の飯盛め、エ、うぬは詮議するに及ばぬ、勝手次第に失せをらう。(ト蹴飛ばす。)

ひろ　オ、あらけない、私も女子、捨てたものではない、生れは京の兩替町、父さんは福徳屋福右衛門とて、人も知つたる銀持ち。母は二分のお金というて、通用のよいお方。それが嘘なら秤にかけ、目力をかけて御覧じませ。

平次　エ、、まだ／＼ぬかすか。此奴すつこんでをらう。

ひろ　ハイ／＼。

〽叱り飛ばせば、

オ、こはや。こんな所にゐたならば、五月人形見るやうに、荒熊眼で睨められ、酷い目にあふであろ。皆さん、お出で。

〽打連れてこそ駈けり行く。

トおひろ先きに女形皆々花道へ走りはひる。

〽跡に姉輪は指折り數へて、

平次　あればかりではない、まだ外に、見目よき女がある筈。

上總　イヤ、その女は、即ち私が娘。

平次　ヤア、どこに〳〵。娘の外に五人の折人がある事を、見抜いておいたのだ。

忠太　左樣々々、ソレ、引摺り出して參りませう。

〽いで引立てんと駈込む忠太。上總はびつくり身をあせり、逃がす道なき詮議の手詰、猶豫の内に、小萩が小腕引立て〳〵出來り、

ト奥バタ〳〵になり、忠太敦盛を引立て出來り。

御覽なされ、姉輪樣、敦盛らしい女が面付、鐵漿黑々と薄化粧。

平次　オ、サ、折手に似合はぬ手足の尋常、いで、懷を吟味せん。

ト懷へ手を入れようとする。敦盛これを止めて、

敦盛　ア、少時待つてたべ。連添ふ夫のその外に、この肌はいらはせぬ。どうぞお許し下さりませ。

平次　ヤアならぬ〳〵隱すほど猶怪しい。

〽と差込むに身悶えあせれども、鷲に捕られし雛鳥の、既に危く見えにけり、

ところへ以前の侍ツツと寄り、差込む腕引き離し、骨も拉げと摑み飛ばし

張り飛ばし、小腕取つてもんどり打たせ、小萩を囲うて立つたゝは、心地よくこそ見えにけり。

ト敦盛あせるを平次無理に手を入れようとする。上總は拳を握り控へる。熊谷直實此體を見て、ツヽと立ち、平次の手を捻ち上げ、忠太かゝるを跳ね上げる、忠太氣絶して倒れる。平次又かゝるを見事に投返し。

〽砂に塗れし姉輪の平次、はふ／＼に起上り、

平次　此奴が／＼慮外千萬。詮議ある女を庇ひ、名ある侍を酷い目に何故逢はした。慮外の緩怠無禮者めが。

〽そり打ちて詰寄れば、びくともせずぢろりと見やり、

直實　されば、名ある侍の道に背きし曲事と、後日に指さゝれんも笑止故、お爲と存じて引分けたり。

平次　そりや何故／＼。その故聞かう、それぬかせ。

直實　ハテ、下さげに物を言ふ侍、御存じなくばよく聞かれよ。抑々今日の詮議、無官の太夫敦盛の事ならずや。それを差置き、由なき外の女の改め。あれ、御覽ぜよ。あの女、獨り身にあら

ぬ印、眉墨に鐵漿附けたるは主ある女。きやつ敦盛の僞り者に極まれば、手柄にもなるべきが、さもない時には主ある女の肌に手を入れ、その身を穢し不義者なりと呼ばるゝとも、惡名は拔けまい〳〵。承れば追付け大名にならるゝとやら、とりわけ大事の御身の上、侍の廉たる事は心を附けるがよい筈と引分けしは、その許の御爲を思ふが故。一禮もあるべきにお咎めは、イヤハヤ、迷惑千萬。

〽迷惑至極とあざわらへば、

平次　ヤアぬかすまい。そりや咎められての言拔けと申すもの。人の非を糺すほどの武士道を磨くからは、冠つた笠も取り、かツつくばひて家名も名乘り、その譯を何故言はぬ。イヤサ、その蓮ツ葉は何故取らぬ。取つて平次に、挨拶さつしやれ。

直實　イヤ〳〵それは料簡違ひ。この男が腰を屈むるは、日本に唯四人、先づ第一に神明、二に佛陀、三に天子、四には御主君御兄弟、その外は蝿蟲共、腰を屈めよう要もない。笠も取らず名も明かさぬが、畢竟そちが爲なれども、所望とあれば何より易し、我名を聞いて、膽玉のでんぐり返らぬ用心しろ、坂東にさるものありとは、豫て音にも聞きつらん。斯く言ふは、武藏の國の住人、四の黨の旗頭、熊谷の次郎直實、眞近く寄つて面相を、拜み奉れエ、。

ト笠ニ取り平次を睨みつける。平次ぎよつとして、呆氣にとられ、尻へにどうとなる。

〽聞くに姉輪も荒鷹取られ、恐れわなゝくばかりなり。

上總　そんなら貴方が、熊谷樣。

〽ハッと上總はとつおいつ、一つのがれて又一つ、胸を痛むるばかりなり。姉輪は俄に追從笑ひ、

平次　ム、ハ、、、、。これは〳〵。聞及びし熊谷殿。拙者は平家の武士故、一向御面體は存ぜぬ。失禮の段御免下されい。サ、この上は敦盛公が詮議をなされい。但し一門の在所知るゝとも見許せと、鎌倉殿の御諚ばし候か。手ぬるし〳〵。

〽理窟張れば、につこと笑ひ、

直實　イヤ〳〵見許せとの仰せもなく、又扇屋まで詮議せよとの御諚も聞かず。なれども、京家の武士に手ぬるしと言はるゝも恥かし。敦盛が實否、これにて糺し見せ申さん。

平次　コリヤ面白い、見物いたさう。

〽見物せんと、浄玻璃の眼を光らす手詰の詮議、臆する色なく上總に向ひ、

直實　コリヤ上總、これへ出い。イヤサ、つッと出い。

へ言ふにおづ〳〵前へ出て、

上總　ヘイ、御用でございますか。

直實　平家繁昌の折節は、幾何の恩も着つらん。その冥加を思ひ、扇の折手などゝ僞り隱し置くとも、この熊谷が一日睨まば、なに安穩に助けおくべきか。その女に用はなし、外に匿しおいた敦盛があらう。これへ出せ。コリヤ町人とて狼狽るな、居らば居る、居ずば居ぬと眞直に申せ。

へ餘所に知らせて言ひければ、

上總　ハツ、是非もなし、遁るゝ迄はと匿し忍ばせ參らせしが、この上は力なし、いかにも敦盛卿、かくまひ奉つてござりまする。

平次　扨こそ〳〵、それ程敦盛をかくまひながら、知らぬなどゝ陳じたる野太い奴。サア敦盛がゐるならば、括し上げて出すか。但しは踏込み、首を突かうか。

直實　コリヤ姉輪殿、御尤も、しかし平氏は桓武の御裔、搔首捻首も恐れあり、御最期すゝめ奉り、御尋常の覺悟こそ願はしけれ。その方すゝめ奉れ、ナ、疑ひ晴れた、小萩とやら、この所に用はない。連れて立て〳〵。

上總　委細畏り奉る。是非もなき御運の末、御最期すゝめ奉らん。サ、小萩、お許しが出たか

らは、そなたは奥へ。

〽奥へ来やれと手を取りて、泣く〳〵立ちて入りにける。姉輪は何がなあけ眼

熊谷は奥の様子を知らせまじと、姉輪に向ひ、

ト上總小萩の手を取り、奥へはひる、直實思入あつて、

直實　イヤナニ姉輪殿、最前承れば、右大辨重虎とやらの仰せは、鎌倉殿の掟も同然とは珍說、其に鎌倉殿の御耳に入れおくべし、その仔細篤りと承りたい。

〽言はれて大きに敗亡し、

平次　これは〳〵東國の武家方は物覺えのよい。それは無根でござる。扇屋めを嚇しのため、ふと口へ出放題。御上聞に達しては、大迷惑に存ずる。この事は沙汰なしに、眞平々々

〽手を操り詫る折柄に、一間の内に太刀の音、

ト此内一間にてエイと太刀音、障子へ血煙立つこと。

上總　エイ。

平次　討つたナ。

直實　喧しい。靜かに召されい。

〽結目の紐に御首を押包み、涙と共に上總の大將直實の前に差置き、

ト上總奥より袖に包みし首を持ち出て兩人の前へ置き、

上總　御詮議嚴しく是非に及ばず、御首級たまはりし上からは、改めて御受取りなされい。

直實　イヤ先づ此方より。

平次　然らばお先きへ。

〽然らばと押開き、首取上げ、

オヽ出かいた〱。この褒美には匿しおいたる科許しくれる。熊谷さらば。

〽言ひ捨てゝ驅け出す。

直實　その手を食ふべき直實ならず。拔驅せうとは野太い事を。

〽引戻して首捥ぎ取り、姉輪が横腰二三間投飛ばされ、死に入る許りの痛さを怺へ、むく〱と起上り、

平次　敦盛が首見屆けた。直實、後日の返報待つてをれ。侍共、皆來やれ。

ト行からとして腰の痛むこなし、

アイタヽヽヽ。

忠太　これは御主人、如何なされた。

平次　イヤ、唯今腰の番をしたゝかに。

忠太　お打ちなされましたか。

平次　イヤ何と者共、コリヤ直實に打ちつけられたのではない。態と身共が打つたのだわえ。

忠太　へヽ左樣かナ、さうは見えませなんだ。

平次　イヤ身共が勝手につけて投げられたのだ。日本一の剛の者、姉輪の平次を投げたなどゝ、後日に必ず廣言吐くな。アイタヽヽヽ。勝手に寄つて投げられたのだ。痛むばかりで、イヤ、何んともない。

〽力んで見ても腰がたく／＼、ちんば引き／＼

覺えてゐろよ。

〽はう／＼逃げて立歸る。

ト平次首を捨置き花道へ皆々附添ひはひる。

〽一間の內より母おこの、死骸を抱て轉び出で、

ト女房おこの桂子の死骸を抱へ、出來り、

このヤレ、いとしや娘梢た、死顏なりとも唯一目、どうぞ見せて下されや。如何なる過去の約束で、思ひがけないこの災難。そなたを先立てゝ此內が、老年寄つて何樂しみ、一緒に死にたい、死にたいわいなう。

〽首に取付き泣沈む。上總は驚き引放し、

上總　物に狂ふ白痴者め。熊谷樣もお聞きの前、その首は敦盛殿、娘などゝは粗相千萬。血迷うて何抜かすぞ。

〽目顏で知らせば、次郎直實。

直實　コリヤ〳〵上總、この首は汝が娘、小萩を敦盛といふことは、一目見るより早や知つたり、最前は姉輪が聞く前、その向にも濟まされず、匿し置かば出せと言ひし我詞、のがれぬ所と心を定め、代りに娘を斬つたるよナ。近附でもなき由緣でもなき汝と熊谷、殊に平家の公達たる、敦盛が事に容赦せう筈はなけれど、熊谷と平家の出合は戰場と思ふが故、隅々まで眼は配らず、町人も弓取も人の恩を蒙り情を受けるほど、悲しきものゝ上はなし。豫ての恩を思ひ出に平家の衰へ、敦盛にかへて一人の娘を身代りにし、親子の緣に引かされぬ、汝等が心の內の不便さに、何も見ず知らず聞かぬ顏。一間の內にて、休息いたすその間、親々よりその首に、回向いたす

ものもあらん。見せて名殘りを惜しませよ。

〽情をかさに熊谷が、障子引立て入る跡を、母のおこのは伏拜み／＼、

と直實上手屋體の内へはひる。

この　エヽ、有難い熊谷樣のお情、モシ小萩樣、死顏なりと、せめて一目見てやつて下さりませ。

〽いふに小萩は轉び出で、死骸に取付き、

ト奥より敦盛出て死骸に取付く、

敦盛　思ひ掛けないこの最期、疾にも斯くと知るならば、人に歎きはかけまじに不便な最期、元はといへば我身から、可愛い事をしたわいナア。

〽御身を悔む御涙。

この　オヽ、その御詞があの娘の菩提。御恩のためとは言ひながら、夢にもそれと知るならば、暇乞もせうものを、嘸や心が惹かされて、死にともなかつたであらうもの。

〽殘す詞のあるならば、

どうぞ聞かして下さりませ。

上總　熊谷樣のお詞、身代りに立てよとの情の御仰せ、お受けを申し立つたれども、誰を斯うとの心當

りもなく、娘に斯うと談合すれば、逃げるまでもなく私を直に御身代りと、首差し延べて健氣な覺悟、涙一滴こぼしもせず。

〽娘が最期に恥入つて、鬼ならぬ氣を鬼となし、

サア最期は今ぞ、言ひ置く事思ひ置く事あるならば、語り殘せと言ひ聞かすれば、父様の前恥しいことながら、昨日にも斯うと知るならば、敦盛様に一と夜さのお情受け、假りにも女夫というての上で、最期を遂げることとなれば、賽の河原へ行くまいに、浮世の殘念これ一つと、言うたばかりで首差し延ばし、ぢつと覺悟のいぢらしさ。君のお頭髮に似せんものと、解き亂したる髮となし思ひ切り、首斬つてのけたわやい。

〽聞くほど母はせきあげて、

この　ナウ、可愛いやナウ。先刻私が叱つた時、何んにも言はず俯いて、恥しがつた面差が、まだこの顔にあるわいナア。かういふ事と知つたなら、見ぬ顔して叱りはせぬ。思へば〳〵可愛やナア。

〽魂魄この世にあるならば、

夢にでも今一度、物言うてたもいなう。

へ敢なき首を抱き悶え、歎けばいとゞ父親も、怺へし涙一時に、泣き叫ぶこそ
道理なり、敦盛殿御顏曇らせ、

敦盛　君が一日の情に妾が百歳の命を捨てるとは、枕を交せし上のこと、穗に顯はれて口說きしが、
明日をも知れぬ我命、この加茂川の流れを汲み、女夫の仲の杯せん、上總來れ。

へ加茂川さして、

ト床の送りになり、三人よろしく思入あつて、敦盛先に上總桂子の首を持ち、跡よりおこの附添ひ、皆々愁ひの思入にて奧へはひる、知らせにつき、淺黃幕を冠せると、どんちやん打込み、花道より堤の軍兵着込の上に上下脫ぎかけ、袴立にて、跡より鎧下の郎等四人、鞍置の黑馬を曳き、軍兵四人附添ひ、直に本舞臺へ來り、

軍次　先つ頃奢る平家を追討の院宣、賴朝公へたまはりしより、石橋山にて御旗を揚げ。

郎一　益々御勝利あるによつて、諸國の大名大半お味方。

郎二　さるによつて義經公を御大將として、われ〳〵が御主人熊谷次郎直實公、此度討手に登りし所。

郎三　今日我君直實公、お忍びにて御出でありしが、時刻をはかり乘馬を曳き、迎ひに來れとの仰せ

故。

郎四　われ〳〵お迎ひに參つたり、此旨心得られよ。

軍兵四人　畏まつてござりまする。

軍次　それについて、此度一の谷にて一戰あれば、高名手柄は各々仕勝ち、よく勵まれたがよくござる。

郎一　軍次殿の仰せの通り、戰は須磨と聞くからは、

郎二　定めし船戰のことならん。

郎三　われ〳〵も身を勵まし、

郎四　一功名仕らん。

軍次　然らば者共、早く參れ。

皆々　ハ、ア。

ト此人數皆々上手へはひる。道具出來次第、ドンチャン打上げ、淺黄幕を切つて落す。本舞臺奥深に五條の橋を眞正面に見せ、上下加茂川の流れ、正面京の町家の書割り、上手九尺の藁家三尺出はひり、繩暖簾をかけ、この下腰羽目付きの眞壁、竹格子の窓、上下とも植込にて見切り、松の釣枝、すべて扇屋勝手口の體よろしく、浪の音にて道具納まる。と床の淨瑠璃になる。

へ行く空の名にしおふ、爰は所も加茂川の、水の流れと人の身は、定めなき世ぞあはれなり。敦盛殿を御先に、上總夫婦もとも〳〵に、娘の首を搔抱き、しを〳〵と立出でゝ、

ト綱暖簾の内より、上總桂子の首を袱紗に包み持ち出る。敦盛やはり娘姿にて、跡より女房おこの硯箱を持ち出で三人愁ひの思入にて住ひ、こなしあつて、

へ涙ながらに敦盛卿われに代りて不便やと、桂子が首御手に取り、

へこれぞ女夫の證ぞと、有合ふ筆に墨含ませ、鐵漿になぞらへ白歯をば、黒々と染め給ひ、御涙を打拂ひ、

敦盛　未來は必らず、女夫ぞや。

ト敦盛桂子の口を明け、墨にて白歯を黒く染める事よろしくあつて、

コレ桂子殿、生半情あり顔せば、跡の歎きが不便さ故、態とつれなくもてなせしが、此世の縁は薄くとも、未來は一蓮托生にて、妻と定むる桂子殿、半座を分けて待ち給へ。

へ御身に迫る御涙。

上總　アレお妻、聞いたか。敦盛様の御臺様と定まるは、親にも勝つた娘の手柄。

こな　さうでござんす、生きて此世にゐるならば、嘸悦ぶでござんせう。その悦ぶ顔を見るやうで、

〽三人顔を見合はせて、一度にわつと聲を上げ、前後正體泣き沈む。かゝる歎きの時しもあれ、熊谷が郎黨堤の軍次、家來引き連れ歩み來て、

ト下手より、以前の軍次先に皆々出で、

軍次　ヤア／＼、此家の内に四の黨の旗頭、熊谷次郎直實公や在すらん。御大將には早や御出馬、君にも急ぎ御出馬あつて、然るべう存じまする。

〽と訴へれば、

直實　聞いた／＼。

〽時刻移ると次郎直實、悠然として立出づる。

ト縄暖簾の内より出て來り、上手床几にかゝり、

いしくも知らせし堤の軍次、スリヤ御大將には早や御出陣とナ。

軍次　それ故にこそ、軍次お迎ひに伺候いたしてござりまする。

直實　汝はこれより我に先立ち、直實程なく參上と、御大將に言上せよ、われは騎馬にて跡より行かん。急げ／＼。

〽諸軍を勵ます勇士の詞。

軍次　畏つて候。

〽ハッと答へて堤の軍次、醍醐の御陣へ引返す。

ト此内軍兵上手の柱へ馬を繋ぎ、ドンチヤンにて皆々下手へはひる。

〽敦盛卿はしとやかに、

敦盛　敵ながらもあつぱれ弓矢の聞えある、熊谷の次郎直實殿。こゝを助かり行先にて、名もなき武士の手にかゝり、死に恥を曝さんより、早く御身が手にかけて、高名手柄を顯はされよ。我こそ三位經盛の末子、無官の太夫敦盛なり。いざ首取れや、次郎直實。

〽暫し御眼を閉ぢて待ち給へば、熊谷は上總に向ひ、

直實　コリヤ上總、この女は狂氣ばしいたしたり、最前討ち奉りし敦盛の御首、熊谷確かに見屆けた。この女は攝州須磨が故郷とやら、こゝに置いては惡しかりなん。早く故郷へ、ナ、心得たるか。

〽仁義の詞に上總も悦び、

上總　コリヤ敦盛樣、ではない、桂子の小萩、これまでよう勤めて呉れた。その禮には此扇、そなたに遣ろほどに、これで出陣、イヤサ、何うなとせい。

〽口では言へど心では、唯今生の暇乞と、夫婦の歎き道理なり、敦盛殿扇を取り上げ、

ト敦盛扇を受取り

敦盛　ナニ熊谷殿、御所望ありし二本の扇、分けて一本進上は、又靡す扇の餞別、夫婦さらば。

〽さらば〳〵と出で給ふ。見遣る向うに直實が、駒の手綱と轡搔繰りしつかと捉へ、ひらりと乘る、敦盛見るより聲を揚げ、

ト此内敦盛花道へ行く。熊谷は舞臺にて、

敦盛　いかに、熊谷。

トノリになり、引拔き、緋縅しの鎧狩衣島田鬘、仕掛けにて振分け髮のなりになり、

この場はこの儘別るゝとも、一の谷の戰場にて、我こそ誠の敦盛と、名乘つて見事出合ひなば、助ける所存か、いかに〳〵。

へいかに〳〵と呼はつたり。

直實　健氣にも申されたり。（トノリになり、）此の加茂川の流れをば、須磨の浦になぞらへて。

へ一二の谷は東山。

今給はりし此陣扇、さつと開いて高聲に。

へ駒を早めて追駈け來り、

ヤア〳〵、それへ立たせ給ふは、平家の大將軍と見奉る。きたなうも敵に後を見せ給ふか。引返して勝負あれ。斯く申す某は、武藏の國の住人、四の黨の旗頭、熊谷の次郎丹次直實、返させたまへ。オ、イ〳〵。

へ扇を持つて呼はつたり。

ト引拔き、萠黄縅の鎧になり、軍扇を開き、馬上にて見得。

へ敵に聲を掛けられて、何の猶豫のあるべきぞと、敦盛跡へ引返し、

ト敦盛花道より、練り戻りにて本舞臺に來り、

敦盛　あつぱれ武者振り。（トノリなり、）

敵にとつて不足なき次郎直實。まツその如く呼び留めなば。

〽我は榮華の夢覺めて、都を跡に須磨明石、隊伍を亂さず驅け迎ひ、磯際近く濱邊にて再會のなし、

いと目覺ましき、勝負を遂げん。

直實　言ふにや及ぶ。

〽互ひにぢつとにじり寄り、朝日に輝く劍の稻妻。驅寄せ〳〵てう〳〵〳〵、蝶の羽返し諸鐙、駒の足並かつしかし。頭は須磨の浦風に、群れゐる千鳥むら千鳥。むら〳〵ぱつと引汐に。

ト兩人軍扇にて烈しき立廻りよろしくあつて見得。

互ひの勝負は。

敦盛　戰場。

兩人　戰場。

〽これぞ名譽の扇屋と、その名を世々に殘しけり。

敦盛　飛花落葉の世の中に、平家の末を見んよりも、せめて勇士の手に掛り、消えにし跡で一門の、
回向を頼む、夫婦のもの。

へとのたまふ詞は須磨寺の、古蹟に殘す稚兒櫻、しるしは今にかくれなき、

ト本釣鐘を打込む。

直實　早や入相の鐘の音も、諸行無常と告げ鳥の、塒にあらぬ津の國へ。

敦盛　この敦盛もこの儘に、若草山の砦まで、

上總　娘が菩提と諸共に、この身の上も出家して、こゝに止まる御影堂。

ト上總匕首にて髻を切る。

この　榮える秋と散る萩の、

敦盛　生死無常の出陣と、

直實　君命重き軍門へ、

敦盛　修羅の門出、

直實　弓矢取る身の、

皆々　成行ぢやナア。

直實　さらば。

兩人　さらば。

〽花の都を跡にして、駒を早めて、

〽かけりゆく。

ト段切にて、熊谷は花道よき所に馬上にてとまる。舞臺皆々よろしく思入。木につき、ドンチヤンカケリにてよろしく。

幕

幕引付けると、熊谷花道にてきつと見得、これより跳への賑やかな鳴物にて、よろしく花道の揚幕へはひる。跡シヤギリ。

扇屋熊谷（終り）

蓮生物語
れんじやうものがたり

庵室の場
歌舞妓
新十八番之内
蓮生物語

蓮生物語（歌舞伎新十八番の內――一幕）

黑谷庵室の場

（景事）　都名所（竹本連中 長唄連中）

役名　熊谷蓮生法師、尼妙林實ハ越中禪司妹柏木、黑木賣八瀨のお里、平山の武者所季重、尼妙春、尼眞如、時忠の息女玉織姫、主馬の判官盛久、牛飼大津の太郎作、軍兵大ぜい。

本舞臺三間の間、眞中に九尺の屋體。栗丸太の柱、竹緣附、正面に畫像の掛物、尤も中足にして緣先に筧の樋竹を掛け、上の方に櫻の立木、下の方同じく並木の樣に飾りつけ、枝垂れたる釣枝をおろし、爛漫と咲きたる景色、いつもの所に栗丸太の竹の簀戶突き上げてあり。後ろ打拔き一面に山の張物、所々に櫻の梢、上の方へ寄せて淨瑠璃出語り臺、爰に竹本連中居並び、幕の內より眞如、妙春そぎ尼にて腰衣、水晶の珠數を持ち立ちかゝりゐる。總て東山麓の體、寺鐘謠への合方にて幕あく。

眞如　ナント妙春さん見やしやんせ、お勤めが濟んだら、山々の櫻の花盛りも一目に見おろす此の景色、又來る春が待たるゝわいなあ。

妙春　眞如さんの言はしやんす通り、勤行怠りなき其の内にも、此の眺めを見ては、櫻が山か山が櫻かと詠みしもことわり、ほんに奥床しうござんすわいなア。

眞如　それ〳〵、居乍ら都の洛中洛外、中に一と際金閣寺、こちらに見えるが銀閣寺、池の番ひの鴛鴦まで、よう見ゆるわいなあ。

妙春　サア、それ故にこそ此の御庵も、尼君樣のお物好き、何んとよいお山ではござんせぬか。

眞如　成程、眺めが一と際增すわいなあ。

ト山おろしになり、下手より平山武者所季重、柿の頭巾袖無し羽織、三尺帶を締め草鞋にて柴を脊負ひ、斧をさし出來たり、

季重　ハイ〳〵御免なされませ、お二人樣、これにおいでゞござりましたか、仰せ付けられました奥山の、木を伐り拂ひ、焚火の枝を持つて參りました。サア〳〵これで焚く物は澤山でござりませう。

ト柴をおろして出す。

妙春　ホンニ大儀でござつた。今日はもうしまつたがよいわいなう。

季重　いえ、もう私も毎日々々此のお山の掃き掃除、枝をおろして薪にするやら、又ある時は豆腐取つて來い、酒屋へ走れと、何やかやの御用を致しまするも、此の御庵主樣の素性を。

兩人　ヤ。（ト思入。）

季重　さあ、醉の蹣蹣のと斷け廻りまするも、及ばずながらあなた方の、お手助けと存じまして。

眞如　親切なそなたの世話、尼君樣にもお悅び、茶でも呑んで、休んだがよいわいなあ。

季重　へい〳〵、有難うござりまする。

ト右の唄にて、花道より大津の太郎作、牛飼ひのなり、黑木賣り八瀨のお里、小原女のなりにて出て直に本舞臺へ來り、

太郎　ヘイ御免なされませ、大津の太郎作めと、

お里　八瀨のお里が、連れ立ちまして、

兩人　御機嫌伺ひに參りました。

眞如　誰かと思へば、いつもの牛飼ひ殿に、黑木賣り殿か。

妙春　ホンニ、ようござんした。サア〳〵爰へはひらんせ。

季重　おゝ、太郎作にお里坊か、さあ〳〵はひつた〳〵。

兩人　さやうなら、御免なされませ。（ト兩人簀戶の內へはひる。）

太郎　見ますれば、尼君樣がおいでなされませぬが、

お里　こりやあ、どつちへやらお出でなされましたのでござりますかえ。

眞如　さいなう、尼君樣は最前、佛間へお供へあそばすとて、

妙春　谷間の櫻を手折りに、お出でなされたが、もうお歸りであらうわいなア。

太郎　さういふことならお歸りを、お待ち申して居りませう。

季重　さうさつしやい〳〵、定めて尼君樣がこなた衆に、何んぞよい物を下さるのであらうぞや。

眞如　太郎作殿、おまへ牛は、どうしなさんしたえ。

太郎　へい、道草を喰つて歩きませぬから、向うの小坂の下へ繋いでおきました。

季重　私はもうお暇致しませう。明日上りませう。尼君樣へ宜しうお願ひ申上げまする。どうぞ此のまさかりをあしたまで、お預かりなされて下さりませ。

ト斧をよき所へ置く事。

どれ、お暇致しませうか。（ト山おろしにて季重下手へはいる。）

眞如　いやもう、いつも〳〵、氣の輕い木樵の親仁、嘸しんどい事であらうわいなア。

妙春　ヲヽ、その疲れで思ひ出した尼君樣には最前から、御佛前へお供へ遊ばすと、よい櫻の枝振を手折つて來るとて、お出でなされたが、山道で嘸かしお疲れ、もうお歸りに間もござんすまいわい

なあ。

眞如　ソレ〳〵、その内わたしらは、何かの拵へして。

妙春　それがようござんす。さあ、ござんせいなあ。

ト矢張り山おろし、笙の笛にて兩人奥へはひる。　ト笛のひしぎ次第の掛になり打ち上げる。此の時上の方出語り臺を打ちかへし、義太夫語ひがゝりになる。

へ爰は所も都にて〳〵、頃しも春の花盛り、吹雪と紛ふ白妙の、雲か花かと面白し、姿もいざと見え分かぬ。

ト語り切ると、櫻の花散る、小鼓のあしらひにて、花道より熊谷蓮生法師、墨衣、誂への笠を持ち、頭陀袋をかけたる好みのこしらへにて、珠數を持ち、白き脚絆草鞋にて出來り、花道中程に留まり、

熊谷　これは武藏の國の住人、熊谷の次郎直實にて候、花の盛りの若君を討ち奉り、無常を悟して念佛修業に出で、問はゞやと思ひ候。

へ宿りもがなと夕ばへに、吹き來る匂ひ櫻花、風に揉まれてひら〳〵と、散り來る花を打ち拂ひ〳〵、しばしの宿りと歩み來る。

ト此の文句にて、本舞臺へ宜しく來る事。

〽とある庵に立ちやすらひ、（ト外に佇み〕

イカニ、此の庵へ物申さん、案内頼み候。

〽言ふ聲の洩れ聞えてや、こなたの尼は打連れ立ちて一間を出で。

ト正面の屋體より、尼妙林實は越中禪司妹柏木出て、

妙林　音信もなき柴の戸へ、案内とは誰人にて候や。

〽切戸から見るかんばせの、色に愛持つ挨拶は、なぜに浮世を捨てたりし、こなたもそれと一揖し、

熊谷　愚僧は一生沙門の身、黒谷に師の坊のましませば、折々通ふ此の山道を、迷ふにてはあらねども、よき枝一つ折り取つて、師の坊の念誦佛に手向けたく、爰をや折らんかしこをと、盛りの花に戯れ參りし御門外、それも他生の縁ならめ、お茶の御無心、煙草の火御芳志にあづかりたし。

〽預かりたしと言ひければ、

妙林　コレハ／＼お安い事ながら、尼ばかり住む此の庵、お客僧とて老朽ちされしといふお年ではなし、人目はなけれど心の愼み、殊には主人の留守なれば、私共が計らひには。（ト思入。）

熊谷　成程尤もたれど、婦人と衾を同じうして、終夜亂れぬ柳下惠、俗の身でさへその道理、まし

て苦界の世界の事、休息ばかりは苦しかるまじと、言ふもこちらの押し手、教へを守るその詞、ア、感心々々。然らば外に願ひあり、此の花一枝佛に供へたし、主もなき花ならば心の儘に折りもせん、軒端に育つ此の花を折り取るは、とりもなほさず偸盗戒、破戒する故斷り申す、何卒一枝手折らさせたまへ。

〽とありければ、

ト櫻のもとへ行きかけるを、

妙林　ア、モシ、どう言へばから言ふと思召すも恥かしけれど、その花は殊更師の坊の秘藏にて、御佛前へさへもせず、今日も態々谷間の人見ぬ花を供へんとて、人には手もかけさせず、自身に疾うから行かれました。それ故その花は氣の毒ながら、

〽言ひ兼ねてさしうつ向けば、大きに不興し、

熊谷　フム、武士の身なればその分では差置き難し、なれども主人も弟子も花を惜しむ心は同じ、緣なき衆生は度し難し。

妙林　これより左へ八丁お出であらば、此の寺に續く櫻の林あり。それへお出でありて、お心任せに遊ばされませ。かならずその花、お斷り申しまする。

へ言ひ捨て、打ち連れ立ちて入りにける。（ト兩人屋臺の內へはひる。）
へ旅僧は何んと詞さへ、眺めに飽かぬ一木ぞと、迷うて外面に佇ずめり。
ト蓮生は下の方へ入隱れする。
へ心盡しの散る花や、立ち歸るあるじの尼、
ト此の淨瑠璃へ冠せ、誂への合方、笙の入りたる鳴物になり、花道より時忠の息女玉織姬、そぎ尼、振袖色衣のこしらへ、水晶の珠數を持ち、櫻の枝を手桶へ入れてこれを持ち、出來り、
へはたちに二つ三つたらで、事たる山も山住みの、嬉しき友と咲く花を、片手に提げて片手には、爪繰る珠數も水晶の、玉も及ばぬ顏かたち、嫁入り盛りを草の露、芝を傳うて立ち歸る。
ト此の文句の內、花道へよろしくとまり、
玉織　あゝ、咲いたる花かな、大原や、小鹽の櫻咲きぬらし、神代の松にかゝる白雲と、爲實ぬしも詠み給ひし、歌の心も思ひやる。かく咲く花を世の人の。
へさぞ面白う眺むらん。
自らが樂みは、たゞ佛の道、南無阿彌陀佛々々、ドレ此の一枝を早う佛前へ手向けませうか。

〽露も一つ涙諸共に、こなたの僧もそろ〳〵と、振り合ふ袖の片摺も、すり合ふ袂薄櫻、花を見捨てゝつか〳〵と、道ある方へ歩み行く、折節風に誘はれて、霞隠れや花曇り、更にそれとわからねど、急ぐ法師を呼び留め、

ト此の 句の内、薄く山おろしになり、玉織姫本舞臺へ、蓮生法師は花道の方へ行く。摺れ違って蓮生法師揚幕の傍迄行くを、玉織姫見て、

ナウ〳〵、それへ急がせ給ふは、御僧にておはさずや。ナウしばし待ちたまへ。花の吹雪に申す聲も聞えぬよナウ、しばしナウ〳〵。

〽しばしと聲かけられて振り返り、傍近く歩み寄り、

トこれにて熊谷蓮生よき處迄かへり來りて、

熊谷 しばしと呼留めめされしは、愚僧が事にて候や。

玉織 如何にも左様、何處のお方か存ぜねど、けふは殊更志した日に當りぬれば、御回向頼み申し度く、見苦しけれど此の庵へ、お出であつて御苦勞ながら。

熊谷 扨は主人の尼君にて候や。愚僧も思はず庵へ參りかゝり、休息の御無心申せしかど、主人の留守といひ女子ばかりと斷わられ、道を求めて立ち歸らんと存じ申して。

玉織　それは近頃お氣の毒、弟子僧とても女御前ばかり、さりながら皮こそ男をうなのへだてあれ、

熊谷　骨にはかはる人影もなし、悟れば女子も變生男子。

玉織　袖振り合ふも、他生の緣。

熊谷　一河の流れ。

玉織　一樹の蔭、

熊谷　佛の回向頼まれしも。

玉織　此の世ならぬ契りなり。サアサアこれへ。

熊谷　しからば。

玉織　かう、お出でなされませ。

　〽打ち連れ庵に入りにけり。（ト兩人内へはひる。）

今戻りましたぞや。

　〽そりやお歸りととりどりに、あわてふためき立ち出でゝ、

　ト奥より尼三 、太郎作お里出て來る。

妙林　尼君樣、只今お歸り、

兩人　なされましたか。

〽てんでにからげおろすやら、介抱おろかはなかりけり。

玉織　二人の衆、御同道の御珍客、お茶など早う。

兩人　かしこまりました。（ト合方、茶を汲み熊谷へ出し。）

妙春　美しい見事な花、ようお取り遊ばした。お客には、只今は思はぬ無禮、何事も主人の留守。心任せになりませぬ故、御免なされて、

妙春
眞如　下さりませ。（トこなし。）

熊谷　これは〱、痛み入りたる御挨拶。

玉織　五戒を保つ尼の住居、九獻のあらう筈はなけれど、何は無くとも、非時の用意しや。

兩人　かしこまりました。（ト立ちかゝる。）

熊谷　あいや、まだ欲しくはござらぬ。御回向致したその上で、御芳志に預かりたし。

玉織　まづ、ゆつくりと遊ばしませ。（ト此の内長押の長刀を見て、）

熊谷　恐 うござる。見ますれば長刀一振掛けられしは、故ある御方と存ずれど、御佛前はいづれでござるな。回向一念仕りたし。

〽問はれてこなたはおもはゆげ。

玉織　はい、佛間はあれにござりまする。

〽あれにとばかり後言ひさし、顔をそむける袖几帳、佛間に向ひ一心に、燒香散花怠らず、禮拜なして不審顔。（ト熊谷佛前に來て見て）

熊谷　佛前とあるからは、彌陀か釋迦かと思ひの外、美しき若衆の畫像といひ、香花手向けて回向めさるゝは、ムヽ、尼君の年の頃も花の盛り、春は彌生の雛祭り、琴よ笛よと氣さへ揉まるゝ最中、思ひ切つたる黑髮は、アヽ聞えた、拙僧も昔は阪東育ちの荒くれ武士、さやうな事はかツふつ不勝手、都の人のやさ風流、得道せられしその因緣、包まずとお話しあれ。我等も沙門に入りし昔物語、我が身の罪も亡ぼす爲、いづれも方へとお聞かせ申す。サヽ、ともぐにお勸め申して下されい。

〽すゝ勸めに尼君、赧む顔を上げ給ひ、

玉織　戀の色のと言ふ樣な、浮氣な事では候はねど、世を捨てし身も元はそれ故、客僧樣にも阪東武士とあるからは、いつ頃御出家なされましたぞ。

熊谷　如何にも、出家は壽永三年二月六日曉方、須磨の浦にて髻拂ひ、我も妻子を捨て坊主、

へ聞くより尼君不審顔、

玉織　テモ似た事もあればあるもの、わらはが飾り黒髪をおろせしも壽永三年如月六日、共に聞いた
る物語り。それ聞いた上自らも、詳しうお話し申しませう。

熊谷　ホヽヲ、物語るは安けれども、それも昔の涙の種、又は尼君のお話しを望むも出家のいらさる
事、それよりは此の庵より、一と目に見おろす名所古跡、所々の名を詳しく、語り給うたその
上にも、我も語りて申し聞かさん。ひらに〳〵尼御達、さゝお勸め下されよ。

へ勸めに傍から口々に、

妙林　モウシ尼君樣、宮樣のお頼みと申し、御馳走ながらあなたが一曲、琴はなくともそのまゝ
に、京の名所になぞらへて、爰からお教へ遊ばしませ。

玉織　それぢやというて、かツふつとらぬ調べごと、此の事ばかりは。

妙春　御辭退あるも無理ならねど、此場でひらに。

玉織　そんならお話し申した上、須磨のお話しも、

熊谷　何がさて、お聞かせ申すも安い事。

玉織　忘れ勝ちなる徒一興、傍から詞そへてたも。

眞如　かしこまりました。幸ひ二人の衆も朝夕目馴れし京の名所。

太郎　私共も及ばずながら。

お里　お許し受けて共々に、

妙林　さあ〳〵お話し〳〵。

三人　あそばしませ。

兩人　かしこまりました。サア〳〵早う遊ばしませ。

へ　と勸められ、流石いなとは岩間行く、水の流れの數々を、いざや告げんと立上り、

ト　これより玉織姫平舞臺へおり、中啓を持ち立上る。大小入り謠への義太夫三絃の合方になり、宜しく住ふ。

うたへ　まづ軒端より見渡せば、都の富士と人の山、申すも畏れ平氏の御先祖、わが立つ杣と申すとかや。（ト妙林前へ出て、）

淨へ　これ王城の鬼門にて、悪魔拂ひや浮雲を、拂へば月も朧ろにて、清水にうつ

る影見れば、

うたへ戀がつらいか世帯が憂きや、小原の賤が褄からげ、

ト眞田太郎作を連れて前へ突き出す。

淨へ七つ起して八瀬を出て、御所を目當の里訛り、

うたへ黑木めさぬか買はしやんせぬか、姫御前の身で恥かしい。

ト妙春お里を前へ出す。

淨へやがて大津の里育ち、雪の野道も日照りの山も、牛の手綱であゝしよんがえ。

トこれより太郎作、お里口說き模樣になる。

うたへさツてもこつちのひなものめ、村で一番一こくの、黑が上首尾忍ぶ夜は、

淨へ包む積りも、ほんに誓文、天神樣かけて、

うたへづツとこんどの先の世迄も、番ふ詞がまちがふならば、

淨へ木の根枕で長々と、

うた〽牛の講釋小しや、もの、こませた縁で、

淨〽あろ、

うた〽ぞいなあ。

ト市人よろしくあつて、又玉織姫前へ出て、

淨〽名も三吉野の花の香に、往來も通ふ逢坂の、

うた〽關の清水に加茂川や、たへず流るゝ瀧の水、漂ふ水の音羽山。

淨〽八重九重のいや高き、大内山の品定め、曲水の宴鷄合せ、

ト太郎作お里鷄合せのふりになる事。

うた〽今日を一世の晴勝負、互ひに勝をとり〳〵の、

淨〽追ひつ追はれつ飛び上り、翅亂れてひら〳〵ひらり、

うた〽花の吹雪と白砂を、蹴立て踏み立てくる〳〵〳〵、

淨〽互ひに勝負も附かざりしが、分ける團扇の風清く、（ト玉織姫出て、）

うた〽納りなびく君が代の、千代に八千代にさゞれ石と、祝ひ奏でゝ興じける。

ト よろしくふり納まる。

〽 客僧ほとんと興に入り、扇開いてあふぎ立つ、二人の賤は面はゆく、

太郎　お客様には御退屈、

お里　わたくしどもは此の儘に。

兩人　お暇と致しませう。

〽 所體繕ひとり〴〵に、又の御げんと夕まぐれ、笑顔こぼして走り行く。

ト 兩人こなしあつて、下手へはひる。

〽 尼君は會釋して、

玉織　拙なき尼がみやび事、お恥しう存じまする。

〽 おはもじやと笑はせ給ふ、

熊谷　いや、只今の面白さに、坊主天窓に汗が出ました。」

〽 扇面の風にその場を添にけり。

ト 此の時熊谷、思はず軍扇を出しあふぎ居る。

〽 尼君も興に入り、話しの内、客僧の扇にきつと眼を付け、

玉織　ハテ心得ぬ、御僧様の御持參なされし此の扇、テモ訝しや。（ト思入。）

熊谷　スリヤ此の扇が、お目に留りましたな。あゝこれが、ムヽ。

　ト思入あつてきつとなり、左の手にて見物に見せる。誂への合方、

玉織　曙に日の光りを現はし、夕紅の海に輝く月の光りにたとへ、三光七星の要めに留め、陰陽和合木火土金水を地紙に書き込みしは、大將の官位なくては所持しがたし、此の軍扇を近頃蔑め過ぎし御事ながら、御所持か但し御到來の品なるか、承りたう存じまする。

　へとのたまへば、旅僧は淚を浮め、（ト思入あつて）

熊谷　筐こそ今は仇なれ、その譬も今は此の身の憂きとなり、捨てもやらず手にも觸れずと、まつその事、忘れうとすれど情なや、諸國修行の我なれば、置所さへ此の通り、食する外は此の扇に、たゞ御經讀誦するばかり。

　へ悲歎の淚にくれにける。

玉織　夏果つる扇と秋の白露と、何れが先に起き伏しの宿、班女が閨にあらねども、其の扇を見るに付け、胸も張り割く此の身の悲しさ、お尋ね申すもおはもじながら、ありし昔の物語り、お聞かせなされて下さりませ。

熊谷　誠や悟り得たる僧の身で、愚癡の歎き、如何にもそのあらましを、さらば語り申すべし。

　　　ト手釣鐘にかゝり、

扨も過ぎにし壽永の春、驕る平家を亡ぼさんと、追手は攝津生田の森、搦手には一の谷、西の木戸へと押し寄せて、火花を散して攻め戰ふ、されども平家は大軍にて、荒手の軍勢入り亂れ、さのみも疲れ見えざるところへ、神變不思議の義經公、鐵拐が峰の絶頂より、平家の陣の眞中へ眞逆落しに責め入りたり、あわてふためく平家方、皆一船に飛乘り／＼、沖を遙かに落ちて行く。（トよろしく思入。）

玉織　ナウ其の中に緋縅しに、白母衣かけ、葦毛の駒にめされたる、若武者はおはさずや。

熊谷　さん候、夜戰の事なれば、物のあいろは分らねども、其の日の戰に天晴れよき大將に出合ひしが、運拙くして　某　に討たれ給ふ。最期に申し殘されしは、何卒此の二品かやう／＼の方迄送りくれよとの御頼み、我その御方を尋ね出し、御首の此の軍扇の渡さんと、念佛修行に出立つたり。

玉織　何んとおつしやる。スリヤその爲に諸國を尋ね。シテ、お頼まれなされしは男子か女子か。

熊谷　今は何をか包まん、時忠殿の息女玉織姫樣を。

玉織　エ、スリヤ我夫の敵、觀念しや。
　〽恨みの懷劍突ッかけ給ふを、身を躱してしつかと留め、
　　ト玉織姫隱し持つたる懷劍にて、突いてかゝるを、ちよつと立廻り、
熊谷　やあ、沙門の捉へ敵呼はり、身に取つて覺えない。
　〽と、引き据ゆれば、
妙林　ア、申し、聊爾めさるな。あなたは時忠公の御息女、玉織樣でござりまする。
熊谷　や。
　〽聞いてこれはとびつくりし、
　ナニ、玉織樣。イヤ疎に思ひがけなき、
　〽御對面と、飛退きうやまひ奉る。
玉織　えゝ恨めしい、熊谷の次郎直實、我夫の敵、
妙林　御主君の仇、サア尋常に。
女三人　覺悟しや。（ト三人立ちかゝり、身構へする。）

へ覺悟々々と詰めかくる。

熊谷　サヽ、そのお怒りは道理ながら、それがし君を討ちたるも、その次第あつての事、まづ〳〵御心を鎭められ、仔細を篤とお聞き下さるべし。

へ言へどもさらに聞き入れなく、

玉織　えゝ胴慾な直實、敦盛公を討つた上にて何言譯、わらはが御最期と聞いた時のその悲しさ、直に自害と思ひしが、女め共に諫められ、法正覺と名を改め、剃髮染衣は望みなけれど、我夫の敵次郎直實討つて恨みを晴らさんと、思ふに甲斐なき尼の身の、これぞ畜生三界に、同じ心と恥かしく、心で心諫めても、忘れ難なき夫の仇、けふ計らずもおことに出合ひ、何んとこれが忘られう。さあ、尋常に勝負しや。

へ勝負々々と詰めかくる。

熊谷　そのお怒りは道理ながら、それがし君を討つたるは、好きで討ちし事に非ず、亂軍の事なれば兩陣共に、よき大將を選み、君を討つにも討たるゝにも次第あり、先づ〳〵お聞き下さるべし。此の度の戰ひは私ならず天子の勅諚、平家の一門誰れ彼れと鎬を削り容赦はならず。ま

ま、姫君にも一と通り、申した上討たれ申さん。先づお下にござつて、お聞き下され。

ト宜しくあつて、

その日の戰のあらましと、敦盛公を討ちたる次第。

〽物語らんと座をかまへ、

扨も去る六日の夜、早や東雲と明くる頃、一二を爭ふ拔駈けの、平山熊谷討ち取れと、おめき立ちたる平家の軍勢、中に一際勝れし緋縅の、さしもの平山あしらひかね、濱邊をさして逃げ出す、逃ぐる敵に目なかけそ、熊谷これに扣へたり、おゝい〳〵と。

〽扇を持つて打招けば、駒の頭を立て直し、波の打際、

二打三打、いでや組まんと。

〽馬上ながらも、

むんづと組み、

〽兩馬が間にどうと落つ、

玉織　すりや、我君を組敷いてか。（トこなし。）

熊谷　さればサ、御顏の見奉れば、鐵漿黑々と細眉に、年はいざよふ若緑、定めて二親ましま

さん、そのお歎きは如何ばかりと、御親子の事思ひやり、上帶取つて引き立て、塵打ち拂ひ、餘り見る目のいたはしさに、落ちたまへと勸むれば、イヤ一旦敵に組み敷かれ、何面目に存へん、早首取れ熊谷。

玉織　と御意なされしか。スリヤお覺悟であつたよなあ。

熊谷　その仰せにいとど猶、淺間しきは武士の習ひと、太刀も拔きかねしが、逃げ去つたる平山が後の山より聲高く、熊谷こそ敦盛を組み敷きながら助けるは、二心に極つたりと呼ばゝる聲々、えゝ是非もなや、仰せ置かるゝ事あらば、言ひ傳へ參らせんと申し上げたれば、

〽御淚を浮め給ひ、

父は波濤へ赴き給ひ、心に掛かるは母人の御事、昨日にかはる雲井の空、定めなき世の中を如何過し行き給ふらん、未來の迷ひこれ一つ、又此の軍扇は。

ト以前の扇を出して、

いつぞや上總が宅にて討死すべき我命、かく戰場に赴くも汝が情け、その時與へし軍扇のかたし我手に入りし事知りつらめ、時忠公の姬玉織へ渡しくれよ、せめて心慰むため、くれ〴〵賴むの御一言こそ此の世の名殘り、是非に及ばず御首を、討ち奉つてござります。

玉織　えゝ。

〽討ち奉つるとばかりにて、珠数も亂るゝ水晶の、玉をあざむく涙なり。

ト よろしく玉織姫へ、以前の扇を渡す。

〽涙ながらに姫君は、筐の扇手に取り上げ、左程自らを思うてたまはる志し、何故都にはおはさぬぞ、一の谷へは向はれしぞ。勇んで門出のその時に、物の具取つて着せ參らせ、健氣に鎧ふ御姿。〽今見る樣とくどき立て、持ちたる扇のゆるぐのも、頷く樣に思はれて、門出の時に振り返り、につこと笑ひ給ひしが、〽あると思へば戀しさ悲しさ、聲さへ咽喉につまらせて、傍の見る目も哀れなり、ことわり至極と貰ひ泣き、脊なでさするばかりなり。

ト 皆々顏見合せ、愁ひのこなしよろしく。

熊谷　御歎きは道理ながら、我とてもまツその通り、首級をたまはりその場より、ふつ〳〵弓矢がいやになり、髻切りしも此の因縁。若君御最期にのたまふやう、玉織へ送りくれよとの御頼み、かしこまり奉ると受け合うて、姫君の御行方そこゝと尋ぬる內、此の黑谷にましますと、

風の噂が心の當て、さまよふ體にして此の庵室へ來て見れば、もしやそれかと思ふ内、あの畫像こそ疑ひもなき敦盛公、扨は玉織姫に疑ひなしと、勸めに從ひ坊主頭も打忘れ、若武者なんぞである樣に、聖の衣の物語、あら恥しや／＼一念彌陀佛、即滅無量罪、南無阿彌陀佛／＼。

〽たゞ彌陀佛と教化して、今ぞ迷ひの雲晴れて、

法の道、跡踏む甲斐はなけれども、我も八十路の春に逢ひぬる。ア、十六年は一昔、人間僅か五十年。あゝ夢だ夢だ。（ト思入。）

〽厚き懺悔に人々が、道理至極と取亂す、傍で見る目も哀れなり。

お筐の品お渡し申す上は、思ひ置くことさら／＼なし。平家數萬の大軍も物の數とは思はねど、ひなに育ちし御身にて、遁さぬやらぬと切りかけ給ふ、御歎きのいたはしさ、何んとこれが見捨てられうか、さゝ某を手にかけて、積る恨を晴らされよ。

〽端座合掌高らかに、念佛したる大道心、玉織姫も今更に、討つに討たれぬ義理と思ひ、今は仇なる筐かと、扇も肌へに抱き締め、聲をもあげず焦れ伏す、共に死したる心地をば、やう／＼と取り直し、

ト愁ひのこなし、玉織姫よろしくあつて、

玉織　あゝ歎くまい〳〵、此の上歎くは佛への障り、我夫覺悟の上なればさら〳〵殘る恨みはなし、今ぞ誠の尼道心、たゞ此の上は亡き後を、弔ふ頼みは蓮生殿。

妙林　そのお歎きは御道理ながら、花の盛りの黒髪を。

眞如　散り行く身にも無常の風。

妙春　果敢ない縁でござりましたなあ。

〽折から麓に人聲して、貝鐘太鼓打ち立て〳〵、さもすさまじく聞えけり。蓮生きつと打ち見やり、

ト此の時より遠寄せ險しく、熊谷思入あつて、

熊谷　ハテ、心得ぬ、此の山中に戰ひあらん筈はなし。察するところ源氏方、姫君これにおはす事、計り知つて討手に向ふと覺えたり。我これにある內は必ず救ひ參らせん、暫らく木蔭に忍んで、事の仔細を窺はん。

〽何かの手筈を言ひ含め、櫻の木蔭へ身を忍ぶ。

ト思入あつて下手櫻の立木の後ろへはひる事。

〽かゝるところへ平山の武者所季重、

トドン〳〵になり、花道より平山武者所季重、大小武者草鞋、りゝしき仰々しきこしらへにて先に立ち、後より陣笠の軍兵大勢附添ひ出て来り本舞臺へ来り、

〽軍兵引具し、眞先に大音聲、

季重　やあ〳〵玉織、汝これに隱れ忍ぶと見たる故に、木樵となつて入り込みしは、平山の武者所季重、平家の根を絶ち、枯らせよと鎌倉御所の嚴命、さあ陣所に健氣々々、と言ふは眞赤な僞り、誠ははなに焦れ人、連れ歸つて閨の伽、應か否かの返答は、サ、サ、どうだ。えゝ、ソレ者共合點か。

軍兵　心得ました。

ト皆々玉織を求ねるを、妙林よろしくあつて、

〽尼君圍うて身構へし、

妙林　ヤア、尾籠なる季重、敦盛公の御戀中と定まりある姫君、殊には貞節の御身にけがらはしい。女乍らも越中の前司が妹柏木、お傍に附き添ひあるからは、近寄つて怪我ばししやんな。

季重　ヤア、ちよこ才な女輩、きやつらに構はず、姫に疵附けぬ様、ソレ者共、討つて取れ。

軍兵　心得ました。

ト かゝる。立廻りあつて、此の内ドン〱はげしく、

〽畏まつたと立寄る家來、姫君圍うて銘〱に渡り合ひ、既に危ふきその所へ、櫻の元より現はれ出でし蓮生坊、

ト 熊谷蓮生坊つか〱と出來り、珠數にてあちこちあしらふを、季重かゝる思入。軍兵立ちかゝり早笛になり。

〽くわつと睨めたる眼の光り、あッとばかりに雜兵は、目眩いて倒れ伏す。

ト 軍兵皆々熊谷を見て、アッと言つて倒れる。

熊谷　やあ、きたなし季重、刄を爭ふ戰場では後を見せ、女を捕へいしくも腕立て、敦盛公を討たせしも元はうぬ故、熊谷は世を去つて今は我名も蓮生坊、當の敵の季重なら、姫君の御助太刀、要へうせたは天の加護、出家の蓮生再び刀は手に取らぬ、憎い葉武者の雜兵共、念佛稱へて往生しやれ。

〽あたりを睨んで立つたりける、（トきつと思入。）

季重　ヤア、熊谷坊主を討つて取れ。

軍兵　やらぬわ。（トかゝるをやはり早笛にて、ドン〳〵はげしく。）

〽畏まつたと無二無三、討つてかゝるをものともせず、傍の石の手水鉢、手輕に引提げ差上げて、

ト有り合ふ石の手水鉢を取つて、打つてかゝる。これにて季重逃げるを捕へ、

〽眞一文字に平山目當て、力まかせ腕まかせ、

ト右の石の手水鉢を打ち付ける。季重あつと言つて首は石に碎かれ、見事にかへつて倒れ伏す。

〽うんとのつけに死してけり。かゝる折しも向ふより、主馬の判官盛久、

ト大小つッかけになり、これへチャン〳〵を冠せ、花道より盛久大小にて、脛當草鞋、好みのこしらへにて出來り、直に舞臺へ來り、

盛久　珍らしや熊谷直實、これにおはする事、疾くより知つて、見參申さん。貴僧の姿替れども、武門の掟は違ふまじ、賴み入り度き一條あつて。

熊谷　オヽいしくも、盛久が賴みとは。

盛久　平家の御一門西海に沈みしと流布なせども、誠安德帝御安泰にてましませば、かくなり果てし御一門の方々とても、何れ定めぬ露の身の、それに引きかへ某の、所持して甲斐なき此の

寶劍、再び源家へ捧ぐる事も、帝王の御守護賴まんため、此の事よきに計らひめされよ、イザ。

ト盛久袋入りの寶劍を熊谷渡す。

熊谷　えゝ、有難や。これこそ誠の三種の内の神寶、蓮生よきに大將へ御披露なさん。

盛久　こは忝きその一言、猶も此の上敦盛卿の、菩提を賴むは法師のお役目。

妙林　玉織樣も、亡き我夫へ追善供養、

玉織　僅に殘る軍扇も、今は徒なれこれなくば、

盛久　出家堅固の尼法師。

玉織　敦盛公の後問はん。

眞如　御法の御供は、

妙春　われ〳〵三人、

盛久　昨日の敵に今日の味方、あら心安や、君の千年を得ん事は、これ偏に御寶の御威德、義經公にはスワ御大事と聞くならば。

ヘ御着當に連なつて、敵何萬騎あるとても、先づ一番に割つて入り、手に立つ

〽軍兵寄合ひ打ち合ひ追ひまくり、分捕り功名擧を現さん。

玉織　睹れ勇士の盛久殿、菩提を賴むは熊谷蓮生。

熊谷　諸國念佛修業なし、やがて古鄕へ一字を取建て、熊谷寺とも熊こく寺。

〽作ひ出る蓮生が、御堂を殘せし熊谷に、消金院とて今も猶、光り輝やく阿彌陀佛の御法の誓ひぞ有難さ。

ト此の時軍兵出て、掉に並んで取卷く、

軍兵　熊谷やらぬわ。

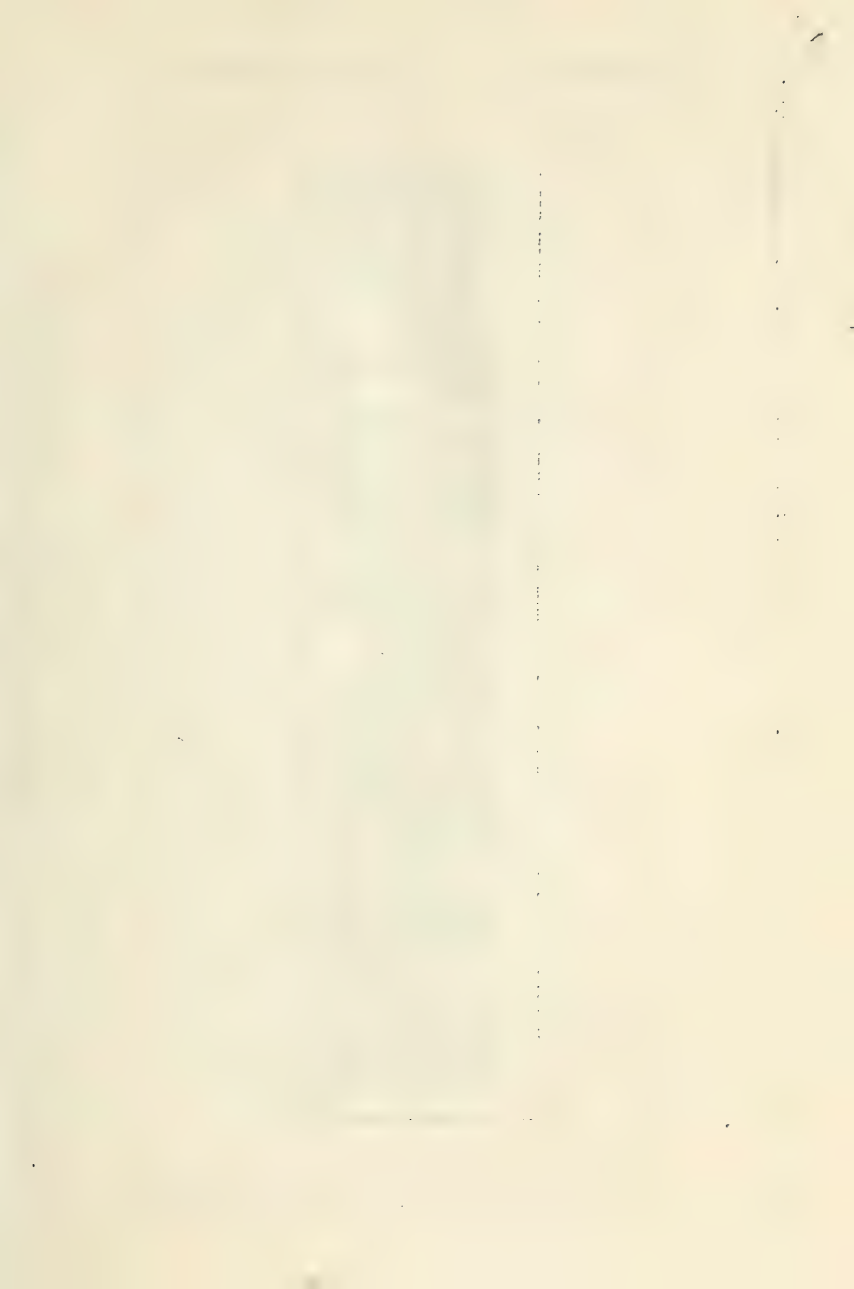
熊谷　何を。

盛久　どつこい。

ト皆々よろしく見得、達寄せカケリにて、皆々なみよく並び、よろしき見得にて、

幕

蓮生物語（終り）

卅三間堂棟由来
さんじふさんげんだう むなぎのゆらい

卅三間堂棟由來（柳のお柳――一幕）

序幕　平太郎住居の場

役名　樵夫孫作實ハ横曾根平太郎、猿辷りの岩松實ハ熊野夜叉丸、進の藏人時定、道心者欲念、庄屋杢作。在所婆おとら、平太郎母深雪、平太郎一子綠丸、平太郎女房お柳實ハ柳の精、其他。

本舞臺正面淺黃幕、日覆より松の釣枝、上下へ藪疊をおき、山颪にて幕あく。と、直ぐに下手より梓纏股引の侍先に、後より羽織袴の庄屋一人、他に△□○の百姓三人附添ひ出來り、侍は上手立身にて控へる、あと皆々下に居て。

庄屋　へイ〳〵、今日は都より火急の御用とござりまして、はる〴〵の所お役人樣には。

四人　御苦勞樣に存じまする。

侍　ヲヽ、大儀々々、シテ其方どもは、當所の村長か。

庄屋　へイ、私は當村の年寄りを勤めまする者でござりまする、折節庄屋杢作は他出致しました故。
△　火急の御用とござります故、幸ひ居合せ申したる。
□　年寄り組中申し合せ、まかり出ましてござりまする。
○　私共をお呼び出しなされました、御用の筋は。
庄屋　いかやうの儀でござりまするか。
四人　伺ひ上げまする。
侍　ヲヽいかにも申し付くる仔細、餘の儀にあらず、備前守忠盛公の執權進の藏人殿の仰せを受け、其方共へ申し渡す旨承はれ、この度白河法皇御頭痛の御惱みにより、かねて當山權現へお祈りある所、ある夜靈夢の御告に、この岩田川の谷陰に年經る柳の大木あり、その柳をもつて棟とし卅三間の御堂を都に建立あらば、御腦平癒とあるによつて、その柳を切り得んため、某が主人、進の藏人殿仰せを蒙むり當所へ下り、旅宿を構へ今明日の內にうがちとり、都へ送らん火急の御用。さるによつて、右の樹木のある場所へ案內しやれ。
庄屋　これは〳〵何事かと存じましたれば、成程お尋ねなされまするその柳は、この先の谷間にござります。

○　いかにも〳〵、幾尋とも知れぬ大きな柳、卅三間堂の棟には、十分ござりませう。

□　したがアノ柳は、何年ぼだいか古木にて、主があるの、化けるのと、申す噂がござります。

△　ヲヽそれ〳〵アノ木をお切りなさる事は、どうして〳〵、けふ明日にはなんとして、なんとして。

侍　ヲヽ、かねてその大木切り得がたしと云へども、誰あらう一天萬乘の君の御用、杣人夫日雇なんぞ一郡へ觸れをなし、手柄次第に人を寄せ集めよ、いか程なりとも價に構ふな、その棟梁たるべき者は、主人藏人殿より申し付くるとある。右の仰せ、心得られよ。

○　イヤモウ、天子樣の急御用、價に構はぬとある有難い仰せ、なんでもこれは所の賑ひ。

□　サア、かけ廻つて呼び集めよう、杣へはこなたよ。

△　人夫へはこの茂六が觸れませう。

庄屋　さやうなれば私は、旦那の案内。

三人　そんならこれからそれ〴〵へ。

侍　しかと申し渡せよ。

三人　かしこまりました。

侍　イザ案内。

庄屋　からござりませ。

ト山おろしになり・皆々上手へはひる。前の道具引いて取り、淺黃幕切つて落す。

本舞臺三間の間常足の二重、正面赤壁、暖簾口、佛檀、神棚に熊野牛王の掛物、前に神酒備へ物など並べ、上手折廻して中二階、下手在所壁、いつもの所に門口、二重よき所に圍爐裏、自在に鑵子をかけ、此傍に平太郎母深雪、着附、袖なし羽織、老女のこしらへにて圍爐裏にかゝり茶を汲み居る、百姓三人、在所婆おとら、田舍婆のこしらへ、銘々並びよく居ならび、三つ椀鍮皿など並べたる膳に向ひ、赤あづき飯に招かれたる體、いづれも飯を食ひしまひたる見得、捨ゼリフにてわや〳〵云うて在郷唄にて幕開く。

百一　ヤレ〳〵御馳走でござつた、皆の衆もたんのうであらうなう。

深雪　ハテ、さう云はずと孫の誕生日、心ばかりのこの祝ひ、なにがなくとも、精出してまゐつて下され。

とら　お袋樣の强ひぶりちやが、術ない程しめこんで。

百二　イヤモ、皆の衆も祝ひの馳走、遠慮なしに喰べましたわいの。

百三　さうでござるとも、時分がよいので、たんのうするほど食ひしめたわいの。

とら　わしやあんまりうまかつたによつて。

百一　食ひ過ぎて術ないか。

とら　コレ見なさんせ、身持ちのやうになつたわいの。

ト腹をたゝいて見せる。

百二　イヤモウ、馬鹿げた話だ。

皆々　ハヽヽヽ。（ト皆々笑ふ、百姓一こなしあつて、）

百一　時に婆さま、こなたもこの五六年前、獨り暮しで居られた時分、息子に貰やつた不孝者の岩松手に合はぬ奴故勘當しやつたが、聞きやア去年の春から又牢へはひつて居るとの噂。

百二　ヲヽ、それ〳〵それについて庄屋殿で話しがあつた、今度もし牢から出た時は引きとつて世話をする家もなし、無宿にしておけば盜みをして、やつぱり世話にかゝる程に、こなたが料簡してやつて下さりや、あいつの仕合せ。

百三　今では孫作殿といひお柳殿、こゝの家へ來やつてからは、よう揃うた孝行な夫婦達、殊に綠丸といふちつ子もでき、家内の人は揃うてあれど。

とら　とてもの事に若松が、牢から出たら馴染みがひに、世話してやつて下さるやう、こちの長三郎も云うてゐましたわいの。

百一　そこで今日はこゝの孫の誕生日、招ばれて來た目出たい次手に、この事を云はうと思うてぢや。コレ、婆樣。

皆々　どうぞ料簡してやつて、下さらぬかいの。

深雪　ヲヽそれはマア親切な、よう云うて下さつた。もとわしは若い時分に、京都のさるお屋敷へ腰元奉公に行た所が、御主人夫婦にお子がない故、ついわしにお子が出來たのが今の孫作、七ツの歳まで乳母同然に育てゝ居たれど、世間の思惑、奥樣への氣兼ねもあればこの熊野へ戻り、それからモウ女子の獨り暮し、末の世話にもならうとアノ岩松を養子に貰へど、手に合はぬ者。もてあまして親許へ返せば、生の親も見限つて七年あとに勘當、それから段々よい事に覺えず、どうで碌では得い果てまいと、ふツつり因を切つたが今では仕合せ、聞けば去年の春博奕とやらで長々の入牢、久離切つたりや難儀もかゝらず、早う死んでなとしまへかしと思うて居ります。その後今の孫作は仔細あつて夫婦諸共尋ねて來て五年この方の介抱、アノ極道にひきかへて又とない夫婦の孝心、それ故この裏手の連理の柳は世に珍らしい古木故御地頭

様からあアノ孫作に守り役を云ひ付けさつしやつて、所の衆にも孫作と立てらるゝその嬉しさ、その上孫の緑丸まで、婆さま婆さまと云うてたもる、モウこの上に、浮世に望みござらぬわいの。

百一　なるほど、さう聞けばこなたがみんな尤もぢや、まだ牢から出もせぬ岩松の詫してやるも、入らぬ世話かいの。

百二　イヤ又こゝへ戻つたら、村中もあんまりよい事もあるまいと、思うて居るて。

とら　それにひきかへこゝの御夫婦、三所権現様へ日参してござる故、皆が達者ぢや。

百三　牛王様をあのやうに、常に祭つてある故、何ぞの時には烏が知らすとやら。

百一　信心者ではあり、孝行ではあり、婆様こなたはきつい仕合せ者ぢや。

深雪　それで私も悦んでゐます。ほんにマア、嫁女も戻りさうなものぢやが。

とら　案じさんすな、モウ大かた戻つてゞござんせう。

百三　さうとも／＼、こちらもお柳様が戻らつしやるまで、茶でも飲んで。

百一　逢うてから行きませうわいの。

三人　さうしませうわいなあ。

ト皆々捨ゼリフよろしく、在郷唄になり、花道よりお柳、世話女房のこしらへにて綠丸の手をひき出る、少し後より慾念、道心者坊主のこしらへにて出て來り、

慾念　ヲヽイ〳〵、お內儀、こなたはマア早い足ぢやなう。

お柳　ヲヽ、あなたは慾念樣、どつちへお出でなされまする。

慾念　イヤ、どつちへも行かぬ、いつも明日が月並の逮夜なれど、ちと用がつかへて居るによつて、今日參らうと思うて、出かけて來たのぢや。

お柳　それはまあ、御苦勞樣でござりまする、御一緒に參りませうか。

綠丸　母樣、早う行きたいわいなう。

お柳　ヲヽさうであらう、草臥れたであらう、婆樣へ連れて行きませうぞや。

綠丸　嬉しい、嬉しい。

慾念　テモ、このぼんちめは賢いわ、よう步くなう。

お柳　ハイ大抵賢い事ぢやござりませぬ。サア、モウシ慾念樣。

慾念　お內儀、行かつしやれ。

お柳　サア、おぢや〳〵。

ト在郷唄になり、木挽臺へ歸り、連れだちて内へはひる、皆々見て、

皆々　ヲ、お内儀、戻らしやつたか。

お柳　ヲ、皆さん、ようお出でなされました。

深雪　ヲ、嫁女戻つてゐ、孫も戻つて來たかいなう。

お柳　ハイ、やう／＼今戻りましたわいな。

慾念　婆様、明日は參詣先が多いので、今日參りましたぞや。

深雪　ヲ、慾念様、それは御苦勞でござります。

お柳　モウシ母様、孫作殿は何處へ行かれましたぞえ。

深雪　さつきから、裏の柴屋に薪が散かつてあるによつて、片附けるとやら云うて。

お柳　裏に居られますか、私しや又何處ぞへ遊びに、行かしやんしたかと思うて。

慾念　戻るとモウ、お内儀のやきもちが始まつたわえ。

百一　イヤ、やきもちよりは誕生祝ひの小豆飯、澤山によばれました。

とら　お柳さんの留守の間に、どんと御馳走になりましたわいの。

百二　イヤモウ御馳走でござつた、御出家、こなたもよばれさつしやれ。

百三　ほんにお寺様。お先へよばれましたぞや。
お柳　ようマア揃うて來て下さんした、慾念様も誕生の赤の飯、あがつて下さりませ。
慾念　ヲヽそれは御馳走ぢやが、酒ならたはら勝手がよいが、さうらうまくもゆくまい。しかし誕生なら、精進物でもあるまいかの。
百一　さりとては、氣の輕いぼん様ぢや。
慾念　イヤ馳走するなら、俺に遠慮はいらぬ、今時の坊主に肴食はぬと色事知らぬはしゆんはづれぢや。
皆々　ハヽヽヽ。
百二　時においらは食べだちにしませうわいの。
皆々　おいらも一緒に行きませうわいの。
慾念　歸らつしやるなら、愚僧も一緒に參りませう。
ト立ち上るを、深雪とめて、
深雪　これ〳〵、こなたは非時にござんしたのぢやないか。
慾念　ほんになあ。皆が云ふので、肝腎の役目を失念いたしました。

お柳　皆さんもマア、ようござんすわいなあ。

百一　イヤ／＼、家には嬶が待つて居よう。

とら　わしも早う戻つて、夫の顔見てたのしまうわいの。

百三　お内儀、權現參りでようゐれたであらうなう。

百二　ハテサテ、隣りの貴をかぞへずと、サア／＼ござれ／＼。

ト在郷唄になり、此四人下手へはひる。お柳思入あつて。

お柳　ほんに在郷の衆といふものは、繕ひのないよいものぢやわいなあ。

深雪　慾念樣、お勤めをなされたら、非時は後で勝手に上りませ。

慾念　非時にありつくはよいが、念佛はいやなやつぢや、ちよつと小短くやつておきませう。

ト[illegible]中より衣を出しひつかける、此内納戸口より、孫作世話なりにて出て。

孫作　拝者人、女房ども、近所の衆はみな戻らしつたか。

深雪　ヲイなう、今皆戻られたわいなう。

お柳　わしは又緣丸を連れて、權現樣まで參つてきましたわいなあ。

孫作　ヲヽそれは大儀であつた。（ト慾念を見て）コリヤ、お寺樣もござつたか。

お柳　アイ今戻りがけに、一緒に連れだつて歸つたのぢやわいなあ。

ト此内慾念は佛壇に向ひ居て、

慾念　願以此功德發菩提心、なまいだ〱。

ト鉦を叩く、緑丸は此内居睡つてゐる、深雪思入あつて、

深雪　ヲ、緑が草臥れたと見えて、居睡つてゐるわいの。

お柳　ヲ、子供といふものは、氣さんじなもの。コレ、目を覺ましやいなう。

孫作　ハテモウ、寢さしておいてやりや、母者人もさぞお草臥れ、緑丸と一緒に、ちと奧でお休みなされませ。

深雪　ヲ、、さう致しませう、そなたも、ちと休息したがよい。ヲ、ドレ〱。

ト緑丸を抱き上げ、

ドレ、奧で寢さしてやりませう。

ト唄になり、深雪緑丸を抱き奧へはひる。あと在鄕めいたる合方になり、孫作煙草盆を持つてよき所に住ひ、

孫作　やれ〱、割りかけた薪を片付けたので、肩も腰もめり〱とするわい。

お柳　さうでござんせう、しつけぬ杣の荒仕事、さぞ草臥れさんすでござんせう。

ト茶を汲んで持つて行く、此内慾念は鉦を叩きながら、佛檀に向ひ居る。

コレ、こちの人、私しやお前に問ひたい事がござんす。

孫作　問ひたい事とは、何かいの。

お柳　昨日何處へ寄つてゐやしやんした。

孫作　市場の長三が噂の所で、談義話して居たがどうした。

お柳　談義話もすさまじい、よう聞いてゐますぞえ。

孫作　ヤイ／＼、悋氣なら晩に云へやい。

お柳　サア、そればかりぢやない、ぜんたいお前はアノ緑丸が眞實可愛うござんすか、但しまた憎いか、それが聞きたいわいなあ。

孫作　ハテ、さま／＼の事を云ひをるな、アノ子といふものは、可愛うなうてできるか、憎うてできるか。

お柳　サア、そりや可愛いによつてぢやわいなあ。

孫作　サア、その可愛いといふ工合があるによつて、でかしたアノ坊主めぢや、なりや可愛うなうて

どうするものか。

お柳　イエそりや嘘ぢや、今更云ふも繰言ながら忘れもせぬ六年前、本國に居たその時分、御臺様のお媒で父御のお座敷へ、養子嫁となつたその時の嬉しさ、そのうち兄さんの悪事の段々、お主の爲には替えられぬと、悪事に一味の者までその折りに打ち果せ、直ぐに切腹なさるゝ所を父御様がかはつて其場の御最期、紛失の寶詮議しいだすまで、幸ひ産の拙御もござれば、この熊野へ來てしつけぬ仙の生業、それなればこそ、今はから世間晴れての夫婦になつて下さんすものゝ、今にも寶が手に入つて元の身にならしやんしたら、謀叛人の妹ぢやによつて、連添うては人に後ろ指をさゝれるなどゝ、あの子やわしを捨ておき、行かしやんせうと思へば、行末が案じられるわいなあ。

孫作　エゝ愚痴な事を云ふものぢや、尤もそなたは兄弟の悪心故、連添うてはをらぬと思ふたれど、親人が最期の折にも、兄弟は他人の始まり、そなたを見捨てゝやつてくれるな、添ひとげいとある御遺言、それからこの熊野へ來てからモウ五年、拙者人にも孝行に仕へてたもる志し、子までなしたるそなたの事、なんの見捨てゝよいものか。

お柳　サア、さう云はんすれど、女子といふものは愚痴なもの。

ト よろしくこなし、此内惣念いろ／＼思入、こちらを見て念佛をうはの空に云うて居る。始終合方。

孫作　さりとては疑ぐり深い。イヤそれはさうと、都で手に入つた密書にて、紛失のかの一品の在所は知れど、この熊野とある故にこの五年が間より／＼に詮議なせども、手掛りにもありつかず、もしその品の知れぬ時は、いつまでも御主人様の明りはたゝず、親人からの名跡も一生埋れ木、この儘朽ちはてるかと思へば、おりや無念口惜しいわい。

お柳　ヲヽ道理でござんす、したが日頃から信心する、熊野權現樣の御利生で、かの一品も手に入りませう、その時こそは昔にかへる。

ト云ふと、孫作ふつと惣念を見てうちけし。

孫作　アヽコレ。（ト惣念の方を顏にて教へる。）

お柳　ホンニ、氣がつかなんだわいの。

孫作　何かにつけて日頃から、俺の難病、夜に入ると皆目見えぬ鳥目の惱み。女房ども、モウ何時であらうの。

お柳　アイ、今しがた道場で八ツの半鐘を打つたわいなあ。

孫作　モウ八ツを打つたか、いま二時がほんの極樂、暮るればそのまゝ呵責の責め。

ト こなし、お柳氣をかへ。

お柳　こちの人、この頃は目の養生ぢやというて、久しう話をせぬわいなあ。

ト こなし　孫作も氣をかへ。

孫作　サア、その話は毒ぢや。

お柳　イヽエ、久しう話しせぬも、結句毒ぢやわいなう。

孫作　いかさま、坊主めが邪魔になつて、思ふやうに話もならず。

お柳　この頃は養生で、いとゞ話はなほならず。

孫作　今夜はしつぽり。

お柳　話さんすか。

孫作　エヽ、思ひきつて。

お柳　こちの人。

孫作　サア、もそつと寄りやいの。

ト お柳の手を取る。慾念夢中になつて、

慾念　なまいだ〳〵。（ト無暗と鉦を叩く故、兩人驚いて飛びのき）

孫作　エヽ、びつくりさせやがつた。

慾念　びつくりどころか、大概は叩き鉦と念佛で紛らしては居たが、なんぼ女夫仲がよいとて、ちつと近所へ遠慮したがよいわい。

お柳　慾念さん、お前もお勤めがしまひなら、奥へ行て非時でも、上ればよかつたに。

慾念　エヽ上口どころか下口で氣がもめるわい。

孫作　それみたことか、これぢやによつて話は止さうといふのに。

お柳　それでも、話さにやならぬ事ぢやによつて。

慾念　ハテ、話なら寢てからさつしやれ。

ト此時下手より歩き出て。

歩き　孫作樣、お宅にござりまするか。

孫作　ヲヽ仲買の五兵衛殿、何の用ぢや。

歩き　イヤ外の用でもござりません、この間伐切り出した柴の注文、先が出來た故より分けて言はうと思うて、サア連立つてゆきませう。

孫作　ムウ、それぢやあ行つて、見分けねばなるまい。おりやちよつと行つて來ようわえ。

お柳　そんなら行つて、早う戻つて下さんせえ、又道寄りはならぬぞえ。
慾念　お内儀、案じられるの、こんな所へは得て代官所から、呼びに來るといふやつも久しいものぢやが、生業向の用とは、コリヤ新らしいわえ。
孫作　日頃お心安いお寺様、ゆつくりとお話しなされませ。
お柳　何はなけれど氣さんじ故、さし合しらぬも山家の一德。
慾念　女犯肉食ならずとも、非時の料理は食べて歸らう。
孫作　女房ども。
お柳　サア、お寺様。
慾念　お内儀ござれ。
歩き　參りませうか。
孫作　ドリヤ、行て來ませうか。

ト在鄕唄になり、孫作歩きを連れて下手へ、お柳は慾念を案内して奥へはひる。隣り柿の木の唄になり、花道より庄屋杢作、百姓四人に、後より猿辷りの岩松、牢出のなり、縄の帯月代を延ばしそろそろ附き出て、花道にてとまり。

杢作　さて皆の衆、今度禁廷様のお目出度で、この岩松も助かつて戻つたものゝ、引取る家がないので困つたものぢやわい。

百一　さればでござります、岩松はえらい仕合せ者ぢやが、ひよんな事は村中の者の又難儀になる事ぢやて。

百二　それ〳〵、今朝卯の刻から庄屋殿を始め、組中残らず代官所へお召しで、助けにくい奴なれど、今度はゆるすとの事。

百三　随分庄屋殿はじめ五人組にも、異見して世話してやれとの情の詞。

百四　門前でうつむけにして、薪雑木で二三百食はせとの過怠、何がてんでの恨みくらにすまい事か、儂も四五十くらはせた、びくともせぬ男ぢやわえ。

百二　とてもの事に、モウ二三年も、牢へはひつて居てくれゝばよいに。

杢作　ア、コレ〳〵、あんまり云ふまい、あとが恐いぞ。さて岩松よ、こゝにゐる皆の衆も、お上から云ひ付けられた事故、せう事なしやり所はなし、婆様が何と云ふかは知らぬが、わしを始め五人組が、詫をしてみるのぢや。これに懲りて今からは、きつと性根を直したがよいぞや。

岩松　アイ〳〵。

百一　コレ岩松、アイ〳〵とばかりでは分からぬわい、なんと長々と入牢で、ちつとは性根に。
皆々　こたへたかいの。
岩松　イヤモ、こたへた段かいの、これからモウ心を入れかへて、眞人間になりまする。
百二　それ聞いたら、婆樣も定めて、勘當はゆるすであらう。
岩松　ともかくも、よいやうに賴みます。
百三　わしらもそれに如在はない。
皆々　サア〳〵皆はひらつしやれ、はひらつしやれ。
　　ト門口を開け家へはひり。
杢作　婆樣は家に居やしやるか、婆樣々々。
皆々　サア岩松、家へはひらんかえ。
岩松　久しく戻らないので、どうやら間が惡いやうだ、皆さん賴みますぞ。
皆々　ハテ、呑みこんでゐるわいの。（ト此内納戸口より深雪出て）
深雪　ヲヽお庄屋樣、ようお出でなされました。
　　ト此内岩松門口の軒の際に、指をくはへ立つて居る、深雪これを見て。

見れば、皆さんもお揃ひで、勘當した悪者を連立つておいでなされたは、又譫言でござりまするか。

本作　サア、取合へぬは合點ぢやが、もと岩松の親といふは、こなさんが恩義を受けたとやら、その縁で世話してやらしやつたが、アノ通りの悪黨者、去年の春から長らく牢へはひつて居るうちに、手ひどい目に逢うて、それから性根を入れかへたとの譫言、連れて行かうにも實親の家は死絶えて、今では親類と云へば貴様、こなたより外はない、そこで定めて迷惑にもあらうが、わし等の顔に免じて、どうぞま一度料簡して、世話してやつて下されいなう。

深雪　それはマア、どなたもお揃ひで、御親切の段はわかつてはござりまするが、何遍云うても同じ事、とんと捨ておいて下さりませ。

本作　サ、、一通りはさうでありさうな事ぢやが、今度はよく〳〵懲りたと見えて、牢の中に居る折から、三所權現様を信仰して、

百一　今迄の心を入れかへませうと、誓言立をしたら、その利生でやら今度のおめでた。

百二　お上の御慈悲で命助かり、その上お庄屋殿をはじめ、五人組のわしらへまで。

百四　隨分世話してやれと、代官所での云付けぢやや、どうぞ料簡してやつて下され。

杢作　コリャ岩松よ、早うこゝへ來て。

皆々　あやまれ〱。

ト皆々寄つて突出す、岩松しを〱とかしこまり、手をつかへ。

岩松　母者人、今まではいかい苦勞をかけました　モウ〱今度といふ今度は、懲り〱しました。
どうぞ料簡して下さりませ。

と涙聲にて、目をすり〱辭儀をして言ふ。

深雪　たとひどなたの御挨拶でも、再びよせ付けうとは思はねども、性根さへ直つたら、子供のうちから育てた事、すてゝおく氣はない。いよ〱性根を入れかへるか、イヤお庄屋始め皆さんの御挨拶といひ、心さへ直つたら、親に代つて勘當はゆるしてやります。

皆々　それは忝い。

杢作　コリャ岩松よ、悦こんだがよいぞよ、勘當はゆるしてやるとよ。

岩松　アイ〱。

杢作　又惡い事をすると、首が飛ぶぞよ。

岩松　アイ〱、イヤモウこれに懲りぬ事はござんせぬ、お前方もちつと牢へはひつてみなさんせ。

よくないものぢや、第一俺の好きなみたは張られず。

杢作　ヤイ、まだそれが悪い、そのしまひが西向きぢやわえ。

岩松　イヽヤ、博奕打たうぢやない、懲りたといふ事さ。

深雪　ヲヽそれ〳〵、年もゆけば合點のゆくもの。コリヤ岩松、そちは知らぬが、わしのほんまの忰孫作、五年あとからお柳といふ嫁諸共戻つてゐるが、それは〳〵又とない孝行者、そちもこれからあの孫作を見習つて、ふツつり悪黨をやめたがよいぞや。

岩松　サアわしもその事を聞きました、その孫作とやらきよろ作とやら、美しい噂を持つて居ると聞いて一倍胸くそが悪い。イヤ、そりやよい事でござります。

深雪　モウ勘當をゆるすからは云うて聞かさう、わしぢやとて心にかゝらぬ事はない、さうして助かつたも三所權現樣の控へ綱、必らず〳〵徒に思はぬがよいぞや。ヲヽまだ云うて聞かす事がある、そちが牢へはひつたあとで、わが身の事を苦にやんで、母親のお品殿も死なしやつたが、可愛やそちや知るまいなあ。

岩松　イヤ、それも聞きました、牢の中でそれを聞いた時のわしの心は、どのやうにあらうと思はんすぞいの。

深雪　ヲヽさうであらう、さうであらう。

岩松　アヽどうぞ替れるものならば、替りたいと思うてばつかり居りました。

深雪　ヲ、親に替つて死にたいとは、孝行な心になりやつたなう。

岩松　そのくせ長煩ひであつたげな、どうでごねるならば家ぢやとて牢ぢやとて同じ事、なう皆の衆。

皆々　ヲヽ、それ〳〵。

岩松　とうに俺とふり替つて、陪脊人が牢へはひつてくたばると、第一葬禮代を助かる上に、俺もとうから助かるのぢや。

皆々　エヽ、またしても何の事ぢや。

岩松　何の事とは陪脊とかはり、兩方よしの勘定づくだ、アヽ儘ならぬ浮世ぢや、くやしうござんす。

　トそら泣きをする。

深雪　そりやモウ悔しからう、親ぢやもの、子ぢやもの。

岩一　したが、幸ひと牢の中には肴はなし、精進もするし氣が盡きて、あくびの出る次手に念佛もや

らかしをしたわいなア。

深雪　ヲヽ年が薬ぢや、大分相好が直つたと見える。これから直ぐに月代でもして、明日は必ず權現様と大師様へ、お禮参りをせにやならぬぞや。

岩松　ヲヽ大師様への禮参りなら、月代せぬ方がよからう、なうお庄屋様。

杢作　勿體ない、そりやなぜに。

岩松　ハテ弘法様は前髪好き、尻むけて拜むが勝手であらう。

杢作　なんぼお好きの弘法様でも、われがやうな前髪なら、南無大師へんぜうまへぢや。

岩松　何を云ふのだ、腰のあたりに牢瘡があり、若衆の本肉といふのだ。

皆々　ヤレ、なさけない。

深雪　コレ〳〵岩松、大師様ばかりぢやない、死んだそなたの母親の念じ佛、觀音様にも參らにやならぬぞや。

岩松　サアその觀音様のお蔭で、助かつたやら、牢の中から背中がむづ〳〵と、いかい輕お蔭が現れたわいの。

杢作　アヽ氣味の悪い、どうやら俺も背中がむづ〳〵するやうだ。イヤその觀音様で思ひ出した、今

の天子様がえらいお頭痛で、それについて大きい観音様をこしらへ、その御堂を建立さつしやるによつて、これから都のお役人の来てござる所へ、寄合ひに行かねばならぬわえ。

百二　ほんにそれ〳〵、こゝの岩松の事で遅うなつては、わしらがあやまり。

百三　サアお庄屋様、モウ歸りませう。

杢作　ヲヽ〳〵、行かう〳〵。コリヤ岩松よ、随分おとなしうしませうぞ。

深雪　段々お世話でござりました。コレ岩松、あなた方にお禮申さぬかいやい。

岩松　なんの、こんな挨拶をするはあの衆の役だ、勘當の詫がすんだならもう用はない。サア庄屋どん、皆の奴等も用はない、行くとも居るとも勝手にしろ。

百一　コリヤ〳〵岩松、たつた今心を入れかへると、いうた口も乾かぬ内に、モうその通りぢや。

杢作　サア〳〵、ようござる〳〵。あんな奴はよけて通るが、勝といふもの。

百四　それ〳〵障らぬ神に祟りなしぢや、うつちやつて行きませう。

杢作　そんなら婆様、行きますぞえ。さりとては、愛想のつきた奴ぢやわえ。

皆々　悪い奴ではござるわえ。

トロ々に云つて下手へはひる、深雪こなしあつて、

深雪　皆さん、御苦勞でござりました。（ト門口を閉めて）これ岩松、幸ひ湯もわいてゐる、風呂へはひつて、そのあとで、月代でもしてやりませう。

岩松　そりや忝うござります、久し振りで屋根の下へ戻つたせゐか、えらく草臥れた、マアこゝで一服のんでゐませう。

深雪　そんなら先へ、風呂の加減を見ておいてやりませう。

ト唄になり、深雪暖簾口へはひる、後合方、岩松あたりを見廻しちよつと舌を出し、

岩松　へゝえらいたわけめ、何の性根が直らうぞ、今のやうにあやまつて居たも、死にさがり婆めをぐんにやりさせ、アノ孫作をぼいまくり、美しい嚊めを俺がしめ、暫く根城を固めるのだ。麥飯食つて寢て居るくらゐで、婆が云ふ事聞き入れてたまるものかえ。それはさうと、泊り所は出來たが、何をいつてもちやんころなしでは詰らねえ、どうぞいゝ魂膽が、ヲヽさうだ、こんな時の役にたてようと思つて、兼ねて荷擔の武者所時澄、コリヤいゝ事を思ひ出した。と言つた所が、こゝから京迄は餘程の道のり。

トちよつと思案して、思入あつて、

さうだ、こゝらで俺が能筆を、見知らせてくれうか。

ト二重に有り合ふ硯箱を持ち出て、さら〳〵と狀を書いて封じ、上書をして、

かうしておいて、どいつぞに持たせてやろべい。へゝ、うまい〳〵。

ト思入、身體を無性に着物にてこすり、狀を懐へ入れる事。

サア〳〵背中がむづついて、こたへられねえ。

トあたりを見廻すと、下手門口の外の棒に、女の着物の掛けてあるのを見て、

こいつは奇妙だ。

ト取つて來て着ようとして、褌のない事を思ひ出したるこなしあつて、

どつこいしよと。

ト前を押へ、又あたりを見て、傍にある縁丸の解き物を取上げ、

コリヤ小悴めが着物の解きかけ。フム時の間に合ひ、俺が悴の着物が肝腎。

ト褌にし、着物を着かへる、此時以前の狀を落して知らずにゐる事、

南無三、また帶ぢや。

ト暖簾口の暖簾を見て、一布はづして、

こいつが即ち、帶となるのだ。

ト帶にしめ、着てゐた以前の着物を丸めて、後へ投げやり、

これから月代をやツつけて、湯へでもはひり、ドリヤ立派な男にならうかえ。

ト唄になり、こなしあつて奥へはひる。在郷唄になり、花道より進の藏人時定、麻なり野袴羽織大小にて、家來一人、後より杣二人附添ひ出て、

杣一　イヤ、アノ目印の藪垣が、柳預かりの守り役。

杣二　杣仲間の、孫作が家でござります。

藏人　ム、、スリヤあの藪垣が孫作が住家とな、よし／＼、其方達は地頭屋敷へまかり越し、杣の人夫を狩り集め、萬事の用意を、申し付けてくりやれ。

兩人　へイ／＼、かしこまりましてござります。

藏人　斧の入れ始めは、申の上刻、相違なきやう相觸れよ。

兩人　かしこまりました、さやうなら、お役人樣。

藏人　大儀であつた、行け／＼。

トこれにて兩人は引返し、花道へはひる。

何を申すも大切の御用、どうぞ在宿致し居ればよいが。

ト思入、合方にて本舞臺へ來ると、下手より孫作戻つて來て、

孫作　エヽ、折角戻りがけに迎ひによつたら、岩松殿は村の衆が、先へ送つてくれたといふ事。

と捨ゼリフにて門口へ來て、藏人と行合ひ、藏人思入れあつて、

藏人　ちと、物が尋ねたい。

孫作　ハイ、なんでござります。（と顏を互ひに見合せ。）

藏人　ヤ、こなたは横曾根平太郎殿ではござらぬか。

孫作　ヲヽ、あなたは進の藏人樣ではござりませぬか。

藏人　その後は打ち絶え申した。

孫作　これはマアおなつかしい、即ちこれが拙者の宅、マアノ\お通り下さりませう。

ト内に先へはひり、岩松が以前とり落したる狀を見つけ、取り上げ思入あつて懷へいれる。

お柳　アイノ\。（ト奥より出來り。）今戻らしやんしたか。

孫作　これ女房、お客がある、その敷物。

女房どもノ\。

お柳　アイノ\。どなたぢや、こちらへおはひりなされませ。

藏人　しからば許しめされ。（ト上座へ通りよろしく住ふ。）

お柳　孫作殿、あなたはえ。
孫作　御家門忠義公の御家來、進の藏人樣ぢやわいの。
お柳　これはマアあなた、ようお出でなされました。

ト茶を汲みゆく、孫作煙草盆を持ち行き、

孫作　イヤモウ、何から申上げうやら、まづあなた樣にも御健勝の體、喜ばしう存じまする。
藏人　御身も堅固にて、まづは重疊に存ずる。
孫作　五ケ年以前常陸介時澄を始め、十平次なんど、主家に仇する佞人輩を討ち捨て、この熊野には少し由緒の心當もござれば、女房諸共引き移り、弓矢にかへし杣の生業、唯今御意得まするも面目なう存じまする。
藏人　イヤ〳〵その言譯には及び申さぬ、今日某參つたは、主命によつて御身に申し付ける仔細あつて、わざ〳〵これまで。
孫作　御用の筋は存じませねど、誰あらう平忠盛樣より仰せ付けられまするその一儀、昔は格別唯今にては杣の孫作、この身に應じまする御用ならば、なんなりとも承はりませう。
藏人　イヤ、ずんとかなひし用向。

孫作　シテ、御川と申しまするは。

藏人　さればさ、この川向餘の儀にあらず、當所岩田川のほとりに年經る連理の柳、今にては預かり守り役を勤むるよし、その柳こそちとこの方に入用の儀あれば、切り崩しくれよとある君の嚴命。

孫作　へエ、、何事かと存じましたら、アノ連理の柳を。

お柳　そりやマアどういふ事で、切り崩すので。

兩人　ござりまするな。

藏人　成程仔細を聞かねば不審な尤も、當今白河帝と申し奉るは、忝なくも一天の君といへども、のかれ給はぬ頭痛の御惱、典藥醫療のしるしもなく、御叡慮苦しめ給ふ折柄、ある夜不思議に大權現三夜につづく靈夢の告、もと白河帝の御前世は蓮花王坊と云ひし沙門、この三熊野に百度の難行苦行の大願發起なし、つひに慢心生ぜしより、忽ち御身は熊野なる御山の土となり給ふ、その髑髏こそ其方が預かる所の柳の本、卽ち土中に埋もれゐるよし、それ故にこそ今日の役目。

孫作　スリヤ、當今白河法皇と申し奉るは。

藏人　唯今も申す通り、蓮花王坊といふは熊野參籠の出家たりしが、マアよく聞かれよ、その出家たりし折柄九十九度の參籠、今一度にて百度の大願成就、しかるにふと慢心を生じ、つひには神佛の御罰をうけ、この三熊野の半腹より落入り命はかなく梢の露、消えても殘る前世の骸、此の木の根をからみ、風につれて動搖のその度毎に頭痛の御惱しきりなれば、その柳を伐り崩し王城の東に、三十三間堂を建て一宇の元にかの髑髏を納めおくならば、忽ち平癒あるべしと夢の御告、さるによつて、かの連理の柳を、伐り崩し、堂の棟木に寄附すべしと、帝の院宣。

お柳　エ、、、、。（トびつくりなす。）

孫作　スリヤ、あの柳を、堂の棟木になさるゝとな。

藏人　いかにも、普天の下率土の濱、王土にあらざる所もなし、明朝までに切りとらんそのために、多くの人歩をかけおきたれど、棟梁になるべき者なく、この所に御身住むこそ幸ひ、殊に今では武士道うちすて、たつきも知らぬ杣の世渡り、樵夫ばかりの其方なれば、申しつくるこの役目、違背はあるまい。

孫作　御意、當今御惱平癒のため、連理の柳を切りいだすは、國恩を報ずる一つとはいひながら、古木とはいひ、殊に五ケ年以前時澄が、鷹狩りの折柄、既に伐り崩さんとせし所、弓矢の德にて

助けし拙者、勅命とは申しながら、この澤山な杣仲間、私に限りました儀でもござりますまいかと、憚りながら存じまする。

お柳　ヲヽさうでござんす、あなたマア無遠慮な役目のお指圖、何ぞ侍らしい事を勤むるのかと、默つて聞いて居りましたが、なんぼ法皇樣の御病氣を直すのぢやとて胴慾な、アノ柳は、標と柳の連理の枝、幾年重ねし夫婦の契り。

トちよつと愁ひのこなしあつて氣をかへ。

いかに非情の柳ぢやとて、可愛想にそれをむざ〳〵伐つたとて、手柄にもならぬ夫の役目、よもや主が、おゝとは云はれますまい。よしまた得心致しましても、私がマアなりませぬ、ハイ、この卯の木が切らす事はなりませぬ。

孫作　コリヤ默れ、女の其方が何を知つて。

お柳　それぢやと云うて。

孫作　ハテマア默つて居れといふに。イヤなに藏人樣、御存じの通り以前は義親公の家臣の横曾根平太郎、かく深山の詫住居も主家の汚名を雪がんため、今にも時節至りなば、もとの武士にたち歸る、暫しが内の假りの世渡り、是非ともこの役目御容赦にあづかりたう存じまする。

藏人　ムヽ、スリヤ杣山樵は、時節を見あはす假りの業、棟梁の役目は望みになく、心はやはり以前にかはらず、義親が家臣横曾根平太郎とな、ムヽ、さうありさうな事。

ト懷中より取繩を出し、ちよつとさばいて、

孫作　ヤヽなんと仰せらるゝ。

藏人　平太郎繩かける、覺悟致せ。

孫作　ヤアしらじらしき汝が有樣、さいつ頃其方が父平左衞門自殺の折柄、鬼切丸の御劍詮議のため、五ケ年が日延もはや事すぎしに、立歸らざる平太郎、察する所義親爲義の兩家を窺ふ佞人ばらに一味なし、劍の詮議もその儘にうちすておくに相違はない、連れ歸つて白狀させん。

サア、尋常に繩かゝれ。　トかゝるを孫作おしとめ。)

藏人　先づ待たれよ、藏人殿。身に覺えなき荷擔の疑ひ、もつとも國を立退く折柄、我が手に入りしこの密書。

ト懷中より出して廣げて見せて、

時澄等に荷擔のもの、この熊野より送りし文體、もつとも劍の事は記してなけれど、一味の者共尋ね出し劍の詮議なしたる上、主君義親が汚名をすゝぎ、勘當の詫の綱と、千辛萬苦に心を

砕けど、これといふ手蔓もきかず、徒に暮れゆくこの年月、それに何ぞやこの平太郎を、盗賊の詮議などゝは、何をもつて。

藏人　ヤア疑はしき第一には、謀叛人の武者所時澄を、其方の手にかけておきながら、兄妹たる妻卯の木を離縁致さぬのみならず、かゝる深山の奥迄も一つに連添ふ汝が心底、實詮議の日延もきれて旦夕にせまる兩家の滅亡、餘所に見流す横曾根當吉、心に一物なくては叶はぬ、それぢやによつて。

ト かゝるをお柳とめて、

お柳　ア、モシ待つて、そのお疑ひは御尤も、既にその場で私も自害と覺悟極めしかど、舅御様の御遺言、いま死ぬる命を存らへ劍詮議のその間、夫に力添へよとの、くれ〳〵の仰せ付け、それ故にこそ惜しからぬ命を存らへ、今にも寶の在所知れ、夫を元の世に出さば兄時澄とひとつでない申譯、私しや死にます覺悟ぢやわいなう。

藏人　イヤその云譯くらい〳〵、某とても家門の傍輩、汝のためを思ふが故連理の柳を切りとる役目、某が推擧を以て申付くるは、志しをたてさせんがため、それに違變を致すからは常の事さへ思はぬ其方、主家の滅亡相待ちをるか。

孫作　ソリヤあんまりお情ない、何しに左樣な所存をば。
藏人　さしはさまぬが誠なら連理の柳を切り崩し、劍の詮議し差上げるか。
孫作　ぢやと云うて、劍の在所は。
藏人　知れぬとばかり云ひのばし、御家の滅亡まねく心か。
孫作　まつたくもつて。
藏人　棟梁の役目は爲義公の仰せつけ、背いても苦しうないか。
孫作　サア、それは。
藏人　サア。
孫作　サア
兩人　サア〳〵〳〵。
藏人　返答は、な、な、何と。（ト孫作思入あつて。）
孫作　いかにも、柳を切り出す。
藏人　たんと。
孫作　棟梁の役目、つとめまするでござりませう。

藏人　ム、、早速の承知、過分に存ずる。
孫作　忠義を忘れず身の潔白、剣もやがて詮議しいだし差上げませう。女房去つたぞ。
お栁　エ、、私をなんで。
孫作　御籠中のお媒といひ父の遺言、添ひとげる心底なれど疑ひかゝるこの場の成り行き、實詮議し差上ぐるまでは、浮世の義理ぢや、去られてくれい。
お栁　成程、去られませう。

ト押入の中より、山刀を持ち出て來て。

モシ平太郎殿、コリや覺えの魂ぢやぞえ。

トとり直し、自害しようとするを、孫作よろしくとめて。

孫作　コリヤやい女房、なんで死ぬる。
お栁　エ、子まで生したる夫に去られ、なんで生きて居られうぞ。
孫作　早まるまいぞ、マア〳〵待て。
藏人　妻子の縁にほだされて、主君の恩を思はねば、繩かけてひつたて行かうか。
孫作　サア、それぢやによつてそこ許の、詞をたてゝ離縁致しました。

お柳　それ故私は、死なねばならぬ。

孫作　エヽ、聞き分けのない、そちがたつて死なうといへば、いよ〳〵此身に疑ひかゝり、この平太郎も生きては居られぬ、なりや一人ならず二人ならず、大勢の命にかゝはる事、こゝの道理を聞きわけて、尋常に去られてくれ、とても得心なければ是非に及ばぬ、俺から先づ切腹しようか。

お柳　サア、それはな。

孫作　去られてくれるか。

お柳　サア。

孫作　但しは果てようか。

お柳　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

孫作　お柳、義理といふ字を辨へて居やらうが。

ト　お柳となしあつて、

お柳　アイ、さうぢやな、こゝで死なねど、どうせ散りゆく柳のこの身。

ト云はうとしてちよつと氣をかへ、

サ、いつ迄ならとまゝなこの身、成程機嫌よう去られませう。そんならお前も泣なさんすにも及ぶまい。

藏人　ア、出かされたり平太郎殿、その心底を聞く上は、連理の樹を伐り崩し、都へ進る道筋の書附け。

ト密書を懐中より出して、孫作の前へ投げてやる。

孫作　なに、道筋の書附けとな。

ト取上げて讀み下す、合方きつぱりとなり、此内中二階の障子をあけ、岩松湯上りの心にて銀頭になり以前の女着物の儘にて立聞きする、孫作讀み下してびつくりしたるこなし。

コリヤ道筋ならぬ怪しき密書、賴みの劍盗みし夜寳藏の番人にとりさへられ、左の高股切りつけられ、今に疵跡癒えかぬれど、劍は人知れず水底に沈めおきたれば、氣遣ひないと時澄へ送りし文體、宛名は無けれど。

ト以前拾ひし[illegible]を出し、手跡を見くらべて、

コリヤ、これ、同筆。

藏人　サ、貴殿都をたち退きし後にて、武者所時澄が屋敷、草を分け詮議なせしに手に入りしはその

孫作　密書、これで歸國の賜ともなれば、心底試せし上この役目、勤めさせん某が寸志。

孫作　ア、忝なき藏人殿のお心添へ、この密書の手に入る上は、いよ〳〵詮議に掛りあり、盜賊の名は夜叉丸、詮議の目當は、左りの高股刀の疵あと。

ト　ふりかへり二階を見る、岩松障子をぱつたり立てきる。皆々こなし。藏人氣色して二階をめがけ行きかけるを、孫作ちよつととめて、

孫作　ア、イヤ、ちつと心當りもござれば、紛失の鯛を手に入れ、歸參の功立て、お目にかけませう。

藏人　さうたうては叶はぬ所、寶無難に戻りし時は、それなる卯の木も、手かけめかけは世にある習ひ、やはり連添ひ、不便をかけやれ。

お卯　そんなら今まで通りに、え丶忝い。（ト此時家來二人出て。）

家來　お迎ひ。（ト門口へ控へる。藏人立上つて、）

藏人　この一條申し聞かす上からは、連理の山代り崩し、ちつとも早く棟の棟梁勤むるが肝要、心も急けばまかり歸るでござる。

孫作　最早お立ちでござりまするか、拙者も程なく、御前が元へ。

藏人　伐り出す時刻は申の上刻、身共はこれより何かの指圖、くれ〴〵もかの詮議を。

孫作　たとひこの身はひしびしほになろとても、寶を手に入れ、よき吉左右をお報せ申さん。必らず氣遣ひなされまするな。（ト此內藏人門口へ出て）

藏人　平太郞喚。

孫作　ハツ。（ト前へ出る、藏人こなしあつて）

藏人　しかと承知か。

孫作　御念に及ばぬ。（ト藏人感心のこなしあつて）

藏人　天晴武士。みよしのゝ山のあなたのおそ櫻、やがて花咲く時を待ち得て、必ず忠義を忘れめさるな。

（ト思入、唄になり、藏人こなしあつて家來を連れはひる。と合方、孫作煙草盆を持ち住ひ、思案のこなし、お納藏人の後を見送りこなし、奥より深雪綠丸の手を引き出來り、）

深雪　コレ孫作、最前からの樣子は、みな奥で聞きました、さぞ心配であらうが、必ず煩うてたもるなや。

孫作　スリヤ先程より何もかも、お聞き取りなされましたか。イヤ何もお案じなされまするな、第一

この身の運の、開ける事でございます。

お柳　サアその運の開くはよけれど、どうしてもアノ柳は、お前が切らねばならぬかいなう。

深雪　これ〳〵嬢女、ソリヤモウ私の事なりや殺生ともいぢらしいとも思はうが、何を云うても帝様の御腦平癒の御祈願なれば、とりとめやうもない。

採作　心なき草木でも幾年經たるアノ柳、殺生とは思ひながら、是非に及ばぬこの度の役目。

お柳　それはさうでも我が身につまされ、夫婦の仲をさくのみか、切らすとは胴慾ぢやござんせぬかいなあ。

採作　ハヽヽヽ、そなたも氣の弱い、よう物を合點してみや、人の命も限りあるもの。ハテアノ柳も當今より切れとあるのが即ち定業、しかし三十三體の觀世音を安置ましますその堂の棟木となるは、草木ながらも佛果を得ん。

お柳　サア、さうは云ふもの丶夫婦の輪廻、もしやみどり兒でもあつてみやしやんせ、伐り崩さる丶柳の心は、どのやうにあらうやら。

採作　ハヽヽヽ、これは又けしからぬ、陰陽師もこ丶にござるに、柳を伐るがそのやうに悲しいとは、お柳、どうしたわけで。

お柳　エヽ。

孫作　おりやとんと合點がゆかぬわいなう。

トこなし、此時下手より杣四人、めい／＼まさかり斧など腰にさし出來り、門口にて、

四人　孫作どの、家にか。（ト云ひながら内へはひる、孫作見て、）

孫作　ヲヽ、皆の衆、御苦勞ぢや、最前から待つて居たわえ。

杣一　待つて居たとはあんまりぢや、仲間を殘らずよび集め、急に人夫をあてねばならぬ。

杣二　さつきからあつちこつちと、わしはモウ歩きづめぢや。

杣三　大方仲間もよつたれば、棟梁のこなさんが早う來て。

杣四　斧の入れ始めせぬ内は、仕事にかゝる事が出來ぬと、お役人樣の云付け故。

杣一　そこで棟梁のこなさんの、來るのをおいら達が。

四人　待つて居たわいの。

孫作　そりや大儀でごんした。なんと皆の衆、一杯飲んでから行かぬかい。

杣一　イヤ／＼、酒は飲んでは居られぬ、明日の朝まで夜通しかけての大仕事。

杣二　そのやうな悠長な事ではない。

柚三　なんでもかでも力一杯働いて。

柚四　手ばなれ早うするつもり。

柚一　孫作殿、用意がよくば。

四人　サア、行かうぢやござんせぬか。

孫作　そんなら一緒に出かけようか。コレ嬶よ、かるさん取つて來い。

お柳　アイ〳〵。（トかるさんを奥より持つて出て。）

柚一　時に、よき六殿、われも俺も親の代から杣なれど、今度のやうな大木を伐るのは、始めてぢやなあ。

柚二　されば枝葉を下すにも、一仕事なれど、根を廻す工夫が肝腎、どうしかけたものであらう。

柚三　成程世の常の雑木を伐り出すというて、世界に稀な大木、なか〳〵人の力ではむづかしからうわ。

柚四　サア、それ故にこそ、こゝな孫作殿に、棟梁の役が當つたといふもの。

柚一　なんでもこれから孫作殿の下知について、がつしり錢儲けをしようわいの。

皆々　さうぢや〳〵、それが一番肝腎ぢやわいの、ハヽヽヽ。

ト四人此内思入、孫作かるさんをはき、身拵へして居る、お柳こなしあつて。

お柳　モシ、こちの人、どうでも行かねばならぬのかいなあ。

ト こなしあつて、かるさんをはかせ、身拵へを手傳ふ事、此内深雪は綠丸をたゝきつけ、寢かせる、

孫作身拵へしながら、

孫作　時限りの仕事、遲らなつては、手配りのさまたげ。

ト こなしあつて、身拵へして斧を手に持ち、

そんなら婦人、行て參ります。嬶よ、どうで今夜は夜通し、日が暮れたればこの鳥目。

ト云はうとしてお柳と顔見合せ、お柳「ア、コレ」といふ心いき、孫作氣をかへて、

アイヤ、日が暮れたら、火の用心に氣をつけ、よう留守しや。坊主よ、行て來るぞよ。

ト行きかける故、お柳思入あつて、

お柳　こちの人。（ト孫作の袖を控へる。）

孫作　なんだ。

お柳　ならう事なら、せめて明日まで延ばす事はならぬかいなあ。

孫作　まだめろ〳〵とおなじ事を。

四人　孫作殿、時刻が延びる、行かぬかいの。

孫作　サア、こゝ放せやい。

ト振りきるを又とりつく、振り放さうとする、お柳放さぬこなし、此時奥にてしらせの法螺貝鳴る。

四人　南無三、仲間の者がしらせの法螺貝。

孫作　エヽしつこい、放せやい。（ト振りきる手をとつて、）

お柳　いかに非情の柳ぢやとて。

深雪　綸言は汗の如し。

孫作　出でゝかへらぬ帝の仰せ。

お柳　柳はたちまち、伐り崩されし。

孫作　枯木となれば。

深雪　かならず成佛。

お柳　このみどり子が、この世の[illegible]。（ト緑丸を孫作の方へつきやる。）

孫作　ヤア。（ト思入、戻りかけて四人を見て、）サア、行きませう。

ト外より戸をぴつしやりさす、お柳緑丸を抱きしめ泣き落す、深雪[illegible]双方を案じるこなし、[illegible]間になり
孫作四人と連立ち花道へはひる、深雪は孫作の後を見送り、内へはひり、お柳を介抱して、

深雪　さりとては、氣の弱い嫁女ではあるぞいの。

ト茶を汲んで來て、飮ませなどする、お柳やう／＼起き上つて。

お柳　惜しんでつきぬこの名殘り、モウ思ひあきらめませう。

深雪　ほんに、さうかいの、長の年月軒に老いたる柳の木。

お柳　今日を一期と枯れゆくもの。

深雪　いかに非情といひながら。

お柳　名殘りがなうてなんとせう。

深雪　これもなんぞの因緣で。

お柳　あるが中にも夫の役目。

深雪　こんなめでたい。

お柳　こんな悲しい。

深雪　ヤア。（トこなし、お柳氣をかへ）

お柳　イヤサ、悲しい凶事のないやうに。

深雪　權現樣でも祈りませう。

お柳　そんなら母さん。

深雪　嫁女も一緒に。

ト お柳綠丸を抱き上げ、顏を見合せ思入あつて、ふと深雪と顏見合せ氣をかへ。

お柳　サア、參りませう。

ト唄になり、深雪先きに、お柳綠丸を抱きこなしあつて、しをしをと奥へはひる。後合方になり、岩松中二階よりそろそろおりて後先を見廻しこなしあつて。

岩松　今聞いた話ぢやア、こりやから落ちついては居られねえわえ。いつぞや武者所時澄に頼まれた鬼切丸の劍、埋め所に困つた故、アノ岩田川の柳の木へ沈めて置いたが、去年の春から牢へ入れられ、時々お見舞ひ申さねから、どうかと案じて居たものゝ何奴も知らう筈はなし、預けの時澄はいつぞやごねたといふ事だ、モウそろそろと取り出してばらしてもいゝ時分と思ひの外、柳の樹を伐り崩せば、アノ劍もうかうかと、あすこにやアおかれねえわえ。コリヤいゝ思案がありさうたものだなあ。

ト思案のこなし、此時奥より鐵念出て、

鐵念　[illegible]返りの岩松、隱し名は夜叉丸、久しく逢はねえの。

岩松　ヲヽ、誰かと思へば猫舌闘八、けうな姿になつたなあ。

鐵念　ヲヽサ、いつぞや時澄に頼まれて、岩田川の筏を流したづきが廻つた故、ぼくよけのこの丸太。

岩松　俺も時澄に頼まれた時分から、いがみも段々上塗りして、今ぢやア盗人の頭分。

鐵念　こんたは根が器用脆故、我ら如きは閉口々々、そりやアさうとこんたが預かつた、かの代物はどうした。

岩松　サア、その事で、今も思案眞最中だ。

鐵念　俺も何だかいゝ仕事があらうかと、犬にはひつたこの家の内、最前もちらりと聞けば時澄はじめ數多の侍殺らして來た、横曾根平太郎といふ奴は、こゝの孫作。

岩松　ムヽ、そんなら俺が推量通り、あの婆めが悴といふは、平太郎めか、そいつはいよ／＼油斷がならねえ、コリヤ氣が氣ぢやアねえわえ。

鐵念　そりや又なぜに。

岩松　なんで所かあの柳を伐り崩すと、岩田川の水底へどめておいた、劍の在所が知れるわえ。

獣念　そんならあの水底に。

岩松　おりやアうかつに寄りつかれねえ、わりやア柚に交つて、合點か。

獣念　符牒分けりや備けになる事、シテ平太郎めを、どうする心だ。

岩松　その事は案じるなえ、かの事役奴めが氣がついたら、俺が工夫がいくらもあるわ、まづ思ひついておいた、何かの手番ひは、コレ、

ト呼子の笛を出して吹くと、以前の柚四人下手より出て、

四人　かしら。（ト大きな聲で云ふ。）

岩松　コレ。（ト抑へて聯く。皆々段々に聞きとる。）

四人　合點でごんす。（ト又大きな聲で云ふ。）

岩松　コレ、まだ〻。

四人　そんなら。（ト又大きな聲で云ふ故〕

岩松　エヽ、なさけねえ奴等だ。（ト云ふ故四人。）

四人　かしら。（トちいさな聲にて云ふ。）

岩松　猫實より一緒に行け／＼。

惣念
四人　ヲヽイ。

ト惣念思入、四人連立ち下手へはひる、岩松こなしあつて、

岩松　サア、これからお柳めをひつさらひ、邪魔をひろぎやアノ婆、ちつぺいもひねり殺すわ。

トあたりを見廻して、

こゝらに居ねえからは、たしかに奥の離れ座敷、ヲヽ、さうだ。

トこなし、尻ひつからげ、あたりを窺ひ、さし足にて奥へはひる、あとしらせにつき、此道具、ぶんまはす。

本舞臺三間の間常足の二重、正面張交ぜの襖、上手藁屋根の壁だれの塀、下手落間、此前植込みのあしらひ、本屋根雪持ちにして、上手に竹本連中の出語り臺を押し出す、口覆より雪しきりに降り、時の鐘、雪おろしにて道具納まる。と淨瑠璃になる。

〽忍びゆく、如月の春は迎へど白妙の空にしられぬ雪ぞ降る、積る歎きにうき氷柱、お柳は我が子を抱きかゝへ、しを／＼一間を立出でゝ。

ト此淨瑠璃にて、奥よりお柳綠丸を抱き出て、愁ひのこなしにて、卷蒲團の上へ綠丸を寐かす、淨瑠

唄のあと床のメリヤス。

ヘ我が子の顔をうちながめ、云はんとすれど胸せまり、聲も得立てず忍び泣き

やゝあつて顔をあげ。

ト此絲床のメリヤス、

お柳　何にも知らずすや／＼と、日影の消えゆく後にては、定めてわれを慕ふであろ、夢現にも今日が云ふ事を聞き覺え、夫にもかくと告げてたも、われこそ誠の人間ならず、雨露の惠みに生を受け幾年ふるき非情の身、過ぎつる春の頃、常陸介時治が鷹狩の折から、梢に綜のかゝりし時數多の武士に伐り崩され。

ヘ既に枯れなんあやふさを。

我が夫の弓矢の徳に、助けられし時のその嬉しさ、せめて御恩を送らんと思ふ折ふし卯の木様の御最期、これ幸ひとお命を救はんため、影身に添ひしこの年月。

ヘ假りに女の姿と變じこの熊野路へ導きて、契りをこめしもはや五年、柳の花のみどり子を親とよび子とよぶも、一方ならぬ因縁ぞや。

おとなしう成人しやれば、母がなくとも育つべし、かならず／＼憐れにも母の身の上云ひ出

して、父御の名まで汚がしやんな。成長の後々は父の弓矢を受け傳へ、天晴な武士よ、さすがは父の子ほどある、手柄者ぢやと褒められて、いさぎよい名を揚げてたも、コレ〳〵

〽母は今を限りにて、元の柳に歸るぞや、かならず草木成佛と回向を頼む夫よ子よ、離れがたなや悲しやと、いふ聲さへも忍び泣き、かつぱと伏して歎くにぞ誠の心通じてや、わつと泣き出す緑丸。

ト緑丸起上り、目をすり、摺足をして、

緑丸　母さまどこに、母さまいなう。

お柳　ヲヽ、堪忍しや、堪忍してたもいなう。

〽これぞ別れの添乳ぞと、思へば胸も張りさけて、聲もしどろに子守歌。

〽ねんねが守りは何處へ行た、山を越えて里へ行た。

ねん〳〵、ねんこせい。

里の土産に何もろた。

〽母の添乳にすや〳〵と又も寢入りしをさな子を、見るにつけても悲しやと、

前後不覺に泣きしづむ。

ヲヽ、何がな僞と思へども非情の身には是非もなし、拙き筆も恥かしながら、父の敎へのいろは文字、いとし可愛の愛別離苦、せめて一筆、ヲヽ、さうぢや。

〽淚の袂おしぬぐひ、硯の海の淺からぬ、深き親子の愛着をこゝに殘して書き終る。

ト二重にある硯箱をもち出し、墨をすり筆をそめて、卷紙へさら〳〵と書くこなしいろ〳〵あつて、此內始終床のメリヤス、よき程に書きしまふと。

〽はや伐り出す斧の音。

ト奥にてエイと斧の音する、これをきつかけに本釣鐘をゴンと打ちこむ、お柳引き拔きになり、仕掛けにて柳葉の着付けになる。床の合方、日覆より柳の葉すさまじく、雪をまぜ、降りちらすこと。

〽伐木とう〳〵てう〳〵と樹を伐る音やこたへけむ、お柳は身節びつくびく苦しき胸をおさへる淚。

トやはりあひだ〳〵に斧の音をあしらひ、お柳苦しむこなしいろ〳〵あつて。

アレ〳〵今散りくる柳葉は、われを導く冥土の迎ひ。

〽五體にひしと斧まさかり、震ふ膝ぶしおし靜め、可愛や〱、云ひおきたい事はやま〱あれど、とてもかへらぬこの身の終り、とはいへ親子一世の別れ、名殘が惜しい、別れともない、別れともしない、悲しやなあ。

〽云ふ聲さへもかきくもり、正體もなく泣き沈む、蟲が知らすか血脈の緣繫き目覺ます綠丸。

綠丸　これ、母さまイなう、母樣イなう。

〽とりつく我が子を振切り〱、散り來る柳の葉隱れに、姿は消えて失せにけり。

ト大ドロ〱にて、上手の切穴へ消える。掛焰硝立つ、綠丸うろ〱して

母さま、何處へ行かしやつた、ぼんも一緒に行きたいわいなう。

〽足ずりしてぞ泣きさけぶ、老女も一間を轉び出で、不便と孫を抱き上げ。

深雪　樣子は聞いたこれ嫁女、非情の草木といひながら、かりに我が子と夫婦の契り、馴染かさねたその上に一人の孫までもうけし身が、この儘に行かうとは、情を知らぬか、嫁女いなう。

綠丸　母樣いなう、母樣いなう。

〽呼べど叫べどその甲斐も、なくより外の事ぞなき、始終を聞いて猿辷り、奧より出で丶綠ばなにのさばりかへつて腰うちかけ。

岩松　これ母さん、最前からの愁歎場は面白う聽聞した、しかし連れて退かうと思つたお柳めは樽の精、エヽ入らざるむだ骨折らしやアがつた。

深雪　ヲヽ、さういふは岩松、そんなら最前からの事聞きやつたか。

岩松　ヲヽすつかりと聞きやした、サアこれからは、生けておけねえはアノ採作、彼奴をばらしてしまはにやア夜が寢られぬ、人質にとるそのこびつちよ、こつちへよこせ。

深雪　イヤヽ、これは大事の可愛の孫、どうして渡してよいものか。

岩松　エヽしぶとい老ぼれの、四の五の云はずと渡してしまやアがれ。

深雪　そんならおのれは、まだ根性が直らぬのぢやな。

岩松　ヲヽなんの直らう、鬼が魅入れちやアもう晴はぬ、邪魔だてせずとそこのけやい。

〽無法むざんの猿辷り、容赦情も泣き入るをさな兒、ひつ捕へんとつきのけれ

ば、老母は足にすがりつく、ヱヽ面倒なと引摑み、既にあやふきその所へ、始終を聞きたる平太郎　奥よりとびだし岩松が、腕引きはなしつゝ立つたり。

ト奥より孫作、つか〳〵と出て両人をきつと圍ふ、深雪見て。

深雪　ヲヽ孫作か、よい所へ、よう戻つてたもつたなう。

孫作　母人、最前からたち戻り、お柳が身の上物語り、あらましは聞きました。

深雪　ヲヽそんなら、その事を聞きやつたか、可愛いゝ事をしましたわいなう。

ト此内岩松やう〳〵起き上り、

岩松　アイタヽヽ、どえらひ目に逢はしやアがつたな、いつたいおのれは。

ト孫作を見て、

孫作　いかにも、この母が實子の孫作、以後は見知つて貰はうかい。

岩松　ム、孫作、わりや俺を知つてゐるか。

孫作　名は疾うから聞いて居たが、岩松とやら、意地悪さうな面付きで、知れてゐるわえ。

岩松　そのまた知つてゐる者が、なんで手籠めにしやアがつた。

孫作　折檻だ。

岩松　やア。

孫作　最前旧主人のお詫に、勘當はゆるしたが悪黨が直らにや、何時でも追ひ出せとの云付けだわ、ぐづぐづすると、閾の外へ投り出すぞ。

岩松　ム、俺より孫作、われから出て行け。

孫作　この孫作に、出て行けとは。

岩松　ヲ、サ、アノ婆めがどうぬかさうが、この家の主人は俺さまぢや、四の五のぬかしやア婆めは、俺の方から勘當して、屋財家財は一呑みにせしめるのだ。ヲ、、猿辷りの岩松様。

孫作　ハテナア、それはそれにして、マア貴様の仲間の名は夜叉丸と云はうがな。

岩松　ヤ、なんと。

ト孫作以前の状を二通出して、

孫作　「お頼みの剣盗み取り候　夜寳藏の番人に支へられ左りの高股切りつけられ、今に疵癒えかね候へど剣は人知れず木座へ沈めおき候、この上は早々大望の旗上げなさるべく候、時澄殿へ。仁作より。」今一通の宛名は、熊野の夜叉丸、まがふかたなき同書同筆。

岩松　やア。

孫作　その夜叉丸がこの家の後繼者、ハテ、あぢにもちこむ奴さなあ。

岩松　イ、ヤ、おりや、知らねえ、覺えはねえ。してわれが本名は、横曾根平太郎といはうがな。

孫作　イヤ、そんな名は知らぬ、杣の孫作。

岩松　エ、ぬかすめえ、義親の討洩らされ。

孫作　なんと。

岩松　まだ問はにやアならねえ事がある、まづこの跡式から差し上げませうと、三拜してぬかしやアがれ、出やうが遲いと、目に物見せるぞ。

ト傍にある斧と鉞とを取る。孫作斧の方を見て、

孫作　二腰は武士の道具、また斧鉞は山樵の魂、以前の養子に今の息子が、初見參の異見の百杖、打つて打つて打ちすえくれう。

岩松　どえらい事をまき出したな、コリヤモウ、しめにやアならねえ。

〽尻ひッからげ身がまへたり。

ト尻をぐつとはしをる、孫作深雪高股を見て、

孫作　さてこそ、左りの高股に。
深雪　最前話しの刀の疵あと。
　　ト岩松ぎよつとして
岩松　ヤア。（トべつたりへたる。）
孫作　母人。
深雪　孫作。
孫作　詮議の蔓にとりついたわえ。
岩松　さうぬかしや破れかぶれ、うぬから先きへ。
　　ト岩松鐵にて打つてかゝるを、孫作斧にてうけとめ、床の浄瑠璃にて立廻りあつて、両人きつととまると、暮六つの本釣鐘ゴンとなる、孫作鳥目のこなしになり。
孫作　アリヤモウ、暮六つ。
　　ト又立廻りて、きつととまる、深雪こなしあつて、
深雪　そなたはどうぞしやつたか。
　　トこれにて孫作ぎつくりする、岩松そぶりを見て、

岩松　孫作、わりやア目が見えねえな。

ト これにて孫作きつとなり、さらでないといふこなしあつて、

孫作　イヤ、ずんとあきらかだ。

岩松　イヽヤ隠すな〳〵、わりやア鳥目だなハヽヽヽヽ、鳥目でけつかる、サアしめたわ、目の見えねえがこつちのつけ目だ。

ト孫作ムヽと思入、身を震はして思入、深雪は始終あぶないといふこなし、岩松孫作の鼻の先へ斧をつきだしたりいろ〳〵あつて、

サア相手にならねえか、詮議をしねえか、心は矢竹にはやつても目が見えねえか、可愛いの者やな。コレ相手にならねえか、ヱヽどうする、ヱヽサア、岩松様が斧のむね打ちくらへ。

〽打ちこむ斧に身をかはし思へば無念と平太郎、盲目さがしのめつた打ち、こなたは我武者の大膽者、聲をしるべに支へる斧の柄、うぬが脾腹にうちあて、ウンとばかりに倒れる岩松、母は嬉しさ走りより、孫諸共にすがりつき。

ト岩松斧の柄にて脾腹を打ち悶絶する。此内深雪縁丸ろ〳〵して居る、此時孫作の傍へより。

深雪　これ〳〵孫作悦びや、岩松は脾腹を打つて、氣を失うたわいの。

綠丸　父樣、けがして下さるなや。

孫作　ヲ、母人か、綠丸か、怪我はござりませなんだか。

深雪　イヤ母がしつかり抱いて居て、どこも怪我はないわいの。

〽たづねながらも口惜し涙、

孫作　チエ、口惜しい、折惡いこの鳥目、母人に聞かせぬやう、女房に云ひ含め、これまでは隱しましたが、かく浪々の元はといへば劍の紛失、その盜賊に出逢ひながらその詮議さへ出來ぬといふは、チエ、無念でござりますわえ。

〽拳を握り身をあせり、無念涙ぞ道理なる、母も悲しさすがり付き。

深雪　ヲ、道理ぢや、道理ぢや、鳥目を母に隱しやつたもみな嫁女が氣あつかひ、孝行な者であつたに、悲しい事をしましたわいなう。

綠丸　父樣、母樣に逢はして下され、母さまいなう〳〵。

深雪　嫁女いなう、お柳いなう。

〽母と我が子に泣きたてられ、父はあるにもあられぬ思ひ、こらへかねて大聲あげ。

採作　ヲ、無念ふは道理ぢや、尤もぢや、聞えぬはお柳、たとひ柳の精にもせよ五年この方馴れ馴染み、かういふ子まで産んだぢやないか、おりややつぱり人間のやうに思うてゐる、道理で出しなにとゞめたは、この世の名殘りを惜しんでか、とはしらずして斧鉞柳にあてたその時は、さぞ苦しかつたであらう、怺へてくれ怺へてくれやい。

〽ゆるしてくれと聲を上げ、歎く涙は谷川に、雪解けまさる如くなり、またもひかるゝ執着心、形はしをるゝ青柳の、お柳の姿あり〳〵と。

トこれにて、上手の切穴より燒酎火ドロ〳〵にてお柳せり上げにて出て、

お柳　母様、わが夫。

〽見るにかけよる綠丸の

綠丸　ヤア母さまが。

採作　なにお柳が戻つた。

深雪　嫁女かいなう。

琢作　ヤアノ\お柳が姿現せしか、ようまあ戻つてくれたなあ、最前樣子を聞いた時、留めに出んとは思へども賓の評議に氣は張弓、岩松が本名知らんが爲に、ぢつと一間に控へてゐたが、聞けば誠の卯の木にも、我出國のその砌りこの世を去りしか、不便の最期、それより假の卯の木となり、五年この方今日が日まで、我に情を添へし身の、二世とかはせし女房の顏も見られぬ鳥目の難病、せめて暫しは生延はり、緑丸が成人して母人を見送るまで、共に介抱してくれよ、これお柳。

〽頼む頼むも目に涙、かこち歎けばやう/\に、しほるゝ顏をふり上げて。

お柳　お嬉しい今のお悔み、傳へきく安倍の童子が母上も丁度わが身と同じ事、獨り子を殘しおき、信田の古巣へ歸りしとや、それは野干の年經る身。

〽我はもとより草木の、歸る柳は勅命にて、今伐り崩されて枯柳、かへるといふは消ゆる身に、なにとて形を殘すべき。

我は朽木の時を得て、一宇の棟となる事も、一つは妙なる法の德。

〽あふ事まれな優曇華の花もの言はぬ草も木も、王土に住めば是非もなし。今より佛果の身となるも、孝子に添ひし縁あれば、情の恩を報ぜん箇。この一品は夫への筐。〽錦に包みし御劍を平太郎が手に渡せば、探りながらも不思議の思ひ、

トやはり薄ドロ〳〵にて、さしがねにて孫作の手へ錦の袋入りの劍を渡す故、孫作取つて、

孫作　ヤア、コリヤ刀。

お柳　その劍こそ日頃から、夫の尋ぬる鬼切丸、悪者が奪ひ取り柳の傍の水底へ、沈めおる事知りながら、今日まで在所を知らさぬは、もしや夫の手に入らば直ぐに都の御主人へ、家づと〻思へば悲しい別れにもならうかと、盡きぬ名殘りを惜しみし故、今ぞ誠の別れ路に、夫へ讓る歸參の賜、それを手柄に御身の上、再び出世をなし給へ、必ず〳〵縁が事返す〴〵も頼みます。〽夫の顏を見ては泣き、若を引よせ抱きしめ、離れがたなき輪廻の絆ともに歎きの折しもあれ、柳の糸を伐り拂ふ斧鉞がてう〳〵〳〵、都はこゝに玉きはる時こそ來れいざさらば。

さらばでござんす、こちの人。

孫作　コリヤ待て女房。

深雪　コレお侍。

緑丸　母さまいなう〳〵。

〽とりすがらんも鳥目の難病、水の月かや手にとまらず、母は正體泣き伏せば母樣なうと駈け出す我が子とともに、うろ〳〵六道の辻に迷ふや愛別の、歎きは盡きぬこの世の別れ。

ト此淨瑠璃の内孫作、お柳を行へようとするをすりぬけ、ちり〴〵と花道の方へ行く、孫作始終目の見えぬこなしにて緑丸につきながら、探り〳〵花道よろしき所へ行き、お柳にとりつかうとする。又すりぬけ孫作と入違ひになる、孫作これを探りばつたりこける、緑丸お柳の袖をとらへ起き上り探り居る孫作の手をひき、右三人本舞臺へ戻る、始終此内床の合方よろしくあること。

〽わつと一聲霧霞姿は見えずなりにけり、幼子膝に平太郎、あまりの事に涙も出ず、ただ忙然たるばかりなり、やゝあつて平太郎涙を拂ひ。

トよろしくあつて、トヾ大ドロ〳〵にて、お柳下手の切穴へ消える、掛焔硝ぱつと立つ、孫作緑丸をとらへ。

孫作　たとひ非情の榊にもせよ、親子離別の悲しみは、人界に志す事なし、さはさりながら女房お柳が情にて、不思議に手に入るこの御鏡。

深雪　蔵人様へ差し上げれば、御主人の、虚名もはれ。

孫作　再び起す横曾根の家名。

深雪　惟。

孫作　母人様。

兩人　チエ、忝い。

へ喜び勇むぞ道理なれ、とかくする内時刻もたち、息吹きかへす以前の岩松。

岩松　ヤイおのれはマア、どう盲目だてらによくまあえらい目に逢はしやアがつたな。然しうんといはしやアがつたお蔭には暫く休んでゐた。今現に聞きや柳の精のとちあまめが人が大事に埋めておいた、大金になる素敵な代物、斷りなしに歸參の賜。いけづう／＼しい、イヤモウ、あきれけへるわ。

孫作　さてこそわが推量に違はず、時澄に荷擔の山賊。

岩松　ヲヽ、通り名は猿辷りの岩松、盜賊仲間の本名は、熊野の夜叉丸といふ、當時日の出の俺様ち

や。

孫作　ムヽ、さう白狀をするからは、いよ〳〵うぬは助けておかれぬ。ひツくゝつて劍沢共惟弘殿へ下渡しするわ。

岩松　なに猪口才な、毛二才め、サアその劒をこつちへ渡せ。

孫作　目は見えねども横曾根平太郎、めつたに渡してよいものか。

岩松　渡さにやかうして。（トかゝるを。）

孫作　こしやくな奴め。

〽襟がみ掴んでもんどり打たせ、互ひに爭ふ劒の袋、見る目ひやいさおやふさに、母は中より劒をひつとり。

ト兩人の立廻りの内、深雪間へ出て劒を取り、

深雪　コレ平太郎、劒はわしが。（ト孫作綠丸に渡し。）

孫作　コリヤ綠丸、これを持つて權現樣へ、早う。

綠丸　ヲヽ合點ぢや。

〽渡せばとつて幼子は、そのまゝかしこへ走り行く。

ト此淨瑠璃にて、綠丸劔を持ち花道へ走りはひる。

岩松　南無三、あれをやつちやア。

〽あわてふためき駈け出す岩松、かよわき力に母親が、支ゆる暇に平太郎、岩松やらぬと切り付くる、刀の鍔元しつかと取り。

どつこいしよ、コリヤおのれ俺を切る氣か、それだけ切りたくば此奴を切れやい。

〽手をもちそへて母親の、咽笛ぐつとつきさゝすれば、わつとばかりに魂ぎる聲。

孫作　ヤヽヽヽ、コリヤ母人を。

岩松　とても事に、かうして切れ。

〽なぶり殺しに止めの刀、母の敵と平太郎、取りつく所を眞のあて。

ト深雪落入る、孫作ウンとのる。

マア、これで片づけた、この上はアノ劔。

〽エヽ面倒なと尻ひつからげ、後をも見ずして逸散に。

後でゆつくりとそばえろ。

〽權現坂へと走り行く、後に氣のつく平太郎、探り廻つて。

探作　ヤア母人には、はや、ことはきれたか。

ト此時後より杣斧六出て、

斧六　平太郎、覺悟。（トかゝるをよろしく立廻つて。）

探作　悴が身の上、心もとない。

ト始終床の合方にて、駈け出ようとするを、斧六かゝるを盲ら探りに立廻つて、段々花道まで行き、トど斧六をポンと切る、見事にかへる。

〽西か東か方角をこけつ轉びつ。

ト引立て三重にて、後から切りにかゝるなど、受け太刀のこなしあつて花道へ探りながらはひる。

本舞臺居所替りになり　右屋體の屋根上へひき上げ、襖東西へ敷疊とも一時にあげると、正面山幕。二重の置込み上げると、草土手雪降りの書割り、上手より二重の上へ見事なる石段をつき出す。これに上り下りあるべし、下手よりやはり二重の上へ、これより本宮路としるせし傍示杭をつき出す、唄と淨瑠璃とうち合せのはげしき合方にて道具納まる。と囃し止むと、直ぐに淨瑠璃になる。

へ追うて行く、そも〳〵三熊野の三所權現と申し奉るは、莊嚴巍々としていと神さび、夜燈の光り兩部をやわらげ、尊くも亦もの淋し、かゝる夜道をたゞ一人、まだいたいけのみどり子が、父の教への袋の劍、よいもてあそびとふりかたげ、御社さして走り來る。

ト又右の合方になる。花道より綠丸右の劍を持ちかたげ、脫ぎ掛けをぬぎ、りゝしく走り出で、息のきれた　なし、雪を口にふくみ、又刀をかたげ本舞臺より二重へ上り坂へ段々と上り、上のかたにて石段に腰をかけ、息をつくと、花道より岩松片肌ぬぎにて走り來り、草臥れしこなしにて、ぶら〳〵と本舞臺へ來て。

岩松　こびつちよに似合はぬ途方もねえ早い足だ、俺でせえも駈け草臥れた、何處へうせをつたか知らん。

ト うそ〳〵見廻す、坂の上より綠丸劍を見せて小手招ぎする、岩松ぎよつとして、

エ、けしからぬこびつちよめ、われが持つて居ても入らねえ物、その劍をこの小父さんによこせい。

ト下より云ふ。綠丸上にて劍を見せびらかし。

綠丸　小父さん、やらうか。

岩松　こつちへよこせ。

綠丸　ベツかツかう。（ト指にてべかをする。）

岩松　エ、いま〳〵しい餓鬼め、馬鹿にしくさる、よこしやアがらねえと、ひどいぞよ。

ト坂の上へかけ上ると、綠丸ちやつと下り、花道の中程まで行つて休んで居る、岩松坂の上にてうそうそ見廻し下を見おろす、綠丸花道にて劍をさし上げ、見せびらかす。岩松あきれておのれマアと下へおり〳〵、舞臺を二三度辿ひあるき、息のきれしこなしあつて。

エ、いめえましい。コレ小僧よ、今の樣に云つたのは噓だ、それを俺によこしたら、饅頭をやるぞよ、賢い坊だ、サア〳〵早くよこせ、この小父さんが目をふさいで居るうち俺が手へ渡せよ。

ト目をふさいで手を出して居る、綠丸劍をもつて遊んでゐる。

まだかな、まだかな。まだかな。

ト綠丸片手にて、有合ふ薪ざつぽを岩松の手へ渡す。

ヲ、賢い奴だな、よう渡しやがつた。

ト目をあいて見て薪ざつぽ故、

ヱヽいまく＼しい。

ト綠丸の方へ行く、綠丸岩松の股をくゞり東西へ行き違ひて花道と西の通ひ道の中程まで行つて向うを見る、綠丸劒を腰にさし、手をたゝいて、

綠丸　こゝまでござれ、甘酒進上、こゝまでござれ、甘酒進上。

トいろ＼／遊ぶ事、岩松氣をいらち追かけ廻る、此内綠丸岩松の背中へかけ上つたり、股ぐらをくゞつたり、又行きちがひ、花道と西の通ひ道の中程にて手をたゝき、

こゝまでござれ、甘酒進上、こゝまでござれ、甘酒進上。

ト岩松いまく＼しいと追かけ、トゞ岩松綠丸を追うて下手まで行く、よき所にてすこしドロ＼／にて綠丸切穴へせり下がる、岩松あきれてよき所にへたり、

岩松　ヱヽ馬鹿々々しい小悴めだ、なか＼／手に餘る餓鬼だ、アヽ草臥れた。

へ大の男のすつたすた鼻息ついてぞ休み居る、かくとは知らず平太郎わが子の行末覺束なく、神にさゝげし燈籠の明りさへ見ぬ目なし鳥、とぼ＼／こゝに探りより、岩松に行きあたれば、

ト孫作やはり拔身にて探り＼／出て、岩松に行きあたり、

ヤア、わりや平太郎か。

孫作　うぬは夜叉丸、坊主をはじめ大切な劒を、何處へやりをつた、こつちへ渡せ。

岩松　何をぬかすぞ、あるくらゐならこのやうに、草臥れ面はしねえわえ、うぬが何處ぞへはかせをつたか、サアぬかせ。

孫作　イヽヤ知らねえ、知らねえわえ。

岩松　ヲヽ、どうせ直ぐ素直にやアぬかすめえ。まて〳〵。

〽ぬかさにやかうぢやと、あたり見廻し、道程知らず傍示杭、これ幸ひと容赦なく雁字がらみにくゝりつけ。

ト孫作を二重の上へ引立て行き、傍示杭にくゝりつけ、

ト蒔ざつぽにて孫作の額を割り、さん〴〵にさいなむ。

サアぬかせ、ヱヽぬかしやアがれ。

孫作　イヽヤ知らぬ、坊主やアい坊主やアい、綠丸。

〽綠よなうと聲限り、よべどさけべどその甲斐も、なく音は森のぬくめ鳥。

岩松　ヱヽしぶとい奴だ、いゝかぬかすなよ。

〽傍に帯びたる山刀、是非も情もなつた折、背骨ひらける苛責のせめ、

孫作　エヽ大悪人め、現當閑の敵をば討つ事ならぬこの鳥目、いつそ一思ひに殺してくれ。

岩松　どうして／＼数多にやア殺さねえ、どうせ小悴の事はぬかすめえ、そのかはりにうぬを生けたり殺したり、さいなまにやア腹がいねえ。

孫作　チエヽ口惜しい、うぬら如きにやみ／＼と刀の錆と消え行くも、よく／＼武運に盡きはてしか。悴は居ぬか緑丸、日頃念ずる熊野權現、悴が命守らせ給へ、父は冥土へ死出の旅、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

岩松　ヲヽあつぱれないゝ覺悟だ、われが望み通り、早く冥土へうしやアがれ。

〽冥土へうせいとめつた切り、もがき苦しみ藪の中、その儘息たえ伏しにけり。

ヤレ／＼盲目と思ひの外、むだ骨を折らしやアがつた、そりやアさうと、こびつちよめは何處へうせをつたかなあ。

〽あたりきよろ／＼ながめる所へ、鼠逃した猫舌胴八、うろ／＼眼に駈け來り。

ト欲念走り出で來り、

欲念　岩松こゝにか、最前聞いた柳の元に沈めた劍、水を潜つて探しても、かいくれに知れねえわ

え。

岩松　欲念坊遅い〳〵、平太郎めが噂といふは柳の精、それ故俺が埋めておいたその劍は、アノ柳めがとつくに、めつけ出しやアがつたわ。

欲念　そいつア、ほんの後の祭だ。

岩松　いつたんこつちへ取りかへしたが、アノ平太郎の小悴めが、持つて逃げたか行方が知れねえ。

欲念　ムヽ、シテ、平太郎めは。

岩松　どうで生かしてはおけぬ奴と、ずた〳〵切りに息の根とめ、死骸はコヽの藪の中に。

欲念　ヲヽ、そいつアいゝ手廻しだ、そんなら餓鬼めを探さゞアなるめえか。

岩松　大儀ながら、仲の奴等にも云ひ付けて、そこらあたりを捜してくりやれ。

欲念　ヲヽ、そりや合點だ、しかしあの平太郎さへばらしてしまへば、アノ劍を取り戻すは、なんの手間暇いらぬ事。

岩松　したが、アノ平太郎めがよみがへらば、何かのさまたげ。

欲念　ヲヽさうぢや、とてもの事に止めを刺してしまふがよいわ。

岩松　ヲヽ合點だ、われも手傳うてくれ、手傳うてくれ。

慾念　承知ぢや〳〵。
〽まツかせ合點と藪の中、倒れ伏したる平太郎、止めの刀を引き出せば神の應護かあらふしぎや。
ト兩人立寄り上手の藪の中より孫作を引出し、岩松慾念双方より切らんとする、ドロ〳〵にてさしがねの烏現はれ、烏笛になり、孫作きつとなり、慾念の刀をおつとり、見事に切りかへし、岩松を投げのけ、きつとなる、此時以前の疵愈へ、兩眼明らかなる思入れ。
孫作　ハテ、あやしや。
兩人　いぶかしやなあ。（トきつとなる。）
孫作　我今まさに逆賊の、刄の下に死したりと、思ひし事も夢現。
岩松　まだ明けやらぬに鳴きたつ烏。
孫作　天の岩戸を開きし如く。
岩松　どうやらうぬが烏目の病も。
孫作　切りつけられし數ケ所の手疵も。
岩松　跡かたもなき、このありさま。

孫作　ヤ、、さては日頃信ずる權現の。
岩松　神の助けか、いま／＼しい。
孫作　チエ、忝い。（ト思入。）
岩松　ヤ孫作、わりやア目が見えるな。
孫作　ヲ、目が見えたらば千人力。劍の賊、親の敵、サア、尋常に覺悟なせ。
岩松　こりやモウたまらぬ、破れかぶれ。ソレ、皆來いやい。（ト呼ぶ。）
皆々　ヲ、イ。

ト ばた／＼にて、下手より、以前の杣四人出て來る。

ヤ、平太郎か、
岩松　たゝんでしまへ。
皆々　合點だ。（ト皆々斧にて打つてかゝる。）
孫作　何をこしやくな。

トちよつと立廻つてきつと見得、これより誂への鳴物になり、よろしく皆々を相手に立廻りあつて、ト
ド岩松を切り倒し、皆々を追込む。

〽支へる大勢事ともせず、切りたて切りたて追廻せば、こりやかなはじと木挽ども、風に木の葉の散る如く、むら／＼ぱつと逃げ散つたり、長追ひ無益と平太郎、後うちみやり立つたる折りしも、後に忽然我が子のみどり。

ト孫作きつと思入、薄ドロ／＼にて、すつぽんより綠丸出て、孫作の傍へかけより。

綠丸　コレ父さま。

孫作　ヤア、そちや綠丸か。

綠丸　父さま、わしやこゝに居たわいなう。

孫作　スリヤこれもお柳が。（と綠丸をひきよせ、劒をとつて。）チエヽ忝い。（ト劒をいたゞく。）

〽はや東雲の街道筋、きやり囃子で地車の、轟く音ぞいさましや。

トはやしの鳴物、木やり唄になり。

皆々　ヨイ／＼、ヨイヤナア。

ト庄屋杢作幣を持ち、音頭になり、この人數總出にて揃ひの襦袢にて鉢卷きをして、上手より隨分見事なる棟を地車に載せ、綱を持つて引出し、舞臺中程まで來る、二重の上手より藏人、野袴ぶつさきにて、家來大勢連れて出來り。

藏人　横曾根平太郎、シテ劍は手に入りしか。

孫作　やうやく手に入りかくのしあはせ、イザ御受け取り下さりませう。

ト劍を藏人へ渡す、藏人袋より出し改め見て、

藏人　紛れもあらぬ鬼切丸の御劍、でかされたり、この上は義親殿の汚名もはれ、昔にかへる横曾根氏。ソレ、家來ども。

家來　ハツ。

ト家來大小衣服を臺にのせ、持ち出る、孫作大小ばかりとつていたゞき。

孫作　コハ有難き、[illegible]弘殿の御とりはからひ、有難う存じまする。

ト此内よいほど、木曳きの人數杢作も此内に幣を振りながら、エンヤラサ〳〵と掛け聲にて、曳けども動かぬこなしにて、杢作おづ〳〵前に手をついて、

杢作　ハツ、お役人樣へ申し上げます、こゝまで曳きかゝつたこの車、地に生へぬいた樣で動きませぬ、どうぞ人夫をお增し。

皆々　下さりませ。

ト此内孫作こなしあつて、

孫作　イヤ、その儀は拙者思ふ仔細もござれば、これなる小兒に宰領させたなば、車の動く事もやあら

ん。

藏人　げに尤も、これなる小兒に幣をふらせて、曳かせてみよ。

杢作　ハツ。御苦勞ぢやが、サア〳〵早う。

孫作　綠、合點か。

綠丸　合點ぢや。

ト綠丸に幣を持たせ、杢作孫作　傳ひて棟の上へ載せる。

〽かき抱きたる孝の道、勇めて歸る都の土産。

孫作　もとは熊野の柳の露に、育てあげたるそのみどり兒が。

皆々　ヨイ〳〵ヨイヤナ。

皆々　ヨイ〳〵ヨイヤナ、コリヤ〳〵。

〽動くも不思議は、きぎの草木に心あればこそ、ひけば曳かるゝ恩愛の梛と柳と契りたる、連理がへりや揚枝村。

ト大ドロ〳〵、東西の窓ぶたをおろし、棟の上上手の方へ、お柳白の着付けにてせりあがる、はたの目には見えぬこなし、孫作綠丸これを見て、

孫作　ヤア、そちやお柳か。

綠丸　母さまいなう。

お柳　綠かわが夫、これこそ白河法皇前生の御頭、綠丸へ母が筐。

ト錦の袋入りの髑髏さしがねにて、綠丸へ渡す。

孫作　それほどまでに。

お柳　この子の身の上、頼みまする。

孫作　ヲヽ、必らずともに、氣遣ひ致すな。

ト綠丸の持ち居る髑髏の袱紗を開き見て、

これぞいつぞや云ひ傳ふ、白河の法皇前生の御頭、いざお受けとり下さりませう。

ト藏人の前へさし出す。

藏人　ドレ、たしかに某預かり申し、一字の下にこれを納め、その寺の名も頭痛山平癒寺との帝の印。

ト懐中より袋入の、院宣を出し見せる。

お柳　嬉しうござんす、それにて我は即身成佛。

ト此時岩松よろぼひながら起上り、

岩松　平太郎、うぬ。

ト平太郎へ切つてかゝる、平太郎立廻つてポンと切り、

孫作　劒の盜賊母の敵。

ト岩松の首前へ落ちる。

藏人　天晴手の內。

孫作　ハツ。

〽女夫坂とて今もなほ、云ひ傳へたる。

ト思入、皆々エンヤラサアとかけ聲をして棟を東へ曳く、孫作下手にて刀を傳へきつと見得、絲丸棟の上にて、幣を持つて孫作の通りにする、お柳嬉しき思入、藏人感心のこなし、孫作刀を納めて

棟を早く。

ト膝をたゝくを木の頭、お柳の體このまゝ、孫作思入、これをキザミ、藏人よろしくこなし、皆々棟を曳くこなし、鳴物よろしく。

ひやうし　幕

柳のお柳（終り）

大正十四年八月廿八日印刷
大正十四年九月一日發行

編纂者檢印

『時代狂言傑作集』第一卷
定價金參圓

編輯者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彥
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　瀧澤一郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
（電話本局五一番
振替東京一六一七番）

春陽堂版